

立花堂遺跡発掘調査報告

2008（平成20）年3月

三重県埋蔵文化財センター

月

県都・津市は、佐賀・伊勢で二十二万石を領した藤原氏の城跡です。その山麓を流く安瀬川は、流域に固いな穀倉沖積を形成し、伊勢灘に注ぎます。この安瀬川は、今流部においては逆流を繰り返すため、藤原氏もその治内に廢墟とし、様々な作戦を行いました。そのひとつが、流部の城跡を改めから護るために、上流部で堤防を築いて水が下った際にそこを切って水の逃げを確保した「三瀬堤」といわれる堤です。現在もこの部分の堤防はよく抑えられていて、津市街並みに水の力が感じられるのが珍しいです。

さて、今朝報道する「花堂退弔は、ちょうどこの「三瀬堤」の下流、安瀬川の中間に位置しています。安瀬川からその中に流れる岩川までの延長部は、いったん止むがあったときは避けられず洪水の危険に晒される地域ですが、今朝の雨によって、この川においても激しい雨を利用しての下流活動の展開を確認することができました。まさに、当然と格闘しながら生きる生活の空虚のために舟をはいだら、たちの舟が走ってくるようです。

また、今朝の雨で代わりの舟を2基確認しておりますが、いずれにおいても舟の荷物である舟や舟便が舟に残存しており、当該当駅の舟を押す上で、大変見苦しい資料となるものです。

しかし、一みでこのような退弔が運休保有という形でしか残せないことは、誠に残念といふほかないません。今得られた成績をどのように活用していくかが、今後わたくしどもの重要な課題であるとぞえております。

車両にあたっては、車両の点検をはじめ、津市教育委員会、三重県警察機関部道路整備課および津市事務所などの関係機関から多大なご協力と嘆かいご配慮を頂きました。やめになりましたが、ふより厚く御禮申し上げます。

2008年3月

三重県警やむ財センター
所長 吉水 康夫

例　　言

- 本書は、三重県津市中津路地区に所在する山林が道夢の第1～3次登録書にかかる報告書である。
- 今道夢の第1次登録書は^①成14年度界掌ほ湯整備更正（津市御所）、第2次登録書は^②成16年度延163号（中津路B P）道夢改築更正、第3次登録書は^③成18年度・移^④延163号中津路B Pを補道夢改築（-列）を受けていたものである。
- 登録書は次の各回で行った。

【^①成14年度】

調査者名　三重県森林委員会
調査担当　三重県森林管理センター（津市御所グループ）
　　三重　　鶴見　正明　　三重　　黒川　智尚
　　研修員　　野口　有美　　技術補助員　　喜多　祥子
調査期間　^⑤成14年7月12日～^⑥成14年11月28日
調査面積　2,999m²

【^③成17年度】

調査者名　三重県森林委員会
調査担当　三重県森林管理センター（津市御所1グループ）
　　三重　　安藤　正子
調査期間　^⑦成17年9月26日～^⑧成18年1月10日
調査面積　2,035m²

【^⑨成18年度】

調査者名　三重県森林委員会
調査担当　三重県森林管理センター（津市御所1課）
　　三重　　安藤　正子
調査期間　^⑩成18年6月23日～^⑪成18年11月7日
調査面積　1,726m²
調査記録番号　朝日伴洋株式会社

- 本書作成にかかる報告月は、就勤秀ビを受けて三重県津市整備部が全額負担している。
- 登録書にあたっては、津市の日々をはじめ、津市森林委員会、三重県津市整備部道夢整備室、界津整備部津市事務所、三重県森林林業省森林部、津市森林林業省森林部（主略）、津市森林改築室から多くの協力を得たことを記述する。
- 報告書作成にあたっては、小林　秀氏（三重県津市経営グループ）、樋村　寛之氏（森吉整地植樹館）から有志な御賛同をいただいた。
- 本報告のものとなる記録類およびEPC資料は、三重県森林管理センターで貯蔵している。
- 本報告書の作成実績は、三重県森林管理センター津市御所1課および1号室で書が行つた。また、報告書の執筆・退所の写真撮影・全般的撮影は安子が行つた。

凡例

〈等因類〉

1. 本音で使用した満ち額は、きの満潮算定日時の1/25,000満ち度である。
 2. 溝西都内満ち度は、きの満潮算定の±±潮汐系による應潮算定系（きの應潮）で示されているものであるため、
⑨成14年4月から施行されている世界潮汐系・溝西度2000には対応していない。
 3. 細きの満ちは全て應潮（きの應潮）で示している。なお、満ちの位は北緯 $6^{\circ} 40'$ 、東の位は北緯 $0^{\circ} 17' 34''$ （⑨成10年）である。

<遺傳類>

- 「肩書きは肩の部分を表現で、頭手又脚手および候藤深次に担当する部分」を一点説で表現している。
 - 「肩書きの仕事は、小山田忠・竹原浩彦著『新版標準二字用字』(日本印刷株式会社 1967年刊、2003年第23版)を用いた。
 - 専教書の道場番号は、運営者としている。
 - 道場番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けている。
 S B……墨柱朱物 SD……消 SK……上筆
 S E……丸印 S Z……落ち込み、下押道場 PIt……ピット、栏穴
 - 墨柱朱物の名前は、墨丸さ熊・又丸さ熊を囲わず、全て「」からの振りで表現している。したがって、又丸さ熊の朱物は横行をもとに右端を譲った。
 - 道場などの新字体での書きの担当者に久空があるものは久空となっている。

〈遺物類〉

10. 宮教者での追跡実験では実物の1/4をふさとしている。それ以外の縮尺のものは、その都度示している。

11. 追跡実験では、唐津市・赤・追跡の所見（ご器やご器、木器など）に關注らず、直系としている。

12. 宮教者番での用語は、「つき」は「枚」、「わん」は「塊」に統一している。

13. 追跡考察番は、以降の考證で記載している。

番号……………番号標記番号である。

実証番号……………実証実験の登録番号である。番号次を頭に付した。

器所……………「伊豫」「須恵器」「陶器」「木製品」といったものおよび追跡の器種を示した。

目録……………調査時に記したグリッド名および追跡の目録した追跡や脇名を記した。

法寸（cm）……………追跡の法寸を示す。（谷）は岐部谷、（底谷）は駿部谷、（横谷）は桑谷部谷、（泓谷）は庄原上端谷、（深堀谷）は庄原根谷部谷を示す。なお、数値はそれぞれの部谷の最大値であり、手筋や、実証実験での「縦横幅」ではない。

調査（枝検）の結果………な枝検を枝検（枝：）、小枝（子：）で示した。「A→B」はAの傍にBが挙げられたことを示す。

用語……………あるなどの説明を除いた本論の概念を「専門用語」で示した。

合記……………その追跡の代子となる在庫を記載した。未記は、卓場『新康標準合記』による。

残存度……………その部位を12分割した際の残存度を示した。6/12は約半分、12/12は全員が残っていることで、この場合は「完全」と記した。

〈写真図版〉

14. 写真版は、第1～3冰をまとめて右に焼戻した。
 15. 烧戻と写真版の遺物番号は、対応している。
 16. 遺物の写真版は特に断らない限り焼戻である。

目 次

I	緒 言	1
1	調査の実績	1
2	調査の経過と法的措置	1
3	調査と配布の方針	2
4	整理作業の方針	2
II	犯罪と歴史的環境	3
1	地理的環境	3
2	歴史的環境	3
III	脅迫と追跡	16
1	調査の基本脅迫	16
2	検討した追跡（1次）	16
3	検討した追跡（2次）	17
4	検討した追跡（3次）	24
IV	自己追跡	34
1	第1次調査自己追跡	34
2	第2次調査自己追跡	34
3	第3次調査自己追跡	38
V	生態学分析	69
1	分析の目的	69
2	ゴルダ追跡の生物分析	69
3	ゴルダ追跡の小型動物群	81
4	ゴルダ追跡自己追跡する群について	84
5	ゴルダ追跡の動物遺骸を	87
6	ゴルダ追跡自己追跡品の解剖学	87
7	ゴルダ追跡の生態学分析	103
VI	結 語	106
1	ゴルダ追跡の追跡について	106
2	周辺追跡を含めた追跡の実験	106
3	動物の鳴叫とろみ	109
4	ギニアについて	109
5	暴音装置について	113
6	ゴルダ追跡の評議	114
	おわりに	114

序　　次

第1号	道 構 計 事 実	4	第22号	日本 退 特 头 頭 字 ①	40
第2号	道 構 治 球 実	5	第23号	日本 退 特 头 頭 字 ②	41
第3号	事 件 分 則 実	6	第24号	日本 退 特 头 頭 字 ③	42
第4号	道 構 事 実 (①～⑥) 紙 記 り 実	8	第25号	日本 退 特 头 頭 字 ④	43
第5号	道 構 事 実 ①	9	第26号	日本 退 特 头 頭 字 ⑤	44
第6号	道 構 事 実 ②	10	第27号	日本 退 特 头 頭 字 ⑥	45
第7号	道 構 事 実 ③	11	第28号	日本 退 特 头 頭 字 ⑦	46
第8号	道 構 事 実 ④	12	第29号	日本 退 特 头 頭 字 ⑧	47
第9号	道 構 事 実 ⑤	13	第30号	日本 退 特 头 頭 字 ⑨	48
第10号	道 構 事 実 ⑥	14	第31号	日本 退 特 头 頭 字 ⑩	49
第11号	第 1 次 1 月 1 日 道 構 事 実	15	第32号	日本 退 特 头 頭 字 ⑪	50
第12号	第 2 次 1 月 1 日 (2 層) 道 構 事 実	16	第33号	日本 退 特 头 頭 字 ⑫	51
第13号	事 件 分 則 断 実	18	第34号	日本 退 特 头 頭 字 ⑬	52
第14号	S E57 事 実・断 実	20	第35号	日本 退 特 头 頭 字 ⑭	53
第15号	S B42・41 事 実・断 実	21	第36号	日本 退 特 头 頭 字 ⑮	54
第16号	S E64・65・68 事 実・断 実	23	第37号	日本 退 特 头 頭 字 ⑯	55
第17号	S E63 事 実・断 実	24	第38号	S E64 の 事 実 と 断 実	74
第18号	S B121 事 実・断 実	26	第39号	S E65 の 事 実 と 断 実	75
第19号	S B171・129 事 実・断 実	27	第40号	S E155 武 田 旗 挙 旗 近 の 二 層 断 実 と 脱 羽 旗 旗 旗	77
第20号	S B172・130 事 実・断 実	28	第41号	S E155 の 事 実 と 断 実	79
第21号	S E155 事 実・断 実	29			

年　　次

第1号	二 層 断 実 と 事 実	19	第16号	日本 退 特 機 密 手 ⑨	66
第2号	壁 と 柱 事 実 と 事 実	30	第17号	日本 退 特 機 密 手 ⑩	67
第3号	道 構 事 実 ①	31	第18号	日本 退 特 機 密 手 ⑪	68
第4号	道 構 事 実 ②	32	第19号	2 次 構 事 実 1 月 1 日 ～ 事 実	73
第5号	道 構 事 実 ③	33	第20号	3 次 構 事 実 1 月 1 日 ～ 事 実	78
第6号	木 製 品 製 造 手 ①	56	第21号	3 次 構 事 実 1 月 1 日 ～ 事 実	82
第7号	木 製 品 製 造 手 ②	57	第22号	S E64 日 本 事 実 ～ 事 実	85
第8号	日本 退 特 機 密 手 ①	58	第23号	2 次 構 事 実 事 項 機 密 手	88
第9号	日本 退 特 機 密 手 ②	59	第24号	2 次 構 事 実 木 製 品 制 造 手	90
第10号	日本 退 特 機 密 手 ③	60	第25号	3 次 構 事 実 木 製 品 制 造 手	104
第11号	日本 退 特 機 密 手 ④	61	第26号	対 し た と し た 道 構 と 事 実 事 実	104
第12号	日本 退 特 機 密 手 ⑤	62	第27号	三 か 月 が 通 構 お よ び 旗 近 通 構 の 壁 と 柱 事 実 と 事 実	110
第13号	日本 退 特 機 密 手 ⑥	63	第28号	三 か 月 が 通 構 お よ び 旗 近 通 構 の 事 実 と 事 実	112
第14号	日本 退 特 機 密 手 ⑦	64			
第15号	日本 退 特 機 密 手 ⑧	65			

文 献 一 次

チ版1	2次調査で発見した山野の木 76	図版12	2次調査出土木製品の 樹種顕微鏡写真⑦ 97
チ版2	3次調査で発見した山野の木 80	図版13	2次調査出土木製品の 樹種顕微鏡写真⑧ 98
チ版3	S D152から見出された大型樹幹遺構 83	図版14	2次調査出土木製品の 樹種顕微鏡写真⑨ 99
チ版4	見出された山野の木 86	図版15	2次調査出土木製品の 樹種顕微鏡写真⑩ 100
チ版5	山野の遺跡付近の樹幹等 88	図版16	2次調査出土木製品の 樹種顕微鏡写真⑪ 101
チ版6	2次調査で見出された木製品の 樹種顕微鏡写真① 91	図版17	2次調査出土木製品の 樹種顕微鏡写真⑫ 102
チ版7	2次調査で見出された木製品の 樹種顕微鏡写真② 92	図版18	3次調査出土木製品の 樹種顕微鏡写真 105
チ版8	2次調査で見出された木製品の 樹種顕微鏡写真③ 93		
チ版9	2次調査で見出された木製品の 樹種顕微鏡写真④ 94		
チ版10	2次調査で見出された木製品の 樹種顕微鏡写真⑤ 95		
チ版11	2次調査出土木製品の 樹種顕微鏡写真⑥ 96		

写真版目次

写真版1	事前検査／事前検査	119
写真版2	2次調査空港見／ 2次調査空港見	120
写真版3	2次調査空港見／ 2次調査空港見	121
写真版4	2次調査空港見／ 2次調査空港見	122
写真版5	3次調査空港見／ 3次調査空港見	123
写真版6	3次調査空港見／ 3次調査空港見	124
写真版7	S E57#P 調査日次表／ S E57#P 調査日次表	125
写真版8	S E57#P 調査日次表／ S E57·S B42	126
写真版9	S B42/S B41	127
写真版10	S B42#s 6 p i t 6／ S B42#s 6 p i t 6#裁決済	128
写真版11	SD152#J 決済／ S B121	129
写真版12	S B129/S B130	130
写真版13	S E155/S E155	131
写真版14	S E155#裁決済／ S E155#裁決済	132
写真版15	季会計器内訳済／ 季会計器内訳済	133
写真版16	立替算出済契約見／ 立替算出済契約見	134
写真版17	自己追跡①	135
写真版18	自己追跡②	136
写真版19	自己追跡③	137
写真版20	自己追跡④	138
写真版21	自己追跡⑤	139
写真版22	自己追跡⑥	140
写真版23	自己追跡⑦	141
写真版24	自己追跡⑧	142
写真版25	自己追跡⑨	143
写真版26	自己追跡⑩	144
写真版27	自己追跡⑪	145
写真版28	自己追跡⑫	146
写真版29	自己追跡⑬	147
写真版30	自己追跡⑭	148
写真版31	自己追跡⑮	149
写真版32	自己追跡⑯	150

I 前 言

1 調査の契機

笠置連鎖を含む桂川牽引路・野田の安濃川牽引路から岩井川側の付積部・岸を牽引に廻断するかたちで前記牽引連鎖のサブバイパス支事が廻定されたのは昭和58年4月のことであった。これに伴って禁り追跡第1～2次調査（10,060m）が実施されている。

さて、このサブバイパスに係るかたちで笠置163号線のバイパス支事が計画され、その運営権を受けて笠置マドソンの範囲調査が実施計画書を公表して笠置11月1月に行われた。

一方、桂川牽引路・野田・岩井は湯野川牽引路の大壁構造であり、笠置連鎖を含む桂川牽引路を対象とした界は湯野川牽引路が笠置19年度以降に廻断手続されることが計画された。そこで、笠置9年度から範囲調査が行われ、このうち笠置連鎖を含む範囲調査は笠置11年度に実施されている。

これら界運営の範囲調査の筋目を受けて、笠置163号バイパス支事に伴うもと調査範囲が、禁り追跡7,800m、笠置連鎖4,500mと確定し、笠置11年度から笠置大壁調査が行われることとなった。実施は7月のとおりである。

④笠置11年度：禁り追跡（第4次）

⑤笠置13年度：禁り追跡（第5次）

⑥笠置14年度：禁り追跡（第6次）

⑦笠置15年度：禁り追跡（第7次）

⑧笠置16年度：禁り追跡（第8次）

⑨笠置17年度：笠置連鎖（第2次）

⑩笠置18年度：笠置連鎖（第3次）

このうち、禁り追跡の調査は既に報告書が提出されている（『禁り追跡（第4次）範囲調査報告』・『第5次～第8次）範囲調査報告』・『2007年』）。また禁り追跡の報告書には、湯野川牽引路に伴う事項も含まれていることを付け加える。

ここで報告する調査は、笠置連鎖のものである。主張運営に伴う大壁調査は、今後報告書が最終となる。

2 調査の経過と法的措置

a 発生問題の著述

発生問題の詳細は以下とのおりである。

第1次調査

算出重量：④成14年度界は湯野川牽引

調査面積：299m²

調査期間：④成14年7月1日～7月11日28日

第2次調査

算出重量：④成17年度界は笠置163号（牽引路B.P.）

道路改良運営

調査面積：2,035m²

調査期間：④成17年9月26日～④成18年1月10日

第3次調査

算出重量：④成18年度界は笠置163号牽引路B.P.

笠置道路駆逐改良（-列）運営

調査面積：1,726m²

調査期間：④成18年6月23日～7月11日7日

なお、笠置連鎖（第1次）調査は、既に既に実施された禁り追跡（第6次）調査と併行して行われたものである。

b やす野原調査等にかかる認証

笠置連鎖調査にかかるやす野原運営法（以下「法」）関係の認証は、以下により行っている。

（第1次）

・法に基づく三重県やす野原運営法第48条第1項（県教育長あて）

④成14年5月31日付け、県三第08-44号

（県やす野原）

・法第58条の2第1項（県教育長あて）

④成14年6月26日付け、認證第88号

・遺失物法によるやす野原見・員日直認

（県教育長あて）

④成15年1月7日付け、認證第12-6-10号

（県教育長直認）

（第2次）

・法第99条第1項（県教育長あて）

④成17年9月30日付け、認證第232号

・遺失物法によるやす野原見・員日直認

(計警察告長あて)

昭成18年2月6日付け、第4号第12-4-27号

(県警告長直印)

(第3次)

・法に定めずく三重県で作成した後久瀬第48号第1項

(県警告長あて)

昭成18年3月31日付け第432号(県警告長直印)

・法第99条第1項(県警告長あて)

昭成18年7月3日付け、第4号第162号

・退所届はによるもの(見出し・目印直印)

(計警察告長あて)

昭成18年11月16日付け、第4号第12-4-13号

(県警告長直印)

3 調査と記録の方法

a 検査の手次

いずれの調査も、追跡が可能であるまで検査印を行った。その後よりにより追跡検査・追跡墨印を行った。

第2次調査の申請部および第3次調査の申請においては追跡検査に追跡を含んでいたことから、追跡検査の存在が疑われたため、再度検査印を行い、その後よりによる追跡検査および墨印を行った。

b 清除記述

調査手次は、4m²の尹ニで2m²することによつて4m² (グリッド) を示している。

第1次調査は水路部分の2ヶ所の調査で、それぞれ1.4%、2.4%としている。いずれも幅約2mの底塗りであったことから、事では調査を終つたものとし、既に底塗には型つていない。

第2・3次調査は道路改築の避難走行であったことから、歩道・砂場(リサイクル系)に付けて追跡した小池を事でを行つた。小池をそのグリッド名とし、1からアルファベットのトマホークマーブルへ、丸から数字を付けている。

c 退所カード

小池を用意として1/40で作成し、略す・墨す・墨・切り合ひ若を記すとともに、追跡が付した追跡については取り上げにおける追跡手次およびビット番号の注記分欄としても使用した。

d 退所記録

調査手次は、1/20で書き表記を行つた。また、色々の追跡で退所手記・済みなどがまとめて記したものについては、1/10の替写真記録を作成した。手記は1/20で作成した。

e 退所記録

追跡記録の写真は、ずまなものを4×5寸および6×9寸(プローニー)で撮影し、紙面・メモ的に35mm写真を使用した。それぞれのフィルムは、ふたのにリールとリバーサルを順番に作成している。なお、第2次調査についてはラジコンヘリによる空撮も併せて行っており、4×5寸および6×6寸で撮影した。

4 整理作業の方法

a 退所類

発生調査で用いた退所は、調査手次が報告書場所記述と実場所記述とに区分した。報告書場所記述については、実測作業などを行つた。実場所記述は表面にし、壁面等に付した後に写真撮影へと移した。

実測作業などが完成した退所は、昭成18~19年度に報告書作成のための整理や写真作成を行つた。これらの退所類は、報告書場所記述に付属し、報告書完成後の活用に備えた。また、実測作業そのものも、記録保存の上課として残してある。

報告書用に作成した床下類やトレース等については、報告書完成後に廃棄した。

報告書場所記述の写真等のものについては、写真撮影を6×9寸(プローニー)で実施した。

b 種別類

発生調査にかかる記述類は、調査手次(第1手次・既存地図など)、追跡カード(1/40縮尺)、調査手次、写真類がある。これらは所定の手次を付与し、立センターの写真撮影に供給している。ただし、1次調査の調査手次は、禁り通勤(第6次)の手次に併記されている。

また、第2・3次調査にかかる小池分野や既存追跡の分野などに部に登記した。既存手次記録についても、既存の記録として残してある。

II 位置と歴史的環境

1 地理的環境

ミル堂進跡は、津西を支西に亘って佐野瀬川にさぐ
安瀬川中流の標高5.3~6mのミル堂跡およびそれ
に續く礎石地に位置する。

この安瀬川は、幹流^{アマツヨ}ノ御所^{ミヤコトノ}御前^{ミヤコトノマサニ}近に源を發し、伊勢に通なる布引^{ハタヒ}川の支流を有する理^{シテ}、長谷^{ナガハ}寺の北^{キタ}麓を洗れる穴倉川などを合流しつつ、洪流に田原^{タハラ}なれば種々野^{ヨリ}野^{ヨリ}を形成する。安瀬川によつてもたらされたこの種々野^{ヨリ}野^{ヨリ}は、先開を絶ヶ峰から長谷^{ナガハ}にいたる^{アマツヨ}、北源を長衡丘陵^(長谷^{ナガハ}下陵)、南源をリ^リ丘陵^{リ^リチヨウ}によって分^{ハセ}れて地理的なひとつのまとまりとえることが可^{ハシ}く、互^カ的には北源^(長衡丘陵)から中源^(リ^リ丘陵)にかけて逐^{シテ}くなつていく形^{ルイ}をなす。すなわち、長衡丘陵中源を洗れる安瀬川本流は、中源へ^リ洪流を派生させて安瀬川北岸のハリ^{ハリ}を潤し、最終的に安瀬川本流も含めて安瀬川へ導入される。また、安瀬川から牽^{ハシ}へ派生した三津^{ミツ}川は安瀬川南岸のハリ^{ハリ}を潤しつつ、リ^リ丘陵北麓を洗れる三津^{ミツ}川に集まり、伊勢湾へと注ぐ。

さて、どうが進歩は、安瀬川が伊勢湾にやかって入りを扼し、又浜を開拓する部分に拘泥する。この辺で安瀬川から浜三・若狭・川へ注ぐ三河川は、昔零はさほど大きな洪害ではない。しかし、大水害にはほぼ毎年河を溢れから漁るため安瀬川の水を守り川へ注ぐする構造をもっており、其背後はかなりの水を受け止つて（安濃部の安瀬川氾濫は、現在も木更津の御殿への水を前堤としている）。そのため、三河川沿いの水は、溢れ時には水没するような傾向となっている。

また、これか連夢のことは安瀬川が小さな矢行を開始する起止でもあり、連夢集近においても矢量時には安瀬川が汇集し、矢渉するような傾向であると考られる。

「佐世遺跡」は、溝辺二町の南北道路の「佐世谷」「足ノ谷」という2つの字にまたがっている。起伏の少ない傾斜地帯に形成された自然遺跡であるが、そのなかでも「溝跡」から続く「佐世谷」を和解して「佐世谷」された状況が窺える。

2 歷史的環境

「されど追跡が含まれる陸軍演は、その軍演が安瀬川上流となる演武であり、安瀬川上流の「安瀬川」は「安瀬町」の一部を含むのでこの都城は安瀬郡にあたる。ここでは、安瀬郡のなかでも、されど追跡の所とする安瀬川はこの演武の追跡を示すに、その演武を想起してみる。

(亂世時代) 亂世時代はまだ田畠部への進出⁽¹⁾、開拓⁽²⁾はまだ始めてあるが、安濃川南岸の箇⁽³⁾進出⁽⁴⁾では御印⁽⁵⁾も見え⁽⁶⁾、松ノ木進出⁽⁷⁾では東洋の神道と堅⁽⁸⁾六色鳥が確認されている。昔かではあるが、亂世時代後段⁽⁹⁾には開拓⁽¹⁰⁾が田畠部へもんでいたことがやられる。

(ゆき 索引) この時代になると、安瀬川流域で、多くに進歩の形態が進む。このうち、最も注目されるのは、前所進歩⁽³⁾である。前所進歩は、安瀬川流域北岸の笠懸町方に位置し、笠懸川進歩の付近に位置する。そこでは、李三郎代那御の笠懸道が確認されており、李三郎代那御をはじめとする多数の大製品が出土している。このことは、大柄柄方に豪傑をもく李三郎代が、安瀬川への浪花にからあなたの的な三活田景額を装備した状態で在籍していることを示している。前所進歩は、サ期に最勝御を迎えて、伊勢源氏御城を代称する李三郎代となる。ただし、後期を迎える場合には必ずしも是れし、法皇御度しか甲斐的な遺構が確認できないようになる。

前原の集落は、沖縄部だけでなく下陵部にも見られる。越所通瀬の日向よりは進れるが⁽¹⁾下陵の上村通瀬⁽¹⁴⁾でも多數の前原姓⁽¹⁵⁾器の日向⁽¹⁶⁾が確認されている。

「即になると、追跡夢はさらに濃化し、安風川两岸の夢」追跡⁽³⁾やその年の式ノゾ追跡⁽⁴⁾でも追跡夢が濃化されているほか、「岸の性類部では哉」追跡夢、松ノ木追跡（らきぬ済満、森誠）、森ノ又追跡⁽⁵⁾（ハリ、三岸流）など多款の追跡がみられる。これらの追跡は、道場密度としては前所追跡にはるかに及ばず、前所追跡の傍ろに開闢する御室集落的な構造を呈するが、この当期の活潑な既存追跡⁽⁶⁾の特徴は



- | | | |
|----------|---------------------|-------------|
| 1 立花草遺跡 | 12 戒田遺跡 | 23 坂本山古墳群 |
| 2 替田遺跡 | 13 位田遺跡 | 24 平田古墳群 |
| 3 武ノ坪遺跡 | 14 梁瀬遺跡 | 25 長谷山古墳群 |
| 4 里前遺跡 | 15 上村遺跡 | 26 稲村1号墳 |
| 5 惣作遺跡 | 16 高松遺跡 | 27 君ヶ口古墳 |
| 6 神ノ戸遺跡 | 17 安濃津遺跡群 | 28 錬切・稻葉古墳群 |
| 7 納所遺跡 | 18 高茶屋・大垣内遺跡 | 29 池の谷古墳 |
| 8 長遺跡 | 19 亀井遺跡 | 30 藤谷埴輪窯 |
| 9 山鹿遺跡 | 20 浄土寺南遺跡 | 31 久居古墳群 |
| 10 森山東遺跡 | 21 神戸銅鑄出土地 | 32 法ヶ広埴輪窯 |
| 11 松ノ木遺跡 | 22 野田銅鑄出土地 (詳細位置不明) | |

結果に達する。

伊賀後突には丘陵部への集落形成がさらに進展し、長崎丘陵には長道跡⁽⁸⁾（堅穴住居100基以上）や山麓道路⁽⁹⁾（堅穴住居10基）など殊い跡手に多数の堅穴住居が集りして掌まれた集落が見られる。これらの遺跡は、後醍醐は廃棄しており、前所遺跡の跡とほぼ同じような状況を呈することはさうされる。つまり、安濃川流域に形成された李三郎跡は、沖波の堅穴集落である前所遺跡の跡と、少なからぬ関係を有しながら存続した可能性が考えられる。

後醍醐によると、若狭川左岸の山口丘陵を始めに新たな集落形成の跡がじがるとともに、山形分陥落などの遺跡が追跡される。また、山口丘陵に取り込んだ谷筋からは、鉄器が出土している（伊賀鉄跡⁽¹⁰⁾）。

（古墳時代） 安濃川水系の古墳時代の集落は、現在知られているものに関してはそれほど規模なものは無く、一般的な道幅密度も薄いものがほとんどであ

る。安濃・須佐に限っても、前醍醐のものは若狭川水系の沿岸に古墳群⁽¹¹⁾があるが、小規模である。また、安濃川右岸の邑母追跡⁽¹²⁾や中岸の桑原古道跡⁽¹³⁾などにも古墳時代の跡が見られるが、これらのあたりは李三郎時代の古墳群の跡にある。

安濃川水系の甲斐ながれは、伊賀山地になつて河床急斜面に形成する甲斐の瀬⁽¹⁴⁾（全長81mの追跡⁽¹⁵⁾）の築造に始まる。また、安濃川水系とはやや離れるが、より南（須津）を望む丘陵上に古墳時代最大の前方後円墳、沖の谷古墳⁽¹⁶⁾がある。三洋城における古墳は、5世紀頃を境に甲斐に地場できるようになる。

この後、5世紀後突以降も、安濃川水系では山口丘陵や長谷山⁽¹⁷⁾から派生した丘陵部をリムに取り囲む築造が継続、小規模ながら安定した古墳の系譜を見ることができる⁽¹⁸⁾。また集落遺跡としては、伊賀追跡で今まではあるが、前醍醐からの遺構や遺物が発掘されており、集落形成があったことが堆積さ



図28 退野沂形跡（1:5,000）



図3-6 安瀬川河跡地図(1:2,000)

れている⁽¹⁰⁾。前述したぎ長堀の河口として認定できる集落遺跡としては、江の谷河口頭がさらに伸びる方向に配置する高茶屋・木治子・追跡⁽¹¹⁾との関係が考慮される限り、まだ下明な部分が多い。

伸びゆく河の複数流も、ぎ長堀に近なる河頭が確認されており、そのひとつが安瀬川⁽¹²⁾浜北岸の長堀下篠塚部に所在する高居河頭⁽¹³⁾である。この河頭は、家形石棺を主とした横穴式石室である。付葬品か追葬品かはともかく、企鵝型埴物などはこれまで手つかずである。

また、安瀬川河口⁽¹⁴⁾に近い河谷段丘には、家形石棺を用いた古墳がある。これなどは集落河頭からつながるぎ長堀に由来された可能性も考えら

れる。

《奈良・和泉兩代》 安瀬川河系の流域は、大部が古代安瀬郡に含まれる。安瀬郡には『和名類聚抄』によると、東部・東木・長堀・伊勢など郡が存在したとされ、中津路や野田集落付近は和泉郡に属していたと推定されている。現日のところ、安瀬郡版に載るような官邸遺跡や、確實に奈良時代以前に遡る古代墓葬は、流域では確認されていない。しかし、前述遺跡から断片的ではあるが、古代の日本が記述されるほか、長堀下篠の先落部に近い社寺跡⁽¹⁵⁾からもかつて紅葉・紅葉山が見えており⁽¹⁶⁾、紅葉河跡遺跡⁽¹⁷⁾として古跡の可能性が考えられている。前述の集落河頭に近い位置にあり、都城や古代も古を含む古代安瀬郡の古跡跡⁽¹⁸⁾

に関わる追跡の確認は、今後も残された大きな課題である。

古代の集落としては、先述の下緑川の宮ノ原追跡や御須神社に近接する萬ノ原追跡、禁ノ原追跡などで奈良時代までの集落が確認されている。また、平安時代以降では、安瀬川左岸の笠置山跡上にある辻ノ原追跡やその付近の式ノ原追跡、伊豆追跡¹⁰、安瀬川を上流に少し遡った中岸にある猿ヶ石原追跡¹¹などで集落が認められる。このうち猿ヶ石原追跡では、規則性をもつた平安時代初期の墳丘墓群が見つかっており、平安風や藤原朝の墓地と墳丘が見つかっており、平安風や藤原朝の墓地と墳丘が見つかっている。

また、安瀬川流域は近畿まで及ぶ河口が我が国で最も古い流域で、N30°Eのタキプランの発見¹²が出土されている。式ノ原追跡の調査でも、平安時代初期の墳丘墓群が、前述したタキプランに沿つて整然と並んでいた状況が確認されている。

さらに、伊豆下緑川の左岸には古代の聚落である西村聚落の所在¹³と思定されている古墳群追跡がある¹⁴。
（註13）予めお詫び——上述流域で、現存・未開拓の追跡や遺跡が確認された追跡はいくつかあるが、まだ記載されていない。

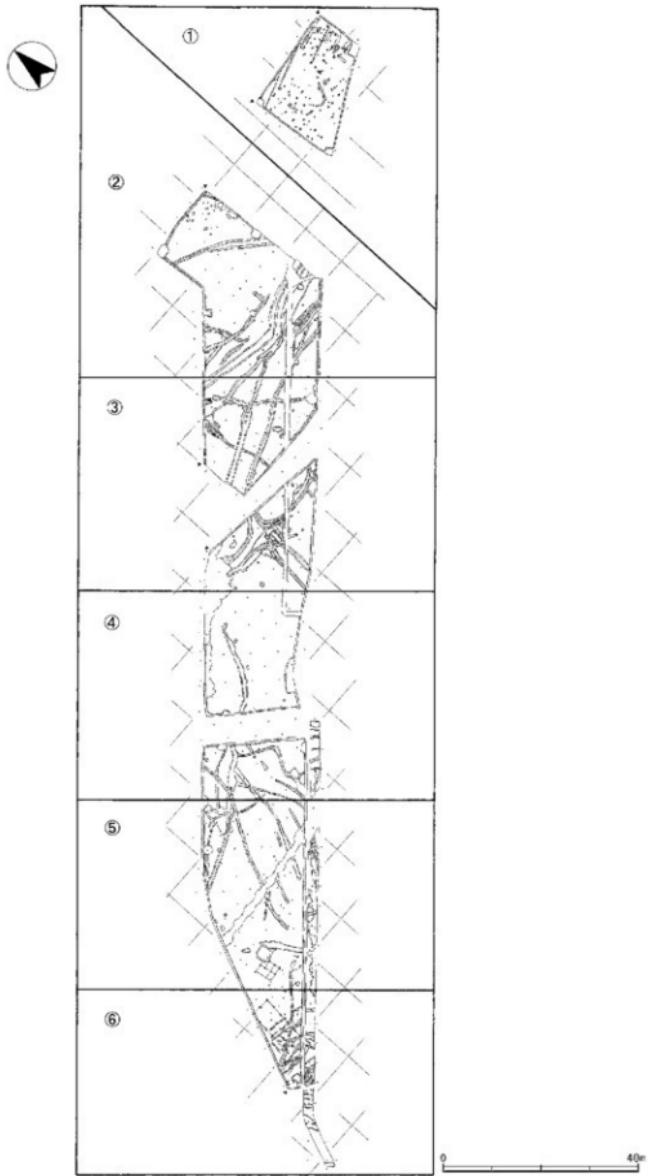
【註】

- (1) 三重県御須神社センター『萬ノ原追跡発掘調査報告』(1999年)
- (2) 三重県御須神社センター『松ノ木追跡・森ノ木追跡・土手追跡発掘調査報告』(1993年)
- (3) 三重県教育委員会『越後追跡調査報告』(1980年)
- (4) 三重県教育委員会『上野追跡発掘調査報告』(1972年)
- (5) 三重県御須神社センター『禁ノ原追跡(第4号)』『荒井塚古墳』(2004年)
- 三重県御須神社センター『禁ノ原追跡(第5号)～第8号)』『荒井塚古墳』(2007年)ほか
- (6) 三重県御須神社センター『式ノ原追跡発掘調査報告』(2005年)
- (7) 幸賀洋(2)
- (8) 三重県御須神社センター『長追跡発掘調査報告』(2000年)
- (9) 三重県御須神社センター『木之宮追跡・辻縁追跡・東ノ原追跡発掘調査報告』(1995年)
- (10) 三重県教育委員会『海老ヶ石遺跡・古戸ノ原墓群』(1970年)
- (11) 三重県御須神社センター『辻ノ原追跡発掘調査報告』(1993年)
- (12) 三重県教育委員会『安瀬川追跡発掘調査報告』(1996年)
- (13) 安瀬川追跡発掘委員会『安瀬川追跡発掘調査』(1994年)

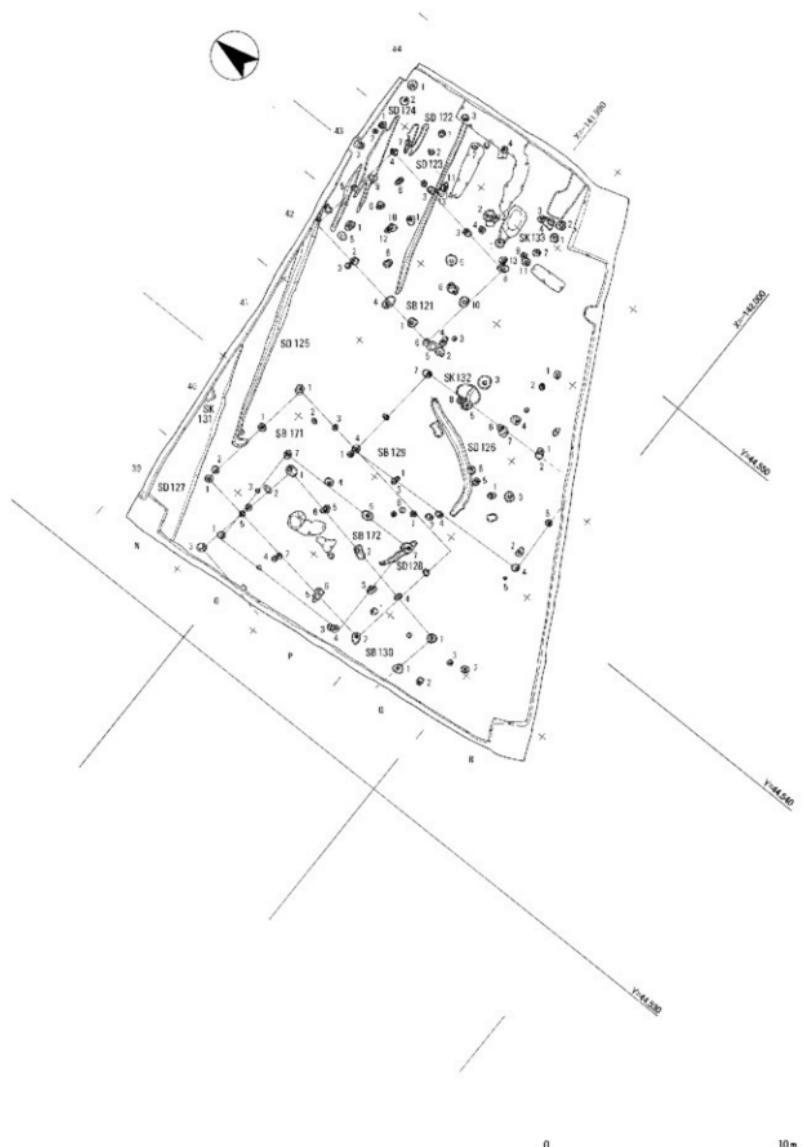
できるのは、伊豆下緑川の宮ノ原追跡である。伊豆下緑川は安瀬川左岸にあって、三瀬川が安瀬川に流入する付近に位置する。集落の中心部とされる駒ヶ谷地区は半分が沼地を以てであるが、三瀬川沿いの沼地からはえり貝品を含む多くの貝塚が茶碗形住居¹⁵している。これらは、安瀬川を通りて小谷へ内糞を荷揚げする小谷道の摩打所としての性格や、島香の小谷からえり貝品に關わる機会などが想定されている。これらは、伊豆部の安瀬川から搬送されてきたと想えられている¹⁶。

さて、スヌード(973)に、安瀬郡は佐賀守の郡となっている¹⁷。そのため三重には、伊豆開拓の安瀬郡¹⁸があった。また、官署・官邸なども存在していた。伊豆追跡の近傍には「野印」という地名があり、野印には特官領迂回¹⁹が存在していたようで、『伊豆地誌』(13世紀初頭成立)の「野印官署」、『伊豆風土記』(14世紀後半頃成立)の「野印官邸」に相当すると想えられる²⁰。これにあたる集落の野印はまだ立ったものはないが、これまで行われた安瀬川流域の荒野調査の結果とも結び合して、今後、より多くの遺跡が出土することが期待される。

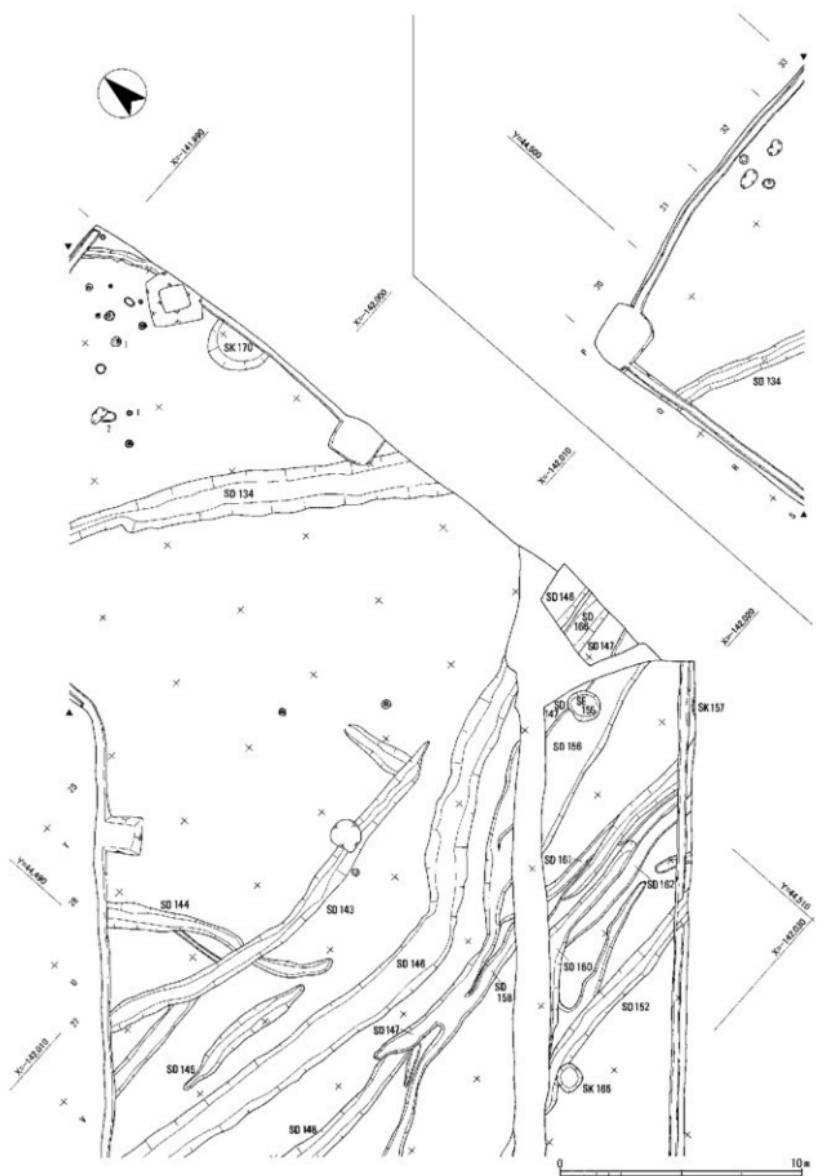
- (14) 佐々木元『伊豆の谷筋須日』の生産地図(『三重の谷筋』)81、三重県会議(1999年)
- (15) 沢、川、池、沼など。
- (16) 三重県御須神社センター『禁ノ原追跡(第5号)』『荒井塚古墳』(2007年)
- (17) 三重県御須神社センター『茶葉木下追跡(第3・4号)』『荒井塚古墳』(2000年)
- (18) 茂三根山『鳥島島遺跡と埋立』(『島の文化』)著者未詳(1989年)
- (19) 稲田敏雄『三重県立考古館』(1993年)
三重県立考古館行企『三重県の古文』(1997年)
- (20) 三重県御須神社センター『伊豆追跡(第2号)』、『禁ノ原追跡(第3号)』『荒井塚古墳』(2001年)
- (21) 三重県教育委員会『昭和55年度伊豆半島整備事業実施計画』(1981年)
- (22) 久保英輔・谷村武義編『伊豆半島古跡の古代久野』(久野学園出版、1979年)
- (23) 有斐一登『伊勢志乃村聚落所在辨定』(『伊勢物語』)13-6、1980年)
- (24) 三重県御須神社センター『伊豆追跡発掘調査報告』(2002年)
- (25) 伊藤裕典『磯浦1・安瀬川と野支集落発掘』(『土生里里良10・伊豆風土記』)の後記と『安瀬川追跡』著者未詳(2007年)
- (26) 『伊豆地誌』(『野印領説』第1章)
- (27) 三重県『三重の地図』(1988年)



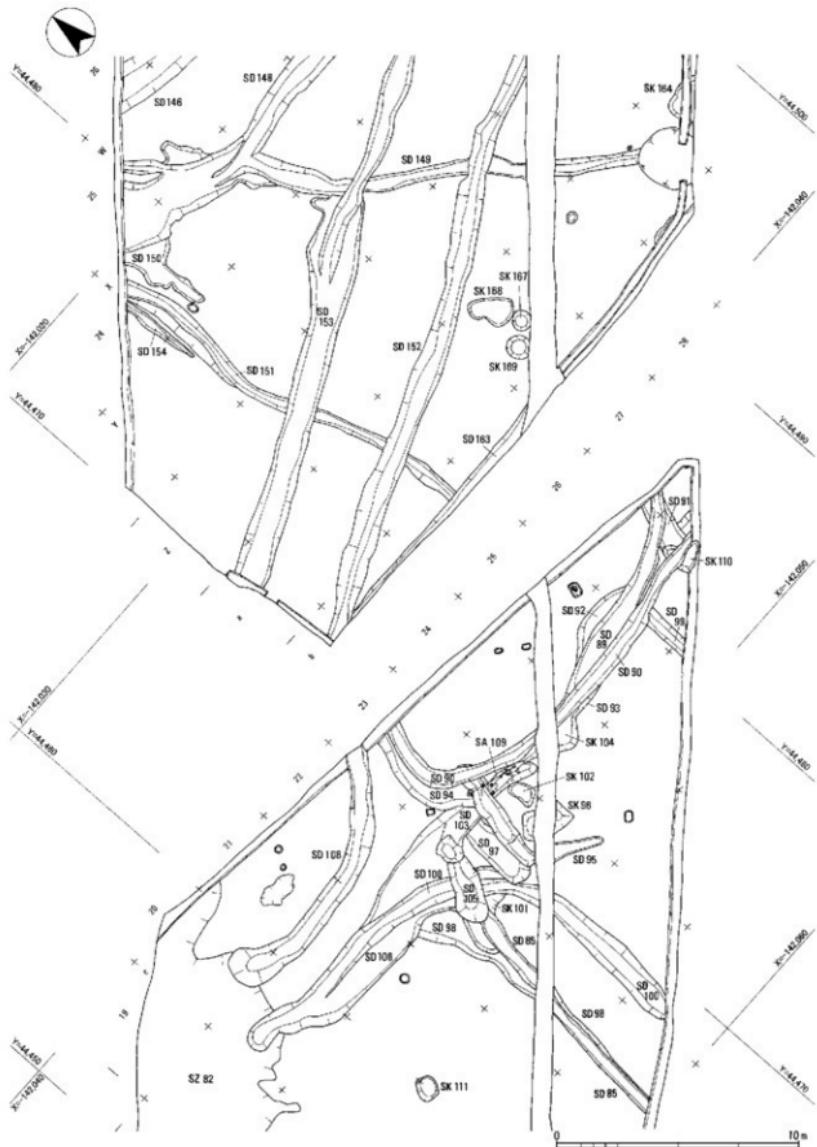
第4図 過溝地形 (①~⑥) 断面図 (1 : 1,000)



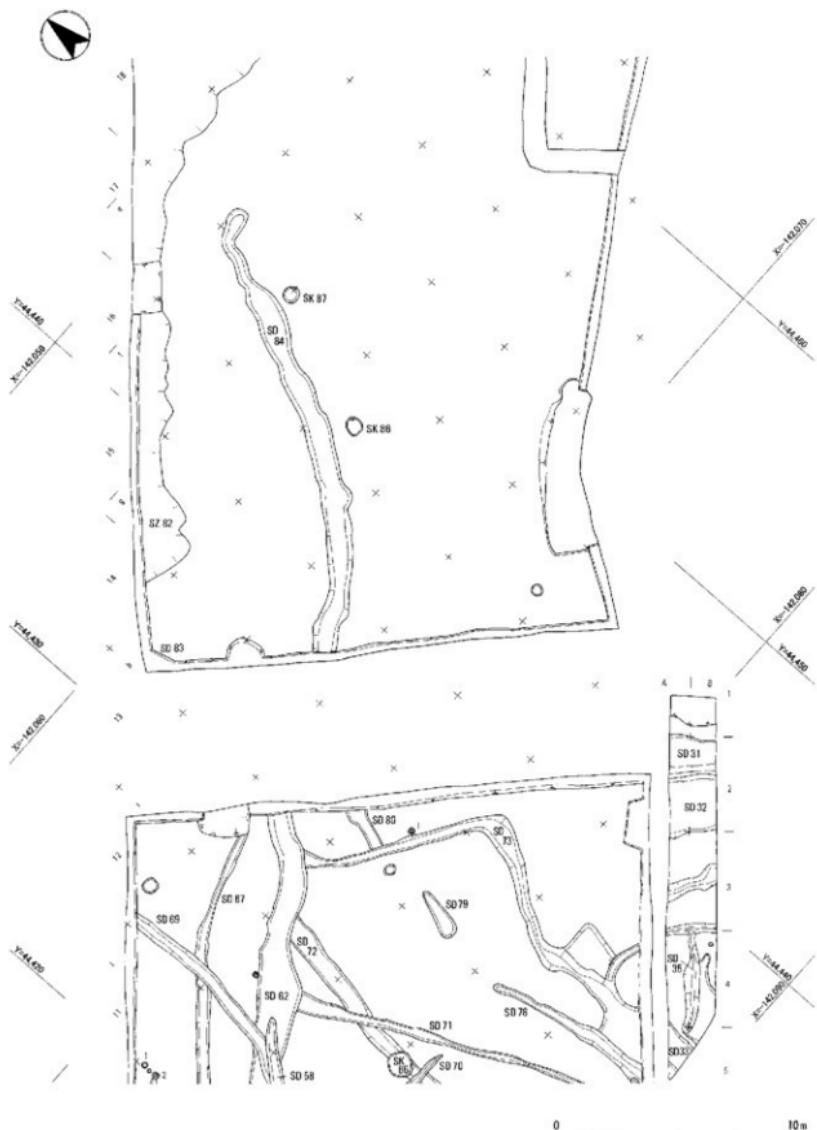
每5亩 退耕还林费①(1:200)



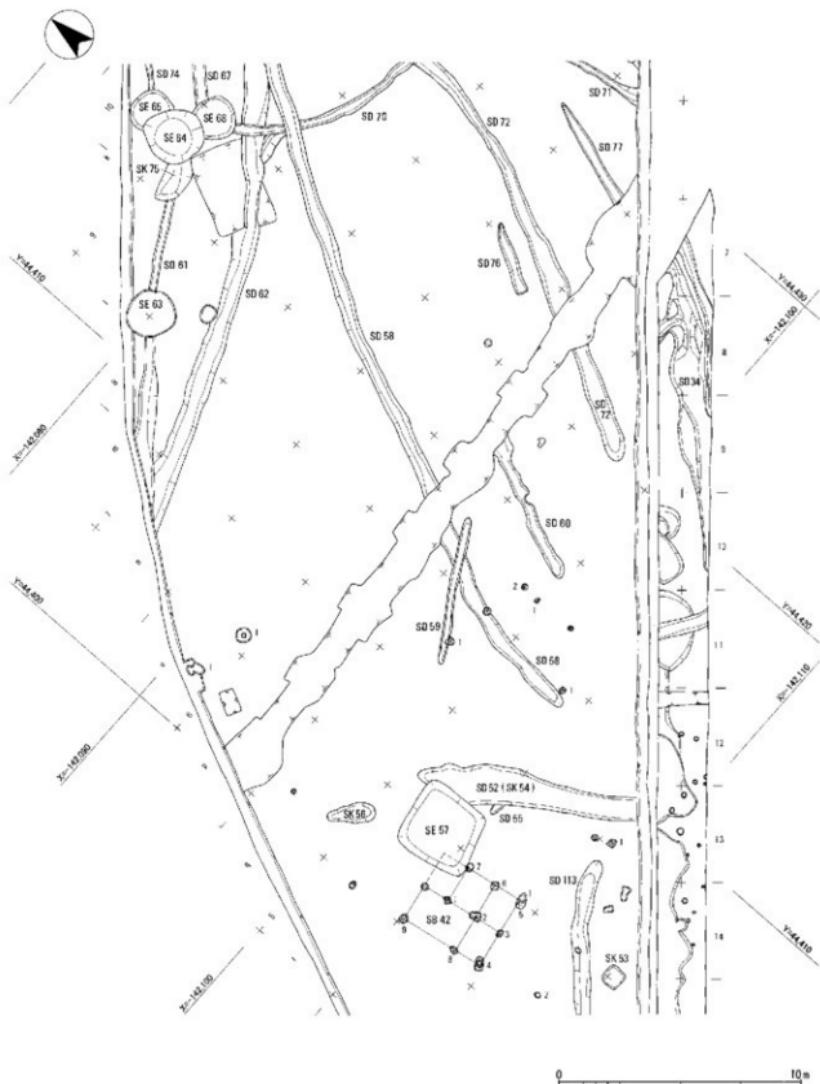
第6図 退済子地区(2) (1 : 200)



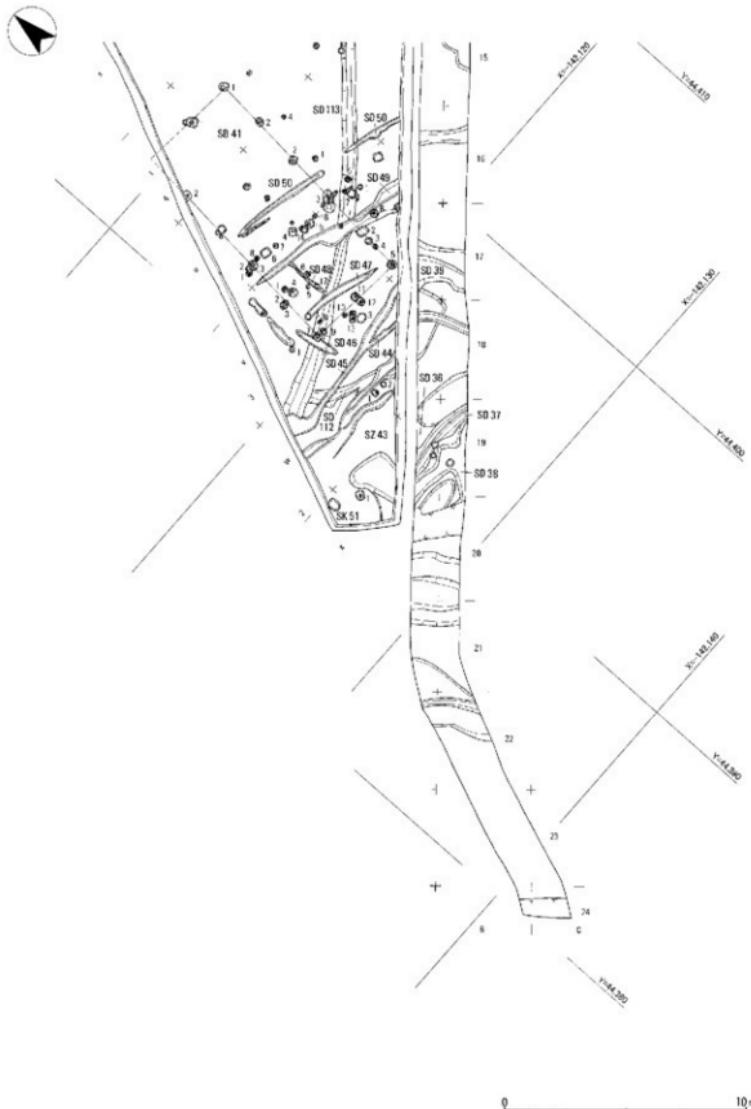
年7月 遠隔子音語(3) (1:200)



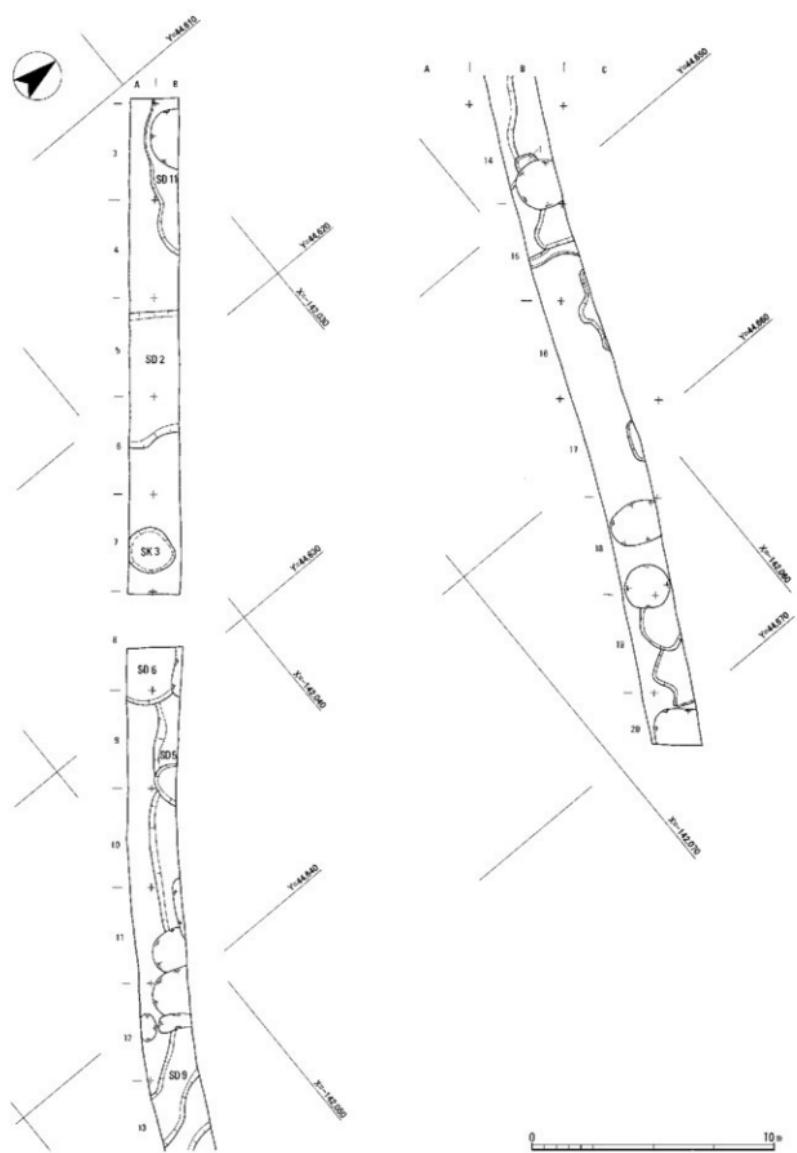
第8剖面 退溝部(4) (1:200)



第9図 退済子地区(5) (1:200)



每10g 適量乙酸 (1 : 200)



第11頁 第1次 1次元透視子剖面図 (1:200)

III 層位と遺構

1 調査区の基本層位

調査区は、安原川と若狭川に挟まれた、標高約5.9mの山腹地に位置し、行政区上は津市中野路に所在する。現況は平野である。

調査の層位は、第1層が耕作土、第2層が灰土、第3層が本然的根籠系のシルトでこの層が遺構を含む層に相当する。第4層が灰土・根籠系のシルトで、この層上まで古代人の遺構を検出した。また第5層が灰土・根籠系のシルトで、第3層調査の際ではこの層上まで年度検査を行った。標高約4.2m程度で根籠系層が確認できる。

2 検出した遺構（1次）

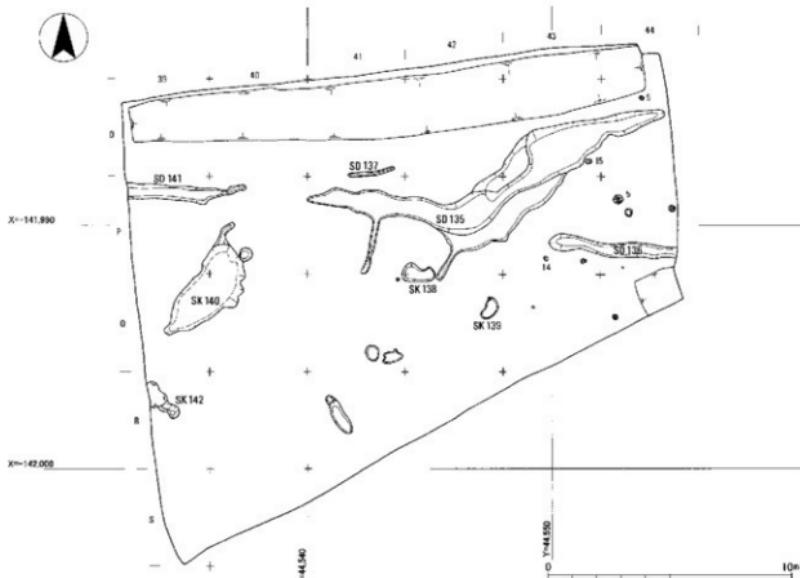
第1次調査では、2箇所に分かれており、調査場に1.5ha・2.5haとした。いずれも山腹部分の標2mのトレント調査である。

1.5haでは溝を検出したが、それ以外はカクランが非常に多い。調査したところと混じて、遺構番号を付与していたものも、そのほとんどが近現代のカクランであることが判明した。第2次調査の範囲に隣接する2.5haではピットが少數検出されたが、やはり溝が多い。以下、主な遺構について概述する。各々の遺構については後掲の遺構一覧（第3表）を参照されたい。

調査場 D 3.9 - 2.5haのサボ付近で検出された遺構である。検出できた溝の幅は約2m、検出点からの深さ約20cmである。サボがテラス状になっている。

2.5haからは、S字形・減分付溝（J1）、「S字溝」のE側に相当するものや、頭蓋骨などが発見されており、古墳時代後期の溝であると考えられる。

調査場 D 9 - 1.5haのサボ付近、B12・13グリッドで検出された遺構である。検出された溝幅は約175cm、



第12回 第2次 調査（1.5ha）遺構調査図 (1 : 200)

焼口部からの深さ約15cmである。焼落に伴行する溝があり、溝より笠退構として簡単しているが、¹である可能性も考えられる。またえびのSD 5につながることも考えられるか。

瓦和骨器などが出土しており、平安時代後期の遺構と思われる。

3 検出した遺構（2次）

今季の調査で検出した遺構は、古墳時代後期～中期にかけてのものである。調査の申部においては、古代の塗抹跡を検出したが、その焼口部とした所に退構が認められていたため、遺構帯型跡と傍に手段基壇で20～30cmほど引げて、²青退構の確認を行い、古墳時代後期のものと思われる溝を2次検出した。

以下に主な遺構について概述する。各々の遺構については遺構・図版（第2～4号）を参照されたい。

a 古墳時代後期

調査SD 62 漆手溝、m 8・9グリッド付近で検出した遺構である。溝幅1～1.7m、焼口部からの深さ20～30cmで、底は緩やかに下に向かう。牽引～牽引溝の溝形に沿って緩やかに延びる。おそらく古墳の調査で検出したSD 84につながると思われるが、SD 62として検出したほうが深く、退構の目撃も多い。

第2からはS字溝（27～29）をはじめ、須恵器の灰（41）などが出土している。

b 安土・江戸時代

↑ S E 57（第15a） 漆手溝からやや牽引のr 6・7グリッド付近で検出した遺構である。溝底は弓形で矢先約3m、牽引約3.2m、焼口部からの深さ約1.4mである。すり伏せに壓印されており、牽引にはテラスがある。第5および6層（第14号の「脛骨等に付属」）の埋納跡からは常に漆手が見られ、遺構の埋納途上から脛に溝付状態であった。また、矢先部には2cmほどのからが含まれていた。

埋納の矢先にあり、横板を柱轍状に埋んだずアビ（後者番号84～105）を確認した。横板はすべてスギ材で、その西端に近いところに矢先からやり今いていたことを示す、それを矢先に埋み合わせる「矢先に矢先横板埋設」である。最上段の矢先に増えた2

枚については、矢先の辺りが焼けからのみである。矢先は約1.0m、矢板は確認できたもので6枚である。底部には矢板の跡を引くような跡跡や矢板ではなく、最上段の板を直接壁間に据えていた。この跡跡は、宇野喜久氏の矢板を額でBVI領横板が施設するのと壁に据えるものである¹¹⁾。

第2遺構は非常に少ないが、²手掘の柱・灰、須恵器などが出土しており、平安時代後期に発達したとされる。

調査SD 52 調査の申部、s 7・8グリッド付近で検出した遺構である。SE 57の奥と重複し、その付近で述べられる。溝幅は約1.2m、焼口部からの深さは約10cmである。第2からの第3退構は、柱跡に多く、今まで見られた「伊賀の柱」や灰をはじめ、灰・灰瓦・また灰瓦に「アヨシ」の墨書きが見られる須恵器（45）が出土していることが特徴である。平安時代後期のものか。

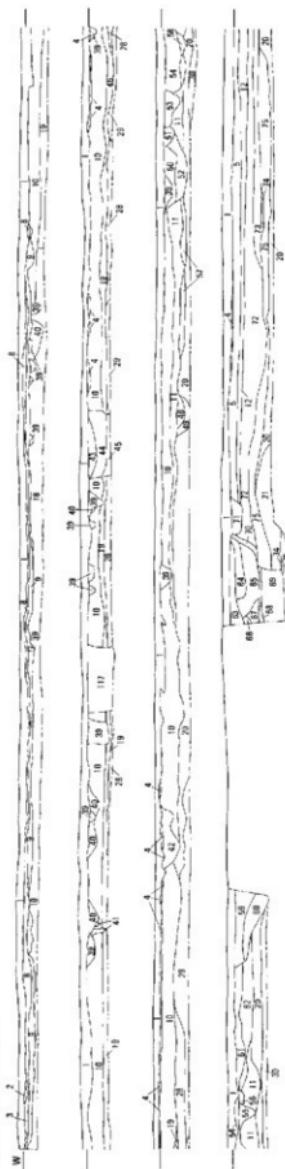
ご子 SK 54 調査の申部、r 7グリッドで検出した遺構である。焼口部、第3の壁かなぎでSD 52と同退構として埋設を行ったが、最終的には第3退構であるとされる。

柴田山遺跡 SB 41（第15b） 調査の申部、t 4・5グリッド付近で検出した遺構である。牽引5番、矢先2番の牽引域の塗抹跡で、矢先はN 5° Eである。柱間は2～2.2mで、柱穴の大きさは、直径30cm程度の柱頭を有する。柱穴からは灰瓦・器や灰瓦骨器が出土しており、平安時代後期の塗抹跡であるとされる。

柴田山遺跡 SB 42（第15b） 調査の申部から申部のs 6グリッド付近で検出した遺構である。矢先2番、牽引3番の柱間塗抹跡であるとされる。確認できないピットも存在したため、E付近塗抹跡の可能性も考慮に入れ、現地で調査を行ったが、それに全く柱穴は検出できなかった。矢先はN 5～6° Wで、SB 41とは矢先を異にする。柱間は1.2～1.6mで、各柱穴には直径約30cmの柱頭が確認できる。また、SE 57と重複しており、矢手の欄杆からSE 57の埋設よりも後回することが多い。

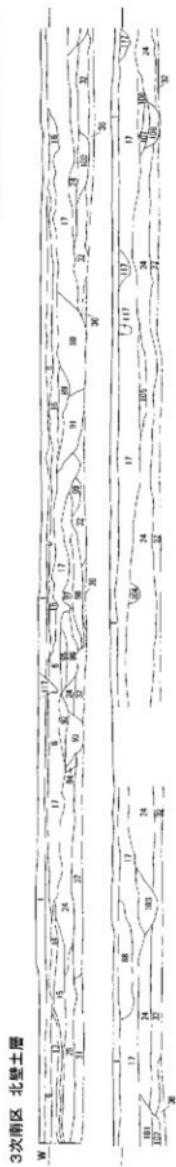
柱穴からは少しお手掘の柱片しか出土していないが、s 6グリッド付近では柱脚（208）が残存していた。斯くて柱を移動すると、柱脚は斜めしており、矢手矢先

2次調查区 北壁土層

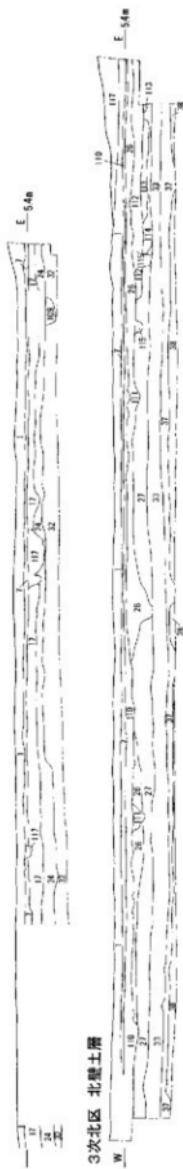


年13年 諸君五二年五月 (1:100)

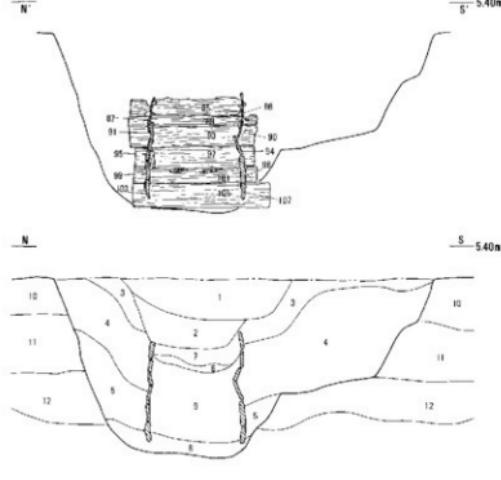
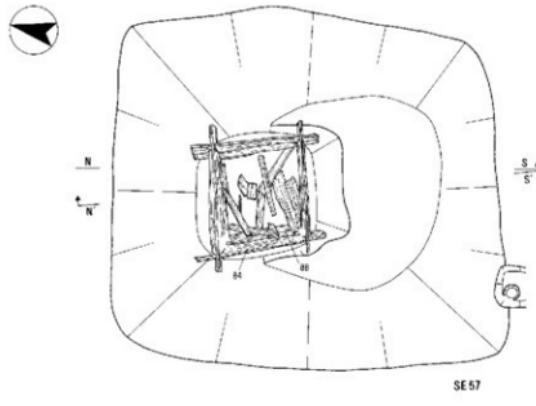
3次南区 北壁土層



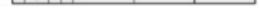
3次北区 北壁土層



耕作土	1/7SY2/1	黒褐色土(耕作土)	遺構埋土	60/2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト(粘質あり、鉄分含む)
底土	2/2.5Y3/1	黒褐色シルト(底土)		61/10YR3/2	黒褐色シルト(底物少含む)
	3/2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト(高石・雲母多く含む、底土)		62/2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト
	4/7SYR4/6	褐色シルト(底土)		63/10YR4/1	褐灰色細粒砂(SD83埋土)
	5/10YR3/1	黒褐色シルト(底土)		64/2.5Y3/1	黒褐色細粒砂(SD83埋土)
	6/2.5Y7/4	浅黄色シルト(底土)		65/2.5Y4/1	黄灰色細粒砂(SD83埋土)
	7/10YR6/4	にじい青褐色砂質シルト(粗砂沈殿箇所あり、底土)		66/2.5Y4/1	黄灰色砂質シルト(砂多いと混じる、SD83埋土)
包含層	8/10YR4/1	褐色シルト(よくしまる、遺物含む)		67/2.5GY3/1	暗オーリーブ灰色砂質シルト(SD83埋土)
	9/10YR4/1	褐灰色シルト		68/10Y3/1	オリーブ黒色中粒砂(SD83埋土)
	10/10YR4/2	暗灰褐色シルト(植物遺体少量含む)		69/10Y4/1	灰色粘土シルト(SD83埋土)
	11/2.5Y3/2	暗オーリーブ褐色砂質シルト		70/10YR4/2	黄灰褐色細粒砂(SD83埋土)
	12/10YR3/1	黒褐色シルト		71/10YR3/1	黒褐色砂質シルト
	13/2.5Y6/2	灰黄色シルト(粘性あり、鉄分多く含む、遺物含む)		72/10YRS/2	灰黄褐色砂質シルト(SZ82埋土)
	14/2.5Y7/1	灰白色砂質シルト(鉄分多く含む)		73/10YR4/1	褐灰色細粒砂(SZ82埋土)
	15/2.5Y6/3	にじい黄色シルト(褐灰色土ブロック混じる)		74/2.5Y3/3	暗オーリーブ褐色細粒砂(GZ82埋土)
	16/2.5Y7/1	灰白色砂質シルト(鉄分多く含む、遺物含む)		75/2.5Y4/1	黄灰色砂質シルト(SZ82埋土)
	17/10YR4/4	褐色シルト(粘性あり、遺物含む)		76/10YR4/2	黄灰褐色砂質シルト(SZ82埋土)
裸地面	18/2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト(裸地面)		77/10YR4/2	黄灰褐色細粒砂(鉄分含む、遺物含む、SZ82埋土)
	19/2.5Y4/1	黄灰色砂質シルト(裸地面)		78/10YR4/1	褐灰色シルト(遺物含む、SZ82埋土)
	20/2.5Y3/3	暗オーリーブ褐色砂質シルト(雲母多い、裸地面)		79/2.5Y4/1	黄灰色砂質シルト(SZ82埋土)
	21/2.5Y4/1	黄灰色粘土シルト(裸地面)		80/2.5Y4/1	黄灰色細粒砂(SZ82埋土)
	22/2.5Y3/1	黒褐色砂質シルト(裸地面)		81/2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト(SZ82埋土)
	23/10Y4/1	灰白色砂質シルト(裸地面)		82/2.5Y4/2	暗灰黄色砂質土(SZ82埋土)
	24/10YR4/2	褐灰色砂質シルト(裸地面)		83/2.5YS/1	黄灰色砂質シルト(2.5Y6/2灰黄色細砂ブロック混じる)
	25/10YR5/2	灰黄色シルト(裸地面) 北区上層		84/2.5Y5/1	黄灰色砂質シルト(2.5Y6/2灰黄色細砂ブロック混じる)
	26/10YR5/2	灰黃褐色シルト(粘性あり、裸地面)		85/10YR5/1	褐灰色砂質シルト
	27/10YR4/4	褐色シルト(粘性あり、裸地面)		86/10YR4/1	褐灰色シルト
	28/10YR3/3	暗褐色シルト(粘性あり、裸地面)		87/10YR4/1	褐灰色砂質シルト
裸出下面	29/10YR4/2	反灰褐色砂質シルト(10YR4/4褐色粘土シルトブロック混じる)		88/2.5Y5/3	黄褐色シルト(粘性あり、遺物含む)
	30/10YR2/2	黒褐色シルト(底物少含む)		89/2.5Y8/2	灰黄色シルト(遺物含む、底物混じる)
	31/2.5Y3/2	黒褐色シルト		90/10YR2/1	黒褐色シルト(遺物多く含む、SD146埋土)
	32/2.5Y6/1	黄灰色シルト(粘性あり、鉄分多く含む)		91/5Y6/1	灰色砂質シルト(底部に屢々、溝埋土か)
	33/2.5Y3/2	黒褐色シルト(粘性あり、砂が部分的に混じる) 北区下層		92/10YR7/1	灰白色砂質シルト(灰白色土混じる、SD151埋土)
	34/10YR4/3	にじい黄褐色シルト(粘性あり)		93/10YR7/1	灰白色砂質シルト(鉄分多く含む、砂質強い、SD151埋土)
	35/2.5Y4/3	暗オーリーブ褐色粘土		94/10YR7/1	灰白色砂質シルト(鉄分少含む、SD154埋土)
地下層	36/2.5Y3/2	黒褐色粘土		95/10YR6/2	黄灰褐色シルト(粘性あり、底物含む、SD148-149埋土)
	37/2.5Y7/1	灰白色砂質土(動性あり、鉄分含む)		96/10YR8/1	褐灰色砂質土(よくしまる、SD148-149埋土)
	38/10YR4/2	反灰褐色シルト(よくしまる、砂含む)		97/10YR6/2	黄灰褐色砂質シルト(SD148-149埋土)
	39/2.5Y3/2	暗褐色砂質土(粘性あり、鉄分含む)		98/17/0	灰白色砂質土(鉄分含む、SD148-149埋土)
遺構埋土	40/2.5Y3/1	黒褐色シルト		99/10YR7/1	灰白色砂質シルト(鉄分多く含む、砂質強い、SD148-149埋土)
	41/10YR3/1	黒褐色シルト		100/10YR7/1	灰白色砂質シルト(鉄分多く含む、溝埋土)
	42/10YR2/1	黑褐色シルト		101/10YR6/3	にじい黄褐色シルト(鉄分少含む、SD143埋土)
	43/10YR3/1	黒褐色シルト(2.5Y4/2暗灰褐色シルトブロック混じる)		102/2.5Y6/1	黄灰褐色シルト(鉄分多く含む、粘性あり、SD143埋土)
	44/10YR4/1	褐灰色シルト		103/2.5Y8/1	黄褐色シルト(底物粘性強い、SD144埋土)
	45/10YR3/2	黒褐色砂質シルト		104/10YR5/4	にじい黄褐色シルト(粘性あり)
	46/10YR3/1	黒褐色砂質シルト		105/2.5Y8/4	にじい褐色シルト(粘性あり)
	47/2.5Y3/1	黒褐色シルト(SD141埋土)		106/10YR5/8	褐灰色シルト(粘性あり、鉄分含む、SD134埋土)
	48/2.5Y4/1	黄灰色細砂(2.5Y3/3暗オーリーブ褐色土混じる)		107/10YR6/2	黄灰褐色シルト(粘性あり、鉄分含む、SD134埋土)
	49/2.5Y4/1	黄灰色細砂		108/10YR6/1	褐灰色砂質シルト(SD134埋土)
	50/2.5Y3/3	暗オーリーブ褐色砂質シルト		109/10YR4/4	褐色シルト(溝埋土)
	51/2.5Y3/3	暗オーリーブ褐色シルト		110/2.5Y5/2	暗灰黄色砂質シルト(SD127埋土)
	52/2.5Y3/3	暗オーリーブ褐色砂質シルト		111/10YR6/2	黄灰褐色砂質シルト(粘性あり、SK131埋土)
	53/2.5Y3/3	暗オーリーブ褐色砂質シルト		112/10YR5/6	黄灰褐色砂質シルト(砂多い、遺物含む、遺構埋土か)
	54/2.5Y3/2	黒褐色砂質シルト		113/10YR5/2	黄灰褐色砂質シルト(粘性あり、遺構埋土か)
	55/2.5Y3/3	暗オーリーブ褐色シルト(遺物含む)		114/10YR5/3	にじい褐色シルト(粘性あり、遺構埋土か)
	56/2.5Y3/1	黒褐色砂質シルト(遺物含む)		115/10YR3/4	暗褐色シルト(よくしまる、底物少含む)
	57/2.5Y3/3	暗オーリーブ褐色砂質シルト(2.5Y4/1黄灰色砂質シルト混じる)		116/10YR3/2	黒褐色シルト(底物・遺物含む、しまり弱い、粘性弱い)
	58/2.5Y3/3	暗オーリーブ褐色シルト		117/カクラン	
	59/2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト(鉄分多く含む)			



- | | | | | | |
|---|---------|-------------------------------------|----|----------|-------------------------------------|
| 1 | 10YR2/3 | 暗褐色砂質シルト(2.5Y3/1 黒褐色粘土ブロック混じる) | 7 | 5Y7/1 | 灰白色粘質土(約2mm程の細粒砂混じる) |
| 2 | 10YR3/2 | 黒褐色砂質シルト(2.5Y3/1 黑褐色粘土ブロックおよび少量混じる) | 8 | 10YR4/6 | 褐色粘質土(10YR4/7) 黑褐色粘土ブロックおよび種々多く混じる) |
| 3 | 10YR3/3 | 暗褐色砂質シルト(2.5Y3/1 黑褐色粘土ブロック少量混じる) | 9 | 7.5Y3/1 | オリーブ褐色粘質土(微粉粒および小石混じる) |
| 4 | 10YR3/3 | 暗褐色砂質シルト(2.5Y3/1 黑褐色粘土ブロック層状に重なる) | 10 | 10YR3/7 | 黒褐色シルト(後出面) |
| 5 | 2.5Y4/1 | 黄灰褐色シルト(青緑色砂) | 11 | 10YR2/1 | 黑色シルト |
| 6 | 2.5Y2/2 | 黑褐色細粒砂(青苔多い) | 12 | 7.5YR2/1 | 黑色粘土 |



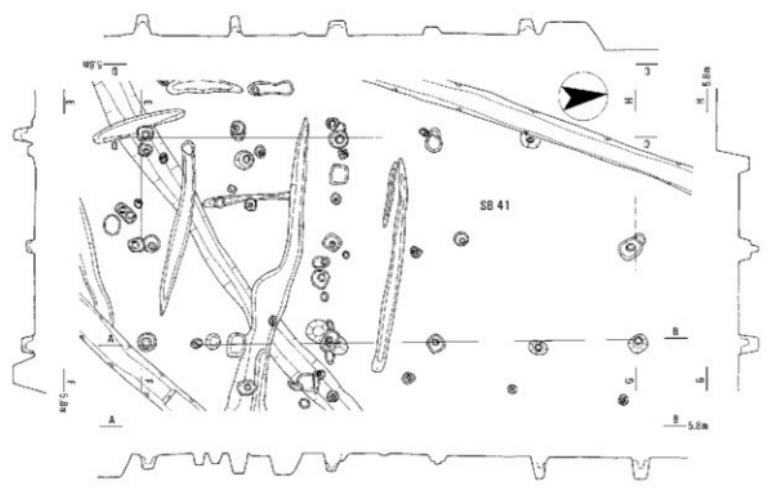
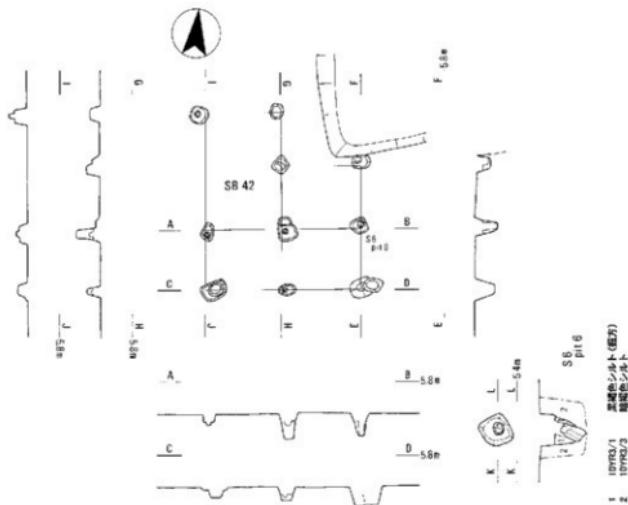


Fig. 15g' SB 42, SB 41 3' 8" + 25' 8" (1 : 100)

當時に折れたものが残存しているか否かも考えられるか。

測S D 5 8 測査を重ね部、n 10グリッド付近で検出した遺構である。溝幅約75cm、検査坑からの深さ約20cmで断面は階段形を呈する。土壁はSD 62と変わることで、車輪も途切れていた。

上記通りは、二伊櫛樂片や須恵器片などが確認できるのみである。

測S D 7 2 測査を重ね部、n 12グリッド付近で検出した遺構である。溝幅約85cm、検査坑からの深さ約15cm、断面は階段形を呈する。途切れまでSD 58とを繋ぎ、これもSD 62とをわって途切れる。

上記からは二伊櫛樂や須恵器樂片などがないとしている。

測S D 7 1 測査を重ね、1 12・13グリッド付近で検出した遺構である。溝幅0.3~0.9m、検査坑からの深さは約10cmで、前述のSD 62とほぼ一致する。

上記からはS字型(42)などのほか、二伊櫛樂や須恵器片などが確認している。

測S D 8 5 測査を重ね部、f・g 22グリッド付近で検出した遺構である。溝幅55~75cm、検査坑からの深さ約15cmである。SD 98を以てほぼ車輪に沿れ、SD 105やSD 103に接するように検出した。ただし、この付近は車輪ものの跡が確認するところで、僅かな溝の跡では復元鏡を照射したが、上記した遺構を照射しても甲冑等は認められない。S字型時代も車輪までは検出していた溝であろう。

測S D 1 0 0 測査を重ね部、f・g 23グリッド付近で検出した遺構である。SD 85とほぼ一致し、先の跡に沿れを示す。溝幅約1.2m、検査坑からの深さは約60cmで、断面は階段形である。部分的に車輪がオーバーハングしており、そこには車の荷物を示す車在系の跡が確認できる。直近で検出した上の溝の断面は階段状やT字形であることと比較して、SD 100はT字形に偏りがあると見える。

上記からは灰陶物器や二伊櫛樂器、馬鹿器などがありしており、S字型時代も車輪のものであろう。落ち込みS Z 8 2 測査を重ね部、d 19グリッド付近で検出した遺構である。車輪がT字形に広がつており、砂とシルトが各所で層状あるいは堆積して見られる溝であることから、生糞洗器もしくは既

沙部に堆積したものが考えられる。

S D 100・108・106はS Z 82とをわるところで途切れる。

上記した遺構は平安時代のものがS字型であり、鉄骨も数点確認した。

c 鉄骨時代

測S A 1 0 9 測査を重ね部、d 23・24グリッド付近で検出した遺構である。車輪はN73~74°Wである。柱穴付に付(209・210)が残存していた。SD 90にほぼ沿う状況から、神らかの関連が考えられる。

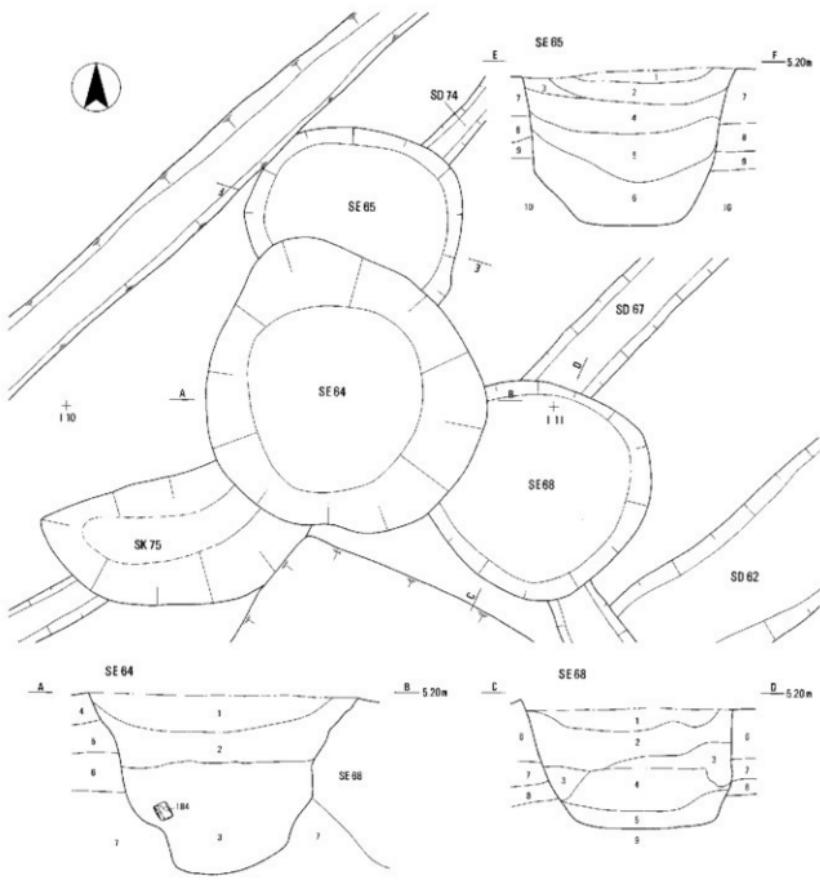
測S E 6 3 (第17g) 測査を重ね部あり、m 8グリッド付近で検出した遺構である。T字型で、直角約2m、検査坑からの深さは約1mである。墨跡深30cm付近で上記が喰藏臥食シルト層となり、そこには井戸に多くの焼物遺物が混じり、骨片が確認できる。柱跡や輪縫などの柱跡等は確認できなかつた。約25m東では丸柱に手縄が残るSE 57を検出ししておらず、溝の状況などを製品が残存するための条件が付けてあるにもかかわらず、本片なども見られないことから、系帯り柱もしくは柱跡等に柱跡などの手縄をやき取ったものと思われる。

上記からは、二伊櫛や須恵器、灰陶系灰陶器類(?)、「茶壺」などがあり、灰陶類のものとされる。

測S E 6 4 (第16g) 測査を重ね部あり、k 10グリッド付近で検出した遺構である。車輪は下型輪、T字形。長軸約2.5m、短軸約2.2m、検査坑からの深さは約1.5mで、すり跡付に墨跡されている。上記のオリーブ乳食シルト層には、丸柱跡のほか柱跡などの有機物が多目に見えており、骨片が確認できる。柱跡を構成するような柱跡や筒構などは確認できなかつた。

上記からは、「茶壺」や車輪跡等の伊櫛などのほか、直角18.8cmの底板を有する柱跡(184)も見出している。

測S E 6 5 (第16g) 測査を重ね部あり、k 10グリッドで検出した遺構である。SE 64と接続しており、車輪の輪跡から、SE 64のほうが新しい。このSE 64によってほぼ車輪が確認されているが、車輪は直角約1.8mのT字形、検査坑からの深さ約1.3mである。柱跡を構成する柱跡や柱などの手縄は確認できなかつた。



SE 64

- 1 10YR4/2 に近い青褐色シルト(10YR4/1)褐灰色シルトが間に混じる)
 2 2.5Y3/2 褐灰色シルト
 3 5Y3/1 オリーブ褐色シルト
 4 2.5Y5/2 褐反対色砂質シルト(検出面)
 5 10YR4/2 褐黃褐色砂質シルト
 6 2.5Y5/2 褐黃褐色シルト
 7 10Y4/1 褐色細粒砂と中粒砂

SE 65

- 1 2.5Y3/2 黑褐色シルト(2.5Y4/1)黄褐色シルトブロック混じる)
 2 2.5Y3/2 黑褐色砂質シルト・黄灰色シルトおよび中粒砂が間に混じる)
 3 2.5Y3/2 混合褐色シルト
 4 2.5Y3/2 黑褐色シルト
 5 5Y3/1 オリーブ褐色シルト
 6 5Y3/1 オリーブ褐色砂質シルト
 7 2.5Y5/2 褐灰褐色砂質シルト(検出面)
 8 10YR4/1 黑褐色シルト
 9 2.5Y5/2 褐灰褐色砂質シルト
 10 10Y4/1 灰色細粒砂と中粒砂

SE 68

- 1 10YR5/1 黒褐色シルト(褐灰色細粒と黒褐色シルトが層状に入る)
 2 2.5Y4/2 黑褐色砂質シルト(10YR5/1褐灰色細粒が層状に入る)
 3 10YR5/2 褐灰褐色シルト質細砂
 4 10Y4/1 褐色シルト質細砂
 5 2.5Y5/2 黄色砂質シルト(検出面ブロック混じる)
 6 2.5Y5/2 黄褐色砂質シルト(検出面)
 7 10YR3/1 黑褐色シルト
 8 2.5Y5/2 褐灰褐色砂質シルト
 9 10Y4/1 褐色細粒砂と中粒砂

0 2m

第16頁 S E 6 4 , S E 6 5 , S E 6 8 第17頁 S E 6 6 (1 : 40)

そこからは、二茶碗などが注げている。

ナメ S E 6 8 (第16号) 清水区立部、110グリッド付近で検出した遺構である。SD67やSD70より新しく、SE64よりも、ナメはほぼ円形で、直径約2m、検出溝からの深さ約1mである。ナメ頭やナメ脚などの手足は確認できず、赤塗りのナメもしくは施墨跡に拘泥されたものとえられる。辯士は5層に分けられ、このうち上層の灰砂更シルト層からはナメなどの有機質などが確認できたが、SE64やSE65に比べて辯士に砂が多く混じる。ナメや茶碗などが出土しており、漢唐時代のものと思われる。

溝 S D 9 0 溝をタテ部で検討した構造である。この付近は多くの溝がずれし、ヨモで 1タス 1タスの溝を検討することは非常に困難であった。この SD90も立溝構造の大きな SD88 をして検討を行い、墨印を行っていく途中で数々の溝にさかれたものの 1つである。溝をタテで底を高くするような状態で凍結され、検討図からの深さは約 10cm と浅い。溝の形状からもこの的なものではなく、リテル路であろう。

港三からは、墳傍即の邊野から二茶焼まで含まれており、最終的に横倉即に沿った溝であると考えられる。

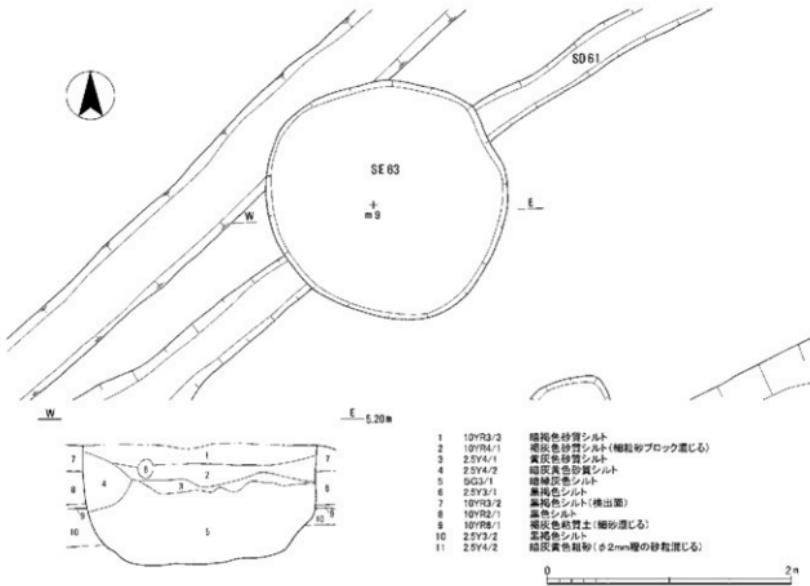
4 検出した遺構（3次）

3次講話をで塗り替えた追憶は、古代がけいである。它「塗る」と塗るで「と車」にかけられ、「と」では、はじめに追憶塗り替えた脇「に」にも追憶を含んでいたことから、2度の講話を行った。上脇では「今まで嘗ての墨絵の墨絵や絵などを、下脇では絵などを塗り替えた。既に追憶からは二・三脇の甲斐の雪印等は認められなかった。

a 古漢語後編

子手SK170 帯を一部、R33グリッド附近で検出した退潮である。支流が渓谷であり、河床が砂質約2.5mの地形、検出点からの深さ約1mである。断面構造によりそれが砂むら地形で、2層に分けられる。飛鳥は丘陵貯水池が進展しており、満水状態であったことが窺える。

SD134 垂木の大塚部、S33グリッド付近で



年17岁 S E 63 三脚架·塑料瓶 (1:40)

検出した遺構である。横幅40~100cm、検出限から
の深さ約50cmで断面は階段形である。**柱**一車夫か
らの溝で、車夫に向かって徐々に深くなる。

溝からは金属器の痕跡などが出土している。

b 余屋・廻廊付

集落内遺跡 S B 1 2 1 (第18号) 二重車夫の上層
丸部、O43グリッド付近で検出した遺構である。車
夫3間、丸2間の櫛柱溝で、軸方向はN 9°~
10° Eである。柱間は約2.4mで、柱穴には柱径
約30cmの柱頭が確認できる。柱穴からは鍵形荷器や
床脚等器などが出土しており、平安時代後期の特徴
とを考えられる。

集落内遺跡 S B 1 2 9 (第19号) 二重車夫の上層
丸部、Q41グリッド付近で検出した遺構である。
車夫4間、丸2間の櫛柱溝で、軸方向はN 2°~
Wである。溝の尖端にはほぼ丸い柱頭が認められることから、丸に丸を塗つ溝である可能性
も考えられる。柱間は1.8~2.1mと互換である。
柱穴からは伊豫器や瓦器などが出土している。S
B172とほぼ丸をそろえる。

集落内遺跡 S B 1 3 0 (第20号) 二重車夫の上層
丸部、P39グリッド付近で検出した遺構である。車
夫4間、丸2間の車輪城の溝で、柱間は約2.1
mである。軸方向はN 11°~12° EでSB121やSB
171とほぼ丸である。ほとんどの柱穴では柱径
20cm程度の柱頭が確認できる。

柱頭の底から床脚等器の底部(432)が根元付
に確認されており、平安時代後期の特徴であると
考えられる。

集落内遺跡 S B 1 7 1 (第19号) 二重車夫の上層
丸部、O40グリッド付近で検出した遺構である。車
夫4間、丸2間の櫛柱溝で、軸方向はN 8°~
9° Eである。柱間は約2.1mで柱径約20cmの柱頭を
確認できる。

柱穴からは伊豫器などが出土しており、平安
時代後期の特徴であろう。

集落内遺跡 S B 1 7 2 (第20号) 二重車夫の上層
丸部、P40グリッド付近で検出した遺構である。車
夫3間、丸2間の櫛柱溝で、軸方向はN 0°~
1° W。SB129とほぼ丸を塗る。柱間は約1.8m
で柱径約20cmの柱頭を塗る。

柱穴からは伊豫器などが出土しており、平安時
代後期の特徴であると考えられる。

手前 S E 1 5 5 (第21号) 二重車夫の头部、W33
グリッドで検出した遺構である。ヨリ縁柱付で長軸
1.4m、短軸1.1m、検出限からの深さ約2.1mであ
る。車夫の手前として、廻廊に横樋を渡し隅柱を設
けた車夫4本のうち3本までが、溝壁部材を配置
したもので、横樋を渡す柄は確認できない。また、
溝の底にあるものほど柱が小さくなり、特に4号
車夫はひとまわり小さい。そのためか、3号車夫を塗
るとときに4号車夫となる車夫を專門とする伏汎が確
認できた。4号車夫の溝には集水のための溝が見ら
れる。室野氏の家領ではBIV型船板模様などめぐら
(瓦柄付)に埋設するか。

手前 S D 1 4 6 車を付木部、W28グリッド付近で検
出した遺構である。柱約1.7m、検出限からの深さ
約30cm、溝まで車夫を有する。

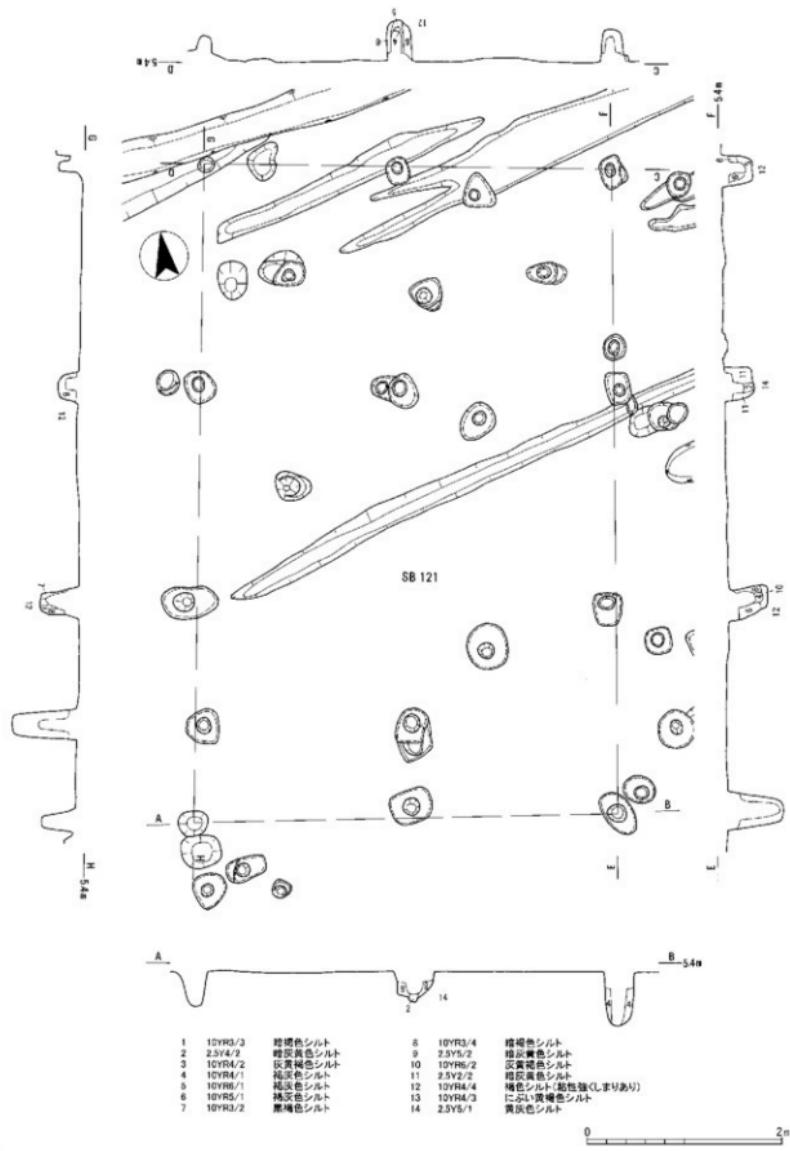
溝からは伊豫器や瓦器、床脚等器などが
出土している。特に、「力範」と書きされた床脚等
器柄が2点(395・400)出土している。

平安時代後期の溝であろう。

手前 S D 1 6 6 車を付木部、V34グリッドで検
出した遺構である。斯形窓枠により、SD146・S
D147より新しいことがわかる。車は柱頭の強い
丸を突起で、大片や列子を含む。「力範」と書き
された床脚等器柄(405)などが出土している。

手前 S D 1 5 2 車を付木部、Z27グリッド付近で
検出した遺構である。柱約1m、検出限からの深さ
約30cmである。溝の底の溝は柱頭の強い丸を
シルトで、そこから木型種子(木版彫り模様)や
製品などを確認した。また、転写できる遺構として
延喜通鑑やノムなども出土している。ノムは頭筋・
尾筋・脚筋が矢理しており、矢理が行われた可能性
も考えられよう。平安時代後期の遺構か。

手前 S D 1 5 3 車を付木部、Y27グリッド付近で検
出した遺構である。柱約1.2m、検出限からの深さ
約30cmである。透視状況を斯形で想定すると、一
度止まつたところに再度溝を墨引している状況が窺
える。丸ほど柱頭の強い丸となり、有機物などを
含む。E155遺構が少ないため、豊かな馬印での溝



號 186 SB 121 五 · 五 · 五 (1 : 50)

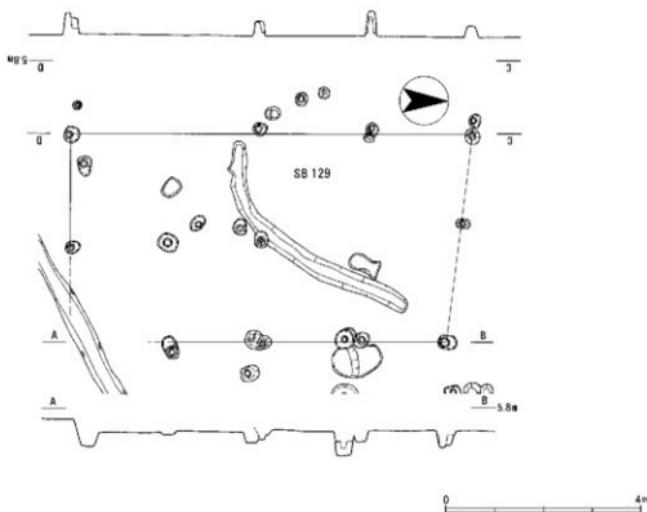
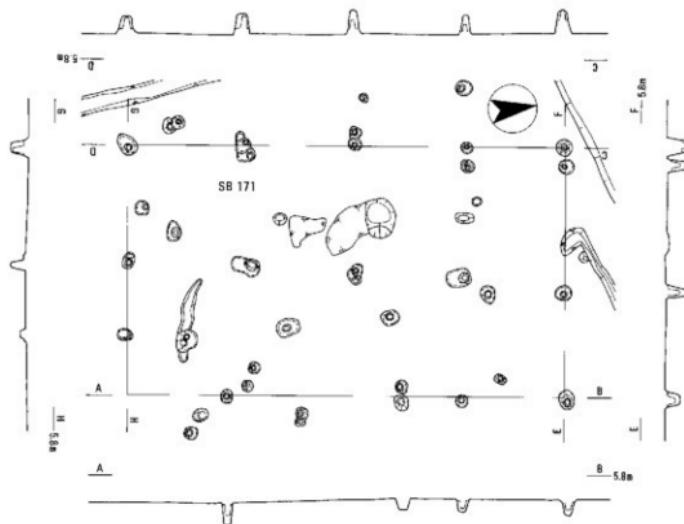
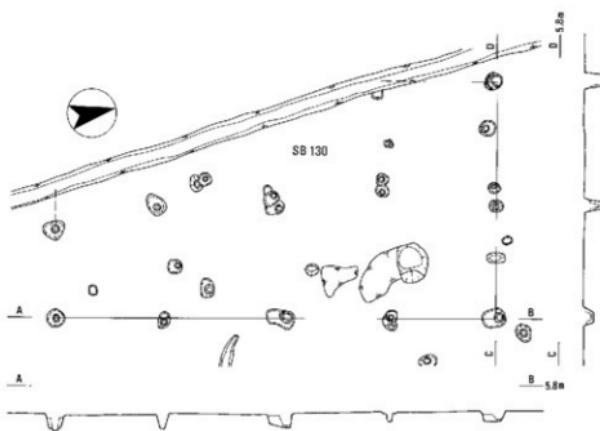
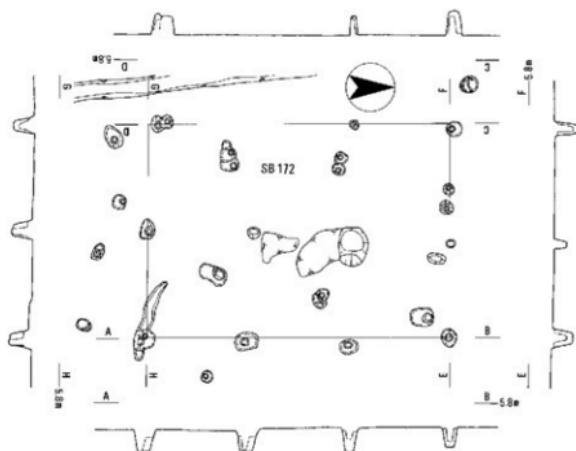


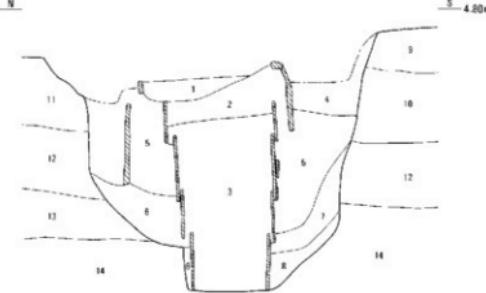
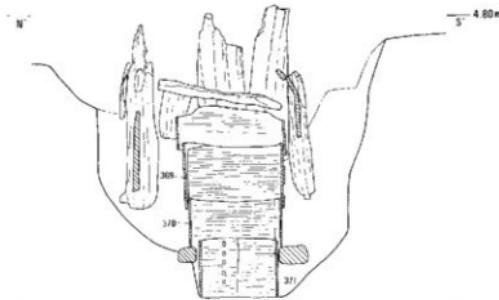
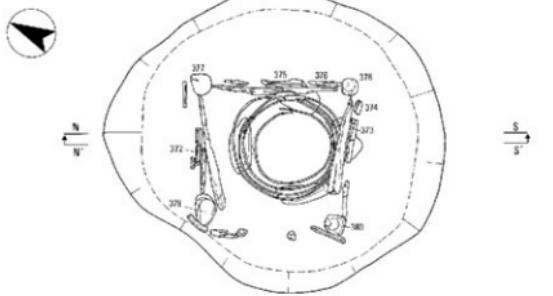
Fig. 19d' SB 171, SB 129 31° 30' + 35° 30' (1 : 100)



0 4 μm

♀ 20d SB 172, SB 130 3000× · 2500× (1 : 100)

SE 155



A horizontal number line starting at 0 and ending at 1. There are 5 tick marks between 0 and 1, dividing the segment into 6 equal parts. The labels 0 and 1 are at the far left and far right respectively.

年21號 SE 155 三版一·四版 (1 : 20)

はできないが、SD158・SD161と並の溝とも考え方、SD152と溝のみ約2mをもつて走る。道路追跡の可能性も考えられるか。

c 調査結果

調査SD163 垂れの車輪跡、b28グリッド付近で検討した追跡である。△角のみ調査せずで検討した

が、ほとんどが車輪跡である。

△角からは車両跡系「伊賀の湯や」茶碗、加工骨等などが見出されている。

【註】

(1) 宮野喜久「伊賀の湯や」(『日本古文書』第65号第5号 宮野喜久 1982年)

遺跡番号	調査名集	地名	グリッド	ピット番号	ピット遺物の時期	發掘時間	面積(東西間×南北間・m)	北緯	方位(N真東)	備考
SB41	新立柱建物		t 4	P 1・P 2	P 1：土師器 P 2：土師器	平安後期	2間(4.2m)×5間(10.2m)	南北	N 5° E	
			t 5	P 1・P 2	P 1：土師器 P 2：土師器、土師質土器					
			u 4	P 3	土師器・土師質土器					
			u 5	P 2・P 3	P 2：土師器、灰陶陶器 P 3：土師器					
			v 4	P 3・P 7・P 11	P 3：土師器・土師質土器 P 7：土師器、灰陶陶器、灰陶土器 P 11：土師器					
			v 5	P 2・P 5	P 2：土師器、灰陶器、灰陶土器 P 5：土師器、黑色土器					
SB42	新立柱建物		x 6	P 1・P 2・P 3・P 4・P 7	いづれも土師器小片出土	古代	2間(3.2m)×3間(3.6m)	南北	N 5°~6° W	柱材推存。
			x 7	P 1	土師器					
SA109	柱列		d 23	P 1・P 2・P 3	P 1：土師器	中世	3間(2.4m)	東西	N75°~76° W	SD90と 関連?
			d 24	P 4						
SB121	新立柱建物		O 42	P 2・P 4	P 2：土師器、灰陶陶器 P 4：土師器、灰陶器、灰陶陶器、土師質土器	平安後期	2間(4.2m)×3間(8.4m)	南北	N 9°~10° E	
			O 43	P 3・P 4・P 5	P 3：土師器、灰陶器 P 4：土師器 P 5：土師器、灰陶陶器、鉢底土器					
			P 42	P 6						
			P 43	P 3・P 8・P 10	P 3：土師器、灰陶器、灰陶陶器、土師質土器 P 8：土師器、灰陶陶器、黑色土器 P 10：土師器、灰陶陶器、土師質土器					
SB129	新立柱建物		P 4 1	P 4	土師器・土師質土器・桃石(砾石)	平安後期	2間(4.2m)×4間(8.2m)	南北	N 2° W	
			P 4 2	P 7	土師器					
			Q 4 1	P 1・P 4	P 1：土師器 P 4：土師器、瓦器、灰陶陶器					
			Q 4 2	P 5・P 7	P 5：土師器、灰陶器 P 7：土師器					
			R 4 1	P 4・P 6	P 4：土師器 P 6：土師器、灰陶器					
			R 4 2	P 2	土師器					
SB130	新立柱建物		P 3 9	P 3	土師器、灰陶陶器	平安後期	2間(4.8m)×4間(8.8m)	南北	N 11°~12° E	
			P 4 0	P 1・P 6	P 1：土師器 P 6：土師器、灰陶器、灰陶陶器					
			Q 4 0	P 2・P 4	P 2：土師器、灰陶器、陶器 P 4：土師器					
			R 3 9	P 1	土師器					
SB171	新立柱建物		R 4 0	P 1	土師器	平安後期	2間(5.2m)×4間(9.0m)	南北	N 8°~9° E	
			O 3 9	P 1	土師器・土師質土器					
			O 4 0	P 1	土師器、黑色土器					
			O 4 1	P 1	土師器					
			P 3 9	P 2・P 5	P 2：土師器、灰陶器					
			P 4 1	P 3	土師器					
SB172	新立柱建物		Q 3 9	P 2・P 5	P 2：土師器 P 5：土師器	平安後期	2間(4.4m)×3間(8.1m)	南北	N 0°~1° W	
			Q 4 0	P 1	土師器					
			P 3 9	P 1	土師器					
			P 4 0	P 3・P 4・P 7	P 3：黑色土器 P 4：土師器 P 7：土師器					
第2章 第二章 地理・歴史			Q 3 9	P 4	土師器、灰陶器					
			Q 4 0	P 3・P 5・P 7	P 3：土師器 P 5：土師器 P 7：土師器					

遺構番号	調査時の番号	性 種	調査次数	地区	遺構面	グリッド	時 期	備 考
	SK 1	カクラン	1	1		B 3		
SD 2		窓	1	1	A 5・6、B 5・6		古墳後期?	
SK 3		土塀	1	1	A 7・B 7		古墳後期	平地円形
	SK 4	カクラン?	1	1		B 8		土塀面ではカクラン表記。
SD 5		窓	1	1	B 10・11		平安後半	SD 9と同一。
SD 6		窓?	1	1	A 8・B 8		古墳?	土塀の可能性あり。
	SE 7	カクラン	1	1		B 12		
	SK 8	カクラン	1	1		B 11		
SD 9		窓	1	1	B 12・13		平安後半	SD 5と同一。
	SE 10	カクラン	1	1		C 18・19		
SD 11		窓	1	1	B 3・4		古代?	
12~30								欠番
SD 31		窓	1	2	A 2・B 2			
SD 32		窓	1	2	A 2・B 2		古墳後期	
SD 33		窓	1	2	A 5		古代	鐵鋸抜削器出土。
SD 34		窓	1	2	A 8・9、B 8・9			SD 7と同一。
SD 35		窓	1	2	B 4・5			
SD 36		窓?	1	2	A 19			調査途中消滅
SD 37		窓	1	2	A 19・B 19		~古代	
SD 38		窓	1	2	A 19・20II&B		古代	
SD 39		窓	1	2	A 17・B 17		古墳後期	
40~42								欠番
SZ 43		落ち込み?	2		w 3・x 3		中世	多良椎窓~鍵倉までの遺物出土。
SD 44		窓	2		w 4		古代?	
SD 45		窓	2		w 3・4		古代	
SD 46		窓	2		v 3・4、w 4		古代?	
SD 47		窓	2		v 4		平安	SD 49・SD 50と並走。
SD 48		窓	2		v 4		古代?	
SD 49		窓	2		v 4・5		平安	SD 47・SD 49と並走。
SD 50		窓	2		u 4・5		古代?	SD 47・SD 49と並走。
SK 51	SD 51	窓	2		x 2・w 2			
SD 52		窓	2		r 7・s 8		奈良後半	SK 54を含む。 「刀自合」の整善鉄削器出土。
SK 53		土塀	2		t 7・u 7		不明	遺物なし
SK 54		土塀	2		r 7		奈良後半	SD 52と同一。
SD 55		窓	2		r 7		奈良後半	
SK 56		土塀	2		r 6・q 6		平安初期	長持円形
SE 57	SK 57	舟戸	2		s・z 6、s・r 7		奈良後半	鐵板組和引き柱口型
SD 58		窓	2		q・r 8、p・q 9		平安	
SD 59		窓	2		p 9、q 8・9		古代	
SD 60		窓	2		q・r 9、q 10		古代	
SD 61		窓	2		m 8、1 9・10			
SD 62		窓	2		m 8・9・10		古墳後期	SD 8と同一の可能性あり。
SE 63	SK 63	舟戸	2		l・m 8、l・m 9		中世前半	有機物多量に含む。 笠置山で出土。
SE 64	SK 64	舟戸	2		k・l 10		中世	風化石灰・有機物含む。 木製品出土。
SE 65	SK 65	舟戸	2		k 10		中世前半	有機物含む。
SK 66		土塀	2		l・m 12		古代?	銅の種子出土。
SD 67		窓	2		k 11		古代	

遺構番号	調査時の番号	性 格	調査位置	地 区	遺構面	グリッド	時 期	備 考
SE 68	SK 68	井戸	2			1 11	縦倉	
SD 69		溝	2			1 × k 12	古代?	
SD 70		溝	2			1 11 × 12	不明	遺物なし
SD 71		溝	2			1 12	古代	
SD 72		溝	2			1 13	古代	
SD 73		溝	2			k 14	古代?	
SD 74		溝	2			k 10	不明	遺物なし
SK 75		土坑	2			1 10	不明	遺物なし
SD 76		溝	2			o 11	古代?	
SD 77		溝	2			o 13		
SD 78		溝	2			n 14	不明	遺物なし
SD 79		溝	2			1 14	古代?	種子など有機物出土。
SD 80		溝	2			k 14	不明	遺物なし
	SK 81	カクランか	2			h × 1 14		遺物なし
SZ 82		萬字込み	2			g 14 × 15 05h	平安後半	白河道から 銀洋等「六」の墨書き無陶器出土。
SD 83		溝	2			h 14	不明	遺物なし
SD 84		溝	2			f 17 05h		遺物で墨 SD 62 と同一の可能性あり。
SD 85		溝	2			g × f 22	平安末	
SK 86		土坑	2			h 17	不明	埋土に炭化物面に亘る。 遺物なし
SK 87		土坑	2			g 18	不明	埋土に炭化物面に亘る。 遺物なし
SD 88		溝	2			d 23 × 24 × 25	中後前半	SD 8 9 × 9 0などの上層。 平安～中世までの遺物出土。
SD 89		溝	2			c 27, d 23 05h~	中世	
SD 90		溝	2			d 23~27	縦倉	古墳開削～中世までの遺物出土。 ほぼ垂直に曲がる。
SD 91		溝	2			c 27, d 26	古代?	堆土側張り。
SD 92	SK 92	溝	2			d 26 × 26	平安後期	SD 9 3 × SK 1 0 4 と同一。
SD 93		溝	2			d 24~26	平安後期	SD 9 2 × SK 1 0 4 と同一。
SD 94		溝	2			d 23	中世	SD 9 2 × SD 9 3 × SK 1 0 4 と同一の可能性あり。
SD 95		溝	2			d × e 23	平安	
SK 96		土坑	2			e 23	古代	
SD 97		溝	2			d × e 23	平安後期	
SD 98		溝	2			d × e 23	平安後半	
SD 99		溝	2			d 26	古代?	ほぼ垂直に曲がる。
SD 100		溝	2			e 23 05h~	平安末	ほぼ垂直に曲がる。 種子出土。
SK 101		土坑	2			e 22	平安	
SK 102		土坑	2			d 23		
SD 103		溝	2			d 23	平安末	SD 1 0 5 と同一。
SK 104		土坑	2			d 24	平安後期	SD 9 2 × SD 9 3 と同一。
SD 105		溝	2			d × e 22	古代	SD 1 0 3 と同一。
SD 106		溝	2			d 22	平安末	
SD 107		溝	2			f × g 22	不明	埋土 遺物なし
SD 108		溝	2			e × d 22 05h~	平安?	
SK 110		土坑	2			d 26 × 27	不明	遺物なし
SK 111		土坑	2			f 20 × 21	古代?	
SD 112		溝	2			w 3 × 4	不明	遺物なし 下層で検出。
SD 113		溝	2			t 6 × 7	古代?	矢番
1 14～1 2 0				北	上層	O 43 × 44		
SD 122		溝	3					SD 1 2 3 ～ 1 2 5 と形状・埋土類似。

遺構番号	調査時の番号	性 種	調査次數	地区	遺構面	グリッド	時 期	備 考
SD123		唐	3	北	上層	O42~44	平安	SD122・124・125と形状・堆土類似。
SD124		唐	3	北	上層	N43・44、O43	平安	SD122・123・125と形状・堆土類似。
SD125		唐	3	北	上層	N42・43、O40~42	平安	SD122~124と形状・堆土類似。
SD126		唐	3	北	上層	P41・42、Q41・42	平安	
SD127		唐	3	北	上層	O39~41	平安	SD122~125と堆土類似。
SD128		唐	3	北	上層	Q40	古代?	
SK131		土坑	3	北	上層	O40	古代	
SK132		土坑	3	北	上層	Q42	平安	
SK133		土坑	3	北	上層	P43・44		
SD134		唐	3	南		Q30・31(II)2	古墳後期	
SD135		唐	3	北	下層	O42~44(II)2	古墳後期	
SD136		唐	3	北	下層	P43・44		
SD137		唐	3	北	下層	O41・P41		
SK138		土坑	3	北	下層	P41・42、Q41・42	古墳?	堆土に灰化物含む。
SK139		土坑	3	北	下層	Q42	平安	
SK140		土坑	3	北	下層	P39・40、Q39・40	古代	
SD141		唐	3	北	下層	P39・40		
SK142		土坑	3	北	下層	R39	古代	
SD143		唐	3	南		U27・28、V28~32	古墳?	SD144・145と堆土類似。
SD144		唐	3	南		T28、U28・28(II)2	古墳後期	SD143・145と堆土類似。
SD145		唐	3	南		V27~29、W28・29	古代(平安?)	SD143・144と堆土類似。
SD146		唐	3	南		V26・27・31~34(II)2	平安後半	「万鏡」など墨書き陶器・絵柄陶器・帽子など出土。 SD146と重複。
SD147		唐	3	南		V33・34(II)2	平安後半	SD156・SD166と重複。 帽子出土。
SD148		唐	3	南		W25・26(II)2	古代?	SD149・150・151と堆土類似。 SD149と合流。
SD149		唐	3	南		W25・26(II)2	古墳後期~古代	SD149・150・151と堆土類似。 SD149と合流。
SD150		唐	3	南		X25、Y25	古代?	SD148・149との堆土類似不明。 SD148・149・151と堆土類似。
SD151		唐	3	南		X25、Y25(II)2	古墳後期	SD148・149・150と堆土類似。
SD152		唐	3	南		Y28~32(II)2	平安後半	薄唇灰陶鉢・土器・木製品・瓶(『延喜式』)・帽子など出土。 SD152と重複。
SD153		唐	3	南		X28・29(II)2	平安	SD158と重複。 帽子など帽子大量出土。SD152と重複。
SD154		唐	3	南		X24・25、Y24・25	古代	堆土に灰化物含む。 帽子など帽子出土。
SE155		井戸	3	南		W33	平安後期	圓筒形石井戸の存在。周辺に建築跡付帯用。 帽子など帽子出土。
SD156		唐	3	南		W31~34(II)2	古代?	SD147と重複して合流。 帽子など帽子出土。
SK157		土坑	3	南		X34		堆土直下で検出。
SD158		唐	3	南		X29~31	平安?	SD153と重複。 帽子出土。
159							火葬	
SD160		唐	3	南		X31~33、Y30・31	古代	SD152と合流する可能性あり。 帽子出土。
SD161		唐	3	南		X31~34	不明	遺物なし
SD162		唐	3	南		X31~34	古代?	SD160と重複。
SD163		唐	3	南		b23~29	中世後半	北端の一部は、地下水により不透。南側は調査区外。 薄唇山形陶器出土。
SK164		土坑	3	南		a30		堆土直下で検出。 堆土に地山ブロック多い。
SK165		土坑	3	南		Y30	中世?	
SD166		唐	3	南		V33~34、W34	平安後半	「万鏡」など墨書き陶器・帽子出土。 SD146・SD147と重複。 V34ブロックでSD146の遺物と混入の可能性あり。
SK167		土坑	3	南		a27	中世半	円形
SK168		土坑	3	南		a27	中世?	
SK169		土坑	3	南		a27		円形
SK170		土坑	3	南		Q31~34、R32~34	古墳後期?	東字は調査区外。

タ 5 次 遺構 ③

IV 出土遺物

今後の調査で判明した遺物は、1～3次のものと合わせると墳頂部にして約110点である。これらは主に後世代後期から現存時代のものが组成である。

以下、主な出土遺物について種別に記述する。
なお、遺物個々の詳細については、主製品・遺物
標示名（第6～18項）を参照されたい。

1 第1次調査出土遺物

漢SD3.9±m 遺物（1～6） 1～4は主に伊賀分
け喰。②底部がS字状を呈するもの（S字状②底分
け喰。以下「S字喰」と呼称）。1はD領⁽¹⁾新
～E領⁽²⁾に、それ以外はE領に属するものであ
る。なかでも2はE領のものであろう。5は主に伊賀
の喰。6は須彌器軸身である。

いずれも6型尾前並列のものと推えられる。

漢SD3.3±m 遺物（7・8） 7は須彌器の軸で、
キノコ形のつまみを持つ。種昌彦のものか⁽³⁾。8
は軸身である。

漢SD1.1±m 遺物（9） 主に伊賀の分け喰と思わ
れる。

主S SK3±m 遺物（10） 主に伊賀の小形軸である。
軸身には細かいハケメが施されており、全然的に器
伊が薄い。主に後世代後期のものか。

漢SD3.8±m 遺物（11） 主に伊賀の喰である。②
底部が近のみのE領であるが、軸部は長軸を呈する
ものか。軸身には少しがけがある。

漢SD5±m 遺物（12・13） 12はム字形製作の器
の軸部である。非常に尾前用である。②底部丸
輪を有す。

13は主に伊賀軸である。②底部が外反する。②底深
部に横伏のものがけがある。③穴跡のものか。

漢SD9±m 遺物（14・15） 14・15は仄列背器の
軸。いずれも軸部が丸みを持つ形状で、器軸は薄い。
15の底部分は絶長い。○53号窓式軸のものである⁽⁴⁾。
遺物6±m 遺物（16～25） 16は仄列背器軸。底分
部の断面が主に角形を呈する。17は須彌器軸 B⁽⁵⁾。
軸部丸みに後世接が確認できる。18～23は主に須彌
器軸の軸。遺物「主茶壺」と呼称されるものであ

る（「J」、「主茶壺」と呼称）。主に後世接がある
ものが多い。藤原北村氏による「主茶壺の構造」⁽⁶⁾の
第5～7型式に該するものである。

24・25は丸口リ脚である。24は主茶壺の底部をわ
ち乍りて軸身している。25は主茶壺の底部分。

2 第2次調査出土遺物

漢SD6.2±m 遺物（26～41） 26は主に主茶壺の軸
である。②底部が吹く外反し、軸部丸みに瘤状突起
を添り立ける。③脚部付のもの。

27～29はS字喰である。いずれもE領に属するもの
であろう。なかでも27は丸軸を呈す。28は②底部
の瘤⁽⁷⁾が弱い。30・31は分け喰の分部。31は底部を
折り返す。

32～40は主に伊賀軸。32はム字軸。器軸が比較的薄い。
33は軸。軸部は丸く、②底部は外反する。「主茶壺
式」⁽⁸⁾のものである。34は丸軸。主にタナデ脚部で、
器軸は薄い。35～40は主茶壺の脚部。37には直径5mm
程度の瘤⁽⁹⁾が見られる。

41は須彌器の軸身。

いずれも主に後世代後期（6世紀前半頃）に属する。
漢SD7.1±m 遺物（42） 42はS字喰。E領のもの
である。

主S SK5.4±m 遺物（43・44） 43・44は主に伊賀
軸。②底部がヨコナデによって外反する。主に構造⁽¹⁰⁾
の第1脚第3脚跡（「J」、「I～3脚」のように記
す）両行のものである。

漢SD5.2±m 遺物（45～60） 45～48は須彌器で
ある。45は主に丸み付の軸。軸身には「アリシ」
の墨書きが見られる。46は軸A、47は軸B。48は丸で
ある。丸きが軽度で、背いる丸を以てする。

49～60は主に伊賀軸。49は軸Aである。軸身には丸き
がけある。軸身にはミガキ漆塗を施す。50～56は
軸A。軸身には墨でが見られるものもある。57は軸、
58・59は軸。60は軸Aである。主に構造のI～3脚
両行のものであると思われる。

主S SK5.6±m 遺物（61・62） 61・62は主に伊賀
の軸Aである。主に構造のII～1～2脚のものか。

湯S D 5 9 ざく退け (63) 二伊摺の糸である。二
歳部が「く」の字状に寄せする。

湯S D 5 8 ざく退け (64) 二伊摺の糸である。二
歳部が強く反し、落部に糸を始つ。

湯S D 5 5 ざく退け (65) 二伊摺の糸 A である。
二歳部はヨコナダによって僅かに反する。糸には
横がけをしている。系す構引の I - 3 部に逆行する
ものか。

湯S D 4 9 ざく退け (66) 豊岱三器の椀と思われる
。小見⁽¹⁾である。

湯S D 4 5 ざく退け (67) 漢乳器の糸 B である。
糸部⁽²⁾の張りが弱い。

打 S E 5 7 ざく退け (68~105) 68~72は頸乳器。
68は糸身。底部糸身にヘラ書きがえられる。69
~72は糸 A。69は底部糸身にヘラ切り糸、糸身に一
定のナデが認められる。70の底部糸身に墨書きが
確認できるが、筆記は下型である。71は梳成下糸。
73~77は二伊摺。73~75は糸 A、76は糸 A である。
糸身にミガキや略々がえられる。系す構引の I - 3
部に逆行するものであろう。77は豐岱。糸部糸身には
横、糸身には横筋がけをする。

78~105は本製品である。78はず⁽³⁾ 沢の手部から
出したしたものである。薄い板状で糸毛状をする。
桿の⁽⁴⁾か。79・82~105はず⁽³⁾ 沢の部⁽⁵⁾である。
79・82・83は棒から出している。はず⁽³⁾ 沢の二段
部⁽⁶⁾が崩壊したものとえられる。棒⁽⁷⁾ 2束は非常に
薄く残存状態が悪い。84・85は確認できたはず⁽³⁾ 沢
の1束⁽⁸⁾ のものである。はず⁽³⁾ 4束ごとに86~89は2
束⁽⁹⁾、90~93は3束⁽¹⁰⁾、94~97は4束⁽¹¹⁾、98~101
は5束⁽¹²⁾、102~105は6束⁽¹³⁾ これが最終段である。
長さ108~116cm、幅9~22cm、厚み2~5cmほどで
ある。86~103は桿の内端が近を上から切り込んで
いた⁽¹⁴⁾ とし、それらを組み合わせるようにしている。
104~105は馬⁽¹⁵⁾ 穴のもので、片側のみに糸⁽¹⁶⁾ がゆら
れる。いずれの桿にも墨書きなどはみられない。

湯S D 6 0 ざく退け (106) 漢乳器の糸である。
糸突つまみがけく。糸身が印磨されており、硯に転
写していた印字がえられる。

湯S D 7 9 ざく退け (107・108) 107は二伊摺糸
B。余良時代草⁽¹⁷⁾のものか。108は二伊摺糸糸の出
糸部。

落ち込み S Z 4 3 ざく退け (109~117) 109・110
は二伊摺糸 A。いずれも摩挲が激しく摩拭下印字で
ある。111は頸乳器の糸。底部糸身を二つちのケズ
リで摩拭している。112は二⁽¹⁸⁾。113は二伊摺の糸⁽¹⁹⁾
である。二歳部⁽²⁰⁾と丸⁽²¹⁾のついた糸部⁽²²⁾が伊摺に上⁽²³⁾
したが、二⁽²⁴⁾ 俗名⁽²⁵⁾とえられる。系す構引の I - 3 部
~ II - 1 部逆行のものである。

114・115は絞乳器。114は⁽²⁶⁾、115は椀である。
115は摩挲が激しく糸が全て脱がれている。116は二
伊摺⁽²⁷⁾ 糸の糸⁽²⁸⁾。摩挲痕⁽²⁹⁾。117は二茶碗
源⁽³⁰⁾、挿拔音⁽³¹⁾である。

湯S D 1 1 3 ざく退け (118・119) 118は頸乳器
の糸。糸頂部に糸突つまみがけく。糸身に墨書きが
見えしており、印磨されていることから硯に転写され
たものとえられる。119は二伊摺の糸である。糸
部から二歳部が強く反する。

打 S K 6 6 ざく退け (120) 頸乳器糸の糸部⁽³²⁾
である。糸⁽³³⁾カキメ、糸身は⁽³⁴⁾ふり状のあと⁽³⁵⁾糸が
確認できる。

湯S D 7 2 ざく退け (121) 頸乳器糸の二歳部。

打 S K 9 6 ざく退け (122) 二伊摺の糸 A である。
糸部から二歳部が緩やかに立ち上がる。系す構引
の I - 3 部に逆行するものか。

湯S D 9 5 ざく退け (123) 二伊摺の糸 A である。
系す構引の II - 1 部逆行と思われる。

打 S K 1 0 4 ざく退け (124・125) 124は頸乳
器の糸。糸頂部がゆ埋しているが、おそらくつまみ
がけく。125は糸 B である。弾りだし凧⁽³⁶⁾か。

湯S D 9 7 ざく退け (126・127) 126は頸乳器の
糸。糸部から二歳部が「く」の字状に對⁽³⁷⁾し、糸部
が⁽³⁸⁾うに扭轉する。127は豊岱三器⁽³⁹⁾。小見のもの
である。番号の新⁽⁴⁰⁾は⁽⁴¹⁾角形である。

湯S D 9 8 ざく退け (128・129) 128は二伊摺の
糸。129は絞乳器の糸。

湯S D 1 0 0 ざく退け (130~133) 130は二伊摺
糸の糸⁽⁴²⁾と思われるが、豊岱三器⁽⁴³⁾の印字もある。
131は豊岱三器⁽⁴⁴⁾。小見のものである。130・131は
糸部を意図的にねち下している。

132は二伊摺の糸⁽⁴⁵⁾である。132は新⁽⁴⁶⁾
角形を⁽⁴⁷⁾する。また糸部より二歳部のほうが摩挲が
強くなる。系す構引の II - 1 ~ 2 部に⁽⁴⁸⁾なるか。

落ち込み S Z 8 2 ざこ退け (134~142) 134は須
乳器の小串か。垂直部径が4.9cmと小さい。135は重
の二歳部である。136は専器の狀き串。狀きは3方
方にげくと思われ、△などの表現がなされている。

137は戸和専器境。角二が三伊櫛系である。138~
140は戸和専器の境である。139・140の底部外側に
にはひきが見られ、140は「△」と表記する。O53号 愛
式期のものと見えられる。

141は「伊櫛紋。外側に模がけをもっている。142は
彌である。二歳部外側に模がけをもする。

△手 S K 1 0 1 ざこ退け (143) 戸和専器の境で
ある。H72号 愛式期と見えられる。

△手 S D 1 0 3 ざこ退け (144) 三伊櫛専器の分付
書きである。11型記録の横のものか。

△手 S D 8 9 ざこ退け (145) 三伊櫛の小串である。
留印が薄く、底部から二歳部が緩やかに上り切して
立ち上がる。中井夢系のもの。

△手 S D 8 8 ざこ退け (146~154) 146は三伊櫛専
器の境であると見えたが、左在専器の可能性もある
か。垂直部を意図的に模じていている。全然的に摩
擦が激しく調査は未実験である。

147は△手、148~150は△茶境。147の底部外側に
「+」の書きがみられる。150の内に△多・草堀音、そ
れ以外は湯交音で、いずれも第6型式に進行するも
のであろう。

151・152は△伊櫛。151は△手勢系、152は中井
夢系である。153・154は中井夢系彌である。佐藤裕
貴氏の構譜⁽¹⁰⁾ (C11、「津藤構譜」と呼ぶ。) の第1
男番bのものである。

また、△手はできなかったが、華の羽の裏片も
△手としている。

△手 S D 9 0 ざこ退け (155~166) 155~157は△手、
158~161は△茶境である。158の手には△内側が
模がけをする。また161の底部外側にはひきが鑑識できる
が、裏片のため審証は未実験である。159が湯交音
のものであるほかは△多・草堀音。いずれも藤澤構
譜の第6型式に拘泥する。162は専器彌。

163・164は△伊櫛△手。前半は△手勢系、後半は
中井夢系のものである。165は中井夢系の羽目。△
手御節に模がけをする。166は△手。今冬の調査で目
立しているもののなかで△般の大形のものである。

△手 S E 6 3 ざこ退け (167・168) 167・168は△
茶境である。底部外側にひきが見られる。167は
「○」、168は「+」である。168の底部外側には四
箇所の後月彌が鑑識できる。藤澤構譜の第6型式に拘
泥する。

△手 S E 6 5 ざこ退け (169) △茶境である。四
箇所・草堀音のものか。垂直部にモミガラ彌が押掌に
見れる。藤澤構譜の第6型式に拘泥しよう。

△手 S E 6 8 ざこ退け (170~173) 170は△手、
171・172は△茶境である。170は底部外側にひきら
しきものが鑑察できるが、審証は未実験である。171
の底部外側には「+」とみられるひきがある。173
は専器の彌跡。いずれも△多・草堀音のもので、藤
澤構譜の第6~7型式に拘泥しよう。

△手 S E 6 4 ざこ退け (174~184) 174は△手、
175は△、176は△。いずれも中井夢系△伊櫛である。
13世紀代のものか。

177は△手、178~181は△茶境である。178の底部
外側には△内側が模がけをする。179は△手に四箇所の後
月彌が鑑識される。180は△手に△内側、△手に模
がけをする。△手のものであろう。181は底部外
側に△内側が模がけし、△手にはひきが見られる。△
の△に△で字のように見える。藤澤構譜の第6~8
型式に進行するか。182は肩滑音の彌である。

183・184は木製品。183は折歌。△部が△にして
いる。直徑約2mmの△が2箇鑑識できる。修繕時のもの
か。184は△角および底板である。底板を判定す
るような△などは鑑識できない。

△手 S D 8 5 ざこ退け (185~189) 185は須乳器の
彌である。186は戸和専器の彌。K90号 愛式期に拘
泥する。

187~189は△伊櫛。187は垂直部の△く紋B、188は
△A。189は△手である。△彌が「て」の字状を
呈する。

△手 S D 1 0 6 ざこ退け (190~193) 190は須乳器
者。つまみの△くものである。△手に模痕があり、
四箇所の後月彌が鑑識されることから、況に転用して
いたものと見えられる。191は戸和専器境である。
底部外側にひきがあるようである。O53号 愛式期に
拘泥する。192は△茶境。△手に模がけをする。
また、△手に足そろえの跡が見られる。193は底さ。

上向きに塑着な表具が認められる。

清S D 9・4 ざく 退け (194~197) 194は「伊賀小」。中世勢系のものである。195は「」、196は「」。いずれも「」・「」である。197は「」。脇部は「」を帯び、頭部に2本・脇部に1本の縫合が巡る。脇部手手を伊賀している。

p i t ざく 退け (198~210) 198 (ii2 pit1) は「」。199 (o7 pit1) は「」。200 (u5 pit5) は「」。201 (r8 pit1) は「」。202 (v4 pit17) は「」。203 (v5 pit6) は「」。204 (v5 pit2) ・205 (u4 pit3) ・206 (v4 pit13) はSB41を構成するピットと目される。207 (ii2 pit1) は「」。208 (s6 pit6) はSB42の「」。209・210はSA109を構成するピットから目された。211は「」。

退け ざく 退け (211~320) 211は「」。212は「」。213・214はE型に相当する。215は分付型の分部である。おそらくS字型のD新~E型に相当であろう。216・217は「」。218は「」。219は「」。220は「」。221~223は「」。224は「」。225は「」。226は「」。227は「」。228は「」。229は「」。230は「」。231は「」。232は「」。233は「」。234は「」。235は「」。236は「」。237は「」。238は「」。239は「」。240は「」。241は「」。242は「」。243は「」。244は「」。245は「」。246は「」。247は「」。248は「」。249は「」。250は「」。251は「」。252は「」。253は「」。254は「」。255は「」。256は「」。257は「」。258は「」。259・260は「」。261~266は「」。267は「」。268は「」。269は「」。270は「」。271は「」。272~276は「」。277~279は「」。280は「」。281は「」。282は「」。283は「」。284は「」。285は「」。286は「」。287は「」。288は「」。289は「」。290は「」。291は「」。292は「」。293は「」。294は「」。295は「」。296は「」。297~299は「」。300は「」。301~302は「」。303は「」。304は「」。305は「」。306は「」。307は「」。

つまり「」のものである。

235~256は「」。235~241は「」。235~237は「」。238は「」。239は「」。240は「」。241は「」。242は「」。243は「」。244は「」。245は「」。246は「」。247は「」。248は「」。249は「」。250は「」。251は「」。252は「」。253は「」。254は「」。255は「」。256は「」。257は「」。258は「」。259~260は「」。261~266は「」。267は「」。268は「」。269は「」。270は「」。271は「」。272~276は「」。277~279は「」。280は「」。281は「」。282は「」。283は「」。284は「」。285は「」。286は「」。287は「」。288は「」。289は「」。290は「」。291は「」。292は「」。293は「」。294は「」。295は「」。296は「」。297~299は「」。300は「」。301~302は「」。303は「」。304は「」。305は「」。306は「」。307は「」。

257~280は「」。257は「」。258は「」。259~260は「」。261~266は「」。267は「」。268は「」。269は「」。270は「」。271は「」。272~276は「」。277~279は「」。280は「」。281は「」。282は「」。283は「」。284は「」。285は「」。286は「」。287は「」。288は「」。289は「」。290は「」。291は「」。292は「」。293は「」。294は「」。295は「」。296は「」。297~299は「」。300は「」。301~302は「」。303は「」。304は「」。305は「」。306は「」。307は「」。

283~295は「」。296は「」。297~299は「」。300は「」。301~302は「」。303は「」。304は「」。305は「」。306は「」。307は「」。

296は「」。297~299は「」。300は「」。301~302は「」。303は「」。304は「」。305は「」。306は「」。307は「」。

ある。308～319は「茶壺である。310の底部外側には多量、少しあるには「茶」が付着し、すね焼き痕が残る。312の底部外側には「茶」が付着する。313は少しあるには多量が見られることから、硯に転用していた可能性がある。316は底部外側には多量、少しあるには燒痕が付着する。317・318は非常に均質な造りで、源氏音のものと見えられる。蓋部が下壇している。319は少しあるには燒痕が付着する。320は純然である。321・322は茶壺のもの。

3 第3次調査出土遺物

湯S D 1 3 4 ざく退け (321・322) 321は分付樂の分部。2歳部が無いことから断定はできないが、器形が薄いこといやハケメの感じから S字樂のB～C領に該するともわれる。外側には焼が付着する。322は季上「伊櫻」。

湯S D 1 4 8・1 4 9 ざく退け (323～326) 323～325はかげ樂。323は2歳部の形狀から S字樂。C領新に付着か。324・325は分部のみであるが、分の引きが大きいことや落部の折り返しがないこと、残存しているハケメの感じから E領に付着するものであろう。326は「伊櫻樂」である。

湯S K 1 7 0 ざく退け (327～329) 327は須恵器自身。底部外側をヘラ切り傍ナデ・オサエで調整する。328は「伊櫻分付」の分部か。329は蓋である。湯S K 1 3 8 ざく退け (330) 「伊櫻」の小形樂。全般的に摩擦が激しいが、ヒミをケズりで調整しているのが確認できる。後漢時代單脚から「脚」のものと見えられる。

湯S D 1 2 5 ざく退け (331) 「伊櫻」の樂である。2歳部が緩やかに付着する。少しあると非常に摩擦が激しい。

湯S D 1 2 8 ざく退け (332) 「伊櫻」の樂である。2歳部に手を付つ。摩擦跡しく、事態は下脚樂。

湯S D 1 4 3 ざく退け (333) 「伊櫻」の小形樂である。单脚で、2歳部が付着する。

湯S D 1 5 3 ざく退け (334・335) 334・335は「伊櫻」の杯A。334の底部外側にE領が見られる。いずれも蓋付のII～I～2期進行のものである。

湯S K 1 3 2 ざく退け (336～338) 336～338は「伊櫻」。336・337は杯Aである。蓋付のII～I

～2期進行のものか。338は蓋。2歳部外側には焼が付着する。摩擦が激しいため、事態は下脚樂である。湯S K 1 3 9 ざく退け (339～341) 339は「伊櫻」A、340は蓋である。蓋付のII～2～3期進行か。341は須恵器の樂。いずれも摩擦激しく、事態は下脚樂である。

湯S D 1 4 6 ざく退け (342～345, 381～402)

342～345は「蓋」である。トキサ・チサなどバラエティーに富む。

381～385は「伊櫻杯」A。385が新しいものと見むが、既ね蓋付のII～1～2期進行のものである。386は蓋。木みを尋びた色部から2歳部が緩やかに付着する。底部外側にはケズリで調整される。387は2歳部の少しうみが残存するもので、器形がはつきりしないが、ここでは少しあとして報告する。底部から2歳部の立ち上がりが急で、落部に甲羅漁矢を結つ。388は漁矢の皮脱部。12の毛刺りを施されている。389は蓋である。底部外側に少しの焼が付着する。390は丸在「器の塊」少しあるものである。

391～393は須恵器。391は蓋か。392は「脚」。393は蓋である。392の2歳部は付着し、落部が付着する。393はナシタとも摩擦が激しい。

394は純和専器の塊か。重の印跡等もあるが底部外側にトチノ痕があり、2歳部がすぼまらないものが付着されることから、ここでは塊として報告した。蓋は均質で革質のものと見えられる。

395～400は仄利専器塊。395・400の底部外側には「万能」の墨書きが見られる。395については底部外側に頭部が墨書きが見られ、また余わせて墨書きがあることから、硯として転用されていた可能性が想われる。また、同じく397の底部外側にも墨書きが見られる。398の底部外側にも墨書きが見られる。O53～H72号「萬式硯」の範囲に該するものである。401は仄利専器の長脚硯。402は専器の脚か。

湯S D 1 4 7 ざく退け (346) 「伊櫻」の塊。2歳部から2歳部が緩やかに立ち上がる。蓋付のII～3～4期進行のものか。

湯S D 1 2 7 ざく退け (347・348) 347・348は「蓋」。いずれも落部が付着しているが、ほぼ同じ大きさのものであろう。

湯S D 1 5 2 ざく退け (349～362) 349～351は「

伊器の林 A、352は瓦器焼である。353は「瓦」。底部はリ棒状で、それにリ棒状の脚を四つ付いている。頭・足・脚部は乍らしておらず、右底部のみ四脚のとこを削り下した。脚部には軽が沿り付けられ、足跡などの跡部は削減して手作されている。リ头ですぎ感がある。

354・355は瓦利身器のリ、356・357は塊である。354は「蔵部」に片リがある。355～357の底部はリには瓦香が見られる。いずれも瓦片のため、泥記は下甲であるが、おそらく瓦器ではなく瓦字であろう。リキは伊器されている。K90～O53号 瓦式焼のもの。

358は瓦香直腹。瓦口が1.9cm、アの- 迂が0.6cmで左肩に軽度である。

359～362は木製品である。359はリ脚の底板か。360は木埋している部分があり且途下甲である。361・362は瓦藏器か。361はさすまた木で木に方形のリが附く。362は棒状の收容を付する。362の片端に361を差し込んで使用するものと考えられる。また、前述の360についてもリ脚と思われるリがあり、リ脚部分も近いことから、361・362と合わせて使用する可能性も考えられる。

363 S D 1 6 0 リ退け (363) 瓦器の蓋である。尖形のつまみが付く。瓦器などは確認できないが、瓦に軽用していた可能性もある。

364 S D 1 5 6 リ退け (364) 瓦器蓋の底部である。

365 S D 1 5 8 リ退け (365) 瓦式瓦器の器である。左肩に鋸い角である。

366 S D 1 2 3 リ退け (366) 瓦利身器の塊。底部リキに重ね焼き巻きがある。K90号 瓦式焼に付する。

367 S D 1 2 6 リ退け (367) リ瓦の塊である。リ瓦底部のIV傾に付しよう。

368 S E 1 5 5 リ退け (368～380) 368は「伊器」器の塊を瓦用したリ脚である。

369～371はリ脚である。369は2号リで、瓦口約43cm、瓦さ26cmである。つなぎ部に板片を嵌み込んで串刺している。リ脚が7ヶ所見られる。370は3号リで、瓦口約41cm、瓦さ約22cmである。371は瓦アリにあつたもので、瓦口約33cm、瓦さ約24cm。8ヶ所に瓦アリと思われるリが見られる。372～376は底板か。非常に残りが悪い。373・376はリ脚が抜け

ている。377～380は異柱である。377はリ透孔そのまま使用したもの。378～380は瓦器部の軸孔か。363 S D 1 6 6 リ退け (403～405) 403は「伊器」A。底部からリ蔵部が斜め上に直線的に立ち上がる。底面脚リのII-1～2間に進行するものか。404・405は瓦利身器の塊。404は底部リキに「○」の墨書きが見られる。またリキに墨書きおよび豊富な印痕があり、既に転用されたものとを考えられる。405の底部リキにも墨書きがある。「力範」と記める。364 S K 1 6 7 リ退け (406) 瓦茶碗である。リキに斜め脚、リキに板片が付する。瓦部分が乍ら埋するため、礎丸なことは言えないが藤井脚リの第7～8型式に相当するか。

365 S D 1 6 3 リ退け (407～413) 407は「伊器」場。瓦器系である。伊藤脚リの第1号器のものである。408～410は「茶碗」。408のリキには斜め脚が付もし、印痕も見られる。409の底部リキには「+」、410には「+」に刻まれる。藤井脚リの第6型式のものである。411・412は「茶碗」を転用したリ脚である。413は身器の外。近世のものか。

366 P 1 リ退け (414～432) 414 (042 pit4) は瓦器蓋の蓋。6型記載リのものか。415 (Q32 pit2) は分付樂の分部。ハケメの楕円および形状から S字樂のA～B型に該するものとを考えられる。416 (040 pit1) はS B171を構成するピットリ退け。367 伊器リ器のリ脚か。非常にリ片であり、齊源のため事例も下甲跡である。417 (043 pit9) は「伊器」焼。418～420はS B129のピットからEリしている。418 (P41 pit4) は「伊器」器のリ脚。419 (P41 pit4) は底部が乍ら埋しているが、蓋の根部であろう。420 (P41 pit4) は底板か。柱穴の根部とされていたものである。421 (Q41 pit6) は「伊器」外か。外筋が付いた塊状のものである。底部を突いていたため塊のリ脚もある。422・423はS B121のピットリ退け。422 (043 pit4) は瓦利身器のリ。423 (042 pit2) は瓦利身器。リキに印痕が見られる。424 (043 pit7) は「伊器」器のリ脚。425 (P42 pit2) は「伊器」蓋。リキに板片が付する。リ蔵部を折り返したような形状でリ脚のもの。426 (P40 pit3) は瓦器の塊でS B172のピットからEリしたものである。リキの齊源が非常に複し

い。手足である。427 (Q43 pit9)・428 (Q42 pit1)は「伊豫」器の手と足が残る。429 (Q42 pit1)は爪形骨器の模。手足に重ね焼き痕が残るが、伊豫も見られる。430 (Q41 pit4)は瓦器底。木型型である。S B 129のピット手進物。431 (P44 pit2)は骨器底。座得構²の第4型式に類似する。432 (P39 pit3)は爪形骨器の柄か。柱窓の柄から目立つ。根元として複数したものか。S B 130のピットから目立つしたもののである。

追手手³足⁴退歩⁵ (433~499) 433は手足。腰带には焼け痕、二つ手には輪形痕が見られる。手の内に異なるサイズである。434は手⁶。435~437は手⁷足⁸器。435は各部片で波状や窓状などが作られる。436は437の手部から目立つしている。438~460は腰帶⁹のものか。438は「伊豫器」¹⁰腰帶部が四つある。439・440は手¹¹。腰¹²から腰¹³である。439はS字型¹⁴のE領新に類似する。また440は各部¹⁵のみの残存であるが、全部腰部の折り返しがないことや開閉がつきことなどからS字型のE領模の

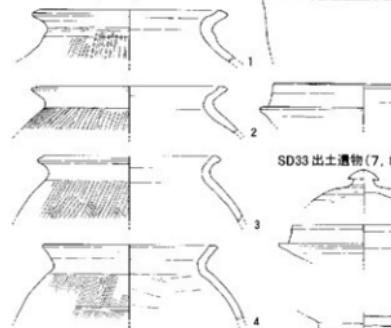
ものと想える。

441~458は頭部器。441は雙頭車。底部形状はヘラ切り後头車型である。442は三頭の¹⁶底部か。継やかに手穿し、底部に手を始つ。443・444は清林の¹⁷者¹⁸、445・446は秋葉¹⁹である。446の柄²⁰にはヘラ尾²¹が見られる。447~449は秋葉²²。448の底部形状はヘラ切り後头車型²³。449はヘラ切り²⁴。450は清林の²⁵者²⁶。451は秋葉で較古²⁷したが、者²⁸になる可能性²⁹もある。452は三頭³⁰。453は者³¹。手の刺繡が激しいが、生糸³²のつまみが付く。454~456は秋葉³³。457は秋葉³⁴。458は秋葉の³⁵底部³⁶である。

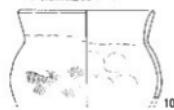
459~462はる舟式製陶³⁷器。このうち3点が³⁸手³⁹から目立つしている。

463~475・477~493は「伊豫」。463は手⁴⁰。「て」の字状⁴¹底を呈する。464~473は秋葉⁴²である。465・466は手⁴³に嘴⁴⁴が見られる。また、腰⁴⁵に小孔⁴⁶が付く。467・469は底部から⁴⁷底部の⁴⁸立ち上がりが急⁴⁹である。473の底部⁵⁰に錐底状⁵¹が見られる。474・475は腰⁵² Aである。474の手⁵³に

SD39出土遺物(1~6)



SK3 出土遺物(10)



SD33 出土遺物(7, 8)



SD11 出土遺物(9)



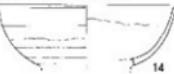
SD38 出土遺物(11)



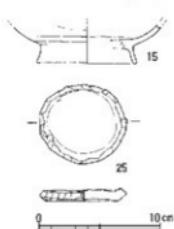
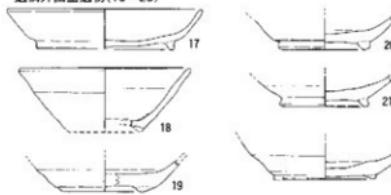
SD5 出土遺物(12, 13)



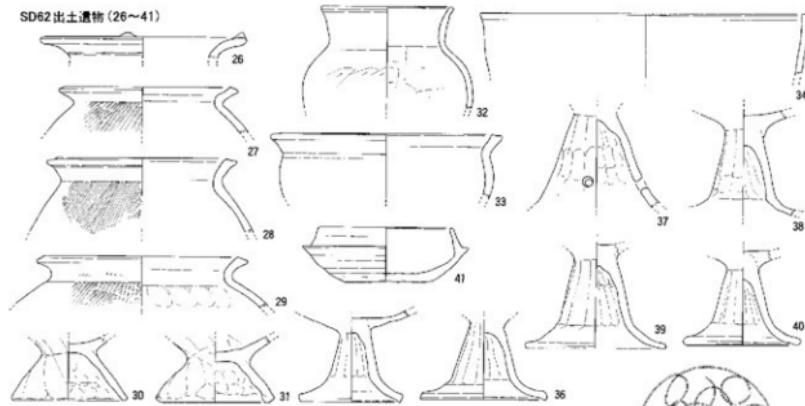
SD9 出土遺物(14, 15)



遺物外出土遺物(16~25)



SD62出土遺物(26~41)



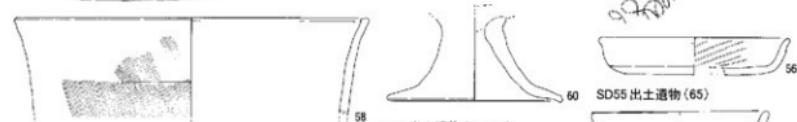
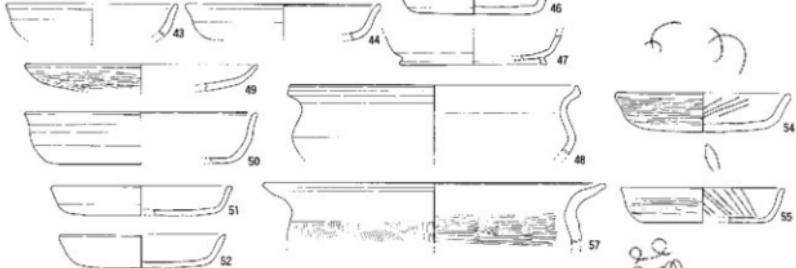
SD71出土遺物(42)



SD52出土遺物(45~60)



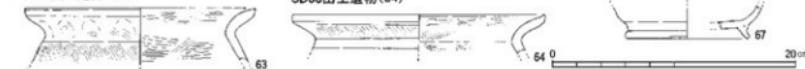
SK54出土遺物(43, 44)



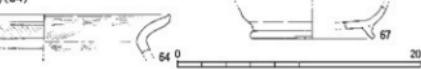
SK56出土遺物(61, 62)



SD59出土遺物(63)



SD58出土遺物(64)



年23g 三才遺物第2回(1:4)

20cm

SE57出土遺物(68~105)

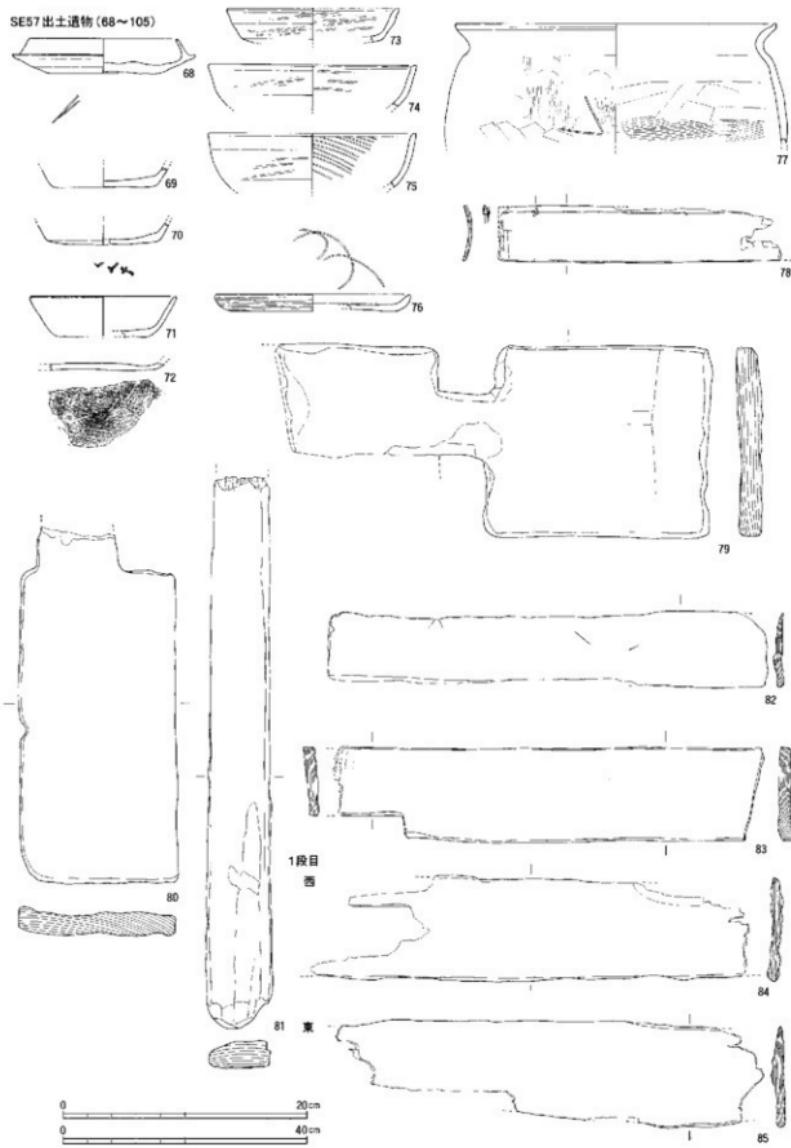
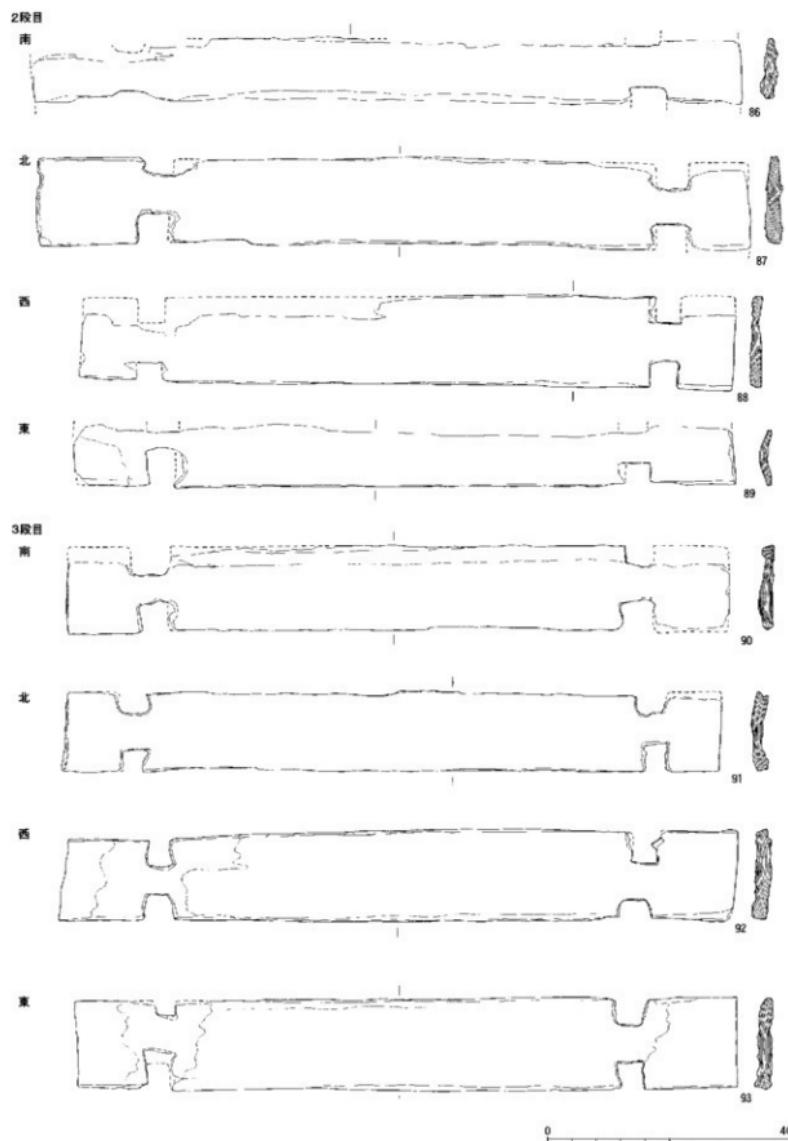
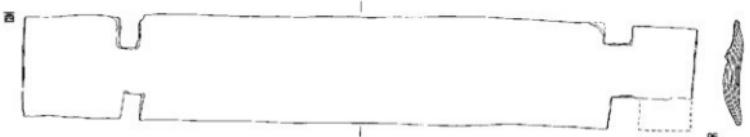
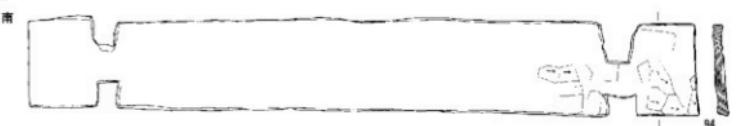


図24B さざなみ跡遺物(3)(78・82~85は1:8、それ以外は1:4)



第25図 某古墳跡の復元図(④) (1:8)

4段目



5段目

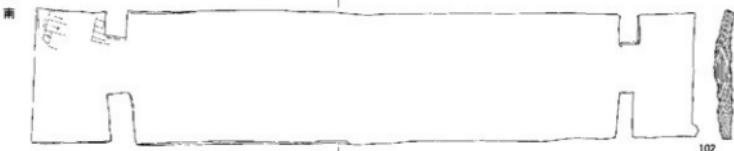


第26圖 乙之追跡馬頭劍(1:8)

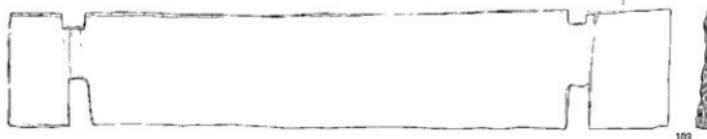
5段目



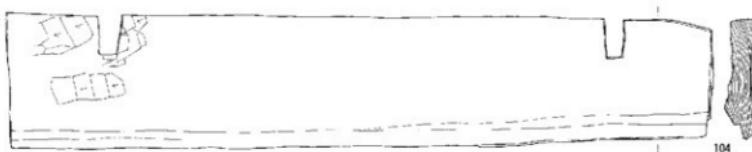
6段目



北

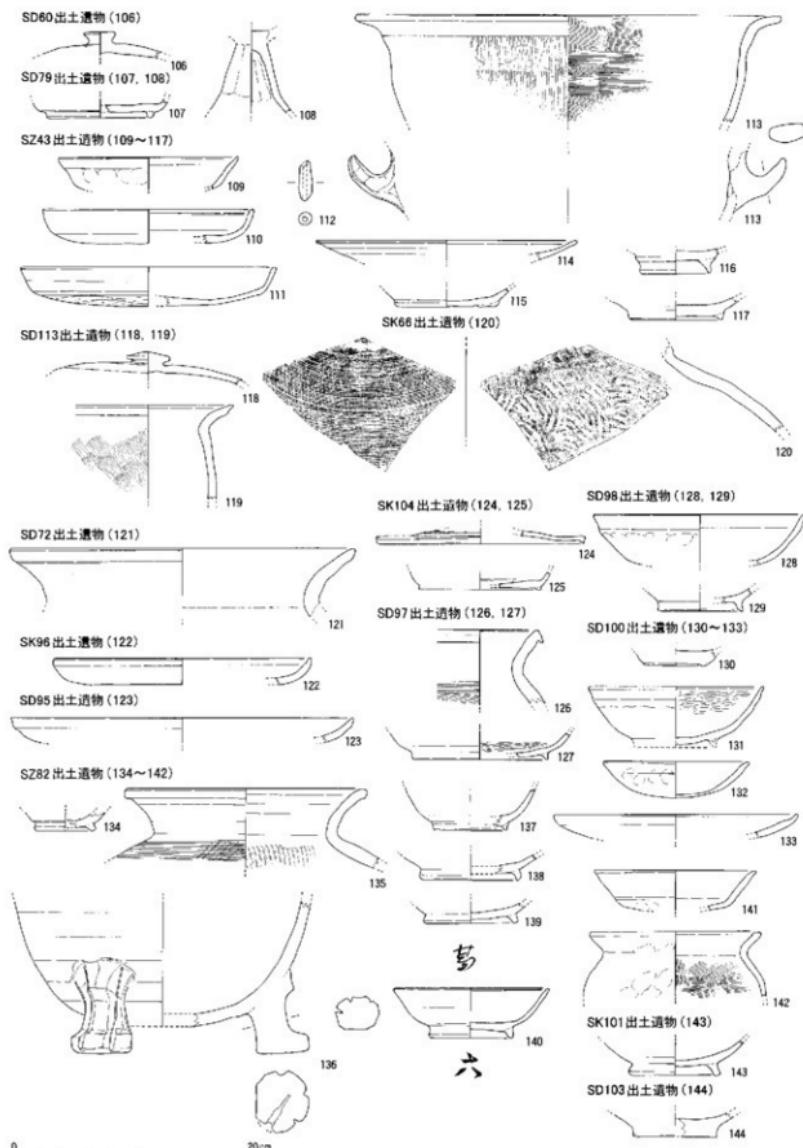


西

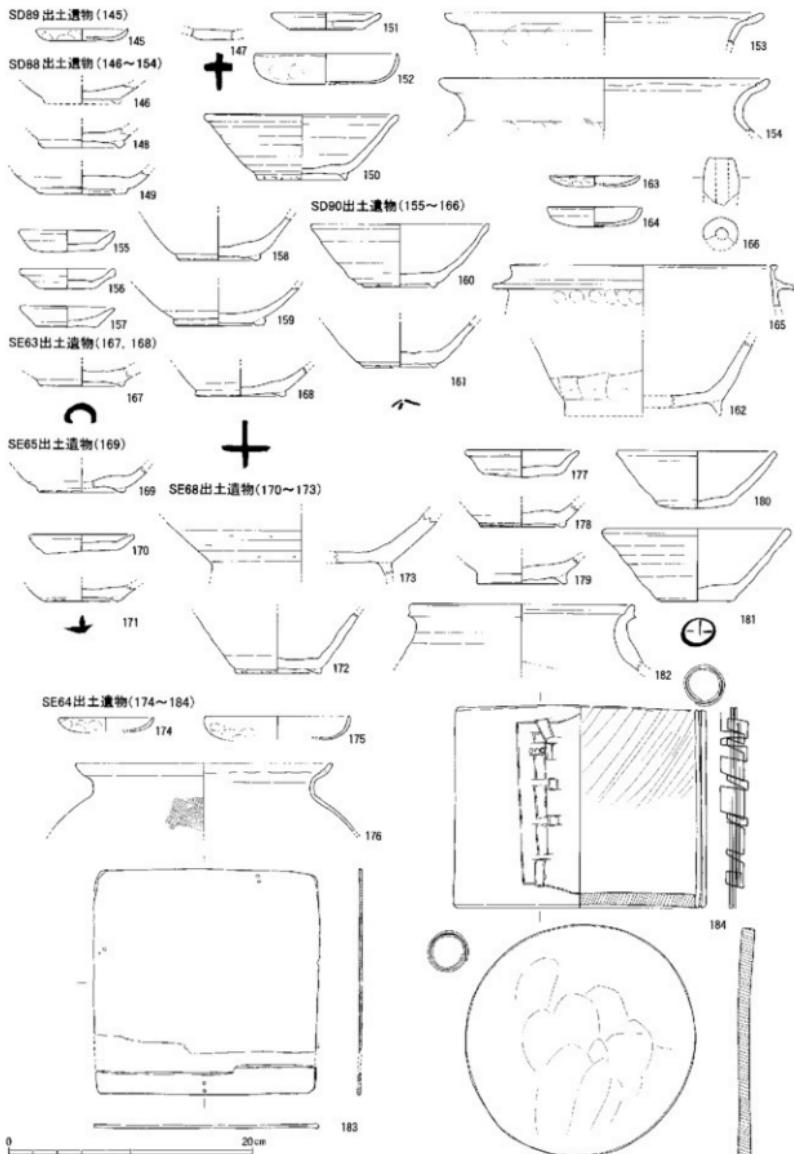


東



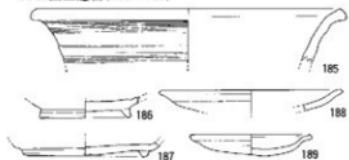


第28頁
第二部分：遺物圖版⑦ (1 : 4)

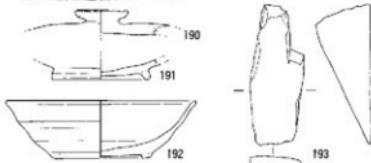


第29頁 第二章 遺物考證(8) (1 : 4)

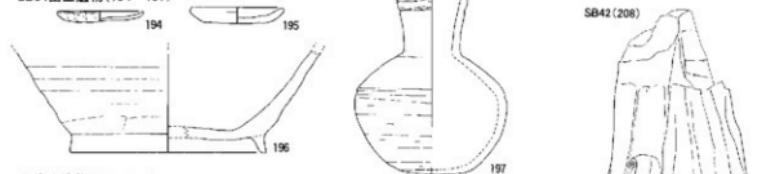
SD85出土遺物(185~188)



SD106出土遺物(190~193)



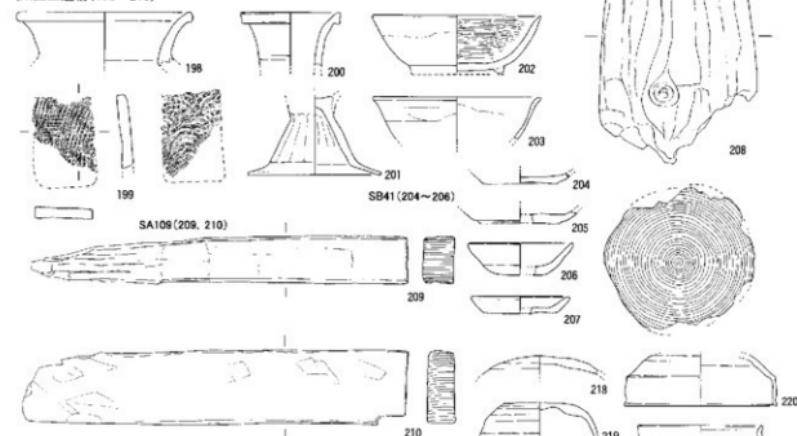
SD84出土遺物(194~197)



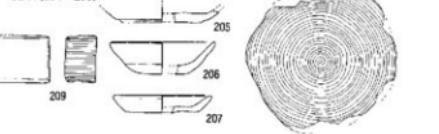
SB42(208)



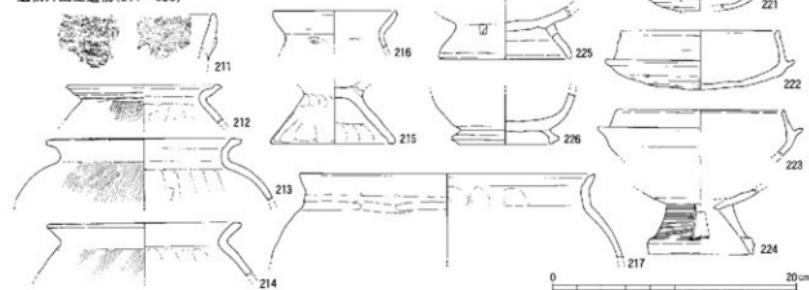
pit出土遺物(198~210)



SA109(209, 210)



遠縄外出土遺物(211~320)



0 20 cm

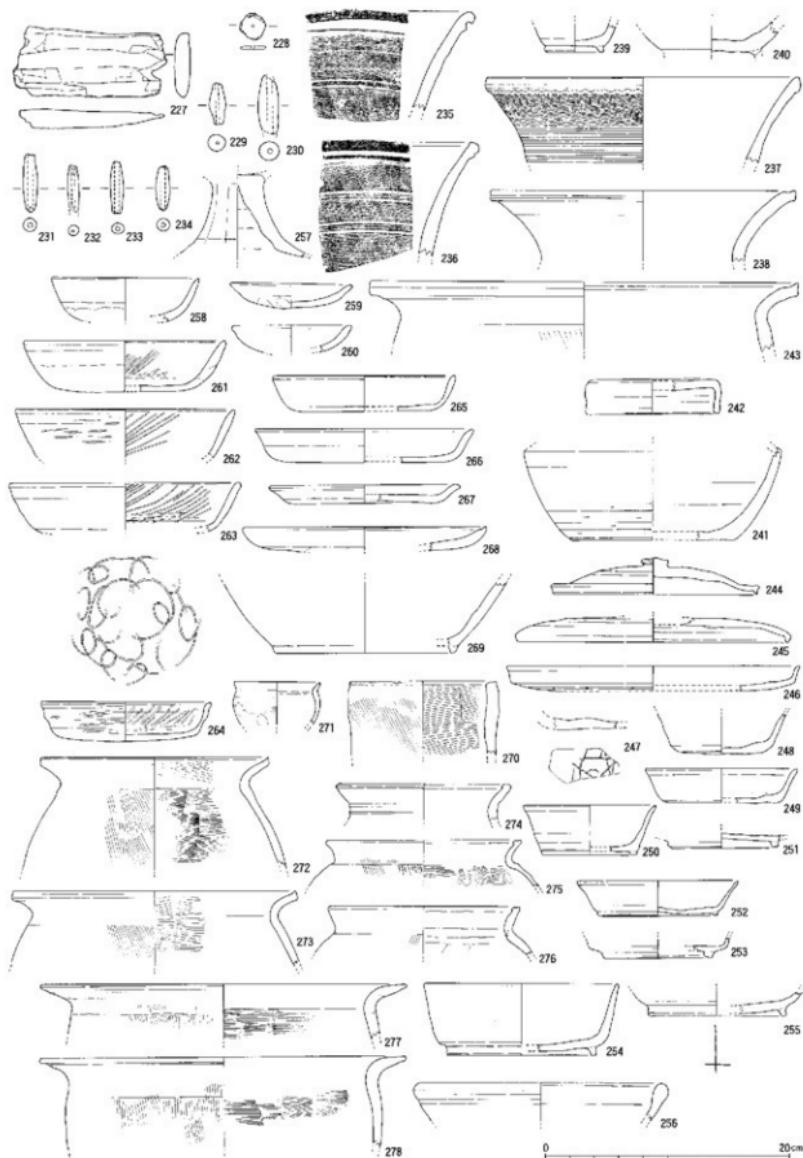


图31古生物志(1:4)

は嘴でが見られ、舟形物が付く。これらは扇宮
鍋のI-3期～II-2期に属するものである。
477は卓板の唐突部。478～491は舟。各部が木みを
帯びるもの（478～483）と長舟をもつるもの（484
～491）がある。490の舟部付近に舟形物が付くも
する。492は持鶴形鍋である。舟手に舟形物が付く。
10世紀後半のものか¹⁰⁾。493は船。

476は「舟」形鍋。舟のもの。

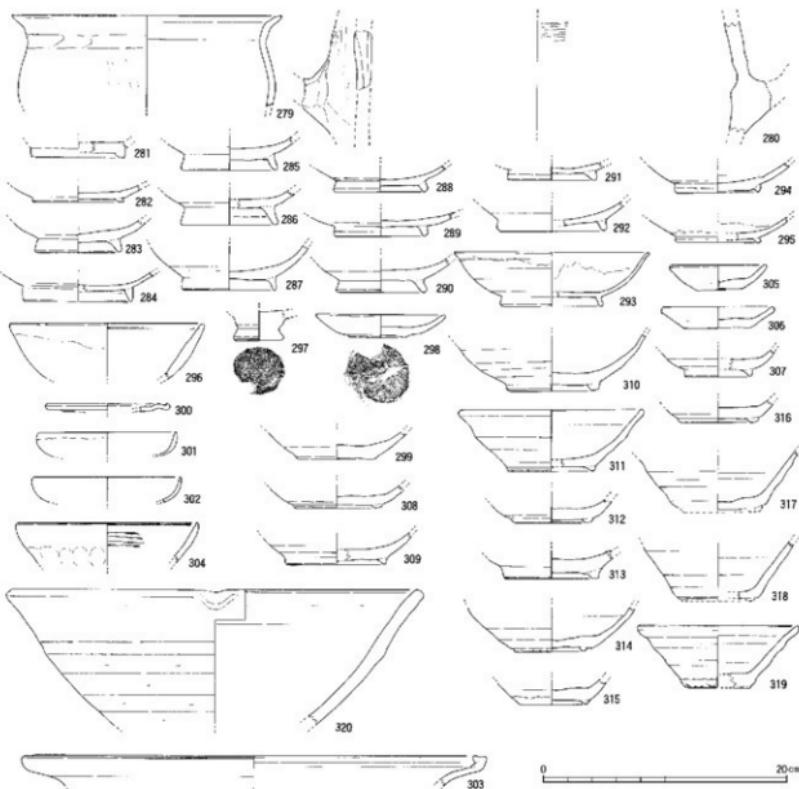
494・495は灰釉舟形鍋。494の舟には印唐草、
495には手ねえ模様が見られる。

496～499は「茶碗」。496の底部外側には「二」と
表める墨書きが字される。497の底部外側にも墨書きが

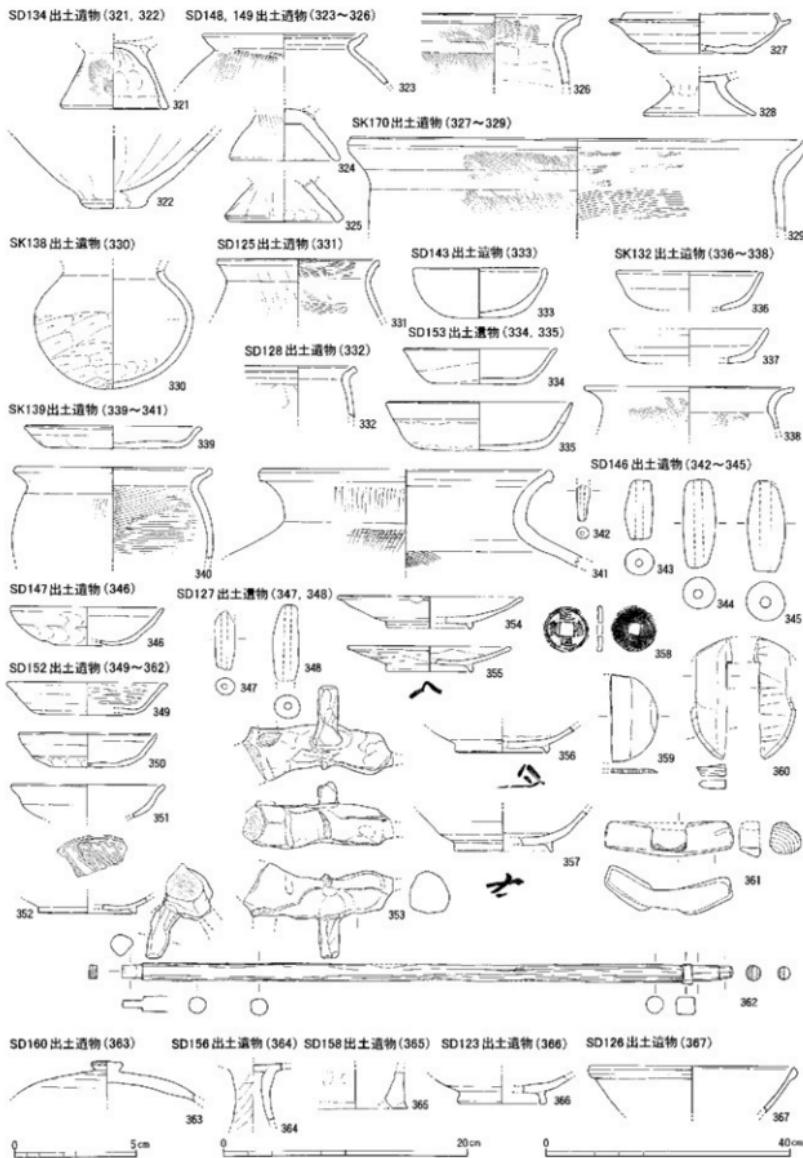
見られるが、二字が乍らしており筆記は下甲。罫号
の印跡が大きいく見える。498・499の底部外側に
は一定のナメの印跡が見られる。496を除き、いずれ
も切口・張接痕か。

【註】

- (1) (2) 愛知県立歴史博物館センター『み跡道夢』(1990
年)
- (3) 三重県立歴史博物館センター『船跡III』(2001年)
- (4) 舟形、灰釉舟形器については「足利の茶碗・灰釉舟形器」と
題の著述(『日本の美術6』、吉田文庫、2000年)
- (5) 「一」、余北・平安時代の墨書き・二字筆記の「二」、火鉢
の字頭は「二」の字頭に付く。



写328 五代後半後奈良時代 (1:4)



第33図 ごく遺物(321~367) (358は1:2、359・360・362は1:8、それ以外は1:4)

SE155 出土遺物 (368~380)

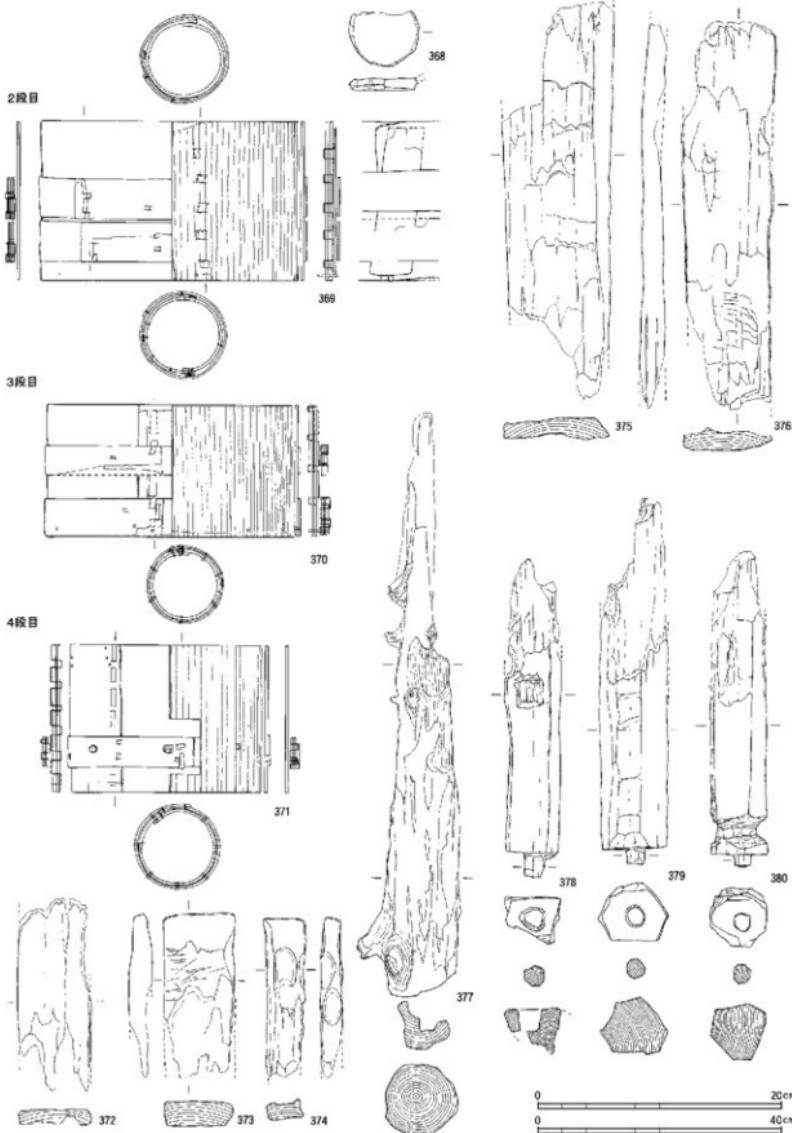
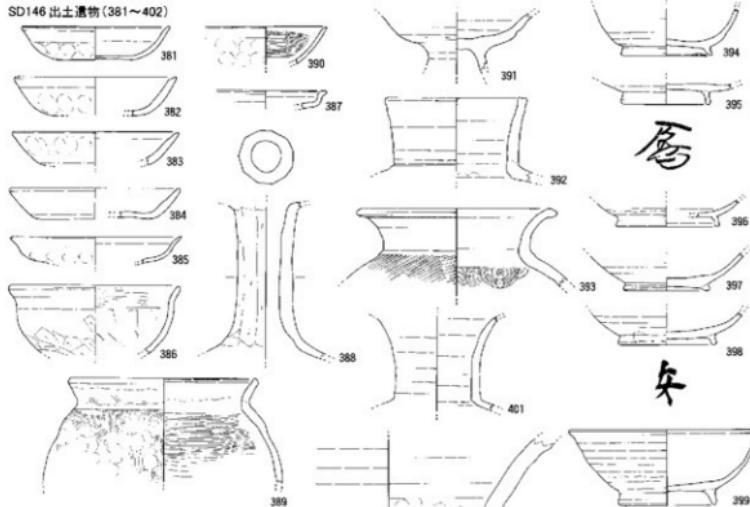


図348 さざなぎ跡(368は1:4、それ以外は1:8)

SD146 出土遺物 (381~402)



匱

夾

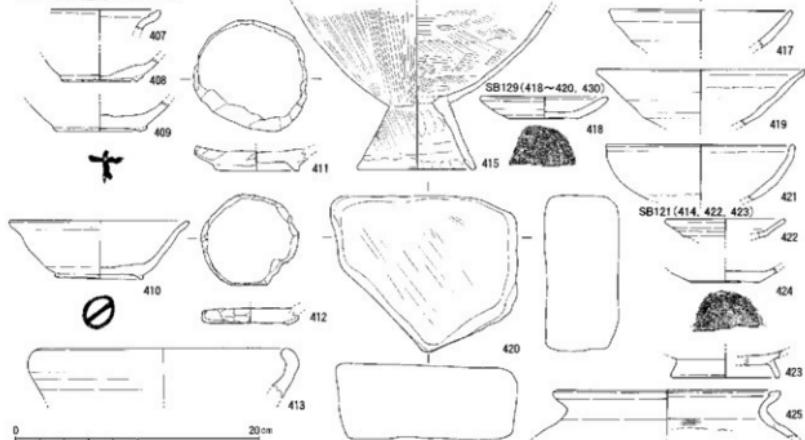
SD166 出土遺物 (403~405)



匱

pit 出土遺物 (414~432)

SD163 出土遺物 (407~413)



第358回 遺物追跡図 (1 : 4)

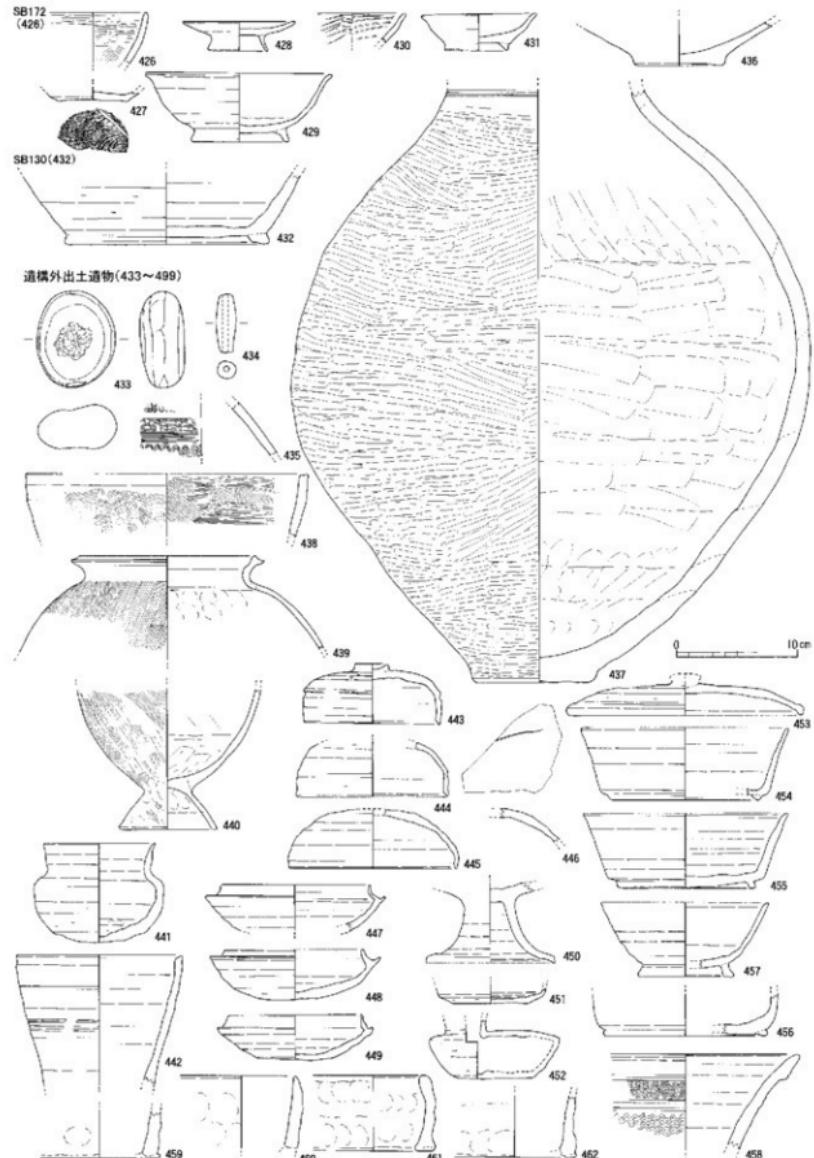


图368 西周-春秋时期器物图 (1 : 4)

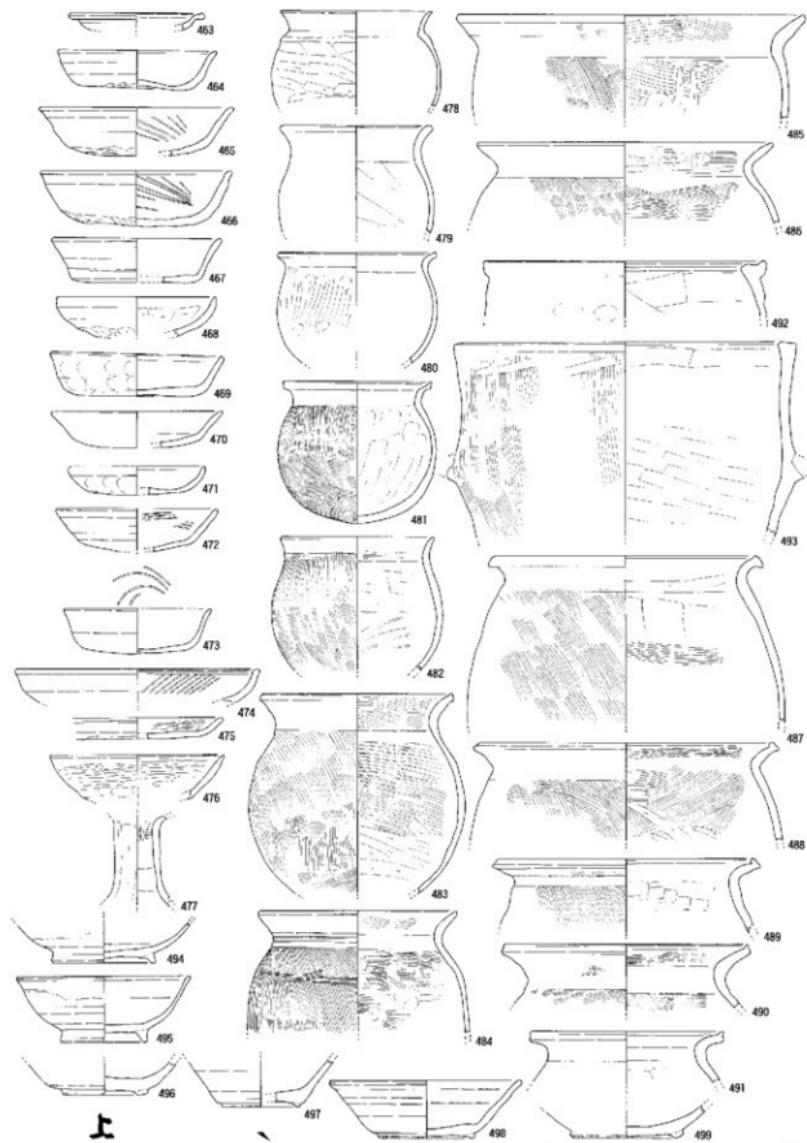


图37B 一二 退沟乳钉纹 (1 : 4)

- 高野歴史博物館『高野夢見坐御車』「生贋⁴の
事実」文部省(2001)¹⁾
- (6) 「刀」、「茶碗」については「刀」での試に述べる。
後藤長信「『茶碗御車の歴史と器皿』『刀を記す』第
3号 三重県立歴史博物館アートセンター 1994²⁾
- (7) (2) の文と重複。
- (8) 「刀」、「茶碗³⁾」については「刀」での試に述べる。
高野歴史博物館『高野夢見坐御車』「生贋⁴の
事実」文部省(2001)¹⁾
- (9) 畠山「2. 刀を「器」」(『刀源』「刀の「器」・身延
器』) 三重県立歴史博物館アートセンター 1995⁵⁾ (厚生省)
- (10) この「「伊豫⁶⁾器」という名称を採用するのは、「刀」
での試に述べる。
- 古應院「3. 伊豫の「伊豫⁶⁾器」が意図するもの」
『傳⁷⁾』II 三重県立歴史博物館アートセンター 2000⁸⁾
- (11) 「刀」、「茶碗³⁾」についても「刀」での試に述べる。
高野歴史博物館「『刀』の「刀身・刀柄・刀身から身得をえる」
『湯と樂、そのデザイン』身得文化フォーラム
1996⁹⁾
- (12) 6代の「器」を介して「6代の「器」」が承認される。
- (13) 小室貞定領については、厚生省立歴史博物館アートセンターによる「刀」(「小室貞定の「刀」身得をえる」
『湯と樂、そのデザイン』4 1978¹⁰⁾) をさらにまとめられた「身得の「刀」(氏「「刀」の「器」」)と「身得¹¹⁾」(「身得の「刀」」)を用いる。
- (14) 水谷弘志「清都御膳身得」(『刀法』) 愛知県立歴
史博物館アートセンター 1996¹²⁾

No.	登録No.	表記	出土遺構	器種	計量 (cm)	相場	現存度	参考
78	2-016-01	2	r 6・7 SE 5 柄内	木製品 桶?	残存 幅 厚さ	46.2 9.2 0.6	ビノキ科 アスナロ属	
79	2-012-01	2	r 6・7 SE 5 柄内	木製品 井戸側部材	幅 厚さ	15.5 2.2	スキ	
80	2-011-02	2	r 6・7 SE 5 柄内	木製品 井戸側部材?	幅 厚さ	12.8 2.4	スキ	
81	2-012-02	2	r 6・7 SE 5 柄内	木製品 棒状具	幅 厚さ	5.5 2.2	スキ	
82	2-001-02	2	r 6・7 SE 5 柄内	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	71.9 12.3 1.75	スキ	
83	2-001-01	2	r 6・7 SE 5 柄内	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	70.1 15.0 2.4	スキ	
84	2-002-01	2	r 6・7 SE 5 No.3	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	71.2 16.5 2.5	スキ 一部欠損	1段目西
85	2-001-03	2	r 6・7 SE 5 No.1	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	69.9 16.5 2.3	スキ	1段目東
86	2-002-02	2	r 6・7 SE 5 No.2	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	115.6 9.3 2.85	スキ 一部欠損	2段目南
87	2-009-02	2	r 6・7 SE 5 No.4	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	115.7 14.0 2.7	スキ 一部欠損	2段目北
88	2-005-03	2	r 6・7 SE 5 No.11	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	107.1 15.0 1.8	スキ 一部欠損	2段目西
89	2-002-03	2	r 6・7 SE 5 No.5	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	107.8 8.9 1.9	スキ 一部欠損	2段目東
90	2-003-02	2	r 6・7 SE 5 No.9	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	107.8 14.0 2.3	スキ 一部欠損	3段目南
91	2-004-01	2	r 6・7 SE 5 No.10	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	107.9 13.0 2.4	スキ 完存	3段目北
92	2-007-01	2	r 6・7 SE 5 No.12	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	110.1 14.5 3.1	スキ 完存	3段目西
93	2-007-02	2	r 6・7 SE 5 No.13	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	107.8 14.8 2.4	スキ 一部欠損	3段目東
94	2-005-02	2	r 6・7 SE 5 No.14	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	109.2 15.0 2.3	スキ 完存	4段目南
95	2-008-01	2	r 6・7 SE 5 No.15	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	109.6 17.1 4.8	スキ 完存	4段目北
96	2-005-01	2	r 6・7 SE 5 No.16	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	109.5 17.0 2.7	スキ 一部欠損	4段目西
97	2-003-01	2	r 6・7 SE 5 No.17	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	113.6 15.0 3.5	スキ 完存	4段目東

第6章 文化財保護法¹⁾

No.	登録番号	表数	出土遺物	説明	出量 (c m)	説明	残存度	備考	
98	2-009-0-01	2	r 6 · 7 S E 5 7 N ₁₈	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	108.5 18.8 4.5	スギ	完存	5段目南
99	2-010-0-01	2	r 6 · 7 S E 5 7 N ₂₀	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	107.8 15.2 4.3	スギ	完存	5段目北
100	2-003-0-03	2	r 6 · 7 S E 5 7 N ₂₁	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	107.9 15.1 2.5	スギ	完存	5段目西
101	2-010-0-02	2	r 6 · 7 S E 5 7 N ₁₉	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	109.0 11.5 3.7	スギ	完存	5段目東
102	2-008-0-02	2	r 6 · 7 S E 5 7 N ₂₂	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	108.7 21.0 3.3	スギ	完存	6段目南
103	2-006-0-01	2	r 6 · 7 S E 5 7 N ₂₃	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	107.9 19.0 3.2	スギ	完存	6段目北
104	2-006-0-02	2	r 6 · 7 S E 5 7 N ₂₄	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	115.0 22.0 4.5	スギ	完存	6段目西
105	2-004-0-02	2	r 6 · 7 S E 5 7 N ₂₅	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	115.5 24.4 2.9	スギ	完存	6段目東
183	2-011-0-01	2	1 1 0 S E 6 4	木製品 折敷	長さ 幅 厚さ	18.5 $15+2.5+\alpha$ 0.2	ヒノキ科 アスナロ属		一部炭化
184	2-015-0-01	2	m 7 S E 6 4 第3層	木製品 曲物・底板	径 高さ	20.5 16.5	ヒノキ科 アスナロ属	ほぼ完存	底板(径18.8、厚さ1.1)
208	2-014-0-01	2	s 6 p i t 6 (S B 4 2)	木製品 柱杖	残存径	12.4	コウヤマキ		
209	2-013-0-01	2	S A 1 0 9 p i t 2	木製品 板状杭	幅 厚さ	3.9 2.6	ヒノキ科 アスナロ属		
210	2-013-0-02	2	S A 1 0 9 p i t 4	木製品 板状杭	幅 厚さ	6.0 2.3	ヒノキ科 アスナロ属		
359	3-007-0-04	3	O 2 5 S D 1 5 2 青灰色土	木製品 底板?	直径	14.4~15.0	ヒノキ属		
360	3-004-0-03	3	b 2 4 S D 1 5 2 N ₂	木製品 不明	最大長 最大幅 厚さ	19.8 6.8 1.8	アカガシ亞属		
361	3-004-0-04	3	b 2 4 S D 1 5 2 N ₃	木製品 筋織具?	最大長 最大幅 厚さ	19.7 2.5 2.5	ヒノキ属		3 6 2 を差込か
362	3-004-0-01	3	S D 1 5 2 N ₁	木製品 筋織具?	長さ 径	100.0 3.0	スギ	完存か	
369	3-003-0-01	3	W 3 3 S E 1 5 5 N ₃₁	木製品 曲物	直徑 高さ	43.1 26.0	スギ	ほぼ完存	曲物の2段目 釘孔7ヶ所 (タガには通っていない) 差込板あり
370	3-002-0-01	3	W 3 3 S E 1 5 5 N ₃₂	木製品 曲物	直徑 高さ	41.0 21.5	スギ	ほぼ完存	曲物の3段目 釘孔8ヶ所 (内1ヶ所で木釘残存)
371	3-001-0-01	3	W 3 3 S E 1 5 5 N ₃₃	木製品 曲物	直徑 高さ	32.5 24.0	スギ	ほぼ完存	曲物の4段目 8方に水抜き孔 修復の痕跡
372	3-006-0-01	3	W 3 3 S E 1 5 5 N ₂₁	木製品 井戸側部材	残存長 残存幅 残存厚	31.4 12.0 2.5	ヒノキ属		継板
373	3-005-0-03	3	W 3 3 S E 1 5 5 N ₂₀	木製品 井戸側部材	残存長 残存幅 残存厚	26.7 11.7 4.0	ヒノキ属		継板 一部焼け
374	3-006-0-02	3	W 3 3 S E 1 5 5 N ₂₃	木製品 井戸側部材	残存長 残存幅 残存厚	26.0 6.6 3.6	ヒノキ属		継板
375	3-005-0-01	3	W 3 3 S E 1 5 5 N ₃₀	木製品 井戸側部材	残存長 残存幅 残存厚	65.2 18.0 4.3	ヒノキ属		継板
376	3-005-0-02	3	W 3 3 S E 1 5 5 N ₂₄	木製品 井戸側部材	残存長 残存幅 残存厚	63.3 14.9 3.9	ヒノキ属		継板 一部や焼け
377	3-004-0-02	3	W 3 3 S E 1 5 5 N ₂₅	木製品 井戸欄柱	残存長 最大幅	95.3 11.8	スギ		継柱 自然木使用?
378	3-007-0-03	3	W 3 3 S E 1 5 5 N ₂₇	木製品 井戸欄柱	残存長 最大幅	51.8 9.0	スギ		継柱 建築部材転用か
379	3-007-0-01	3	W 3 3 S E 1 5 5 N ₁₅	木製品 井戸欄柱	残存長 最大幅	59.6 11.3	スギ		継柱 建築部材転用か
380	3-007-0-02	3	W 3 3 S E 1 5 5 N ₁₄	木製品 井戸欄柱	残存長 最大幅	51.6 9.5	スギ		継柱 建築部材転用か

No.	登録年	表記	工具種別	工具名	(単位: m)	測量(設置)の特徴	加工	被覆	色調	拘束度	備考
1	1-002-05	I B 1.7 SD 3.9	土師器 台付型	口桿	16.0	内: ハケメヨロコナ 外: ナヂメヨロコナ	直	直	灰 灰	山脚部 2/12 山脚部 10Y R5/2	5字標準E型か 5字標準E型古
2	1-002-02	I B 1.7 SD 3.9	土師器 台付型	口桿	16.0	内: ハケメヨロコナ 外: ナヂメヨロコナ	~1.5mmの巻 糸合む	直	灰 灰	山脚部 3/12 (6字標準前半)	5字標準E型古 (6字標準前半)
3	1-002-03	I B 1.7 SD 3.9	土師器 台付型	口桿	15.0	内: ハケメヨロコナ 外: ナヂメヨロコナ	直	直	灰 灰	山脚部 2/12 S型底	5字標準E型 内側に化粧材付着
4	1-002-04	I B 1.7 SD 3.9	土師器 台付型	口桿	14.4	内: ハケメヨロコナ 外: ハケメヨロコナ	直	直	灰 灰	山脚部 2/12 山脚部 10Y R7/3	5字標準E型 5字標準E型
5	1-002-01	I B 1.7 SD 3.9	土師器 瓶	口桿	28.0	内: ナヂメヨロコナ 外: ナヂメヨロコナ	直	直	灰 灰	西斜面 10Y R6/4 に近い真壁 10Y R7/4	5字標準E型か 5字標準E型
6	1-001-04	I B 1.7 SD 3.9	東北器 瓶	口桿 受鉢部	14.8 17.0	内: ロクナロ 外: ロクナロ	~2.5mmの巻 糸合む	直	灰 灰	山脚部 1/12 山脚部 1/12	山脚部 1/12 山脚部 1/12
7	1-001-05	I B 5 SD 3.3	東北器 瓶	つまみ椎	2.8	内: ロクナロケリ→輪柱ナ 外: ロクナロ	~2.5mmの巻 糸合む	直	灰 灰	山脚部 1/12 山脚部 1/12	キノコ形つまみ 輪柱型?
8	1-004-04	I B 5 SD 3.3	東北器 瓶	山根 受鉢部	11.7	内: ロクナロ 外: ロクナロ	直	灰 灰	山脚部 1/12 山脚部 1/12	山脚部 1/12 山脚部 1/12	
9	1-004-04	I B 4 SD 1.1	土師器 瓶?	口桿	6.2	内: ハケメヨロコナ 外: ハケメヨロコナ	~2.5mmの巻 糸合む	直	直	直 直	直 直
10	1-004-05	I A+B 7 SK 3	土師器 小形瓶	口桿	11.2	内: ハケメヨロコナ 外: ハケメヨロコナ	~5.0mmの巻 糸合む	直	直	直 直	直 直
11	1-001-06	I B 1.9 SD 3.8	土師器 瓶	口桿	16.6	内: ハケメヨロコナ 外: ナヂメヨロコナ	輪柱含む	直	直	直 直	直 直
12	1-004-03	I B 1.0 SD 5	製塩土器	口桿	6.0	内: オサモ・ナ 外: ナ	~5.0mmの巻 糸合む	直	直	S型 R6/6	小片 芯式
13	1-004-02	I B 1.0 SD 5	土師器 瓶	口桿	6.1	内: オサモ・ナ 外: ナヂメヨロコナ	~2.5mmの巻 糸合む	直	直	直 直	直 直
14	1-001-01	I B 1.2 SD 9	灰釉陶器	口桿	15.2	内: ロクナロ 外: ロクナロ	直	直	直 直	直 直	山脚部 4/12 山脚部 4/12
15	1-001-02	I B 1.2 SD 9	灰釉陶器	高台型	8.2	内: ロクナロ 外: ロクナロ	直	直	直 直	直 直	直 直
16	1-004-01	I B 3 カラン	灰釉陶器	高台型	7.4	内: ロクナロ→一条→輪柱ナ 外: ロクナロ	直	直	直 直	直 直	直 直
17	1-003-07	I B 8 包含型	東北器 瓶	口桿 高台型	16.0 11.2	内: ロクナロ 外: ロクナロ	直	直	直 直	直 直	直 直
18	1-003-08	I 包含型	陶瓶	口桿	14.0	内: ロクナロ 外: ロクナロ	~2.5mmの巻 糸合む	直	直	直 直	直 直
19	1-003-04	I 1地区 B 7 包含型	陶瓶	高台型	8.0	内: ロクナロ→一条→輪柱ナ 外: ロクナロ	直	直	直 直	直 直	直 直
20	1-003-02	I 表土器	陶瓶	高台型	7.4	内: ロクナロ→一条→輪柱ナ 外: ロクナロ	直	直	直 直	直 直	直 直
21	1-003-01	I 2地区 表土器	陶瓶	高台型	7.3	内: ロクナロ→一条→輪柱ナ 外: ロクナロ	直	直	直 直	直 直	直 直
22	1-003-05	I 表土器	陶瓶	高台型	8.4	内: ロクナロ→一条→輪柱ナ 外: ロクナロ	直	直	直 直	直 直	直 直
23	1-003-03	I 表土器	陶瓶	高台型	6.4	内: ロクナロ→一条→輪柱ナ 外: ロクナロ	直	直	直 直	直 直	直 直
24	1-004-08	I 表器	加工円盤	直桿	4.9~5.4		直	直	直	直	直
25	1-004-07	I A 1 注出器	加工円盤	直桿	6.0~7.1		直	直	直	直	直
26	2-047-05	Z m 9 SD 6.2	生土器 瓶	口桿	16.4	内: ヨコナ 外: ヨコナ	~2.5mmの巻 糸合む	直	直	直 直	直 直
27	2-048-04	Z m 8 SD 6.2	土師器 台付型	口桿	14.7	内: ハケメヨロコナ 外: ハケメヨロコナ	~2.5mmの巻 糸合む	直	直	直 直	直 直
28	2-048-05	Z m 9 SD 6.2	土師器 台付型	口桿	15.6	内: ハケメヨロコナ 外: ナヂメヨロコナ	~2.5mmの巻 糸合む	直	直	直 直	直 直
29	2-048-02	Z m 9 SD 6.2	土師器 台付型	口桿	17.2	内: ハケメヨロコナ 外: ヨコナ	~2.5mmの巻 糸合む	直	直	直 直	直 直
30	2-047-03	Z m 9 SD 6.2	土師器 台付型	脚台型	9.4	内: ハケメヨロ 外: ヨコナ	~2.5mmの巻 糸合む	直	直	直 直	直 直
31	2-047-02	Z m 9 SD 6.2	土師器 台付型	脚台型	9.6	内: ハケメヨロ 外: ヨコナ	~2.5mmの巻 糸合む	直	直	直 直	直 直
32	2-047-04	Z m 9 SD 6.2 ①	土師器 小形瓶	口桿	10.8	内: ハケメヨロコナ 外: ナヂメヨロコナ	~2.5mmの巻 糸合む	直	直	直 直	直 直
33	2-047-06	Z m 9 SD 6.2	土師器 瓶	口桿	19.0	内: ナヂメヨロコナ 外: ナヂメヨロコナ	~2.5mmの巻 糸合む	直	直	直 直	直 直
34	2-048-05	Z m 9 SD 6.2	土師器 瓶	口桿	27.0	内: ヨコナ 外: ヨコナ	~1.5mmの巻 糸合む	直	直	直 直	直 直
35	2-046-06	Z SD 6.2 ②	土師器 瓶	高脚瓶 脚脚瓶	2.6	内: ナ 外: 工具カ 内: ナ 外: ナ	~2.5mmの巻 糸合む	直	直	直 直	直 直
36	2-046-03	Z m 9 SD 6.2	土師器 瓶	高脚瓶 脚脚瓶	10.4	内: ナ 外: 工具カ 内: ナ 外: ナ	~2.5mmの巻 糸合む	直	直	直 直	直 直
37	2-047-01	Z m 9 SD 6.2	土師器 瓶	高脚瓶	3.4	内: ナ 外: 面取ナ 内: ナ	~2.5mmの巻 糸合む	直	直	直 直	直 直
38	2-046-04	Z m 9 SD 6.2 ③	土師器 瓶	高脚瓶	3.2	内: ナ 外: 工具カ 内: ナ 外: ナ	~2.5mmの巻 糸合む	直	直	直 直	直 直
39	2-046-02	Z m 9 SD 6.2	土師器 瓶	高脚瓶	3.5	内: ナ 外: 工具カ 内: ナ 外: ナ	~2.5mmの巻 糸合む	直	直	直 直	直 直
40	2-046-02	Z m 9 SD 6.2 ④	土師器 瓶	高脚瓶	9.7	内: ナ 外: 工具カ 内: ナ 外: ナ	~2.5mmの巻 糸合む	直	直	直 直	直 直
41	2-046-01	Z m 1.0 SD 6.2	東北器 瓶	口桿 高脚瓶 脚脚瓶	11.0 13.4	内: ロクナロ 外: ロクナロ	~2.5mmの巻 糸合む	直	直	直 直	直 直

No.	詳細No.	表記	目次(通巻)	細胞	位置 (x, y)	測定 (沿線) の特徴	断面	色調	地物名	備考
42	2-048-01	2 1 2 S D F 1	土壌器 付付属	口桂	17.0	角: ハクメイコロナデ 内: ナデココロナデ 外: オオタケノコロナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	浅黄黒T.5YR 6/4	口縁部 2/12 5字標準E版	
43	2-043-05	2 r 7 S K H 0.4	土壌器 付	口桂	14.0	角: ナデココロナデ 内: ナデココロナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	暗S YR7/6	口縁部 1/12	
44	2-043-06	2 r 7 S K H 5.4	土壌器 付	口桂	16.0	角: ナデココロナデ 内: ナデココロナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	にふく桜T.5Y R7/4	口縁部 1/12	
45	2-061-07	2 r 7 S D S 2	土壌器 付	口桂 根 茎 つまみ枝	13.4 2.8	角: ロクナデ 内: ロクナデ 外: ロクナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	白	良白SYR7/1	口縁部 4/12 外面墨書きあり「刀自古」
46	2-061-06	2 S D S 2 ⑤	土壌器 付	口桂 根 茎	13.0 3.6	角: ロクナデ 内: ロクナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	良白SYT1/1	口縁部 11/12	
47	2-063-05	2 r 7 S D S 2	土壌器 付	高台性	12.0	角: ロクナデ 内: ナデココロナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	良 画面: 深N5/0 内面: 深N6/0	高台部 2/12	
48	2-062-05	2 r 7 S D S 2	土壌器 付	口桂	23.9	角: ロクナデ 内: ロクナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	不良 良白SY 6/1	口縁部 1/12 鋸歯らしい	
49	2-064-04	2 r 7 S D S 2	土壌器 付	口桂	18.0	角: ダギキ 内: ナデココロナデ 外: ナデココロナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	直 SYR7/6	口縁部 2/12 内面に炭化物 外面に墨斑	
50	2-064-03	2 r 7 S D S 2	土壌器 付	口桂 根 茎	19.0 4.2	角: ダギキ 内: ダギキ 外: ナデココロナデ 外: ナデココロナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	直 SYR7/6	口縁部 2/12	
51	2-061-03	2 r 7 S D S 2	土壌器 付	口桂 根 茎	14.8 2.4	角: ナデココロナデ 内: ナデココロナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	内面: 浅黄黒T.5YR 6/6 内面: 暗黄黒S YR7/6	口縁部 4/12 墓碑形	
52	2-061-02	2 s 8 S D S 2 ②	土壌器 付	口桂 根 茎	13.4 2.7	角: ナデココロナデ 内: ナデココロナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	内面: 暗黄黒T.5YR7/4	口縁部 5/12	
53	2-061-01	2 S D S 2 ②	土壌器 付	口桂 根 茎	14.4 3.0	角: ナデココロナデ 内: ナデココロナデ 外: 短毛ナデココロナデ	やや直 ~1.5mmの筋 筋走行	内面: 暗黄黒T.5YR 7/6 内面: 暗黄黒S YR7/6	口縁部 8/12 土壌器付行者 内面墨書き見え、鐵塗装端文	
54	2-061-04	2 s 8 S D S 2	土壌器 付	口桂 根 茎	14.4 3.1	角: ナデコ 内: 短毛	直 ~1.5mmの筋 筋走行	内面: 暗黄黒T.5YR7/6 内面: 暗黄黒S YR7/6	口縁部 3/12 内面斜状紋理、鐵塗装端文	
55	2-061-05	2 r 7 S D S 2	土壌器 付	口桂 根 茎	13.4 3.0	角: ナデコ 内: 短毛	直 ~1.5mmの筋 筋走行	内面: 暗黄黒T.5YR 6/6 内面: 暗黄黒S YR7/6	口縁部 1/12 内面斜状紋理、鐵塗装端文	
56	2-064-02	2 S D S 2 ⑤	土壌器 付	口桂 根 茎	15.6 3.0	角: ナデコ 内: ナデココロナデ 外: ナデココロナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	内面: 暗黄黒T.5YR 6/6 内面: 暗黄黒S YR7/6	口縁部 2/12 内面斜状紋理、鐵塗装端文 内面炭化物付壁	
57	2-065-01	2 r 7 S D S 2	土壌器 付	口桂	28.0	角: ナデコメイコロナデ 内: ナデコメイコロナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	良白SYR8/2	口縁部 1/12 脊骨番号277と同一か	
58	2-062-01	2 r 7 S D S 2	土壌器 付	口桂	29.0	角: ナデコメイコロナデ 内: ナデコメイコロナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	にふく桜T.5YR7/4	口縁部 2/12	
59	2-062-02	2 r 7 S D S 2	土壌器 付	直桂	15.7	角: ナデコ 内: ナデコ 外: ナデコメイコロナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	内面: 暗黄黒T.5YR7/2 内面: 暗黄黒S YR6/6	直桂 2/12	
60	2-062-04	2 s 8 S D S 2	土壌器 付	脚脚桂	14.4	角: ナデココロナデ 内: ナデココロナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	内面: 暗黄黒T.5YR 7/6 内面: 暗黄黒S YR7/6	直桂 4/12	
61	2-042-03	2 v 6 S X S 5.6	土壌器 付	口桂 根 茎	12.8 3.5	角: ナデココロナデ 内: ナデココロナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	暗S YR7/6 西黄黒T.5YR 8/3	口縁部 3/12	
62	2-059-05	2 s 8 S X S 5.6	土壌器 付	口桂 根 茎	12.0 3.2	角: ナデココロナデ 内: ナデココロナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	暗T.5Y R7/6	口縁部 3/12	
63	2-059-02	2 s 8 S D S 5.9	土壌器 付	口桂	18.8	角: ナデコ 内: ナデコ 外: ナデココロナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	西黄黒T.5YR 8/3	口縁部 3/12	
64	2-059-01	2 m 1 1 S D S 5.8	土壌器 付	口桂	20.6	角: ナデコ 内: ナデココロナデ 外: ナデココロナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	良白SYR8/2	口縁部 3/12	
65	2-059-03	2 r 7 S D S 5.5	土壌器 付	口桂	14.5 3.9	角: ナデココロナデ 内: ナデコ 外: ナデココロナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	西黄黒T.5YR 8/3	口縁部 6/12 外面墨村着	
66	2-060-01	2 v 5 S D 4.9	黑色土壌 根付	口桂	13.6 3.4	角: ナデココロナデ 内: ナデココロナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	良白SYR8/2	口縁部 1/12 内墨	
67	2-039-01	2 w 3 2 4 S D 4.5	黑色土壌 根付	高台性	16.2	角: ロクナデ 内: ロクナデ	直 ~0.5mmの筋 筋走行	良白SY 6/9	高台部 3/12	
68	2-032-06	2 r 6 S E 7 ③	土壌器 付	口桂 根 茎 受付桂	12.0 15.0	角: ロクナデ 内: ロクナデ 外: ロクナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	良白NT7/6	口縁部 1/12 外面内面にヘラ書き	
69	2-054-01	2 S E 7 ③	土壌器 付	直桂	8.8	角: ナデコナデ 内: ナデコナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	良白N8/0	直桂 10/12	
70	2-054-02	2 S E 7 ③	土壌器 付	直桂	9.2	角: ロクナデ 内: ロクナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	良白N8/0	直桂 5/12 直面部墨書きあり	
71	2-054-03	2 S E 7 ③	土壌器 付	口桂	12.0	角: ナデコ 内: ナデコ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	不規S YR6/6 不規SYR8/1	口縁部 2/12 今持け 銀鏡のため調整不明瞭	
72	2-053-03	2 S E 5.7 ③	土壌器 付	口桂 根 茎	16.0 1.4	角: ナデコ 内: ナデ 外: ナデコナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	良白SYT1/1	近源所	
73	2-052-02	2 S E 5.7 ③	土壌器 付	口桂	14.0	角: ナデコ 内: ナデコ 外: ナデコナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	二点打標SYR8/3+5/3 標記SYR4/1	口縁部 1/12 内面一部墨	
74	2-052-01	2 S E 5.7 ③	土壌器 付	口桂	17.0	角: ナデコ 内: ナデコ 外: ナデコナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	暗S YR7/6 にふく桜T.5YR7/4	口縁部 3/12	
75	2-052-04	2 S E 5.7 ③	土壌器 付	口桂	17.0	角: ナデコ 内: ナデコ 外: ナデコナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	暗S YR6/6	口縁部 1/12 内面斜状紋理	
76	2-052-03	2 S E 5.7 ③	土壌器 付	口桂 根 茎	16.0 1.4	角: ナデコ 内: ナデ 外: ナデコナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	暗S YR6/6	口縁部 2/12 内面斜状紋理	
77	2-054-01	2 R E 5.7 N S E 5.7 ③	土壌器 付	口桂	26.2	角: ナデコ 内: ナデ 外: ナデコナデ 内: ナデ 外: ナデコナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	良黄HYS/5/2	口縁部 1/12 内面墨村着 内面炭化物付	
106	2-059-02	2 g 9 S D 6.0	黑色土壌 根付	つまみ枝	2.6	角: ナデコ 内: ナデ 外: ナデコナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	良白N6/0	つまみ部 頭に點印有	
107	2-052-06	2 1 1 4 S D 7.9	土壌器 付	高台性	8.6	角: ロクナデ 内: ロクナデ 外: ロクナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	にふく桜T.5Y R7/4	高台部 3/12	
108	2-054-02	2 1 1 4 S D 7.9	土壌器 付	基盤桂	2.6	角: ナデ 内: ナデ 外: ナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	にふく桜T.5Y R7/4	口縁部 2/12	
109	2-057-01	2 w 3 S Z 4.3	土壌器 付	口桂	14.7	角: オサエ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	良黄HYS/5/2	銀鏡のため調整不明瞭	
110	2-057-02	2 w 3 S Z 4.3	土壌器 付	口桂	17.2	角: ナデコ 内: ナデコナデ 外: ナデコナデ	直 ~1.5mmの筋 筋走行	暗S YR7/6	口縁部 1/12 銀鏡のため調整不明瞭	

No.	登録年	水準	II. I 適用	範囲	面積 (ha)	測量 (踏査) の特徴	測定	地図	地図	地図	備考
111-2-057-05	2	x 3 S 2 4 3	東部都 市	口桂 横田 高見	30.9 3.2	内: ロクロナダ、半持ケツリ 内: ロクロナダ	~1.0m/mの移 動性付	良	良自 5 YT/1	口桂部	4/12
112-2-057-05	2	x 3 S 2 4 3	土浦	長崎 高見 六桂	3.2 1.1 0.4	内: ロクロナダ	~1.0m/mの移 動性付	一	良自 黄地10Y RT/4/2 高見地 5Y RT/1	重量	3.18 g
113-2-058-01	2	w 3 S 2 4 3	土浦都 市	口桂	34.8	内: ハケメ→コロナダ 内: ハケメ→コロナダ	~3.0m/mの移 動性付	一	内面: にせい10Y RT/5/3 内面: 沖田 5Y RT/6/2	口桂部	1/12 手形部分接合せ
114-2-057-04	2	w 3 S 2 4 3	緑橋都 市	口桂	21.4	内: ロクロナダ 内: ロクロナダ	内: ハセナダ	B	面地: 良自 5 NT/7 面地: BCJ 5 YT/1	口桂部	小片
115-2-056-05	2	x 3 S 2 4 3	緑橋都 市	台桂	8.6	内: ハセナダ、新村ナダ 内: ハセナダ	~1.0m/mの移 動性付	一	内面: 良自 10Y RT/8/2 内面: 沖田 10Y RT/8/3	台桂	3/12 變誠のため調整不規 則が全部削除
116-2-056-02	2	x 3 S 2 4 3	土浦都 市・台桂	高台桂	8.6	内: ハセナダ、新村ナダ 内: ハセナダ	~2.0m/mの移 動性付	一	BCJ 10Y RT/8/2	高台桂	小片
117-2-056-05	2	x 3 S 2 4 3	胸桂	高台桂	7.7	内: ロクロナダ→条田→船村ナダ 内: ロクロナダ	内: ハセナダ	良	良自 5 YT/2	高台桂	5/12 山系側(段丘・鹿戸) 内面削除
118-2-049-08	2	w 3 S 1 1 3	東部都 市	つみ住	3.5	内: ハセナダ、ロクロケズリ→船村ナダ 内: ロクロナダ	~3.0m/mの移 動性付	内面: 良自 5 YT/1 内面: 沖田 5 YT/1	一	北東部: つみ住 9/12	現に転化 過度あり
119-2-041-05	2	s 6 S 1 1 3	土浦都 市	口桂	—	内: ハセナダ→コロナダ 内: ナダ→コロナダ	~2.0m/mの移 動性付	—	赤黄地 10Y RT/4	口桂部	小片
120-2-053-01	2	m 1 2 S X 6 6	東部都 市	口桂	—	内: ハセナダ 内: 口心ナタカタ	—	良	良自 5 NT/9 良自 5 NT/0	赤照片	—
121-2-053-02	2	k 1 2 S D 7 2	東部都 市	口桂	28.3	内: ロクロナダ 内: ロクロナダ、ナダ	—	良	良自 5 NT/9 良自 5 NT/7	口桂部	1/12
122-2-049-01	2	e 2 3 S K 0 6	土浦都 市 A	口桂	21.0	内: ナダ→コロナダ 内: ナダ→コロナダ	~1.0m/mの移 動性付	—	赤黄地 5 YT/8/4 内面: 明鏡地 5 YT/7/2	口桂部	1/12
123-2-059-08	2	d 2 4 S D 9 5	東部都 市	口桂	28.0	内: ナダ→コロナダ 内: ナダ→コロナダ	—	—	赤黄地 10Y RT/8/3 内面: 沖田 10Y RT/7/6	口桂部	1/12 口桂不安
124-2-057-02	2	d 2 4 S K 1 0 4	東部都 市	口桂	17.0	内: ハセナダ	—	良	良自 5 NT/9	口桂部	2/12
125-2-057-01	2	d 2 4 S K 1 0 4	東部都 市	高台桂	16.0	内: ロクロナダ、割り出し高台 内: ロクロナダ	—	良	内面: 沖田 5 NT/0 内面: 沖田 5 NT/7	高台桂	2/12
126-2-041-02	2	d 2 3 S D 9 7	東部都 市	—	—	内: ロクロナダ、カキメ 内: ロクロナダ	~0.5m/mの移 動性付	—	良自 7 NT/0	口桂部	小片
127-2-049-05	2	e 2 3 S D 9 7	墨北部都 市	高台桂	11.0	内: ナダ→船村ナダ 内: カギメ	—	—	赤黄地 10Y RT/3 内面: 明鏡地 5 NT/3	高台桂	3/12 内面
128-2-039-06	2	i 2 2 S D 9 8	土浦都 市	口桂	17.4	内: ハセナダ→ナダ→コロナダ 内: ナダ→コロナダ	—	—	BCJ 10Y RT/8/2	口桂部	2/12
129-2-039-04	2	i 2 2 S D 9 8	緑橋都 市	高台桂	7.0	内: ハセナダ	—	良	面地: 良自 5 YT/1 面地: 沖田 5 YT/7, 5 YT/3	高台桂	2/12 無類
130-2-049-08	2	d 2 2 S D 1 0 0	土浦都 市 A	高台桂	5.4	内: 先切→船村ナダ 内: カギメ	~0.5m/mの移 動性付	—	内面: 赤黄地 5 YT/8/3 内面: 沖田 5 NT/0	高台桂	3/12 内面: 高台園圃的に打ち欠く
131-2-041-04	2	e 2 2 S D 1 0 0	墨北部都 市	口桂	14.3	内: ナダ→船村ナダ→コロナダ 内: ナダ→コロナダ	—	—	内面: 良自 5 YT/8/2 内面: 明鏡地 5 NT/3	口桂部	1/12 内面: 高台園圃的に打ち欠く
132-2-049-02	2	e 2 2 S D 1 0 0	土浦都 市	口桂 横田	12.0 2.95	内: ナダ→コロナダ 内: ナダ→コロナダ	—	—	BCJ 5 YT/8/2 内面: BCJ 5 YT/8/1	口桂部	2/12
133-2-059-07	2	e 2 2 S D 1 0 0	土浦都 市	口桂	20.0	内: ナダ→コロナダ 内: ナダ→コロナダ	—	—	BCJ 5 YT/8/2 内面: BCJ 5 YT/7/2	口桂部	1/12
134-2-049-04	2	e 1 9 S 2 8 2	東部都 市	高台桂	4.9	内: ハセナダ→船村ナダ 内: ロクロナダ	—	良	良自 6 NT/0	高台桂	4/12
135-2-056-01	2	g 1 5 S 2 8 2	東部都 市	口桂	19.8	内: ハセナダ 内: ロクロナダ	~2.0m/mの移 動性付	—	良自 5 NT/0	口桂部	2/12
136-2-043-01	2	e 1 8 S 2 8 2	胸桂 底定	脚上深体部 底	21.0	内: ロクロナダ、ケツリ、工具、ナダ、ナダ 内: ロクロナダ、ナダ	~0.5m/mの移 動性付	—	BCJ 5 YT/6/1 BCJ 5 NT/0	—	—
137-2-039-04	2	c 1 9 S 2 8 2	緑橋都 市	高台桂	6.0	内: ロクロナダ 内: ロクロナダ	—	良	面地: にせい10Y RT/7/ 面地: オーブル 5 NT/4	高台桂	1/12 輪郭
138-2-043-07	2	d 1 9 S 2 8 2	胸桂都 市	高台桂	8.2	内: ロクロナダ、ナダ→船村ナダ 内: ロクロナダ	—	良	BCJ 2 YT/7/1	高台桂	3/12
139-2-043-03	2	e 1 8 S 2 8 2	胸桂都 市	高台桂	7.8	内: 先切→船村ナダ 内: ロクロナダ	~0.5m/mの移 動性付	—	良自 5 YT/1	高台桂	4/12 前面外壁に需要 内面削除
140-2-044-02	2	d 1 8 S 2 8 2	胸桂都 市	口桂 横田 高見	12.7 4.9 6.9	内: ハセナダ→先切→船村ナダ 内: ロクロナダ	~2.0m/mの移 動性付	—	良自 5 NT/0	口桂部	2/12 前面外壁に需要「六」
141-2-042-04	2	d 1 9 S 2 8 2	土浦都 市	口桂	13.2	内: ハセナダ→コロナダ 内: ナダ→コロナダ	~1.0m/mの移 動性付	—	赤黄地 5 YT/4/4 内面: BCJ 5 YT/8/2	口桂部	1/12 外壁耐候着
142-2-041-01	2	e 2 2 S 2 8 2	土浦都 市	口桂	14.0	内: ハセナダ→船村ナダ 内: ハセナダ→コロナダ	—	—	内面: にせい10Y RT/8/2 内面: にせい10Y RT/7/3	口桂部	2/12 口桂外側面耐候着
143-2-039-01	2	e 2 2 S K 1 0 1	胸桂都 市	高台桂	7.4	内: ロクロナダ→船村ナダ 内: ロクロナダ	~1.0m/mの移 動性付	—	良自 5 YT/1/1	高台桂	完治 内面外壁削除
144-2-046-05	2	d 2 3 S D 1 0 3	土浦都 市・台桂	直桂	6.8	内: ナダ→オサキ 内: ナダ	—	—	良自 5 YT/1	直桂	4/12
145-2-051-05	2	d 2 3 S D 8 9	土浦都 市小	口桂 横田	7.6 1.0	内: ナダ、オサキ 内: ナダ	—	—	良自 10Y RT/8/2	口桂部	4/12 伊勢原系
146-2-056-04	2	d 2 3 S D 8 8	土浦都 市	船村ナダ	—	内: ナダ、船村ナダ 内: カギメ	~1.0m/mの移 動性付	—	内面: BCJ 5 YT/8/2 内面: 明鏡地 5 NT/2	高台桂	3/12 高台園圃的に打ち欠く
147-2-055-04	2	d 2 5 S D 8 8	胸桂 小屋	—	内: ロクロナダ 内: ロクロナダ	~0.5m/mの移 動性付	—	良自 2 YT/7/1	高台桂	— [正面(屋根) 裏面(外壁)カギメ 高台園圃需要あり]+	
148-2-055-06	2	d 2 3 S D 8 8	胸桂 木	高台桂	7.1	内: ロクロナダ→先切→船村ナダ 内: ロクロナダ	~0.5m/mの移 動性付	—	良自 10Y RT/8/1	高台桂	2/12 内面外壁削除 内面修理後
149-2-055-05	2	d 2 5 S D 8 8	胸桂 木	口桂	16.0	内: ロクロナダ→先切→船村ナダ 内: ナダ→コロナダ	~0.5m/mの移 動性付	—	良自 5 YT/1/1	高台桂	1/12 完治 内面修理後
150-2-055-03	2	d 2 5 S D 8 8	胸桂 木	高台桂	9.0	内: ナダ→オサキ→コロナダ 内: ナダ→コロナダ	—	—	5 YT/7/8	口桂部	5/12 完治 内面修理後
151-2-055-07	2	d 2 4 S D 8 8	土浦都 市	—	—	—	—	—	—	口桂部	5/12 完治

記号	品種名	形態	花期	日数 (日)	開花 (日付) の日数	性状	花色	商品名	備考
152-056-02	2 d 2 3 S D 8.6	土蔵器 盆	口桔 鮎高	11.8 2.5	内:ナデ+オヌエ 外:ロクナデ+ナデ	■	白花 5Y R/2	山伊勢系	4/12 南伊勢系
153-2-055-02	2 d 2 3 S D 8.6	土蔵器 盆	口桔	26.0	内:ナデ+オヌエ→コナデ 外:ナデ+コロナデ	中+根 ~2.5cmの根 細胞むけ	内:濃い黄鶴10Y R/5/2 外:浅鶴10Y R/6/3	山伊勢系 第1段根b 外園地村付	1/12 山伊勢系 第1段根b 外園地村付
154-2-055-01	2 d 2 5 S D 8.8	土蔵器 盆	口桔	27.0	内:ナデメ+コナデ 外:ナデ+コロナデ	中+根 ~2.5cmの根 細胞むけ	内:濃い鶴10Y R/5/2 外:浅鶴10Y R/6/2	山伊勢系 第1段根b 外園地村付	1/12 山伊勢系 第1段根b 外園地村付
155-2-060-04	2 d 2 5 S D 9.0	陶器 桜	口桔 鮎高	8.0 1.7	内:ロクナデ+赤田 外:ロクナデ+ナデ	■ ~3.5cmの根 細胞むけ	良白NK/9	山伊勢系	1/12 (現況+加多) 自然あり
156-2-060-06	2 d 2 6 S D 9.0	陶器 桜	口桔 鮎高	7.8 1.6	内:ロクナデ+ナデ+赤田 外:ロクナデ+ナデ	■ ~3.5cmの根 細胞むけ	良白NK/9	山伊勢系	1/12 (現況+加多) 内園地村付
157-2-060-05	2 d 2 6 S D 9.0	陶器 桜	口桔 鮎高	7.8 1.5	内:ロクナデ+赤田 外:ロクナデ+ナデ	中+根 ~2.5cmの根 細胞むけ	良白NK/9	山伊勢系	1/12 (現況+加多) 内園地村付
158-2-060-03	2 d 2 4 S D 9.0	陶器 桜	高台桜	6.7	内:ロクナデ+赤田→船付ナデ 外:ロクナデ	■ ~7.5cmの根 細胞むけ	良白 5 Y NT/1	高台部	8/12 黄鶴式 高台式
159-2-063-02	2 d 2 4 S D 9.0	陶器 桜	高台桜	7.4	内:ロクナデ+ナデ→船付ナデ 外:ロクナデ	■ ~7.5cmの根 細胞むけ	良白NT/0	高台部	8/12 黄鶴式 高台式
160-2-063-01	2 d 2 5 S D 9.0	陶器 桜	口桔 鮎高 薩摩台付	14.6 5.2 6.0	内:ロクナデ+赤田→船付ナデ 外:ロクナデ	■ ~7.5cmの根 細胞むけ	良白NT/0	山伊勢系	2/12 (現況+繁殖) 6.5cm
161-2-060-07	2 d 2 5 S D 9.0	陶器 桜	高台桜	6.2	内:ロクナデ+赤田→船付ナデ 外:ロクナデ	■ ~7.5cmの根 細胞むけ	良白NK/9	山伊勢系	2/12 (現況+繁殖) 6.5cm
162-2-060-02	2 d 2 6 S D 9.0	陶器 桜	高台桜	約12.8	内:ロクナデ+ケズリ+ナデ→船付ナデ 外:ロクナデ+ナデ	■ ~7.5cmの根 細胞むけ	良白NT/0	流造	別名: 墓塚 高台式
163-2-059-08	2 d 2 5 S D 9.0	土蔵器 小盆	口桔 鮎高	7.4 0.8	内:ナデ+ナデ 外:ナデ	■ ~1.5cmの根 細胞むけ	西黄7.5 Y R/4	山伊勢系	3/12 山伊勢系
164-2-059-06	2 d 2 4 S D 9.0	土蔵器 小盆	口桔 鮎高	7.8 1.6	内:ナデ+コナデ 外:ナデ+コロナデ	■ ~3.5cmの根 細胞むけ	に若い黄鶴10Y R/7/2	山伊勢系	9/12 南伊勢系
165-2-059-04	2 d 2 5 S D 9.0	土蔵器 小盆	口桔 つばせ	21.8 24.6	内:ナデ+鮎田ナデ 外:ナデ	■ ~1.5cmの根 細胞むけ	良白10Y R/8/2 漁場(良白) 5 Y NT/1	山伊勢系	1/12 内園地村付
166-2-060-06	2 d 2 3 S D 9.0	陶器 六代	飛行草 飛行草 六代	3.8 1.0	内:ナデ+ナデ 外:ナデ	■ ~4.5cmの根 細胞むけ	高台10Y R/6/1	重量 18.0 g	
167-2-050-03	2 m 9 SE 6.3	陶器 桜	高台桜	6.8	内:ロクナデ+ヘラ切り+鮎田ナデ 外:ロクナデ	中+根 ~1.5cmの根 細胞むけ	白良NT/0	高台部	4/12 山系(鮎田) 第6型式 高台式外園地付
168-2-050-02	2 m 9 SE 6.3	陶器 桜	高台桜	7.4	内:ロクナデ+赤田→船付ナデ 外:ロクナデ	中+根 ~1.5cmの根 細胞むけ	白良NT/0	高台部	2/12 山系(鮎田+繁殖) 6.5cm
169-2-050-05	2 k 10 SE 6.5	陶器 桜	高台桜	7.2	内:ロクナデ+鮎田ナデ 外:ロクナデ	■ ~2.5cmの根 細胞むけ	良白NT/0	高台部	4/12 山系(鮎田+繁殖) 6.5cm
170-2-050-04	2 1 1 0 SE 6.8	陶器 小盆	口桔 鮎高	8.3 1.8	内:ナデ+ナデ 外:ロクナデ	■ ~2.5cmの根 細胞むけ	良白NK/9	山系(鮎田+繁殖) 7.5cm	
171-2-036-05	2 1 1 0 SE 6.8	陶器 桜	高台桜	6.0	内:ロクナデ+赤田→船付ナデ 外:ロクナデ	■ ~1.5cmの根 細胞むけ	西黄7.5 Y NT/1 内面:灰BN/8.0	高台部	2/12 山系(鮎田+繁殖) 6.5cm
172-2-049-05	2 1 1 0 SE 6.8	陶器 桜	高台桜	7.1	内:ロクナデ+赤田→船付ナデ 外:ロクナデ	■ ~1.5cmの根 細胞むけ	白良NT/0	高台部	8/12 山系(鮎田) 第7型式 6.5cm
173-2-049-02	2 SE 6.4 6.8 蝶	陶器 蝶		内:ロクナデ? ケズリ+鮎田ナデ 外:ロクナデ?	■ ~3.5cmの根 細胞むけ	白良NT/0	流造	別名: 墓塚 高台式	
174-2-051-04	2 k 10 SE 6.4	土蔵器 小盆	口桔	7.8	内:ナデ+オヌエ 外:ロクナデ	■	白花10Y R/8/2	山伊勢系	4/12 南伊勢系
175-2-051-03	2 k 10 SE 6.4	土蔵器 盆	口桔	12.0	内:ナデ+オヌエ 外:ナデ	■ ~1.5cmの根 細胞むけ	白花 5 Y NT/1	山伊勢系 口桔系	1/12 内園地村付
176-2-051-01	2 k 10 SE 6.4	土蔵器 盆	口桔	21.0	内:ナデメ+コナデ 外:ナデ+コロナデ	中+根 ~1.5cmの根 細胞むけ	白良NT/0	山伊勢系	1/12 内園地村付 山伊勢系 第1段根b
177-2-049-06	2 1 1 0 SE 6.4	陶器 小盆	口桔 鮎高	9.3 2.2	内:ロクナデ+ヘラ切り 外:ロクナデ	中+根 ~2.5cmの根 細胞むけ	に若い黄鶴10Y R/7/3	山伊勢系	4/12 (現況+加多) 7.5cm
178-2-049-07	2 1 1 0 SE 6.4	陶器 小盆	高台桜	7.9	内:ロクナデ+赤田→船付ナデ 外:ロクナデ	■ ~2.5cmの根 細胞むけ	白良NT/0	高台部	6/12 山系(鮎田+繁殖) 5.5~6型式
179-2-049-04	2 1 1 0 SE 6.4	陶器 桜	高台桜	7.4	内:ロクナデ+赤田→船付ナデ 外:ロクナデ	■ ~1.5cmの根 細胞むけ	白良NT/0	高台部	4/12 山系(鮎田+繁殖) 5.5~6型式
180-2-049-03	2 1 1 0 SE 6.4	陶器 桜	口桔 鮎高	13.1 4.7	内:ロクナデ+赤田 外:ロクナデ	中+根 ~1.5cmの根 細胞むけ	白良NK/9	山系(鮎田) 第8型式 内園地村付	
181-2-050-01	2 k 10 SE 6.4	陶器 桜	口桔 鮎高 鮎根	15.5 5.95	内:ロクナデ+赤田 外:ロクナデ	中+根 ~1.5cmの根 細胞むけ	白良NT/0	山系(鮎田+繁殖) 6.5cm	
182-2-049-01	2 1 1 0 SE 6.4	陶器 桜	口桔	18.4	内:ロクナデ 外:ロクナデ+ケズリ	中+根 ~1.5cmの根 細胞むけ	施地区 5 Y R/5/1	山伊勢系	1/12 貴重
183-2-044-01	2 e 2 2 S D 8.5	葉巻器 盆	口桔	25.8	内:ロクナデ+カキメ	中+根 ~4.5cmの根 細胞むけ	白良NT/0	山伊勢系	1/12
184-2-044-04	2 g 2 2 S D 8.5	灰輪器 盆	高台桜	7.5	内:赤田+鮎田ナデ 外:ロクナデ	中+根 ~1.5cmの根 細胞むけ	白良NK/9	高台部	3/12 山系(鮎田+根) 5.5~6型式
185-2-043-08	2 d 2 2 S D 8.5	土蔵器 盆	高台桜	10.2	内:ナデ+鮎田ナデ 外:ナデ	中+根 ~1.5cmの根 細胞むけ	内:灰白10Y R/8/2 外:良白 5 Y NT/1	高台部	4/12 山系(鮎田+根) 5.5~6型式
186-2-043-04	2 e 2 2 S D 8.5	土蔵器 盆	口桔 鮎高	15.0	内:ナデ+コナデ 外:ナデ+コロナデ	■ ~1.5cmの根 細胞むけ	内:灰白 5 Y NT/2 外:浅鶴10Y R/8/4	山伊勢系	1/12
187-2-043-01	2 f 2 2 S D 8.5	土蔵器 盆	口桔 鮎高	10.0	内:ナデ+コナデ 外:ナデ+コロナデ	■ ~1.5cmの根 細胞むけ	内:良白10Y R/8/4 外:灰白10Y R/7/4	山伊勢系	完
188-2-040-07	2 d 2 1 S D 10.6	里地器 盆	つみみ桜	4.3	内:ロクナデ+ロクナデ+鮎田ナデ 外:ロクナデ	■ ~1.5cmの根 細胞むけ	良白NT/0	つまみ部	説明用 (内園地村) 2/12
189-2-039-02	2 d 2 1 S D 10.6	灰輪器 桜	高台桜	8.0	内:ロクナデ+赤田→船付ナデ 外:ロクナデ	■	良白NT/0	高台部	説明用 (内園地村) 2/12
190-2-036-01	2 d 2 2 S D 10.6	陶器 桜	口桔 鮎高 鮎根	15.5 4.7 7.6	内:ロクナデ+赤田→船付ナデ 外:ロクナデ	中+根 ~1.5cmの根 細胞むけ	内:良白NK/9 外:良白NT/0	山系(鮎田) 第5型式 6.5cm	1/12 山系(鮎田) 6.5cm
191-2-036-04	2 d 2 2 S D 10.6	陶器 桜	高S 大根	11.5 4.5	内:ロクナデ+ナデ	■	良白NT/0	高台部	重量 225 g 高台系

No.	詳細	水準	目次(通巻)	形態	形質 (cm)	測量 (cm) の特徴	加工	成形	色調	拘束度	備考
194-2-043-02	2 d 2.3 S D 9.4	土側面 小面	口横 筋面	2.1 8.0	内: オクナ-コナデ 外: オカニ-コナデ	~1.0cmの筋 筋面むき	削	表面: にじ-模様Y R 6/4 内面: 深緑D 3Y R 6/2	口縁部 9/12 南伊勢系		
195-2-043-02	2 d 2.3 S D 9.4	土側面 小面	口横 筋面 直筋	2.2 1.3 8.2	内: ロクナダ-エキナ 外: ロクナダ-ロクナダ	~1.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 白N 6/0	口縁部 3/12 山岳・加多・飯田 藍緑 4/12 7号式 内面無		
196-2-042-02	2 d 2.3 S D 9.4	土側面 直筋	高台傾	16.0	内: ロクナダ-ケズリ、ナデ-船付ナデ 外: ロクナダ-ケズリ	~1.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 白N 1 Y 7/1 内面: 白N 5 Y 7/1	高台部 3/12 加多・羅陀		
197-2-042-01	2 d 2.3 S D 9.4	土側面 直筋	腰部傾	4.6	内: ロクナダ-、ロクロケズリ、ナデ、沈緑 外: ロクナダ	~1.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 白N 5 Y 7/1 内面: 白N 6/0	腰部 2/12 加多・羅陀		
198-2-064-02	2 i 1 2 p 1 t 1	腰部面 側面	口横	14.4	内: ロクナダ 外: ロクナダ	~1.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 白N 5/0 内面: 白N 6/0	口縁部 2/12 加多・羅陀		
199-2-065-02	2 o 7 p 1 t 1	軸用紙					削	表面: 白N 1 Y 0/0	東伊勢徹体部 墨付茎		
200-2-049-02	2 u 5 p 1 t 5	東側面 直筋	口横	8.2	内: ロクナダ、沈緑 外: ロクナダ		削	表面: 白N 6/0	口縁部 4/12 西伊勢徹体部 墨付茎 1/17と同一個体		
201-2-051-02	2 r 8 p 1 t 1	土側面 直筋	脚部傾	16.9	内: ロクナダ-ロナダ 外: ロクナダ-ロナダ		やや削	表面: 白N 1 Y 8/0 内: ハシモ-5 Y R 7/4	脚部部 5/12 脚部		
202-2-067-02	2 v 4 p 1 t 17	墨化土側面 直筋	口横 筋面	13.8 4.8	内: ロクナダ-ロナダ-船付ナデ 外: ロクナダ-ロナダ	~1.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 深白Y R 6/2 内面: 橙EKN 3/0	口縁部 10/12 内面 高台部意図的に打ちちぐく		
203-2-051-02	2 v 5 p 1 t 6	灰地側面 直筋	口横	13.8	内: ロクナダ- 外: ロクナダ		削	表面: 白N 1 Y 0/0	口縁部 1/12 復元		
204-2-063-02	2 v 5 (S 4.1)	土側面小面 直筋	直筋	6.0	内: ロクナダ-エキナ-船付ナデ 外: ロクナダ	~1.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 白N 2.5 Y R 6/1 内面: 深青碧10Y R 6/3	藍緑 完存		
205-2-059-02	2 p 1 3 直筋 (S 4.1)	土側面小面 直筋	直筋	6.6	内: ロクナダ-エキナ 外: ロクナダ	~1.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 白N 1 Y R 8/2 内面: 白N 1 Y R 8/2	藍緑 3/12		
206-2-063-02	2 p 1 13 (S 4.1)	土側面小面 直筋	直筋	2.6 4.2	内: ロクナダ- 外: ロクナダ		削	表面: 白N 1 Y R 6/1 内面: 深白Y R 6/1	口縁部 1/12 藍緑 3/12		
207-2-063-02	2 i 2 p 1 t 1	脚部 直筋	口横 筋面	8.0 1.4	内: ロクナダ-エキナ 外: ロクナダ	~1.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 白N 1 Y 0/0 内: ロクナダ	口縁部 4/12 山岳・加多・羅陀 第6号式		
211-2-028-02	2 e 2 1 直筋	漢文・脚部 直筋			内: ナデ-船付突変 外: ナデ		削	表面: 黄褐色10Y R 7/3 内面: 深青碧4Y R 5/1	口縁部 3/12 3号D型 外面一張黒皮		
212-2-028-02	2 x 4 細木	土側面 合板傾	口横	12.7	内: ロクナダ-ロクナダ 外: ロクナダ-ロナダ	~2.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 白N 1 Y R 6/2 内面: 深青碧10Y R 7/3	口縁部 3/12 3号D型 外面一張黒皮		
213-2-028-01	2 q 5 细木	土側面 合板傾	口横	16.0	内: ロクナダ-ロクナダ 外: ロクナダ-ロナダ	~2.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 白N 1 Y R 6/2 内面: 深青碧10Y R 7/3	口縁部 3/12 5号E型		
214-2-027-02	2 m 8 合板傾	土側面 合板傾	口横	16.0	内: ロクナダ-ロクナダ 外: ナデ・オカニ-ロクナダ	~2.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 白N 1 Y R 6/2 内面: 深青碧10Y R 6/4	口縁部 1/12 5号E型		
215-2-027-05	2 j 1 5 細木	土側面 合板傾	合板	18.2	内: ロクナダ 外: ナデ	~2.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 深黄10Y R 4/4	台面 7/12		
216-2-038-03	2 g 1 0 合板傾	土側面 直筋	口横	18.2	内: ロクナダ-ロクナダ 外: ロクナダ	~2.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 白N 1 Y R 6/2 内面: 深青碧10Y R 6/2	口縁部 1/12 ミニチュアか		
217-2-028-07	2 j 1 5 合板傾	土側面 直筋	口横	24.2	内: ロクナダ-オカニ-ロクナダ 外: ナデ・オカニ-ロクナダ	~2.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 深青碧10Y R 6/3 内面: 深白2.5 Y R 2/2	口縁部 1/12 5号E型併存		
218-2-029-05	2 e 1 7 細木	裏面 直筋	口横 筋面	9.6	内: ロクナダ-、ロクロケズリ-ハラ切り 外: ロクナダ-、花方舟ナデ	~2.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 白N 1 Y 0/0	天井剥片		
219-2-022-07	2 g 2 3 直筋	裏面 直筋	口横 筋面	9.7 2.0	内: ロクナダ-ハラ切り 外: ロクナダ	~2.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 深白2.5 Y R 2/2 内面: 深白2.5 Y R 2/2	口縁部 4/12 軒身の可能性あり		
220-2-029-06	2 m 8 直筋	裏面 直筋	口横	12.5	内: ロクナダ-、ロクロケズリ 外: ロクナダ	~2.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 白N 1 Y 0/0	口縁部 1/12		
221-2-028-07	2 j 1 5 細木	裏面 直筋	口横 筋面	16.2	内: ロクナダ-、ロクロケズリ 外: ロクナダ	~2.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 白N 1 Y 0/0	口縁部 4/12 外表面自然黒		
222-2-029-06	2 j 1 5 細木	裏面 直筋	口横 筋面	16.3	内: ロクナダ-、ロクロケズリ 外: ロクナダ	~2.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 白N 1 Y 0/0	口縁部 3/12 天井剥片		
223-2-029-06	2 k 1 2 合板傾	裏面 新筋	口横 受筋傾	13.8	内: ロクナダ- 外: ロクナダ	~2.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 白N 1 Y 0/0	口縁部 2/12 受筋		
224-2-029-07	2 m 8 合板傾	裏面 直筋	合板	8.7	内: ロクナダ-カキメ		削	表面: 白N 1 Y 0/0	台面 2/12 四方スカシ(二方残る)		
225-2-024-02	2 f 1 5 細木	裏面 直筋	高台傾	10.8	内: ロクナダ-台面三方スカシ 外: ナデ		削	表面: 深白2.5 Y R 4/2	高台部 9/12 内外面自然黒		
226-2-032-01	2 g 1 7 合板傾	裏面 直筋	高台傾	7.7	内: ロクナダ-ナデ-船付ナデ 外: 工具ナデ、ナデ	~2.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 白N 5/0 内面: 白N 1 Y 0/0	高台部 4/12		
227-2-026-02	2 c 2 3 合板傾	砾石		12.5 5.7 1.9	内: ロクナダ- 外: ロクナダ	~2.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 黄褐色10Y R 6/4 内面: 深青碧10Y R 6/2	重量: 1.05g 品目: 砂利		
228-2-032-06	2 m 8 合板傾	有孔凹彫		2.1 6.3 0.25	内: ロクナダ- 外: ロクナダ		削	表面: 黄褐色10Y R 4/1	重量: 1.96g 品目: 砂利		
229-2-034-05	2 w 4 合板傾	土側面		3.5 1.4 0.25	内: ロクナダ- 外: ロクナダ		削	表面: 黄褐色10Y R 6/2	重量: 4.85g		
230-2-034-06	2 w 3 合板傾	土側面		4.8 1.7 0.4	内: ロクナダ- 外: ロクナダ	~2.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 黄褐色10Y R 6/2	重量: 11.52g		
231-2-023-06	2 e 2 3 直筋	土側面		3.8 1.1 0.25	内: ロクナダ- 外: ロクナダ		削	表面: 黄褐色10Y R 4/1	重量: 5.5g		
232-2-038-04	2 u 4 台面傾	土側面		3.8 1.0 0.2	内: ロクナダ- 外: ロクナダ		削	表面: 白N 1 Y 0/0	重量: 3.66g		
233-2-023-05	2 c 1 0 台面傾	土側面		4.2 1.0 0.35	内: ロクナダ- 外: ロクナダ		削	表面: S Y R 6/6	重量: 3.3g		
234-2-026-03	2 f 2 1 台面傾	土側面		3.6 1.1 0.25	内: ロクナダ- 外: ロクナダ		削	表面: 黄褐色10Y R 6/2	重量: 3.67g		
235-2-030-04	2 f 2 4 細木	裏面 直筋		4.2 1.0 0.2	内: ロクナダ-カキメ、嵌状文、沈緑 外: ロクナダ	~2.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 橙EKN 3/0 内面: 深白2.5 Y R 1/1	口縁部片		
236-2-030-03	2 f 2 4 細木	裏面 直筋		4.2 1.0 0.2	内: ロクナダ-カキメ、嵌状文、沈緑 外: ロクナダ	~2.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 深白2.5 Y R 6/1 内面: 深白2.5 Y R 6/0	口縁部片		
237-2-024-01	2 d 2 3 合板傾	裏面 直筋	口横	25.7	内: ロクナダ-嵌状文 外: ナデ	~2.0cmの筋 筋面むき	削	表面: 白N 4/0 内面: 深白2.5 G Y R 1/1	口縁部 2/12		

No.	登録年	水系	川上遊場	場所	面積 (ha)	調査 (沿岸) の特徴	加工	施設	危険	地図	地図	備考	
238	2029-01	2	m 1 位合場	東部遊 合場	口桂	25.0	内: ロクヨウゾ 内: ロクヨウゾ	直	良	IKN4/0	口桂部	1/12	
239	2-031-08	2	c 2 6 桂木浦	東部遊 合場	高台付	4.8	内: ハクメイナード→赤切→輪付ナダ 内: ロクヨウゾ	~2.5mの巻 絞れむ	直	良	IKN4/0	高台部 完存	
240	2-031-03	2	c 2 6 桂木浦	東部遊 合場	高台付		内: ロクヨウゾ、ナダ→輪付ナダ 内: ロクヨウゾ	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	内面: 桂木10Y R4/1 内面: 桂木10.5Y 7/1		内面込みに工具痕 高台部連続的に打ち丸さ
241	2-036-02	2	q 1 0 位合場	東部遊 合場	高台付	13.1	内: ロクヨウゾ、ロクヨウゾ 内: ロクヨウゾ、ナダ、オサエ	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	IKN4/0	高台部	1/12
242	2-031-07	2	c 2 6 桂木浦	東部遊 合場	口桂	16.8	内: ロクヨウゾ 内: ロクヨウゾ	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	IKN4/1 IKN4/1	口桂部	4/12 直部
243	2-030-01	2	q 8 位合場	東部遊 合場	口桂	36.0	内: ハクメイナード→赤切→輪付ナダ 内: ナダ→ロクヨウゾ	~2.5mの巻 絞れむ	直	良	IKN5 Y7/1	口桂部	1/12
244	2-023-04	2	g 2 3 位合場	東部遊 合場	口桂	16.8	内: ハクメイナード→ロクヨウゾ 内: ロクヨウゾ	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	IKN4/0	口桂部	1/12
245	2-036-03	2	x 7 位合場	東部遊 合場	口桂	22.2	内: ハクメイナード、ロクヨウゾ 内: ロクヨウゾ	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	IKN5 Y7/1	口桂部	3/12
246	2-032-04	2	黄土灘	東部遊 合場	口桂	24.0	内: ロクヨウゾ→ロクヨウゾ 内: ロクヨウゾ→ヨコナダ	~2.5mの巻 絞れむ	直	良	IKN5 Y7/1	口桂部 小舟	
247	2-026-01	2	f 2 1 位合場	東部遊 合場	高台付		内: ロクヨウゾ 内: ロクヨウゾ	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	内面: IKN4/0 内面: IKN4/7	高台部	内面にヘラ記号
248	2-029-03	2	黄土灘	東部遊 合場	高台付	7.0	内: ロクヨウゾ、ロクヨウゾ 内: ロクヨウゾ	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	IKN4/0 IKN4/7	高台部	7/12
249	2-037-04	2	x 7 位合場	東部遊 合場	口桂	13.4	内: ロクヨウゾ 内: ロクヨウゾ	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	IKN4/0	口桂部	3/12 直部
250	2-031-06	2	c 2 6 桂木浦	東部遊 合場	高台付	16.8	内: ロクヨウゾ、ナダ→輪付ナダ 内: ロクヨウゾ	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	IKN4/0	高台部	3/12
251	2-031-04	2	芦之 岸(前川原 (水道壁付近))	東部遊 合場	高台付	9.0	内: ロクヨウゾ→赤切ケリ→輪付ナダ 内: ロクヨウゾ	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	IKN5 Y7/1	高台部	8/12
252	2-031-06	2	f 2 2 桂木浦	東部遊 合場	高台付	13.2	内: ロクヨウゾ、ナダ→輪付ナダ 内: ロクヨウゾ	~2.5mの巻 絞れむ	直	良	IKN5 Y7/1	口桂部	3/12
253	2-022-02	2	d 2 2 位合場	東部遊 合場	高台付	8.8	内: ロクヨウゾ→輪付ナダ 内: ロクヨウゾ	~1.5mの巻 絞れむ含む	直	良	IKN5/0 IKN7/0	高台部	2/12
254	2-029-02	2	黄土灘	東部遊 合場	口桂	16.0	内: ロクヨウゾ→ハシリカ→輪付ナダ 内: ロクヨウゾ→一定方向で	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	IKN4/0	口桂部 高台部	3/12
255	2-025-06	2	k 1 3 位合場	東部遊 合場	高台付	11.3	内: ロクヨウゾ、ロクヨウゾ→輪付ナダ 内: ロクヨウゾ	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	IKN5 Y7/1	高台部	11/12
256	2-024-07	2	e 2 1 位合場	東部遊 合場	口桂	26.9	内: ロクヨウゾ 内: ロクヨウゾ	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	IKN5 Y7/1	口桂部	1/12
257	2-032-05	2	x 9 位合場	土浦遊 合場	高台付	4.2	内: ハクメイナード、ナダ 内: ナダ	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	西奥側10Y R4/4 直面: 桂5 Y R7/6	脚形柱	9/12
258	2-024-03	2	l 1 4 位合場	土浦遊 合場	口桂	12.1	内: ハクメイナード→ロクヨウゾ 内: ハクメイナード	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	IKN5 Y7/1	口桂部	1/12
259	2-028-05	2	南岸 黄土灘	土浦遊 合場	口桂	18.0	内: ナダ→ナダ→ヨコナダ 内: ナダ→ナダ	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	西奥側10Y R8/3	口桂部	9/12
260	2-064-01	2	d 2 1 位合場	土浦遊 合場	口桂	9.8	内: ナダ→ロクヨウゾ 内: ナダ→ロクヨウゾ	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	IKN5 Y7/2	口桂部	3/12
261	2-037-07	2	x 7 位合場	土浦遊 合場	口桂	16.6	内: ナダ→ロクヨウゾ 内: ナダ、暗云ヨコナダ	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	に近い脚5 Y R6/4	口桂部	1/12 内面状況写真
262	2-032-02	2	r 7 位合場	土浦遊 合場	口桂	18.0	内: ハクメイナード、ヨコナダ 内: 暗云、ヨコナダ	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	脚5 Y R6/6	口桂部	2/12
263	2-037-08	2	x 8 位合場	土浦遊 合場	口桂	19.0	内: ナダ→ロクヨウゾ 内: ナダ、暗云→ヨコナダ	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	に近い脚5 Y R5/3	口桂部	3/12 内面状況写真 (書込あり)
264	2-038-02	2	r 6 位合場	土浦遊 合場	口桂	13.9	内: ガキ 内: ガキ	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	西面: IKN5 Y7/6/2 内面: 桂5 Y R7/3	口桂部	2/12 内面状況写真 槍形付帯
265	2-037-05	2	x 7 位合場	土浦遊 合場	口桂	15.0	内: ナダ→ロクヨウゾ 内: ナダ	~0.5mの巻 絞れむ	直	良	に近い脚5 Y R6/6	口桂部	2/12 整理のため調整不明確
266	2-032-03	2	r 7 位合場	土浦遊 合場	口桂	17.9	内: ナダ→ロクヨウゾ 内: ナダ→ロクヨウゾ	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	に近い脚5 Y R6/6	口桂部	1/12
267	2-028-05	2	c 1 9 位合場	土浦遊 合場	口桂	15.6	内: ナダ→ロクヨウゾ 内: ナダ→ロクヨウゾ	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	に近い脚5 Y R7/2	口桂部	1/12
268	2-023-03	2	w 2 3 位合場	土浦遊 合場	口桂	20.0	内: ハクメイナード→ヨコナダ 内: ハクメイナード	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	西面: 桂2.5 Y R7/2 内面: 桂5 Y R7/2	口桂部	1/12
269	2-027-04	2	x 9 桂木浦	土浦遊 合場	高台付	15.0	内: ハクメイナード→輪付ナダ 内: ハクメイナード	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	脚5 Y R7/2	高台部	以下
270	2-064-05	2	x 5 位合場	土浦遊 合場	口桂	12.0	内: ハクメイナード→ロクヨウゾ 内: ハクメイナード→ヨコナダ	~2.5mの巻 絞れむ	直	良	西面: 桂奥側10Y R8/2 内面: 桂5 Y R7/2	口桂部	2/12
271	2-038-06	2	g 2 1 桂木浦	土浦遊 合場	口桂	7.2	内: ナダ、オサエ→ヨコナダ 内: ナダ→ヨコナダ	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	西面: 桂奥側10Y R7/2 内面: 桂5 Y R7/4	口桂部	2/12
272	2-031-01	2	m 1 1 位合場	土浦遊 合場	口桂	18.6	内: ハクメイナード→輪付ナダ 内: ハクメイナード	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	西面: 桂10Y R8/2	口桂部	1/12
273	2-027-02	2	n 1 3 位合場	土浦遊 合場	口桂	23.4	内: ロクヨウゾ→ヨコナダ 内: ハクメイナード	~2.5mの巻 絞れむ	直	良	西面: 桂10Y R7/3 内面: 桂5 Y R6/2	口桂部	1/12 内面に炭化物付帯
274	2-034-04	2	u 5 位合場	土浦遊 合場	口桂	14.3	内: ロクヨウゾ 内: ロクヨウゾ	~2.5mの巻 絞れむ	直	良	西面: 桂10Y R7/3 内面: 桂5 Y R6/3	口桂部	1/12 口桂部外側面付帯
275	2-021-04	2	d 1 9 位合場	土浦遊 合場	口桂	16.0	内: ハクメイナード→ヨコナダ 内: ハクメイナード	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	西面: 桂10Y R8/2 内面: 桂5 Y 5/6	口桂部	2/12 口桂部外側面付帯
276	2-021-07	2	c 2 1 位合場	土浦遊 合場	口桂	15.6	内: ハクメイナード 内: ハクメイナード	~2.5mの小 巻	直	良	西面: 桂10Y R8/4 内面: 桂5 Y R7/4	口桂部	4/12 口桂部外側面付帯
277	2-038-03	2	x 8 位合場	土浦遊 合場	口桂	30.0	内: ハクメイナード→ヨコナダ 内: ハクメイナード、ヨコナダ	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	西面: 桂10Y R8/2	口桂部	2/12 傷害番号87と同一
278	2-030-02	2	x 8 位合場	土浦遊 合場	口桂	30.0	内: ハクメイナード→ヨコナダ 内: ハクメイナード、ヨコナダ	~1.5mの巻 絞れむ	直	良	西面: 桂10Y R8/3	口桂部	1/12

No.	等級%	名前	川上標高	距離	計量 (m)	測量 (找出) の特徴	断士	地盤	地盤	地盤	等号
279	2-028-05	2	j 1.5 鉢木瀬	土被器 鉢	口様	22.0	内: ロクナダ→ロコナダ 外: ナダ→ロコナダ	やや粘 ~2.5mmの砂 含む	内面: に凸・黄緑10YR 3/3 外面: 棕褐色5/3	白羅部 1/1 満潮のため調査不明確	
280	2-027-01	2	n 1.2 包合瀬	土被器 鉢形土被			内: ハメ、ナダ 外: ナダ→オサズ、ハメ	やや粘 ~3.0mmの砂 含む	西黄緑7.5Y R 8/3	把手付近体感 月	
281	2-037-06	2	j 1.4 鉢木瀬	土被器 鉢	高台様	7.8	内: ロクナダ→盆付ナダ 外: ロコナダ	密	良 オリーブ灰10Y 5/2	高台部 1/12 内外面輪廻	
282	2-037-03	2	w 2 包合瀬	土被器 鉢	高台様	7.4	内: ロクナダ→盆付ナダ 外: ロコナダ	密	良 白灰5GY R 8/1	高台部 5/12 内外面輪廻	
283	2-021-05	2	e 2.0 包合瀬	土被器 鉢	高台様	7.1	内: ロクナダ→一条切→盆付ナダ 外: ロコナダ	細 ~1.5mmの砂 含む	良 白石NT/0	高台部 は正作付	内面込みに墨付・研磨痕
284	2-021-01	2	d 1.9 包合瀬	土被器 鉢	高台様	9.0	内: ロクナダ→盆付ナダ 外: ロコナダ	密	良 白石2SY T/1	高台部 4/12 内面研磨なし	
285	2-025-03	2	j 1.3 鉢木瀬	土被器 鉢	高台様	7.8	内: ロクナダ→一条切→盆付ナダ 外: ロコナダ	やや粘 ~1.5mmの砂 含む	良 白石2SY R 8/1	高台部 8/12 黒粒	
286	2-021-02	2	c 1.9 包合瀬	土被器 鉢	高台様	8.0	内: ロクナダ→盆付ナダ 外: ロコナダ	密 ~1.5mmの砂 含む	良 白石NT/0	高台部 2/12	
287	2-022-06	2	k 2.3 包合瀬	土被器 鉢	高台様	7.7	内: ロクナダ→一条切→盆付ナダ 外: ロコナダ	密 ~1.5mmの砂 含む	良 白石N/0 輪廻: 深オリーブ7.5Y R 6/2	高台部 5/12 時はハケ張り	
288	2-063-05	2	黄土廻所	土被器 鉢		7.6	内: ロクナダ→一条切→盆付ナダ 外: ロコナダ	密	良 白石5Y R 1/1	高台部 6/12	
289	2-025-01	2	k 2.0 包合瀬	土被器 鉢	高台様	7.7	内: ロクナダ→盆付ナダ 外: ロコナダ	密	良 白石5Y T/1	高台部 6/12 黒粒	
290	2-025-02	2	e 2.2 包合瀬	土被器 鉢	高台様	7.4	内: ロクナダ→一条切→盆付ナダ 外: ロコナダ	やや密 ~1.5mmの砂 含む	良 白石YT/1	高台部 6/12	
291	2-021-06	2	d 2.1 包合瀬	土被器 鉢	高台様	7.3	内: ロクナダ→一条切→盆付ナダ 外: ロコナダ	密 ~1.5mmの砂 含む	良 白石NT/0	高台部 6/12	
292	2-025-04	2	b 2.0 包合瀬	土被器 鉢	高台様	9.0	内: ロコナダ、クロコケツリ→盆付ナダ 外: ロコナダ	密 ~3.0mmの砂 含む	良 白石N/0	高台部 3/12	
293	2-031-02	2	e 2.2 包合瀬	土被器 鉢	高台様 高行側	15.9 4.4 8.5	内: ロクナダ→一条切→盆付ナダ 外: ロコナダ	やや密 ~3.0mmの砂 含む	内: 白石5GY R 8/1 外: 白石5Y T/1	白羅部 4/12 高台部 6/12	
294	2-029-04	2	黄土廻所	土被器 鉢	高台様	T.0-7.1	内: ロクナダ→一条切→盆付ナダ 外: ロコナダ、ナダ	密	良 白石N/0	高台部 9/12	
295	2-025-05	2	f 2.2 包合瀬	土被器 鉢	高台様	7.0	内: ロクナダ→ロコナダ→盆付ナダ 外: ロコナダ	密 ~2.5mmの砂 含む	良 白石10Y R 6/1 内: 白石N/0	高台部 2/12 黒粒	
296	2-024-05	2	d 2.2 包合瀬	泥土	口様	16.0	内: ナダ→ロコナダ 外: ナダ→コナダ	密 ~1.5mmの砂 含む	良 白石SY R 8/2 内: 白石N/0	口羅部 1/12 内黒	
297	2-022-04	2	d 2.1 包合瀬	土被器 鉢	高台様	4.1	内: 黄切 外: ナダ	密	良 白石LS Y R 8/2	高台部 は正作付	状況高台
298	2-021-03	2	d 1.9 包合瀬	土被器 鉢	口様 崩崩	10.6 1.65	内: ロクナダ→一条切 外: ロコナダ	密 ~1.5mmの砂 含む	良 白石SY R 8/1	口羅部 3/12	
299	2-032-07	2	北区 黄土廻所	土被器 鉢	直様	6.4	内: ロクナダ→一条切 外: ナダ	密 ~1.5mmの砂 含む	良 白石10Y R 8/2	直	
300	2-038-05	2	v 5 包合瀬	土被器 小鉢	口様	18.2	内: ナダ→ナダ→ロコナダ 外: ナダ→ナダ→ロコナダ	やや密 ~1.5mmの砂 含む	西黄緑7.5Y R 8/3	口羅部 2/12 での字面	
301	2-022-03	2	d 2.3 包合瀬	土被器 鉢	口様	11.4	内: ナダエ→ナダ 外: ナダ	密	良 白石2SY R 8/2	口羅部 1/12 伊勢美系	
302	2-024-04	2	m 1.2 包合瀬	土被器 鉢	口様	12.2	内: ナダ 外: ナダ	密 ~1.5mmの砂 含む	内: 白石2SY R 8/2 外: 白石5Y R 1/1	口羅部 2/12 伊勢美系	
303	2-023-01	2	d 2.3 包合瀬	土被器 鉢	口様	38.0	内: ロクナダ→ロコナダ 外: ロコナダ	密	内: 茶葉10Y R 5/2 外: 白石2SY R 8/2	口羅部 1/12 伊勢美系、第2段階e	
304	2-024-06	2	c 2.3 包合瀬	瓦	口様	15.0	内: ナダ→ロコナダ 外: ナダ→ロコナダ	やや密 ~2.5mmの砂 含む	良 N/0	口羅部 1/12 火灼痕	
305	2-033-01	2	k 1.0 包合瀬	陶器 小皿	口様 崩崩	8.0 2.0	内: ロコナダ→ヘラ切り 外: ロコナダ	やや密 ~3.0mmの砂 含む	良 白石5Y T/1	口羅部 3/12 直(多・難波) 直(多・難波)	
306	2-032-02	2	e 2.2 包合瀬	陶器 小皿	口様 崩崩	9.2 1.7 5.5	内: ロコナダ→一条切 外: ロコナダ	密 ~3.0mmの砂 含む	良 白石5Y T/1	口羅部 2/12 直(多・難波) 直(多・難波)	
307	2-023-02	2	d 2.2 包合瀬	陶器 小皿	高台様	5.4	内: ロクナダ→一条切→盆付ナダ 外: ロコナダ	密	内: 白石5V T/1 外: 白石5Y R 1/1	直(多) 直(多)、廻所 内: 白石5Y R 1/1	
308	2-063-04	2	北区 黄土廻所	陶器 鉢	高台様	7.3	内: ロクナダ→一条切→盆付ナダ 外: ロコナダ	密 ~1.5mmの砂 含む	良 白石SY T/1	直(多) 直(多)、廻所 内: 白石5Y R 1/1	直(多) 完成
309	2-033-03	2	北区 黄土廻所	陶器 鉢	高台様	8.3	内: ロクナダ→一条切→盆付ナダ 外: ロコナダ	密 ~1.5mmの砂 含む	良 白石5Y T/1	直(多) 直(多)、小皿 内面白作付	
310	2-033-05	2	c 2.6 土被器	陶器 鉢	高台様	7.6	内: ロクナダ→一条切→盆付ナダ 外: ロコナダ	やや密 ~2.5mmの砂 含む	良 白石5Y T/1	直(多) 直(多)、廻所 内: 白石5Y R 1/1	直(多)、廻所 直(多)、自然船 モリツラ、モリタカヒ
311	2-022-05	2	d 2.2 包合瀬	陶器 鉢	高台様	7.2	内: ロクナダ→盆付ナダ 外: ロコナダ	密 ~0.5mmの砂 含む	良 白石NT/0	直(多) 直(多)、自然船 モリツラ、モリタカヒ	
312	2-033-04	2	c 2.3 包合瀬	陶器 鉢	高台様	6.2	内: ロクナダ→一条切→盆付ナダ 外: ロコナダ	密	内: 白石5Y T/1 外: 白石5Y R 1/1	直(多) 直(多)、廻所 内面見え込み化粧物付	
313	2-022-01	2	d 2.2 包合瀬	陶器 鉢	高台様	7.8	内: ロクナダ→一条切→盆付ナダ 外: ロコナダ	密	良 白石NT/0	直(多) 直(多)、自然船 モリツラ、モリタカヒ	
314	2-034-03	2	d 2.2 土被器	陶器 鉢	高台様	5.7	内: ロクナダ→一条切→盆付ナダ 外: ロコナダ	密 ~2.5mmの砂 含む	良 白石5Y T/1	直(多) 直(多)、廻所 直(多)、自然船 モリツラ、モリタカヒ	
315	2-033-07	2	m 9 鉢木瀬	陶器 鉢	高台様	5.5	内: ロクナダ→一条切→盆付ナダ 外: ロコナダ	やや密 ~3.0mmの砂 含む	良 白石5Y T/1	直(多) 直(多)、廻所 直(多)、自然船 モリツラ、モリタカヒ	
316	2-063-05	2	c 2.3 包合瀬	陶器 鉢	高台様	6.6	内: ロクナダ→一条切→盆付ナダ 外: ロコナダ	密 ~1.5mmの砂 含む	良 白石NT/0 内面: 白石N/0 内面: 白石N/0	直(多) 直(多)、廻所 直(多)、自然船 モリツラ、モリタカヒ	
317	2-033-08	2	d 2.3 包合瀬	陶器 鉢		内: ロクナダ→一条切→盆付ナダ 外: ロコナダ→オサズ、ナダ	密 ~1.5mmの砂 含む	良 白石2SY T/1	直(多) 直(多)、廻所 直(多)、自然船		
318	2-034-01	2	e 2.4 包合瀬	陶器 鉢		内: ロクナダ→一条切→盆付ナダ 外: ロコナダ	密 ~1.5mmの砂 含む	良 白石2SY T/1	直(多) 直(多)、廻所 直(多)、自然船		
319	2-034-02	2	j 1.0 鉢木瀬	陶器 鉢	口様 崩崩	13.3 5.1 5.5	内: ロクナダ→盆付ナダ 外: ロコナダ	密 ~3.0mmの砂 含む	内: 白石2.5SY T/1 外: 白石N/0	直(多) 直(多)、モリツラ 直(多)、自然船	

品目	規格	原種	出荷(± m)	特質(注記)の特徴	生长期	熟成	色調	用法	備考	
220-0-025-01	2 C 2 種 包装袋	西高麗 韓國	口桂	34.2 内: ロクロゲザ、ロクロケツリ 外: ロクロゲザ	~5mmの部分 が剥離する	直	真白/NW	口羅部 5/12	新鮮・酸性	
221-0-020-03	3 T 3.4 SD 13.4	土高麗 台付種	台桂	8.9 内: ハナメニオサニ-ヨコナヅ 外: ナ-ダ-オサニ-ヨコナヅ	~3mmの部分 が剥離する	直	糞黃鳴10Y R/L2 内: 糞黃鳴10Y R/T2	台部 完熟 外面剥離村		
222-0-020-03	3 Q 1.0 SD 13.4	生毛芋 芋	直桂	3.4 内: ナ-ダ-オサニ- 外: ナ-ダ-オサニ	~4mmの部分 が剥離する	直	糞黃鳴10Y R/L2 内: 糞黃鳴10Y R/L4	直部 直部 3/12		
223-0-023-01	3 W 2.5 SD 14.8	土高麗 台付種	口桂	13.4 内: ハナメニヨコナヅ 外: ナ-ダ-ヨコナヅ	直	糞黃鳴10Y R/L2 内: ナ-ダ-ヨコナヅ	口羅部 2/12	S字茎C瓶		
224-0-023-04	3 X 2.6 SD 14.8	土高麗 台付種	台桂	9.0 内: ハナメニヨコナヅ 外: ナ-ダ-ヨコナヅ	直	糞黃鳴10Y R/L2 内: ナ-ダ-ヨコナヅ	台部 6/12			
225-0-020-04	3 X 2.6 SD 14.8	土高麗 台付種	台桂	9.7 内: ナ-ダ-オサニ- 外: ナ-ダ-オサニ	~3mmの部分 が剥離する	直	糞黃鳴10Y R/L2 内: ナ-ダ-オサニ	直部 6/12		
226-0-020-05	3 X 2.6 SD 14.8 1.4.9	土高麗 根	角桂	角 内: ハナメニヨコナヅ 外: ナ-ダ-ヨコナヅ	~2mmの部分 が剥離する	直	糞黃鳴10Y R/L2 内: ナ-ダ-ヨコナヅ	口羅部 小片		
227-0-009-04	3 R 1.3 SK 1.7.0	銀杏樹 枝条	口桂	12.4 内: ナ-ダ-ヨコナヅ 外: ナ-ダ-ヨコナヅ	~1.0mmの部分 が剥離する	直	HN/N/0	口羅部 3/12	生葉	3/12
228-0-010-04	3 R 1.4 SK 1.7.0	土高麗 台付種	解桂	9.2 内: オサニ- 外: ナ-ダ-ヨコナヅ	~1.0mmの部分 が剥離する	直	糞黃鳴5Y R/L2 内: 糞黃鳴5Y R/L3 外: 橙10Y R/L2	解桂部 5/12 剥落部		
229-0-010-05	3 R 1.3 SK 1.7.0	土高麗 根	口桂	32.0 内: ハナメニヨコナヅ 外: ナ-ダ-ヨコナヅ	~2.0mmの部分 が剥離する	直	糞黃鳴10Y R/L3 内: 橙10Y R/L2	口羅部 1/12		
230-0-019-04	3 Q 4.2 SK 1.3.8	土高麗 小形種	解桂大根	12.9 内: ナ-ダ-オサニ- 外: ナ-ダ-オサニ	~1.0mmの部分 が剥離する	直	糞黃鳴10Y R/L3	内外剥離膜		
231-0-021-03	3 O 4.1 SD 1.2.5	土高麗 根	口桂	15.3 内: カケヅチ-ヨコナヅ 外: ナ-ダ-ヨコナヅ	~3mmの部分 が剥離する	直	糞黃鳴5Y R/L2 内: 糞黃鳴5Y R/L3	口羅部 3/12	内外剥離膜	
232-0-021-06	3 Q 4.0 SD 1.2.8	土高麗 根	角桂	角 内: ヨコナヅ 外: ナ-ダ-ヨコナヅ	直	糞黃鳴5Y R/L2 内: 橙10Y R/L4	口羅部 小片 外面剥離			
233-0-022-01	3 V 2.9 SD 1.4.3	土高麗 小形種	口桂 頭高	10.9 内: ナ-ダ-ヨコナヅ 外: ナ-ダ-ヨコナヅ	~2.0mmの部分 が剥離する	直	糞黃鳴5Y R/L2 内: 橙10Y R/L4	口羅部 8/12		
234-0-022-02	3 S D 1.5.3 V 2.6	土高麗 根	口桂	12.6 内: ナ-ダ-ヨコナヅ 外: ナ-ダ-ヨコナヅ	直	糞黃鳴5Y R/L2 内: 橙10Y R/L4	口羅部 1/12 道産外表面有			
235-0-022-03	3 S D 1.5.3 V 2.6 %2	土高麗 根	頭高	12.6 内: ナ-ダ-オサニ-ヨコナヅ 外: ナ-ダ-ヨコナヅ	~3mmの部分 が剥離する	直	糞5 Y R/L2	口羅部 1/12		
236-0-020-03	3 Q 4.2 SK 1.3.2	土高麗 根	口桂	12.1 内: ナ-ダ-オサニ-ヨコナヅ 外: ナ-ダ-ヨコナヅ	~2.0mmの部分 が剥離する	直	糞黃鳴5Y R/L2 内: 橙10Y R/L4	口羅部 2/12		
237-0-019-04	3 Q 4.2 SK 1.3.2	土高麗 根	口桂	13.1 内: ナ-ダ-オサニ-ヨコナヅ 外: ナ-ダ-ヨコナヅ	~2.0mmの部分 が剥離する	直	糞黃鳴10Y R/L2	口羅部 2/12		
238-0-019-05	3 Q 4.2 SK 1.3.2	土高麗 根	口桂	17.1 内: ハナメニヨコナヅ 外: ハナメニヨコナヅ	直	糞黃鳴7.5Y R/L2 内: ハナメニヨコナヅ	やや青 糞黃鳴7.5Y R/L2 内: ハナメニヨコナヅ	口羅部 小片 外内剥離膜 口羅部 外表面村付		
239-0-019-05	3 Q 4.2 SK 1.3.2	土高麗 根	口桂	14.6 内: ナ-ダ-オサニ-ヨコナヅ 外: 不明	直	糞5 Y R/L2	口羅部 1/12 内内剥離膜			
240-0-019-02	3 Q 4.2 SK 1.3.2	土高麗 根	口桂	16.3 内: ハナメニヨコナヅ 外: ハナメニヨコナヅ	直	糞5 Y R/L2 内: ハナメニヨコナヅ	糞5 Y R/L2 内: 橙10Y R/L2	口羅部 4/12 内内化物村付 外表面膜		
241-0-019-03	3 Q 4.2 SK 1.3.2	銀杏樹 根	口桂	25.1 内: タクモカキタクモカキタクモロクロナヅ 外: タクモロクロナヅ	~1.0mmの部分 が剥離する	直	HN/N/0 HN/N/0	口羅部 1/12		
242-0-025-07	3 V 2.7 SD 1.4.6	土羅	肉桂 頭高	2.9 内: ナ-ダ-オサニ- 外: ナ-ダ-ヨコナヅ	直	糞5 Y R/L2	重量 2.98 g			
243-0-021-04	3 W 2.6 SD 1.4.6	土羅	頭高	4.8 内: ナ-ダ-オサニ- 外: ナ-ダ-ヨコナヅ	直	糞5 Y R/L2	重量 24.09 g			
244-0-016-02	3 V + W 2.6 SD 1.4.6	土羅	頭高	2.3 内: ナ-ダ-オサニ- 外: ナ-ダ-ヨコナヅ	直	糞5 Y R/L2 内: 橙10Y R/L2	重量 54 g			
245-0-024-05	3 W 2.6 SD 1.4.6	土羅	頭高	2.4 内: ナ-ダ-オサニ- 外: ナ-ダ-ヨコナヅ	直	糞5 Y R/L2 内: 橙10Y R/L2	重量 66.96 g			
246-0-015-04	3 W 3.3 SD 1.4.7 %1	土高麗 根	口桂	12.4 内: ナ-ダ-オサニ-ヨコナヅ 外: ナ-ダ-ヨコナヅ	~2.0mmの部分 が剥離する	直	糞黃鳴7.5Y R/L2	口羅部 9/12		
247-0-021-04	3 O 4.0 SD 1.2.7	土羅	肉桂 頭高	4.9 内: ナ-ダ-オサニ- 外: ナ-ダ-ヨコナヅ	直	糞5 Y R/L2 内: 橙10Y R/L2	重量 10.05 g			
248-0-021-05	3 O 4.0 SD 1.2.7	土羅	肉桂 頭高	2.0 内: ナ-ダ-オサニ- 外: ナ-ダ-ヨコナヅ	直	糞5 Y R/L2 内: 橙10Y R/L2	重量 25.41 g			
249-0-015-05	3 Y 3.1 SD 1.5.2	土高麗 根	口桂	13.1 内: ナ-ダ-オサニ-ヨコナヅ 外: ナ-ダ-ヨコナヅ	直	糞黃鳴7.5Y R/L2	口羅部 3/12			
250-0-013-02	3 a 2.6 SD 1.5.2	土高麗 根	口桂	11.3 内: オサニ- 外: ナ-ダ-ヨコナヅ	~1.0mmの部分 が剥離する	直	真白/NW	口羅部 4/12		
251-0-019-03	3 a 2.5 SD 1.5.2	土高麗 根	口桂	12.4 内: ナ-ダ-オサニ-ヨコナヅ 外: ナ-ダ-ヨコナヅ	~1.0mmの部分 が剥離する	直	糞5 Y R/L2	口羅部 2/12		
252-0-019-03	3 b 2.5 SD 1.5.2	瓦羅 根	高台桂	8.0 内: ナ-ダ-オサニナナ 外: ナ-ダ-高台桂	直	糞5 Y R/L2 内: 瓦羅NW/0	高台部 2/12			
253-0-026-06	3 Z 2.8 SD 1.5.2	土羅	肉桂 頭高	12.3 内: ナ-ダ-オサニ- 外: ナ-ダ-ヨコナヅ	直	糞5 Y R/L2	頭部-脚部-尾端尖端			
254-0-018-05	3 S D 1.5.2	火輪物 根	口桂	15.2 内: ロクロナ- 外: ロクロナ	~2.0mmの部分 が剥離する	直	真白/NW	口羅部 4/12		
255-0-017-03	3 S D 1.5.2	火輪物 根	口桂	13.3 内: ロクロナ- 外: ロクロナ	~2.0mmの部分 が剥離する	直	糞5 Y R/L2 内: 瓦羅NW/0	口羅部 7/12 内内剥離膜 直面部-直面部		
256-0-017-03	3 b 2.5 SD 1.5.2	火輪物 根	高台桂	7.7 内: ロクロナ- 外: ロクロナ	~2.0mmの部分 が剥離する	直	真白/NW	高台部 4/12 内内剥離膜 近面部-近面部		
257-0-013-02	3 Y 1.1 SD 1.5.2	火輪物 根	高台桂	8.2 内: ロクロナ- 外: ロクロナ	~1.0mmの部分 が剥離する	直	糞5 Y R/L2	高台部 4/12 内内剥離膜 葉と葉と葉		
258-0-008-01	3 S D 1.5.2	根質	根質	1.9 内: ロクロナ- 外: ロクロナ	直	糞5 Y R/L2	延葉實 重量 2.6 g			
259-0-016-03	3 X 3.1 SD 1.6.0	銀杏樹 根	生毛芋	2.5 内: ロクロナ- 外: ロクロナ	直	糞5 Y R/L2	糞に転化			
260-0-019-03	3 X 3.0 SD 1.5.6	銀杏樹 根	高台桂	3.3 内: ロクロナ- 外: ロクロナ	~2.0mmの部分 が剥離する	直	糞5 Y R/L2	糞部-自然根輪		

No.	測定番号	水質	川上測定	測定	目録番号 (x m)	測定 (注記) の特徴		測定	地図	地図番号	備考
						測定	地図				
418-3-031-02	3	P 4.3 p 1.4 残留 (S B 1.2 9)	土壌質土層 小品	口桂	10.4 1.8 5.8	内: ロクナダ→赤田 内: ロクナダ	~1.0mmの砂 粒が混在	西: 黄葉7.5YR R/4	白鷺部	3/12 4/12	白鷺部
419-3-031-01	3	p 1.1 4 残留 (S B 1.2 9)	土壌質 高粘	口桂	17.0	内: ロクナダ?	~1.0mmの砂 粒が混在	西: 白10YR R/2	口鶴部	2/12	内外面遮蔽
420-3-011-01	3	p 1.1 4 残留 (S B 1.2 9)	砾石								重量 L. 5kg 底質の砾石として転用
421-2-011-05	3	Q 4.1 p 1.6 残力	土壌質 高粘	口桂	15.4	内: ロクナダ 内: ロコナダ	~1.0mmの砂 粒が混在	西: 紫2.5Y R/6/4	口鶴部	4/12	
422-3-035-04	3	O 4.3 p 1.4 (S B 1.2 1)	緑植物 草	口桂	9.9	内: ロクナダ 内: ロクナダ?	~2.0mmの砂 粒が混在	良: 青紫2.5Y R/6/2 極点: 沖モーラスY S/2	口鶴部	4/12	
423-3-035-02	3	O 4.2 p 1.2 (S B 1.2 1)	灰植物 高粘	口桂	8.9	内: ロクナダ→赤田→輪ナダ 内: ロクナダ	~1.0mmの砂 粒が混在	西: 黄葉L.5YY/T/2	黄岱部	5/12	
424-3-031-06	3	O 4.3 p 1.5 残力	土壌質土層 小品	直桂	5.3	内: ロクナダ→赤田 内: ロクナダ	~1.0mmの砂 粒が混在	西: 赤10YR R/4	口鶴部	4/12	馬頭村付 青島海水
425-3-039-01	3	P 4.2 p 1.7 (S B 1.2 2)	土壌質 高粘	口桂	18.4	内: ハセヨロナダ 内: ハセヨロナダ?	~1.0mmの砂 粒が混在	西: 面に白7.5Y R/5/2 内面: に白1.5Y R/1/2	口鶴部	1/12 6/12	小井 内黒
426-3-039-05	3	O 4.3 p 1.9 (S B 1.2 2)	藻植物 高粘	口桂	5.8	内: ロクナダ→赤田 内: ロクナダ	~0.5mmの砂 粒が混在	西: 面に白7.5Y R/5/2 内面: に白1.5Y R/1/2	口鶴部	4/12	
427-3-034-05	3	p 1.1 9 (S B 1.2 9)	土壌質土層 直桂	口桂	5.4	内: ナガヨロナダ 内: ロクナダ	~0.5mmの砂 粒が混在	西: 面に白7.5Y R/5/2 内面: に白1.5Y R/1/2	口鶴部	4/12	
428-3-009-06	3	O 4.2 p 1.1 残力	土壌質土層 竹材直桂	口桂	5.4 4.8	内: ナガヨロナダ→輪ナダ		西: 面に白7.5Y R/5/2 内面: に白1.5Y R/1/2	口鶴部	4/12	
429-3-009-03	3	O 4.2 p 1.1 残力	灰植物 高粘	口桂	5.0 5.6 8.0	内: ロクナダ→赤田→輪ナダ 内: ロクナダ	~1.0mmの砂 粒が混在	西: 面に白7.5Y R/5/2 内面: に白1.5Y R/1/2	口鶴部	4/12	白鷺部 黄岱部
430-3-037-02	3	Q 4.1 p 1.1 (S B 1.2 9)	瓦植物			内: カキヨロナダ 内: ミガニヨロナダ		西: 白N/0	口鶴部	小井	
431-3-035-01	3	P 4.2 p 1.2 残力	陶器 小品	口桂	9.4 3.0 5.3	内: ロクナダ→赤田→輪ナダ 内: ハセヨロナダ	~2.0mmの砂 粒が混在	西: 白2.5YY/T/1	口鶴部	10/12 11/12	モジラ模 美竹部 完存 第4型式
432-3-033-01	3	P 4.2 p 1.3 残留 (S B 1.3 0)	灰植物 輪	口桂	15.4	内: ロクナダ→ヘラ切り→輪ナダ 内: ロクナダ	~3.0mmの砂 粒が混在	西: 面に白5YY/T/1 内面: 白C5.5YY/T/1	台面	7/12	
433-3-022-05	3	Q 3.1 包合物	叩き石	良S 良S 良S 良S 六種	7.8 7.4 3.6 3.6 0.8			西: 白5YY/T/6			重量 25kg
434-3-039-03	3	東区 表土層	土壤					西: 白5.22g			
35-3-014-04	3	W 3.0 トシナ	微生物 質			内: 廉成文・直成文・横状文 内: ナダ	~1.0mmの砂 粒が混在	西: 黄葉10YR R/6/2	事務所		
36-3-041-02	3	K 3.0 包装袋 質	微生物 質	直桂	7.5	内: 不明 内: ナダ		西: 紫2.5Y R/7/6	直桂	完存	外面遮蔽
37-3-042-01	3	R 3.0 包装袋 質	微生物 質	直桂 底桂 底桂 底桂	9.3 42.4	内: バギー・ナガ・オカサ 内: ナダ・オカサ、エナナ	~1.0mmの砂 粒が混在	西: 内面に白7.5Y R/7/2 内面: オリーブ2.5YY/T/1	直桂	完存	
38-3-040-01	3	P 4.2 下解剖層	土壌質 輪	口桂	23.0	内: ハセヨロナダ 内: ハセヨロナダ		西: 面に白7.5Y R/7/3 内面: 木炭7.5YY/T/1	口鶴部	3/12	
39-3-029-03	3	Q 4.1 下解剖層 第14	土壌質 竹材 直桂	口桂	15.7	内: ハセヨロナダ 内: ナガ・ナ・ナコロナダ		西: 内面に白7.5Y R/7/2 内面: 木炭7.5YY/T/1	口鶴部	完存	5字覆E面
440-3-029-02	3	Q 4.1 下解剖層 第13, 14	土壌質 竹材 直桂	口桂	8.0	内: カギニハヨリナ・キナ・ナダ 内: ナガ・ナ・ナ・ナ・ナ		西: 内面に白7.5Y R/7/2 内面: 木炭7.5YY/T/1	台面	完存	
441-3-034-03	3	北区 下解剖層	裏庭 底桂	口桂	9.0	内: ロクナダ→ロクナダ→ヘラ切り 内: ロクナダ	~1.0mmの砂 粒が混在	西: 白5YY/T/1	口鶴部	1/12	
442-3-038-03	3	O 4.1 包合物	裏庭 底桂	口桂	8.1	内: ロクナダ→底桂		西: 白5YY/T/6	口鶴部	1/12	内面自然熱
443-3-032-01	3	R 4.0 包装袋 質第3	裏庭 底桂	口桂 脚脚	11.2 5.0	内: ロクナダ→ロクナダ→輪ナダ 内: ロクナダ	~1.0mmの砂 粒が混在	西: 白N/1/0	口鶴部	8/12	
444-3-031-06	3	R 4.0 包装袋 質第3	裏庭 底桂	口桂	12.5	内: ロクナダ→ロクナダ 内: ロクナダ	~1.0mmの砂 粒が混在	西: 白N/1/0	口鶴部	11/12	
445-3-028-02	3	Q 3.1 包合物	裏庭 底桂	口桂 脚脚	13.9 4.8	内: ロクナダ→ロクナダ→ヘラ切り 内: ロクナダ		西: 白5YY/T/1	口鶴部	8/12	
446-3-041-01	3	Q 3.1 下解剖層 第6	裏庭 底桂	口桂		内: ロクナダ→ロクナダ 内: ロクナダ	~2.0mmの砂 粒が混在	西: N/4N/0	小片	外側にヘフ記号	
447-3-033-03	3	Q 3.1 下解剖層	裏庭 底桂	口桂	12.0	内: ロクナダ→ロクナダ 内: ロクナダ	~3.0mmの砂 粒が混在	西: 内面: 白2.5YY/R/4/2 内面: 白N/5/0	口鶴部	6/12	
448-3-027-04	3	Q 3.1 合壁 底桂	裏庭 底桂	口桂	11.5 4.1 1.5	内: ロクナダ→ロクナダ→ヘラ切り 内: ロクナダ		西: 内面: 白N/5/0 内面: 白N/5/0	口鶴部	6/12	
449-3-009-03	3	T 2.8 北壁 底桂 第1	裏庭 底桂	口桂	11.0 3.6 12.7	内: ロクナダ→ロクナダ→ヘラ切り 内: ロクナダ	~1.0mmの砂 粒が混在	西: 白N/7/0	口鶴部	6/12	外側にかぶり
450-3-026-07	3	W 2.8 合壁	裏庭 底桂	脚脚	10.5	内: ロクナダ→ロクナダ 内: ロクナダ		西: 内面: 白N/1/0 内面: 白C7.5YY/T/1	脚脚部	2/12	
451-3-026-06	3	Q 4.2 下解剖層	裏庭 底桂	直桂	6.0	内: ロクナダ→ロクナダ→ヘラ切り 内: ロクナダ		西: 内面: 白2.5YY/T/1 内面: 白C5.5YY/T/1	直桂	6/12	蓋の可能性あり
452-3-033-05	3	北区 下解剖層	裏庭 底桂	脚脚	10.5	内: ロクナダ→ロクナダ→ヘラ切り 内: ロクナダ	~3.0mmの砂 粒が混在	西: 白5YY/T/1 内面: 白C5.5YY/T/1	直桂	6/12	外側自然熱
453-3-033-02	3	北区 下解剖層	裏庭 底桂	口桂	19.0	内: ロクナダ→ロクナダ→ヘラ切り 内: ロクナダ	~2.0mmの砂 粒が混在	西: 白5YY/T/1	口鶴部	5/12	
454-3-035-03	3	Q 4.2 包合物	裏庭 底桂	口桂	17.5	内: ロクナダ→ヘラ切り 内: ロクナダ	~1.0mmの砂 粒が混在	西: 白5YY/T/1 内面: 白C5.5YY/T/1	口鶴部	1/12 2/12	
455-3-030-01	3	北区 下解剖層	裏庭 底桂	口桂	16.8 11.4	内: ロクナダ→ヘラ切り→輪ナダ 内: ロクナダ		西: 白5YY/T/1 内面: 白C5.5YY/T/1	口鶴部	2/12	
456-3-038-04	3	北区 表土層	裏庭 底桂	直桂	13.2	内: ロクナダ→赤田→輪ナダ 内: ロクナダ		西: 白5YY/T/1	直桂部	3/12	内面自然熱 みみれ
457-3-038-02	3	R 4.3 鉛水銀	裏庭 底桂	口桂	13.6 6.7	内: ロクナダ→赤田→輪ナダ 内: ロクナダ		西: 白2.5YY/R/6/1 内面: 白C4.5YY/R/6/1	口鶴部	2/12	内面自然熱
458-3-014-03	3	* 2.3 西壁	裏庭 底桂			内: ロクナダ→波状文・凹面 内: ロクナダ		西: 白N/5/0	口鶴部	1/12	

No.	登録年月	台数	直上地	目深(cm)	調査(抜き)の特徴	出土	出土	色調	保存度	備考		
459	3-023-05	3	北区 下層位生層	製塩土層	内: オサニ・ナヅ 内: ナヅ	~3.5cmの砂 砂粒混在	遺5 YR6/6	休耕 小井 志摩式				
460	3-023-07	3	北区 下層位生層	製塩土層	内: オサニ・ナヅ 内: ナヅ	~3.5cmの砂 砂粒混在	遺2.5 YR6/6	口耕部 小井 志摩式				
461	3-026-03	3	U3.0 包装層	製塩土層	内: オサニ・ナヅ 内: ナヅ・オサニ	~3.5cmの砂 砂粒混在	遺5 YR6/6	小片 志摩式				
462	3-023-08	3	北区 下層位生層	製塩土層	内: オサニ・ナヅ 内: ナヅ	~2.0cmの砂 砂粒混在	遺5 YR6/6	休耕 小井 志摩式				
463	3-037-05	3	R 4.0 包装層	土御器 小品	口耕	11.2	内: ヨコナヂ 内: ヨコナヂ	~1.5cmの砂 砂粒混在	外面: に点状・黄褐色YR6/2 内面: に点状・黄褐色YR6/2	口耕部 1/12 ての玉造		
464	3-034-03	3	R 4.1 包装層 第2	土御器 灰木	口耕 耕高	12.8 3.0	内: タモチケズリ→ナゾ→ヨコナヂ 内: オサニ・ナヅ→ヨコナヂ	~2.0cmの砂 砂粒混在	遺5 YR7/6	口耕部 6/12		
465	3-034-02	3	R 4.1 包装層 第2	土御器 灰木	口耕 耕高	15.6 3.95	内: ケズリ→ナゾ→ヨコナヂ 内: 灰文、ヨコナヂ	~2.0cmの砂 砂粒混在	遺7.5 YR7/6	口耕部 3/12 内面剥着付		
466	3-034-01	3	R 4.1 包装層	土御器 灰木	口耕 耕高	15.5 4.6	内: ハラクズリ→ヨコナヂ 内: 灰文、ヨコナヂ	~5.0cmの砂 砂粒混在	外面: に点状・黄褐色YR6/4 内面: に点状・黄褐色YR6/4	口耕部 1/12		
467	3-035-06	3	R 4.1 包装層 第2	土御器 灰木	口耕 耕高	13.9 3.45	内: オサニ・ナゾ→ヨコナヂ 内: ナゾ→ヨコナヂ	~4.0cmの砂 砂粒混在	外面: に点状・黄褐色YR6/4 内面: に点状・黄褐色YR6/3	口耕部 3/12		
468	3-037-01	3	Q 4.0 包装層	土御器 灰木	口耕	13.1	内: ケズリ・ナゾ→ヨコナヂ 内: ケズリ→ヨコナヂ	~1.5cmの砂 砂粒混在	遺5 YR6/6	口耕部 2/12		
469	3-035-05	3	N 4.4 包装層	土御器 灰木	口耕 耕高	14.2 3.45	内: オサニ・ナゾ→ヨコナヂ 内: ナゾ→ヨコナヂ	~2.0cmの砂 砂粒混在	外面: に点状・黄褐色YR7/3 内面: に点状・黄褐色YR7/3	口耕部 5/12		
470	3-037-03	3	O 4.2 包装層 第1	土御器 灰木	口耕	14.97	内: ケズリ→ヨコナヂ 内: ナゾ→ヨコナヂ	~1.5cmの砂 砂粒混在	遺5 YR7/6	口耕部 1/12 口耕不要		
471	3-026-04	3	V 2.9 包装層	土御器 灰木	耕高	2.4	内: ケズリ・オサニ→ナゾ 内: オサニ・オサニ→ナゾ	~2.0cmの砂 砂粒混在	遺7.5 YR7/6	口耕部 小井 内外剥離		
472	3-032-02	3	R 4.1 下層位生層	土御器 灰木	口耕	13.2	内: オサニ・ナゾ→ヨコナヂ 内: オサニ→ヨコナヂ	~5.0cmの砂 砂粒混在	遺7.5 YR7/6	口耕部 2/12 内外剥離		
473	3-022-06	3	北区 下層位生層	土御器 灰木	口耕	12.0	内: オサニ→ヨコナヂ	遺	外面: 混褐色YR6/4 内面: 黄褐色YR7/4	口耕部 3/12 内面理化		
474	3-014-01	3	南区 包装	土御器 灰木	口耕	20.0	内: ナゾ→ヨコナヂ 内: 灰文→ヨコナヂ	~1.5cmの砂 砂粒混在	明赤褐色5 YR6/6	口耕部 2/12 内面化物付着		
475	3-026-05	3	Q 4.0 下層位生層	土御器 灰木	口耕		内: ケズリ・ナゾ→ヨコナヂ 内: オサニ→ヨコナヂ	~1.5cmの砂 砂粒混在	に点状・黄褐色YR7/4	小片		
476	3-026-02	3	V 2.7 包装層	黑色土器 陶	口耕	14.2	内: オサニ・黒土器→ヨコナヂ 内: オサニ→ヨコナヂ	遺	外面: 浅褐色YR6/4 内面: 混褐色5 YR6/3	口耕部 2/12 内黑		
477	3-010-06	3	a 2.6 包装層 第1	土御器 灰木	口耕		内: 面取ナゾ、ナゾ 内: ナゾ	遺	面取7.5 YR8/4	断面片		
478	3-039-04	3	P 4.2 包装層	土御器 傳	口耕 耕高混	12.3 11.0	内: ケズリ→ヨコナヂ 内: ナゾ→ヨコナヂ	遺	外面: 混褐色YR7/6 内面: に点状・黄褐色YR7/3	口耕部 4/12 耕高 5/12		
479	3-032-03	3	Q 3.1 包装層	土御器 傳	口耕	12.4	内: ケズリ 内: ナゾ・ケズリ→ヨコナヂ	~2.0cmの砂 砂粒混在	遺7.5 YR8/2	口耕部 2/12 内外剥離激しい		
480	3-032-02	3	R 4.2 包装層 第4	土御器 傳	口耕	12.9	内: ケズメヨリナゾナヂ 内: ナゾ→ヨコナヂ	~2.0cmの砂 砂粒混在	遺	外面: に点状・黄褐色YR7/4 内面: 浅褐色YR6/3	口耕部 2/12 内外剥離	
481	3-027-01	3	R 4.2 下層位生層	土御器 傳	口耕 耕高	11.6	内: ケズメヨリナゾナヂ 内: ケズリ→ヨコナヂ	~2.0cmの砂 砂粒混在	浅黄褐色10 YR4/4	口耕部 4/12 黑斑		
482	3-027-03	3	R 4.2 下層位生層	土御器 傳	口耕	12.6	内: ケズメヨリナゾナヂ 内: ケズリ・ケズメヨリナゾナヂ	やや黒	に点状・黄褐色YR7/4	口耕部 5/12		
483	3-040-02	3	南区 土器陶器	土御器 傳	口耕 耕高混	14.5	内: ケズメヨリナゾナヂ 内: ハタケ→ヨコナヂ→ヨコナヂ	~2.0cmの砂 砂粒混在	外面: に点状・黄褐色YR7/4 内面: に点状・黄褐色10 YR7/3	口耕部 1/12 耕高混		
484	3-027-02	3	H 3.9 下層位生層 第15	土御器 傳	口耕	16.2	内: ハタケ→ヨリナゾナヂ 内: オサニ・黒土器→ヨコナヂ	やや黒	に点状・黄褐色YR7/6	口耕部 3/12		
485	3-036-02	3	Q 4.2 包装層	土御器 傳	口耕	29.5	内: ハタケ→ヨリナゾナヂ 内: ハタケ→ヨリナゾナヂ	~2.0cmの砂 砂粒混在	外面: に点状・黄褐色YR7/3 内面: に点状・黄褐色YR7/2	口耕部 2/12		
486	3-028-01	3	W 2.9 包装層	土御器 傳	口耕	24.2	内: ケズメヨリナゾナヂ 内: ハタケ→ヨリナゾナヂ	やや黒	に点状・黄褐色YR7/4	口耕部 2/12		
487	3-023-01	3	北区 下層位生層	土御器 傳	口耕	22.4	内: ケズメヨリナゾナヂ 内: 工具ナゾ→ヨコナヂ	遺	遺7.5 YR6/6	口耕部 5/12		
488	3-026-03	3	R 4.1 包装層 第2	土御器 傳	口耕	24.9	内: ケズメヨリナゾナヂ 内: ハタケ→ヨリナゾナヂ	~4.0cmの砂 砂粒混在	外面: に点状・黄褐色YR7/4 内面: に点状・黄褐色YR6/3	口耕部 4/12 口耕部内面剥着付		
489	3-036-01	3	Q 4.2 包装層	土御器 傳	口耕	21.8	内: ケズメヨリナゾナヂ 内: ハタケ→ヨリナゾナヂ	~2.0cmの砂 砂粒混在	遺	外面: 混褐色YR6/6 内面: に点状・黄褐色5 YR6/4	口耕部 2/12	
490	3-032-04	3	Q 3.1 包装層	土御器 傳	口耕	20.4	内: ケズメヨリナゾナヂ 内: ハタケ→ヨリナゾナヂ	~2.0cmの砂 砂粒混在	遺	外面: 10 YR8/2	口耕部 4/12 口耕部内面化物付着	
491	3-014-02	3	南区 西壁	土御器 傳	口耕	13.8	内: ハタケ→ヨリナゾナヂ 内: 工具ナゾ→ヨコナヂ	~1.5cmの砂 砂粒混在	遺5 YR6/6	口耕部 2/12		
492	3-026-01	3	V 2.7 包装層	土御器 南窓空隙	口耕	23.1	内: ハタケ・オサニ→ヨコナヂ 内: 敬ナゾ→ヨコナヂ	~2.0cmの砂 砂粒混在	外面: 区域7.5 YR4/2 内面: 混褐色YR6/6	口耕部 3/12 内面剥着付		
493	3-023-02	3	北区 下層位生層	土御器 傳	口耕	28.0	内: ケズメヨリナゾナヂ 内: ハタケ→ヨリナゾナヂ	~4.0cmの砂 砂粒混在	外面: 浅褐色YR6/3 内面: に点状・黄褐色YR7/3	口耕部 1/12		
494	3-038-01	3	南区 耕木道	灰植器 傳	高台位	8.2	内: ロクロナゾ→奈田→駒田ナゾ 内: ロクロナゾ	~1.0cmの砂 砂粒混在	良 白泥7.5 YR7/0	高台位 7/12 内面研磨		
495	3-038-03	3	南区 耕木道	灰植器 傳	高台位 高台位	6.4 6.9	内: ロクロナゾ→奈田→駒田ナゾ 内: ロクロナゾ	~2.0cmの砂 砂粒混在	良 白泥7.5 YR7/0	高台位 8/12 内面燒毛		
496	3-009-02	3	南区 西壁	陶器 傳	高台位	7.0	内: ロクロナゾ→奈田→駒田ナゾ 内: ロクロナゾ	~5.0cmの砂 砂粒混在	良 白泥7.5 YR7/0	高台位 完成 山根(跡) 第6型式進行		
497	3-038-06	3	南区 土器陶器	陶器 傳	高台位	6.3	内: ロクロナゾ→奈田→駒田ナゾ 内: ロクロナゾ	~1.0cmの砂 砂粒混在	良 白泥7.5 YR7/0	高台位 8/12 土器(跡) 第6型式		
498	3-013-05	3	X 3.3 南壁	陶器 傳	高台位	16.8 4.8 7.9	内: ロクロナゾ→奈田→駒田ナゾ 内: ロクロナゾ→奈田→方圓ナゾ	~1.0cmの砂 砂粒混在	良 白泥5 YR7/1	高台位 8/12 X 3.3 山根(跡) 第7型式		
499	3-013-04	3	X 3.3 南壁	陶器 傳	高台位	9.2	内: ロクロナゾ→奈田→駒田ナゾ 内: ロクロナゾ→奈田→方圓ナゾ	~1.0cmの砂 砂粒混在	良 白泥5 YR7/1	高台位 8/12 X 3.3 山根(跡) 第5型式 山根(跡) 第6型式		

V 自然科学分析

1 分析の目的

「ニッセン進歩賞」受賞の際、会員登録料の返却を株式会社バレオ・ラボおよび株式会社吉ヨリ・三崎印画所に委託してました。

第2次調査では奈良時代後半の♂₁、♀₁、漢風奈良時代の♂₂、♀₂を検出した。いずれにも碧子に枯葉の
掌状の形が確認でき、とくにS E63～65・68では名前の有機物が見られたことから、これらの♀₂塗を分析することで
第2の♂₂塗環境を復元することを試みた。また、S E57から碧子した♂₂塗については分析を終了した。

そのほか、SD106をはじめSD88やSD98から
獣特性がE化したため、それらについても検定を行つた。

3次調査では「昭和時代初期の葬戸」を1基発見した。2次調査の5基の葬戸とは所蔵当期が異なるが、これについても「比較検証の対象として」次の分析および図示した葬戸作画の特徴を併記した。

- す。SD152をはじめとした浮群からは多くの水生植物¹⁷⁾を確認した。これらから当時の浮葉植物の構えや食性などの解明を試みた。

庄生は、香取山から燐がされた殺虫をふさに、一部編集者の加筆・修正を行っている。また、各小折篇をひとつの連弾の篇端としてまとめるために、-殺虫を分離しきへ替えを行った。庄生の最後には株式会社パレオ・ラボによる第2・3次の小折篇を踏まえたまとめを掲載している。なお、小折に関する見聞関係には、マガジンを控えていないことを押記しておく。

各報答を分解してしまうため、以下に報答者をまとめてみます。

(花粉门孢分析)

新庄 駿也（株式会社パレオ・ラボ）：2次事業
鈴木 茂（株式会社パレオ・ラボ）：3次事業
〔足立・山口・佐藤監修〕

王藤序言（後半部分）

(多點鐘的江口集述)

藤根 久（株式会社パレオ・ラボ）

〔柳所著述〕

株式会社三井物販所：2次選

藤堀 久（株式会社パレオ・ラボ）：3次事件

(蘇軾遺墨集)

栗澤一男（株式会社パレオ・ラボ）：2次審査

〔二〕哲學運動の自然科學分析

藤根 久・村野賢太郎・鈴木 兼 (株式会社パレオ・ラボ) (文二)

2 立花堂遺跡の花粉化石分析

はじめに

それが退陣は、三重界隈の御陣跡に所在し、安濃川の流域岸の山地溝に位置する。佐道陣では、これまでの磐堀陣により、8代の堀尾柱磐堀や堀尾、奥羽の堀尾・清が焼討された。また退陣としては、二伊弉諾・須恵器・越後守器・三酒などが焼討された。ここでは、8代および9世の堀尾の清二などを戦死とし、常陸の分地三および東流を甲らかにする一場として片桐の群衆の焼討を行った。

a 試

(2次調査)

孤鈴山の静草の検証は、試料が号1~10の合計10試料について行った。各試料は、S E57・63・64・65・68（♂）といった道場サニヨンないし道場に関連する種類などから選択された。以下に、各試料の記載を示す。なお、S E64（試料7・8）については、丸山進也の検証も行われた。

S E57 (r 6・7グリッド) : 余毛時代のダフ^トであり、試料1～4が採取された。試料1 (S E57サンプル①) は、櫻毛壁^ト (第5層; 第14号の「肩骨^号」に付属する) より採取され、黒塗^レシルト更^レ砂^トで下部明瞭な褐鐵鉄^ルが認められる。試料2 (S E57サンプル②) は、ダフ^ト櫻毛^ト最^レ上^ト層 (第6層) の部より採取され、黒塗^レシルトで下部明瞭な褐鐵鉄^ルが認められる。試料3 (S E57サンプル③) は、遺構櫻毛^ト (第10層) より採取され、黒塗^レシルトで褐鐵鉄^ルが認められる。試料4 (S E57サンプル④) は、

退橋外壁²（第11層）より採取され、灰土シルト。

S E63 (1.8グリッド)：英倉時代の柱²であり、試料5、6が採取された。試料5は、退橋外壁²より採取され、黒鉄灰土砂混じり粘土²で褐鐵鉻が認められる。試料6は、柱²下部³（第5層）上部より採取され、黒鉄灰土シルトで褐鐵鉻が認められる。

S E64 (m7グリッド)：英倉時代の柱²であり、試料7、8が採取された。いずれも第3層より採取され（第1層準で2試料を採取）、オリーブ灰土シルト。

S E65 (m7グリッド)：英倉時代の柱²であり、試料9が採取された。第5層上部より採取され、オリーブ灰土シルトで灰白色片を含み、褐鐵鉻が認められる。

S E68 (m7グリッド)：英倉時代の柱²であり、試料10が採取された。第4層上部より採取され、灰土シルト灰鉄砂で褐鐵鉻が認められる。

〔3次事象〕

試料はS E155の墨斗壁²の⑥層（試料1）、⑤層（試料2）および退橋外壁の⑦層（試料3）と斯モ調査²（試料4）より採取された4試料である（第40頁）。各試料の特長について記すと、試料1は粘土の多い灰土柱²で、レキが認められる。試料2は灰土の砂質シルト、試料3は褐灰土の砂質粘土²で、少レキ（マサ）が嵌しておらず、根茎に砂質鉱物が集積して褐鐵鉻を呈している。試料4は黒鉄灰土の砂質粘土²で、鈴鉄やマンガンが集積して全層が褐鐵鉻を呈している。当期としては試料1と2が③室町時代で、試料3・4はこれより古いもののいつの時期かは不明である。

b シダ

〔2次事象〕

井坊²の柱²は、試料約2～3gを10%水酸化カリウム²（浸漬約15分）による粒度分析、標定法による粒度分析、フッ素²水系酸²（約30分）による粒度分析などの溶解、アセトリシス²（水酸化による脱色、濁度管¹において無水硫酸²9の溶液で浸漬約5分）の順に物理・化学的分析をすることにより行った。なお、フッ素²水系酸²は、重液²（比重を1.2を濃度）による有機

物の洗浄を行った。プレバラート作成は、残渣を熱脱水²で過剰²に乾燥し、1分に複数した後マイクロビペットで取り、グリセリンで封²した。検鏡は、プレバラート1～2枚の全形ををめし、その間に出現した全ての種類について検定・計数した。その計数結果をもとにして、まとめて顕微鏡の目視率を平均²値で算出した。ただし、クワドリ、バラ科は厚木と薄木のいずれをも含むが顕微であるが、空きが多いため、ここでは既²の薄木を佔めた。なお、複数の顕微鏡をハイフンで隔んだものは顕微鏡の空きが多いためである。

〔3次事象〕

試料（湿重約5～7g）を洗浄管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間浸漬する。水²洗²後0.5mm²の網にて細粒過濾などを取り除き、標定法を用いて粒度分析などを実施する。次に46%フッ素²水系酸溶液を加え30分間浸漬する。水²洗²後、重液²（比重2.1を用い逐段分離）を行い、浮遊物を水²洗²する。次に、重液²洗²、減圧でアセトリシス²（無水硫酸9:1水酸化物の混合を加え3分間浸漬）を行う。水²洗²、残渣にグリセリンを滴²し仮封²とする。検鏡はこの残渣より直ちにプレバラートを作成して行い、その際サフランにて染色²を施した。

c 仁玲²と其の範囲

〔2次事象〕

全試料で確定された顕微鏡は、厚木²22、薄木²18、形態記載で示したシダ植物²2である。いずれの試料も薄木²の顕微鏡は少なく、比較的名前した試料7～9のみ、未だまでに平均²値で粒度を基準として水²洗²を重ねて洗出した。以下に、退橋ごとに井坊²の顕微の記載を示す。

S E57 (r 6・7グリッド；試料1～4)：いずれの試料も井坊²の顕微鏡は、非常に少なかつた。井斗壁²（試料1）、墨斗壁²（試料2）からは、厚木²のスギ庭、イチイ²イヌガヤ²ヒノキ²、コナラ²庭、薄木²のイネ²、カヤツリグサ²、アカザ²ヒユ²が僅かに見出された。また、退橋外壁の11層（試料4）からはヨモギ²とシダ植物²の多型²が僅かに見出されたが、10層（試料3）からは井坊²、唐草²は全く見出しなかった。

S E63 (18グリッド; 試料5、6) : グリッド5層 (試料6) からは、山のキクイモの群集に変化したが、道端の試料5は芦原・鹿子山を全く変化しなかった。

S E64 (m7グリッド; 試料7、8) : いずれの試料も草木山地のさめる群合が極めて多く、80%弱～90%強である。そして、いずれもクワ群の出現率が高い。試料7は、クワ群が40%強を占め、イネ群も20%弱が一般的な率である。山に、カヤツリグサ群、アカザ群ヒユ群、バラ群、タンボボク群が3～4%で出現し、イボクサ群、カラマツソウ群、アブナ群、キカシグサ群、ヨモギ群などが僅か1%弱で出現する。芦原山地は、モミ群、マツ鹿児島杉等えき群、スギ群、ヤマモモ群、クマシデ鹿一アサダ群、コナラ群、アカガシ群、二列楓一ケヤキ群、エノキ群一ムクノキ群などが僅かに変化する。試料8は、クワ群の出現率がより多く、約85%を占める。山は、イネ群が約3%で出現し、カヤツリグサ群、ソバ群、アカザ群ヒユ群、アブナ群、アリノトウゲサ群、ヨモギ群、タンボボク群などが僅か1%弱で出現する。芦原山地は、マツ群(トモ)、スギ群、アカガシ群、エノキ群一ムクノキ群、サンショウウ群、ツツジ群、イボタノキ群などが僅かに変化する。

S E65 (m7グリッド; 試料9) : 芦原山地のさめる群合は、60%弱である。そのままで、エノキ群一ムクノキ群が約26%を占め、シノノキ群も約7%と比較的多く。山は、スギ群、イチイ群一イスガヤ群ヒュノキ群、クマシデ群一アサダ群、カバノキ群、コナラ群が3%弱で出現し、ツガ群、ヤマモモ群、ハンノキ群、ブナ群、アカガシ群、キハダ群、グミ群などが1ないし2%未満で出現する。草木山地は、イネ群の20%弱、クワ群の約7%、アブナ群の約5%が一般的である。山に、ヨモギ群が2%弱、ソバ群、アカザ群ヒユ群、ナデシコ群、タンボボク群が1%未満で出現する。

S E68 (m7グリッド; 試料10) : 山地・鹿子山は全く変化しなかった。

[3次調査]

検討された山地・鹿子山の全種群数は芦原山地31、草木山地21、形態分類を含むシダ植物鹿子山の総計

57である。これら山地・鹿子山の山を第20番に、それらの分布を第41番に示した。なお、分布図は全部粉塵可燃性を基準としたき分布としてある。また、山および山においてハイフンで結んだ山地群はそれらを傾斜群の山地が外れたものを示し、クワ群・バラ群・マツ群の山地には山地起源と草木起源のものとがあるが、さもなくばこれが外れたため便宜的に草木山地に括してある。

検討の結果、芦原山地のさめる群合は多く、多いものは試料2でも20%に達していない。そのままで、試料2ではコナラ群アカガシ群が最も多く、次いでスギ群、モミ群が続いている。さらにマツ鹿児島杉等えき群（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）、コナラ群コナラ群、コウヤマキ群がモミ群とほとんど差なく続いている。モミ群ではイネ群が多産しており、出現率は40%を越えている。このイネ群だけで10%を越える山地群はなく、次いで多いカヤツリグサ群でも約7%、ヨモギ群は約4%である。その山ではベニバナ群が1番目であるが程跡されており、バシ局地のオモダカ群（山地内特有）や芦原山のキカシグサ群などが著しく検出されている。

試料4ではコウヤマキ群が最も多く検出され、次いでアカガシ群、コナラ群が多く程跡されている。草木山地ではヨモギ群が多く、次いでイネ群などになっている。またシダ群のシダ植物鹿子山が最も多く検出されている。

試料1と3では芦原山地のさめる群合が非常に近く、試料1は約5%、試料3は約7%となっている。そのままでヨモギ群が多産しており、出現率はそれぞれ約60%、約75%を示している。

d 結論

[2次調査]

[3次調査について]

一般的な調査した S E64 (試料7、8)、S E65 (試料9) の達成から検査を試みる。グリッドという狭い面積のせいか、芦原山地の群合群数は少なく、鹿子山の森林地帯を1分に反映した達成ではないと察えられる。しかし、脊歯のアカガシ群やシノノキ群がやや多くつづいており、ヤマモモ群も随伴することから、黒松林が成長していたが歴史が伝えられる。ヨリ構成群は、山地内では、ツガ群、マツ群

褐鰐管束き腹、スギ腹、落葉じ葉母ではクマシデ腹ーアサダ腹、カバノキ腹、コナラき腹、エノキ腹ームクノキ腹のほか、イボタノキ腹なども混じっていたと見えられる。エノキ腹ームクノキ腹は、試糞9で突出するが、S E65付近にまで見ていたものが多くの出現されたと見えられる。

S E64付近には、クワ科が繁茂し、アカザ群ヒユ群、アリノトウグサ群、ヨモギ群、タンボボ群なども混じっていた。クワ群は、草本としては、カナムグラ、クワクサなどの草本群が見えられ、樹木群流が存在していたと推定される。また、キカシグサ群、イボクサ群などが群生するような小さな群落の混生の環境も存在していたであろう。キカシグサ群は、パリにしばしば地表として群生するが、パリが存在していたにしては、イネ科の群落が群生するように思われる。着生の強い草本の存在が推定されることから、イネ群は、イネリ群というよりは、むしろススキやシバなどを含む草本群が多めに見えられる。S E65付近には、イネ群、クワ群、アブランナ群をはじめ、アカザ群ヒユ群、ナデシコ群、ヨモギ群、タンボボ群が群生しており、S E64付近と然ね類似した環境であったと推定される。

[栽培状況について]

S E64、S E65のいずれからもソバ群が産出し、ソバ栽培が行われていたと見えられる。また、白呂茶は多くはないが、有茎植物を多く含むアブランナ群もソバと共に栽培されていた可能性がある。

[付近の栽培環境について]

当所付近は、未開拓地である場合には乱れに风化されるが、このようないちじくでは、土壌の性質により分解・消失し、主にバクテリアによる分解も受ける。従って、S E64、S E65は、伊豆山地群が少ないものの、当所付近がそれなりに風化されていることから、みかけの付近ではあったと推定される。一方、S E57、S E63、S E68の付近は、当所付近が殆どないし全く産出しないことから、少なくとも未開拓地で安定して栽培したものとは見え難い。つまり、これらの付近は、乾燥していたか、當時選択した環境ではなく、乾燥を避けて選択した環境であつたことが示唆される。

[3水準]

試糞とも伊豆山地群が少ない傾向を示しており、これはS E64やS E65においても伊豆山地群の傾向を示している。そのうちとしては付近という美しい漁業群が影響していると見えられる。そのうち一般的な状態で観察された試糞2においてモミジ腹、ツガ腹、ニヨウマツ腹、コウヤマキ腹、スギ腹といった紅葉群が比較的多く検出されており、伊豆山地の道場周辺部ではこれら伊豆山地群が最も多く付近森林群が群生部を多くして存在していたとみられる。またこの試糞2ではアカガシ群が最も多く検出されており、付近と見えているS E64やS E65の芦群が付近においてもアカガシ群やシノノキ群が付近に多く傾向を示している。こうしたことから道場周辺部では丘陵部にアカガシ群を多く見出され、付近と見えているS E64やS E65の芦群が付近においてもアカガシ群やヤマモモ、モチノキ群などが多く見出される。このように伊豆山地付近の付近では伊豆山地群が、また丘陵部には伊豆山地群が付近で栽培していたと推測される。さらにこれら群に絡まるようにブドウ腹やツタ腹などのつる植物にも群生していたと推測される。

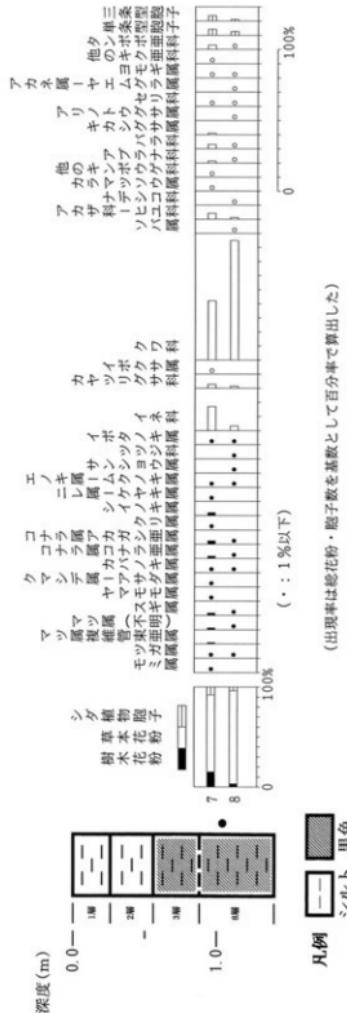
S E155付近についてみると、試糞2においてイネ群が多産しており、その付近にはイネと見えれる手を模倣する手形群が多く観察された。またパリ地表を含む分類群のオモダカ腹やキカシグサ群なども検出されていることから、道場周辺においてパリ地表が行われていた可能性が見えられる。なおこうした栽培地帯についてはS E64やS E65においてソバやアブランナ群（アブランナ、ダイコンなど）の栽培の可能性が示されている。付近に試糞2よりもベニバナ群が1番多く検出されており、栽培も推測される。しかしながら良种などに付近が見られた際、付近に群生したことでも見えられ、ベニバナの栽培についてはさらに検討が必要であろう。

このS E155の試糞1・3においてはヨモギ腹が美しい白呂茶を示しており、このヨモギ腹をはじめとしてツユクサ群、アカザ群ヒユ群、オオバコ群、ヨモギ群を多く付近のキク群、タンボボ群、シダ植物などの地表群がS E155道場周辺に多く成長し

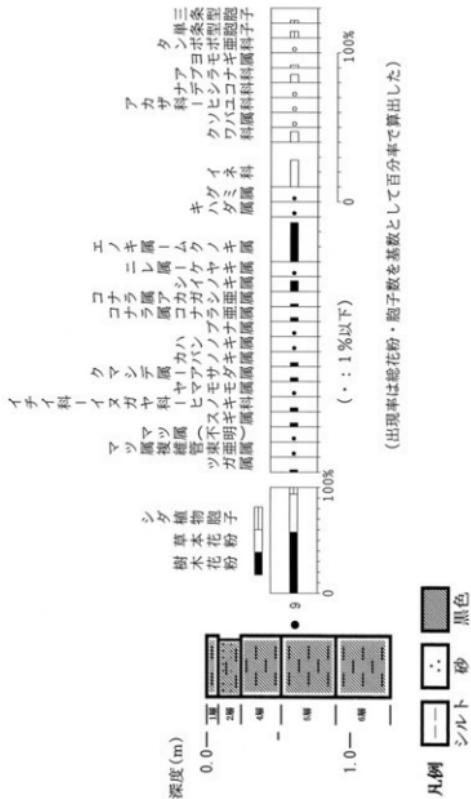
和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
樹木											
モミ属	<i>Abies</i>	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
ツガ属	<i>Tsuga</i>	-	-	-	-	-	-	1	1	2	-
マツ属複数管束細属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	-	-	-	-	-	-	3	-	1	-
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	-	-	-	-	-	-	4	4	1	-
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	1	-	-	-	-	-	5	5	3	-
イタク料ーイヌガヤ科ーヒノキ科	<i>T.- C.</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	3	-
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-
クマシテ属ーアサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	-	-	-	-	-	-	2	-	3	-
カハナキ属	<i>Betula</i>	-	-	-	-	-	-	1	1	3	-
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ブナ属	<i>Fagus</i>	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-
コトネ属コナラ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	-	-	-	-	-	-	5	1	3	-
コトネ属アカガシ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	-	-	-	-	-	-	7	2	2	-
クリ属	<i>Castanea</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
シイキ属	<i>Castanopsis</i>	-	-	-	-	-	-	6	-	8	-
ニレ属ークヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-
エノキ属ームクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	-	-	-	-	-	-	2	2	19	-
サンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
キダマ属	<i>Phellodendron</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
グミ属	<i>Elaeagnus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ツツジ科	<i>Ericaceae</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	-	-	-	-	-	1	5	-	-
草本											
イネ科	<i>Gramineae</i>	1	1	-	-	-	-	49	34	20	-
カバツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	1	1	-	-	-	-	8	11	-	-
イボタサ属	<i>Anelliens</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
クワ科	<i>Moraceae</i>	-	-	-	-	-	-	121	624	8	-
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
アカサ科ーヒユ科	<i>Chenopodiaceae - Amaranthaceae</i>	-	1	-	-	-	-	12	9	1	-
ナデシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-
カマツツキ属	<i>Thalictrum</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
アブラナ科	<i>Cruciferae</i>	-	-	-	-	-	-	4	3	6	-
バラ科	<i>Rosaceae</i>	-	-	-	-	-	-	9	3	-	-
キダマツウガ属	<i>Hedera</i>	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-
アリトリウガ属	<i>Hederastris</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
アキネ科ーヤエムグラ属	<i>Rubia - Galium</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	-	-	-	2	-	-	1	4	2	-
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-
タンボボ亜科	<i>Liguliflorae</i>	-	-	-	-	-	-	9	1	1	-
シダ植物											
單类型胞子	Monolete spore	-	4	-	3	-	-	12	20	5	-
三葉型胞子	Trilete spore	1	-	-	-	-	-	11	8	2	-
樹木花粉	Arboreal pollen	2	1	0	0	0	0	43	23	64	0
草木花粉	Nonarboreal pollen	2	3	0	2	0	1	222	685	40	0
シダ植物胞子	Spores	1	4	0	3	0	0	23	28	7	0
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	5	8	0	5	0	1	286	736	111	0
不明花粉	Unknown pollen	3	6	0	3	0	4	19	18	9	0

T. - C. は Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceaeを示す

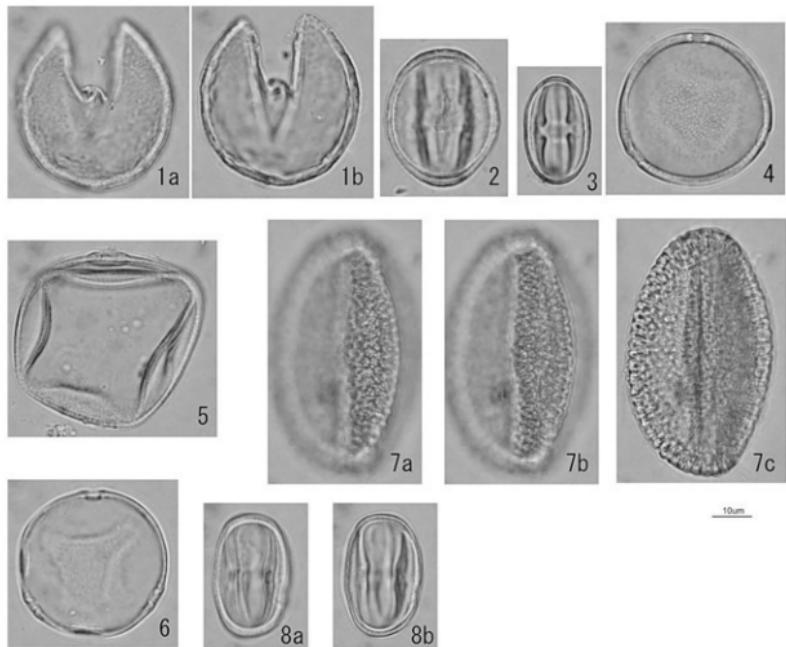
♀ 19% 2 次開花 1-5月に亘る



(出現率は総花粉・胞子数を基準として百分率で算出した)



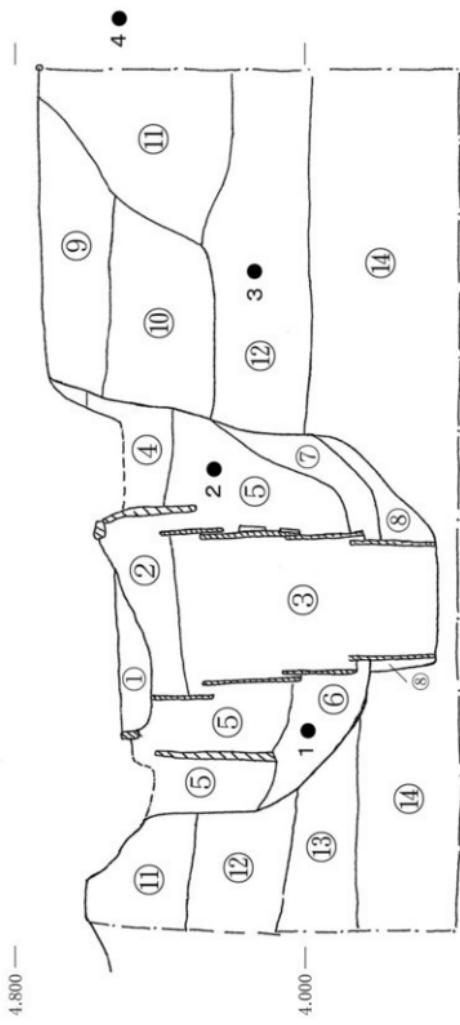
(出現率は總花粉・胞子数を基數として百分率で算出した)



1. スギ属、試料9、PAL. MN 2392
2. コナラ属アカガシ亜属、試料7、PAL. MN 2387
3. シイノキ属、試料7、PAL. MN 2391
4. エノキ属一ムクノキ属、試料9、PAL. MN 2393
5. イネ科、試料7、PAL. MN 2386
6. クワ科、試料8、PAL. MN 2389
7. ソバ属、試料8、PAL. MN 2388
8. キカシグサ属、試料7、PAL. MN 2385

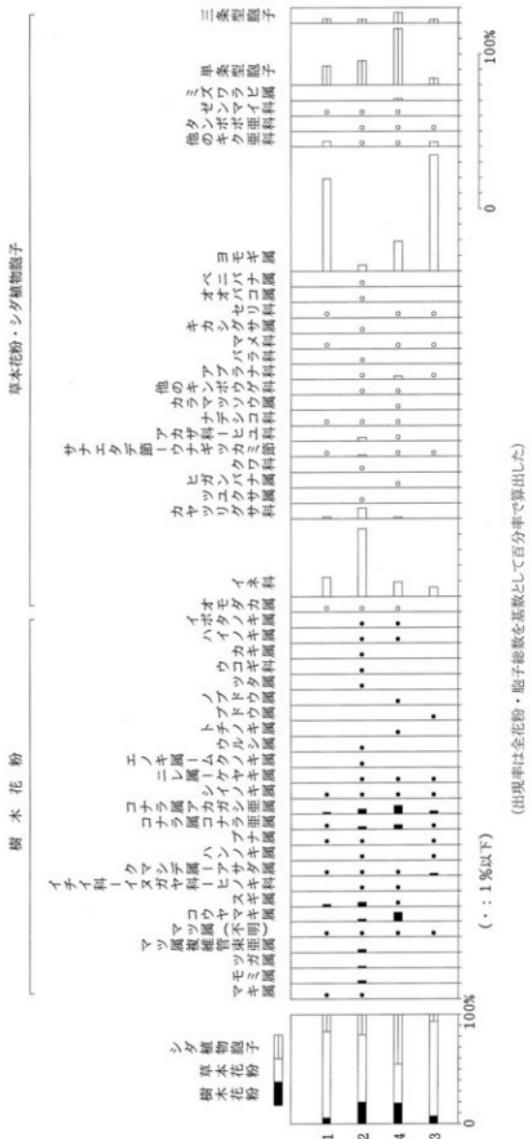
図版1 2次複数で脱臼した花粉粒

約40° S E 155 調査地附近の地質図と鉱物分布図(●)

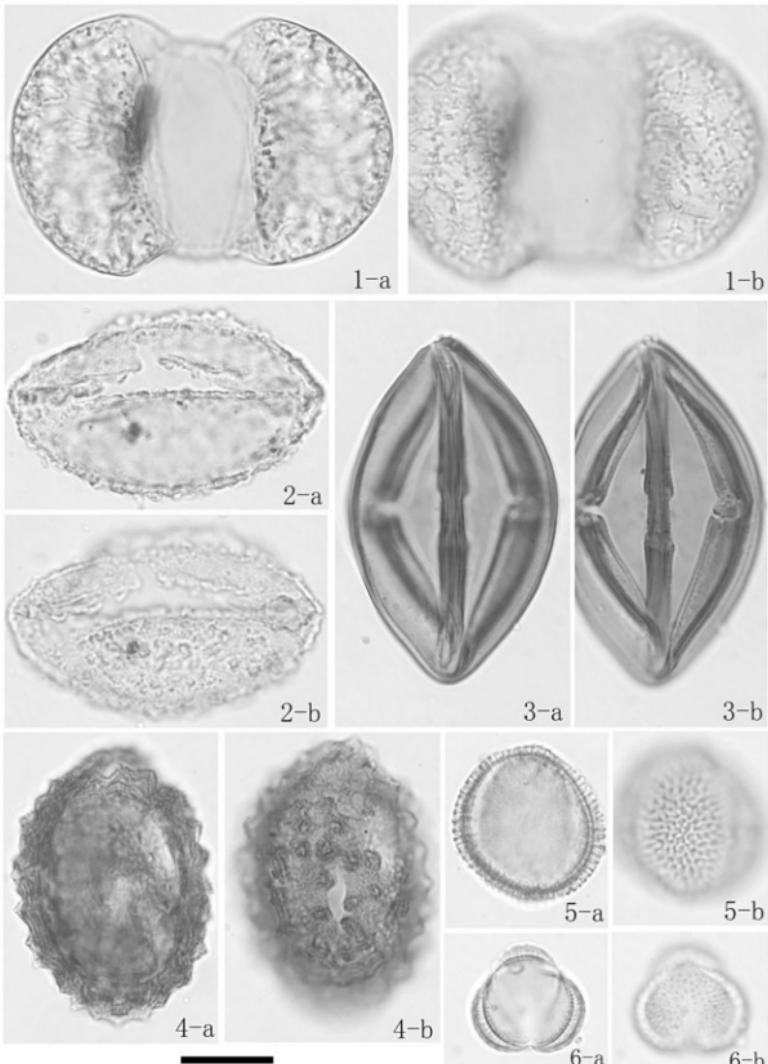


和名	学名	1	2	4	3
樹木					
マキ属	<i>Podocarpus</i>	1	2	-	-
モミ属	<i>Abies</i>	-	15	-	-
ツガ属	<i>Tsuga</i>	-	8	-	-
マツ属 複維管束亞属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	-	15	-	-
マツ属 (不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	1	4	2	1
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	-	13	27	-
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	4	22	2	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T. - C.	-	2	2	-
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	-	2	-	-
クルミ属	<i>Juglans</i>	-	2	-	1
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus</i> - <i>Ostrya</i>	1	2	2	3
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	-	2	-	1
ブナ属	<i>Fagus</i>	1	2	-	1
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	2	14	14	1
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	3	25	25	4
クリ属	<i>Castanea</i>	-	2	-	-
シノキ属	<i>Castanopsis</i>	1	7	3	1
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus</i> - <i>Zelkova</i>	-	3	3	2
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis</i> - <i>Aphananthe</i>	-	6	-	-
ウルシ属	<i>Rhus</i>	-	1	-	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	-	2	-
ニシキギ科	<i>Celastraceae</i>	-	1	-	-
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	-	-	1	-
ブドウ属	<i>Vitis</i>	-	-	-	1
ノブドウ属	<i>Ampelopsis</i>	-	-	1	-
ツタ属	<i>Parthenocissus</i>	-	1	-	-
ウコギ科	<i>Araliaceae</i>	-	2	-	-
ミズキ属	<i>Cornus</i>	-	1	-	-
カキ属	<i>Diospyros</i>	-	1	-	-
ハイノキ属	<i>Symplocos</i>	-	1	1	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	1	1	-
草本					
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	2	1	1	-
イネ科	<i>Gramineae</i>	32	343	42	13
カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	3	54	5	-
ツユクサ属	<i>Commelinaceae</i>	-	1	-	-
ヒガンバンナ属	<i>Lycoris</i>	-	-	3	-
クワ科	<i>Moraceae</i>	-	5	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	2	8	2	2
アカザ科-ヒユ科	<i>Chenopodiaceae</i> - <i>Amaranthaceae</i>	-	18	1	-
ナデシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	1	7	2	-
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	-	-	1	-
他のキンポウゲ科	other <i>Ranunculaceae</i>	-	3	1	-
アブラナ科	<i>Cruciferae</i>	-	5	9	1
バラ科	<i>Rosaceae</i>	-	2	-	-
マメ科	<i>Leguminosae</i>	1	-	1	1
キカシガサ属	<i>Rotala</i>	-	1	-	-
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	2	-	1	1
オオバコ属	<i>Plantago</i>	-	1	-	-
ベニバナ属	<i>Carthamus</i>	-	1	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	154	30	87	169
他のキク亜科	other <i>Tubuliflorae</i>	9	3	3	7
タンポポ亜科	<i>Liguliflorae</i>	-	3	4	1
シダ植物					
ヒカゲノカズラ属	<i>Lycopodium</i>	-	-	2	-
ゼンマイ科	<i>Osmundaceae</i>	1	2	1	-
ミズワラビ属	<i>Ceratopteris</i>	-	-	6	-
単柔型胞子	Monolete spore	32	124	165	10
三柔型胞子	Trilete spore	7	18	31	5
樹木花粉	Arbooreal pollen	14	157	86	16
草本花粉	Nonarboreal pollen	206	486	163	195
シダ植物胞子	Spores	40	144	205	15
花粉・胞子总数	Total Pollen & Spores	260	787	454	226
不明花粉	Unknown pollen	10	22	36	15

T. - C. は Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae を示す



第418回 SE155の「スケルトン」



1 : マキ属 PLC.SS 4343

2 : コウヤマキ属 PLC.SS 4345

3 : カキ属 PLC.SS 4344

4 : ベニバナ属 PLC.SS 4346

5 : アブラナ科 PLC.SS 4347

6 : ヨモギ属 PLC.SS 4342

図版2 3次元で作成した形態 (スケールは0.02mm)

ていたとみられる。またSE64やSE65ではクワ科が多めであり、サ型においては上記の越後類の山カナムグラやクワクサなどが見えられるクワ科、イネ科などがあり、堆積される。

おわりに

(2) 水事か

サ型の遺跡周辺には、黒変母林が成長しており、SE65付近には、エノキ属一ムクノキ属が生じていたが、サ型が見えられた。SE64やSE65の付近には、ソバの栽培跡が存在しており、そのような耕作地や周辺においては、クワ科、イネ科をはじめ、アカザ科ヒユ科、アリノトウガサ属、ヨモギ属、タンボボクサなどの草木類が繁茂していた。また、SE64付近には、キカシグサ属、イボクサ属などが生じするべしの古い泥炭の環境も存在していた。確認したサ型のうち、SE64、SE65は、水田の跡であったが、SE57、SE63、SE68は、乾燥していか、乾燥を繰り返す跡であったとみられる。

(3) 水事か

サ型には示していないが、山カナムグラの跡が試料2より1番目で検出されている。本試料に混じたものの一つとしてソバなどの栽培地の畠跡として発見がされたことが見えられる。また、山カナムグラの跡によると、サ型などの歴史として山カナムグラが生じて、それが生じたが、サ型が堆積される。今後、トイレ遺構の検出やそのごく後の分析により、サ型遺跡と山カナムグラとのかわりがより明確になる可能性があり、期待したい。

3 立花堂遺跡の大型植物化石

a 試料と方法

立花堂遺跡の事かでは、溝SD152からモモ科など多型地的遺跡が発見している。

これら試料について、サ型および山カナムグラで生産・計数を行った。なお、一部の試料は、イヌクサ属、山カナムグラ属、新進植物にご理解いただいた。

b さかしたへと種子化

各試料から選出した大型地的遺跡の一部を第21表で示す。ここで、サ型でない場合は、サ型がない試料の数を()内に示した。なお、私は取り上げた上で集計した。

c さかなべと種子化の形態記録

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr.

核は胚根がないし茶褐色、完形であれば胚生根は卵形から卵円形、果皮は楕円形。果皮には縦立ちの葉(葉起)があり、單葉な1つの縫合線が核に沿る。

ナラガシワ *Quercus aliena* Blume

幼芽は、リ球形で長さ9mm程度である。葉片は厚さ11mm程度である。

コナラ属 *Quercus*

葉片ののみが得られた。葉片のみではこれ以上は生査にはならない。

ウメ *Prunus mume* (Sieb.) Sieb. et Zucc.

胚生根は球形、上半部は凹凸レンズ形。果皮に溝があり、その際には縫合線が発達する。果皮には小さく、深い凹が存在する。長さ18mm程度である。

モモ *Prunus persica* Batsch

胚生根は卵形ないし球形、上半部は凹凸レンズ形。果皮に溝があり、その際には縫合線が発達する。果皮には不規則な渦れるような溝と穴がある。大きなものは3.3cmに達する。

サクラ属サクラ属 *Prunus* sect. *Pseudocerasus* Koidz.

核は胚根まで持つ。サ型の際には縫合線がある。果皮はウメやモモのような溝や穴はない。

エゴノキ *Styrax japonica* Sieb. et Zucc.

核は広卵形で頂部から3つの縱溝がある。果皮には、鋭かな縫合線があり、ざらつく。

マメ科 (Leguminosae)

長さ5mm、幅1.5mmの小型の果皮である。

d 伝承

検出された大型地的遺跡は、

[栽培・利用状況について]

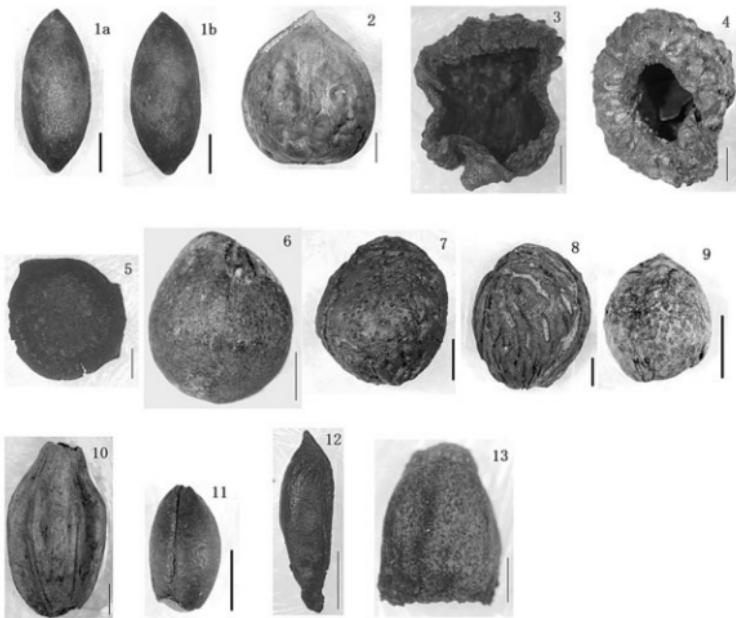
立花堂遺跡のうち、栽培地的ないし山カナムグラの多いものは、ウメ、モモである。モモは、山カナムグラで育てられており、食後授乳されたものと思われる。

[種子葉流について]

エゴノキの種子が比較的多く見ているが、エゴノキは落葉木であり、葉の裏面にきわめて著しく見える網目であることから遺傳域に残っていたと

分類群名・部位 属位名・番号	Y29	Z27	a26	Z28	a24	a25	a24	Z28	Y28	Y31	Y32	Z28	Y30	a24	a24	b25	b24	b25	Z28	Z27	a25	Y30	b25
	SD152																						
イヌガヤ 種子																							1
オニグルミ 極																							
コナラ属 果実	1																						
ナラガシワ 幼果																							
ムクノキ 内果皮	1																						
ウメ 極																							
モモ 極	3(2)	(1)			1	1	1(1)	2	1		1	1		1	1	3(1)		5(1)	1	1	2(1)	(1)	2
サクラ属 サクラ節																							
センダン 極	1																						
エゴノキ 種子	7(1)	9(3)	2	3																			
マメ科?																							
不明 種子																							

年21号 3月刊行 ページ数21頁 - 価格 350円 - 印刷は株式会社、○印は専門的な書籍の数を示す



1a・1b. イヌガヤ種子 (b25:5mm) 2. オニグルミ核 (z27:5mm) 3. ナラガシワ幼果 (z28:2mm)
 4. ナラガシワ核斗 (z28:2mm) 5. コナラ属果実 (y29:2mm) 6. ムクノキ内果皮 (z28:2mm)
 7. ウメ核 (z27:5mm) 8. モモ核 (y29:5mm) 9. サクラ節核 (y29:2mm) 10. センダン種子 (z27:2mm)
 11. エゴノキ種子 (y29:5mm) 12. マメ科?果序 (z28:2mm) 13. 不明種子 (y28:2mm)

図版3 SD152から撮影した代表標本

思われる。こうした場所では、ナラカシワやムクノキなども見えていたものと推定される。

なお、センダンが含まれていたが、零落の辺に近いところなどに見られるが、すぐから栽培もされていることから本種の分布域ははっきりとしない。

4 立花堂遺跡 出土昆虫化石群集について

はじめに

私は、当時の日本で最も多くの種類数を誇り、多様な環境に棲み分けている。私はその大半はアーチないしきアーチで時代を代が替い。しかも移動幅が廣いために、環境の変化に敏感に反応する。また、昆粉等と比べて個体の移動が少なく、現生性が高い。このような理由により、私はこの遺跡は過去の環境を推定するのに有用である。

立花堂遺跡の摸倣時代の土器と交えられる遺構（SE64）の壁から私は、アーチとした。アーチから出たした私は、アーチの遺跡を試みた。

a 分類試験およびアーチ

私は、アーチが開いた試験は、SE64の第3層から採取した壁サンプルである。No. 7、No. 8のサンプルから分離壁面によってブロック割りによつて私は、アーチが開いた。サンプルの重は、No. 7が0.5kg、No. 8が2.7kgである。

私は、この断片について、実際塑性鏡で現る様子と比較しながら観察を行った。

b 着火

検出された私は、アーチの開口部を第22番に示した。全部で7回燃焼、26点の私は、アーチが検出された。残まで燃焼できたのは次の5例である。それぞれの種の生態については森（1994）と田中（2001）を参考にした。

ハムミョウ *Cicindela chinensis japonica*

岩へ隠れて全腹燃焼があり、火をきれいな私は、である。燃手を塑性鏡で拡大して観察すると手と全体に颗粒状の模様がある。現る様子と比較して部材の形態、大きさ、手のしわ模様の点がのり今まで一致しており、本種と判定した。

本種は油手の私は、では食である。單けた草木などに棲息する。

セマルガムシ *Coelostoma stultum*

全長が5mmほどの小さな足である。全身が黒色で、脚には細かな疣がある。現る様子と比較して、头部の大きさや密度、部材の形や大きさが一致したため本種と判定した。

本種はハリ虫でベリなどのような穴深の代い、流れのない水底に棲息する。

オオクロコガネ *Holotrichia parallela*

その形態のみEにした。けい前頭部の突起の形状、後頭部のアーチ、头部の形状などアーチをクロコガネ、コクロコガネの現る様子とともに比べて検討した結果、オオクロコガネと判定した。

本種は肉食性で、サクラやナシ、クワなどに集まる。

コガネムシ *Mimela splendens*

全身に鱗片の全腹燃焼がある。部材で大きさ、形、头部の形状等を現る様子と比較したところ、コガネムシと一致したため、本種と判定した。

本種は肉食性で、葉落木や林蔭などに生息する。ヒメコガネ *Anomala rufocuprea*

コガネムシと似て全腹に鱗片で全腹燃焼があるが、コガネムシよりも大型である。部材で大きさ、形、头部の形状等を現る様子と比較したところ、ヒメコガネと一致したため、本種と判定した。

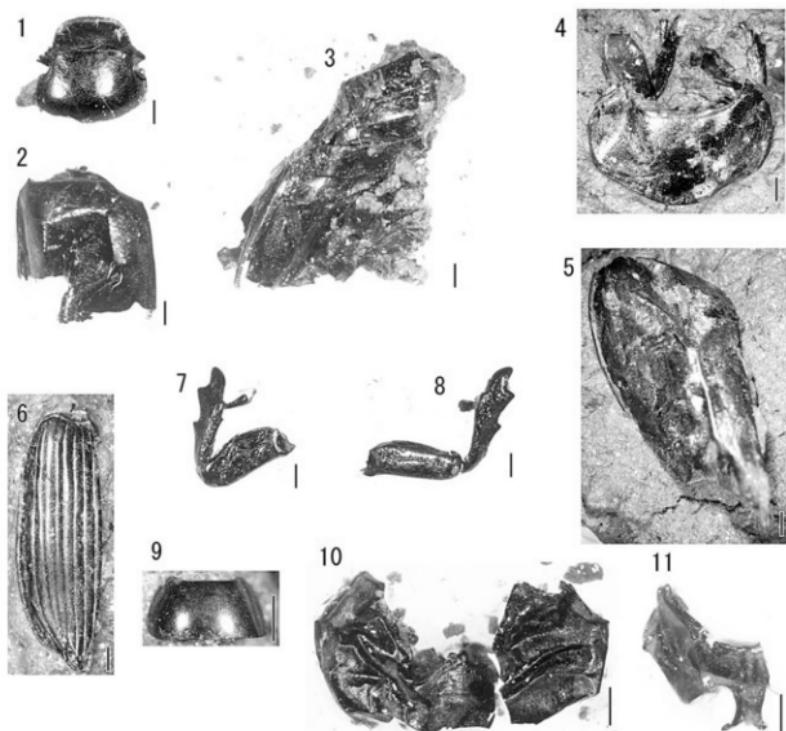
本種は肉食性で、さまざまな草木や草木にやってくる。アーチの遺跡からしばしば木質に自己し、成約の糞を食い散らす性質の特徴となっている（森1994）。

今まで判定されなかった私は、アーチの所見も第22番に示した。

c 伝承

私は、遺跡の断片は、かなり傷んでいるものや付いているものが多く、完全な状態のものはなかった。これは、自己した私は、遺跡が自己した場所で生じていたものではなく、近隣に棲息していた遺跡がバラバラになって木などによって移動してアーチ遺構になったものであることを示している。そのため、ここで自己した私は、群衆はアーチの附近の山で進殖した時代の私は、群衆を反映しているものと思われる。しかし、アーチ点数が26点と少なく、いちばん多くの点数が自己したコガネムシでもすべての自己アーチを合

No	種名	学名	部位	所見
1	コガネムシ	<i>Mimula splendens</i>	右前脚、左脚趾節、後脚趾節、翅膜片	褐色性、樹上性
2	コガネムシ	<i>Mimula splendens</i>	右後脚、腹側板	褐色性、樹上性
3	コガネムシ	<i>Mimula splendens</i>	右後脚、腹側板	褐色性、樹上性
4	コガネムシ科	<i>Scarabaeidae gen. sp.</i>	鞘翅膜片	褐色性
5	コガネムシ	<i>Mimula splendens</i>	頭部	褐色性、樹上性
6	ゴミムシ類	<i>Carabidae</i>	右中脚趾節	褐色性
7	コガネムシ科	<i>Scarabaeidae gen. sp.</i>	左前脚	褐色性、樹上性
8	コガネムシ	<i>Mimula splendens</i>	左中脚趾節	褐色性、樹上性
9	コガネムシ科	<i>Scarabaeidae gen. sp.</i>	左後脚趾節	褐色性
10	コガネムシ	<i>Mimula splendens</i>	左中脚趾節	褐色性、樹上性
11	コガネムシ	<i>Mimula splendens</i>	左前脚趾節	褐色性、樹上性
12	ヒメコガネ	<i>Aesalus rufocinctus</i>	前胸骨板、前脚、左前脚	褐色性、樹上性
13	コガネムシ	<i>Mimula splendens</i>	左前脚	褐色性
14	ゴミムシ類	<i>Carabidae gen. sp.</i>	左前脚	褐色性
15	不明甲虫	<i>Coleoptera</i>	脚	褐色性
16	ゴミムシ類	<i>Holotrichia parafasciata</i>	後脚膜片	褐色性
17	オオクロコガネ	<i>Holotrichia parafasciata</i>	左前脚	褐色性
18	コガネムシ	<i>Mimula splendens</i>	頭部	褐色性、樹上性
19	セマルガムシ	<i>Cetoniidae</i>	前胸骨板	水生
20	コガネムシ	<i>Mimula splendens</i>	右中脚趾節	褐色性、樹上性
21	コガネムシ科	<i>Scarabaeidae gen. sp.</i>	右中脚	褐色性
22	ハシミコウ	<i>Cicindela chrysomelina</i>	後腹板	褐色性、肉食性
23	コガネムシ	<i>Mimula splendens</i>	左中脚趾節	褐色性、樹上性
24	ハシミコウ	<i>Cicindela chrysomelina</i>	中腹板片	褐色性、肉食性
25	オオクロコガネ	<i>Holotrichia parafasciata</i>	右前脚	褐色性、樹上性
26	コガネムシ科	<i>Scarabaeidae gen. sp.</i>	右前脚	褐色性



1. コガネムシ、頭部
 腹板 2. コガネムシ、左鞘翅
 4. ヒメコガネ、前胸背板と前脚
 6. ゴミムシ類、左鞘翅
 9. セマルガムシ、前胸背板
 11. ハンミョウ、中胸腹板片
 3. コガネムシ、腹部
 5. ヒメコガネ、左鞘翅
 7. オオクロコガネ、左前脚
 8. オオクロコ
 ガネ、右前脚
 10. ハンミョウ、後胸腹
 板

図版4　模式とした標本 (スケールは1mm)

わせてもせいぜい2倍程度しかない。したがって馬の羣衆について考察することは難しく、ここではE12した馬の遺跡の記載をすることまでに留めておく。

引用文献

◎ 久保田・2001.野や原の馬と馬骨.

森・2001.1994.馬骨によるモノヘテモノ: 当代における馬の遺跡と馬骨. 筑摩見聞録33.

5 立花堂遺跡の動物遺体同定

a 骨董部および頭骨

立花堂内車軸跡にある立花堂遺跡からE12した馬の遺跡について考察をおこなった。馬は現存標本との比較によりおこなった。

b 頭骨部および尾骨

立花堂遺跡からE12した馬の遺跡について考察した結果を以下に述べる。なお詳しいE12考察については、第23章に示す。

立花堂のE26床から馬の遺跡がE12した。それらのほとんどは歯のエナメル質部分のみの焼けで、一部にセメント質を残すものもあるが、集P質はほとんど残っていない。そのため、エナメル質が痕跡としてしまい、馬を含む馬であるが、e 22³⁴Pと含脣、d 22³⁴P S D106とv 4³⁴P p i t 13歯より焼けられたものについてはウマの臼歯であり、それぞれ、上歯第1後臼歯、上歯第3後臼歯と下歯臼歯である。e 22³⁴Pと含脣より焼けられた上歯第1後臼歯は歯根が一部壊滅されるため、およよその臼歯の全表面（歯根半部と咬合半部の直線距離；久保田・松井著、1999）の計算をおこない、その結果からおよそ3~4~5程度の若い成駒阶段と推定される。上歯第3後臼歯については歯冠部が約5cm程度、下歯臼歯については約6.8cm程度壊滅されることから馬骨に若い成駒阶段の歯であるとさえられる。

なお、e 22³⁴P S D98とd 23³⁴P S D88より焼けられた歯はおそらくウマ臼歯のエナメル質部分痕跡と思われるが、歯片であるため確定的な馬にはいたらないため、「ウマ?」としている。またe 22³⁴P S D98より焼けられている馬の遺跡は、歯のエナメル質部分痕跡ではあるが、より細かにしているため

立花堂遺跡としている。

おわりに

立花堂遺跡からE12した馬の遺跡を考察した結果、3~4~5程度の若齢のウマの存在が確認された。若い成駒の歯が複数焼けされているが、残存状態が悪く、痕跡としていることから馬のものであるかなどの確認的な検討にはいたらない。

引用文献

久保田・松井著 (1999) 第9章 家畜(その2-ウマ・ウシ). 松本昌也・松井著編「立花堂と立花堂」, 169-208.

6 立花堂遺跡出土木製品の樹種同定

a 試料

(2次調査)

試料は、S E64からE12した容器ほか2点、S E57からE12したg 1号橋梁部材28点、そのうち後部材6点の合計36点である。

(3次調査)

試料は、S E155からE12したg 1号橋梁部材13点、そのうち製品が4点の合計17点である。

b 調査結果

(2次調査)

g 1号橋梁部材、g 2号橋梁部材、g 3号橋梁部材の各部分を採取し、水素プレバートを作製した。このプレバートを顕微鏡で観察して確認した。

(3次調査)

木製品からg 1号橋梁部材を用いて3次調査(模擬断面・模擬断面)の部分を採取し、ガムクロラールで封をしてプレバートを作成した。このプレバートを光学顕微鏡で観察して確認した。

c 結果

(2次調査)

毎何年ごとに(計4年)の木と塑形鏡写真を示し、以下に各所の木の解剖学的特徴を記す。

1) コウヤマキ*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.

(遺跡No.36)

(g 1号, No.36)

g 1号では直道管をもち、半球から直角への移行はやや緩やかで直角部の粗さは極めて多い。粒

グリッド	遺構	種名	部位	状態	備考
d23	SD88	ウマ?	臼歯	破片	
d22	SD106	ウマ	左上顎第3後臼歯	破片	
v4	pit13掘方	ウマ	下顎臼歯	破片	
e22	SD98	ウマ?	臼歯	破片	
e22	包含層	ウマ	左上顎第1後臼歯		全歯高約65mm
f22	SD98	不明哺乳類	歯	破片	

年23% 2次埋没 さざなぎ歯



1.ウマ 左上顎第1後臼歯 (e22 包含層)

2.ウマ 下顎臼歯 破片 (v4 pit13掘方)

3.ウマ? 臼歯 破片 (e22 SD98)

4.不明哺乳類 歯 破片 (f22 SD98)

5.ウマ 左上顎第3後臼歯 (d22 SD106)

6.ウマ? 臼歯 破片 (d23 SD88)

図版5 下臼歯退跡 さざなぎ歯

Ⅱでは後伊達蔵の分野群^アは小型の窓穴で1分野に1~2倍ある。板Ⅱでは後伊達蔵はすべてリブであった。コウヤマキは太糸(根島口原), やさき, 太糸(根島まで)に分布する。

2) スギ群スギ庭スギ

(*Cryptomeria japonica* D. Don)

(道幹No. 1~18, 22~30, 34)

(ワラNo. 1~18, 22~30, 34)

木リでは東道管を待ち、半糸から東糸への移行はやや急であった。摩術記庵は実葉部で残葉のみでにぎんでいた。松Ⅱでは後伊達蔵の分野群^アは長型的なスギ型で1分野に1~3倍ある。板Ⅱでは後伊達蔵はすべてリブであった。摩術記庵の太落葉はおむね葉^アである。スギは太糸, やさき, 太糸のヨとしてトリ洋便に分布する。

3) ヒノキ群アスナロ庭 (*Thujopsis* sp.)

(道幹No. 19~21, 31~33, 35)

(ワラNo. 19~21, 31~33, 35)

木リでは東道管を待ち、半糸から東糸への移行は緩やかであった。摩術記庵は実葉部で残化または残葉配^アである。松Ⅱでは後伊達蔵の分野群^アはヒノキ型からややスギ型で1分野に2~4倍ある。板Ⅱでは後伊達蔵はすべてリブであった。散葉状・落葉を帯び摩術記庵がある。アスナロ庭にはアスナロ(ヒバ, アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが翌發鏡^アでは落葉^アである。アスナロ庭は太糸, やさき, 太糸に分布する。

[3次事象]

ダリ (S E 155) から検出された正門4庇はいずれもスギが利用されている。また、構造部材の異性4庇はいずれもスギであるが、屋根5庇はいずれもヒノキ庭の木リを利用している。

△△、溝から引いた床板およびドーム製品はヒノキ庭とアカガシ庭、構造木製品がスギ。これにぎり込んで検出された試料No.11がヒノキ庭、がそれぞれ利用されている。

木製品の木リ利用状況は、△△はヒノキ庭を利用する場合が多いが、スギ庭を利用する場合もある。ただし、8世紀刀将ではヒノキ庭を利用している場合が圧倒的に多い(ヒリ, 1993)。ダリ構梁^アの場

合、木リとしてみると、8世紀刀将ではスギとヒノキ庭は△△に多く、その△△の母トとしてマツ庭^ア越前庭^アや庄庭^アなどの利用も多い(ヒリ, 1993)。

以下に、さ摩列の特徴記載を述べる。

(1)スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ利 キ庭18 1a-1c (No.6)

東道管・後伊達記庵・摩術記庵からなる東庭^ア。東庭の東道管は極めて多い。分野群^アは木リ、△△が△△に多く重いたスギ型、1分野に2~3倍が△△に配^アしている。

スギは太糸口原の零星から根糸^ア部の混生のある谷間に生す常緑樹木である。木リはやや堅直で△△は容易である。

(2)ヒノキ庭 *Chamaecyparis* ヒノキ利 キ庭18 2a-2c (No.12)

東道管・後伊達記庵・摩術記庵からなる東庭^ア。東庭の△△はない。分野群^アの△△はやや柔めに△△に重いたヒノキ型、1分野におもに2倍が△△に配^アして配^アする。

ヒノキ庭の母トには、太糸の根糸^ア口原から太糸に△△するヒノキ (*C. obtusa*) と太糸の根糸^ア口原から太糸に△△するサワラ (*C. pisifera*) がある。木リは和モリ, 椿モリ, 胡桃モリにすぐれる。

(3)コナラ庭アカガシ庭 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ利 キ庭18 3a-3c (No.10)

記述種の良い集合後伊達蔵を除み△△の△△管^アが後伊達蔵に配^アする後伊達蔵^ア。逆管の群^アは△△, 番^アは△△である。後伊達蔵はほぼ△△, ダブルのものと集合後伊達蔵があり、逆管との群^アは△△が木リ、△△、△△状である。

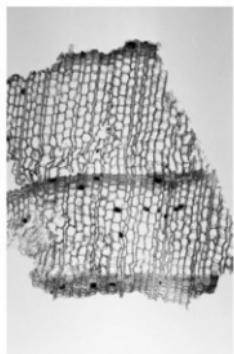
アカガシ庭は、背蔵^アで零星に分布する。△△に生すアラカシ (*Q. glauca*) やアカガシ (*Q. acuta*) あるいはシラカシ (*Q. myrsinaefolia*)、留^ア口原に多いイチイガシ (*Q. gilva*) やツクバネガシ (*Q. sessilifolia*)、背蔵^アや乾燥^アに多いウバメガシ (*Q. phillyraeoides*)、寒さに強くブナ谷の△△部まで分布するウラジロガシ (*Q. salicina*) などがある。木リは木リで彌生や和混生がある。

◆参考文献◆ [2次事象]

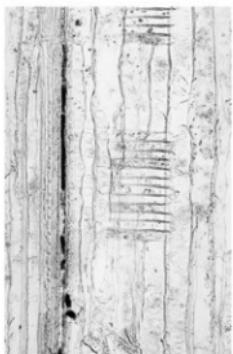
島田誠・江良喜久「さつの道夢口二木製品細観」

No.	報告番号	実測番号	出土遺構	品名	樹種
1	100	2-003-03	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
2	105	2-004-02	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
3	91	2-004-01	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
4	90	2-003-02	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
5	97	2-003-01	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
6	104	2-006-02	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
7	103	2-006-01	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
8	88	2-005-03	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
9	94	2-005-02	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
10	96	2-005-01	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
11	92	2-007-01	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
12	95	2-008-01	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
13	93	2-007-02	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
14	102	2-008-02	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
15	87	2-009-02	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
16	101	2-010-02	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
17	99	2-010-01	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
18	98	2-009-01	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
19	78	2-016-01	S E 5 7	井戸枠材	ヒノキ科アスナロ属
20	183	2-011-01	S E 6 4	板	ヒノキ科アスナロ属
21	184	2-015-01	S E 6 4	曲物	ヒノキ科アスナロ属
22	84	2-002-01	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
23	85	2-001-03	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
24	86	2-002-02	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
25	89	2-002-03	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
26	82	2-001-02	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
27	83	2-001-01	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
28	80	2-011-02	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
29	79	2-012-01	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
30	81	2-012-02	S E 5 7	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
31		未実測	S A 1 0 9	板材	ヒノキ科アスナロ属
32	210	2-013-02	S A 1 0 9	板材	ヒノキ科アスナロ属
33	209	2-013-01	S A 1 0 9	板材	ヒノキ科アスナロ属
34		未実測	S A 1 0 9	板材	スギ科スギ属スギ
35		未実測	S A 1 0 9	板材	ヒノキ科アスナロ属
36	208	2-014-01	S B 4 2	柱材	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ

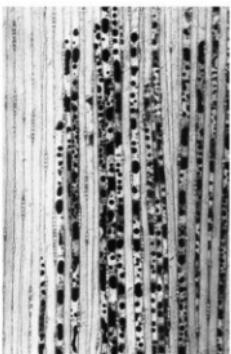
第24章 第2次調査 竹の木製品目録



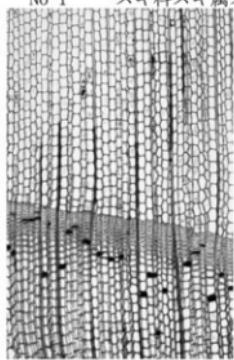
No-1 スギ科スギ属スギ



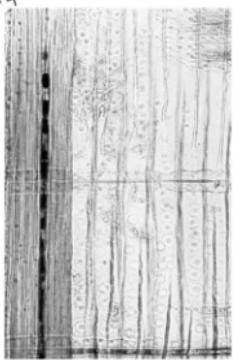
柾目×100



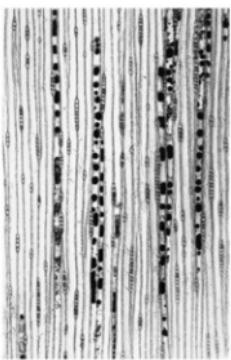
板目×40



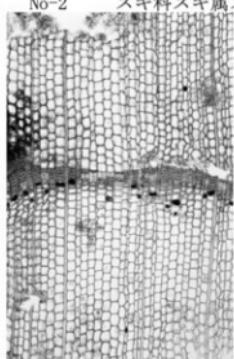
No-2 スギ科スギ属スギ



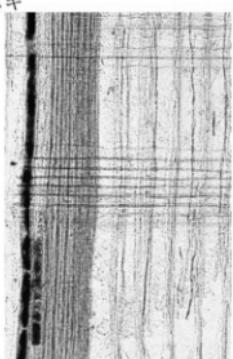
柾目×100



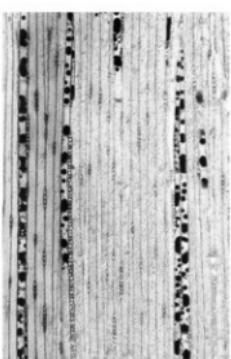
板目×40



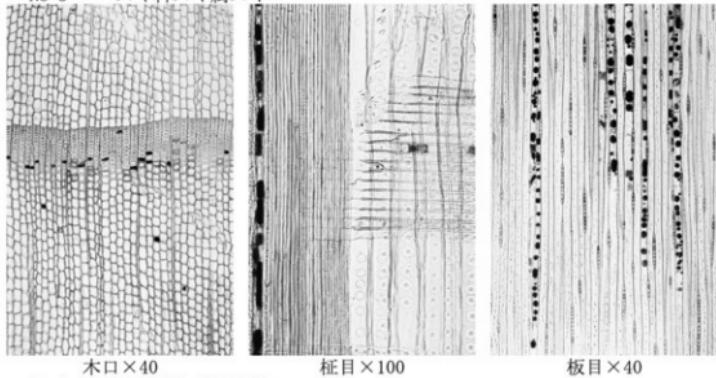
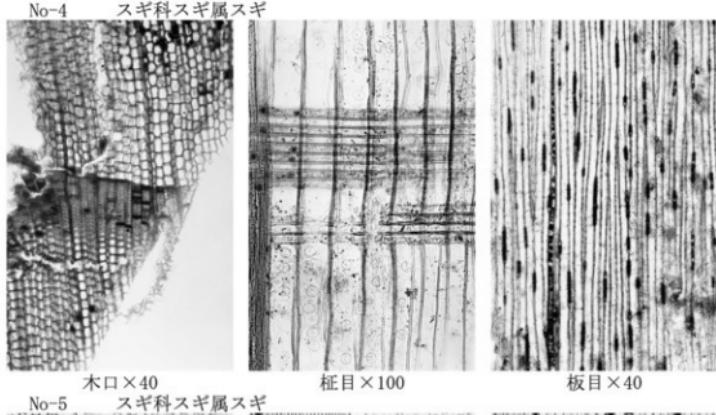
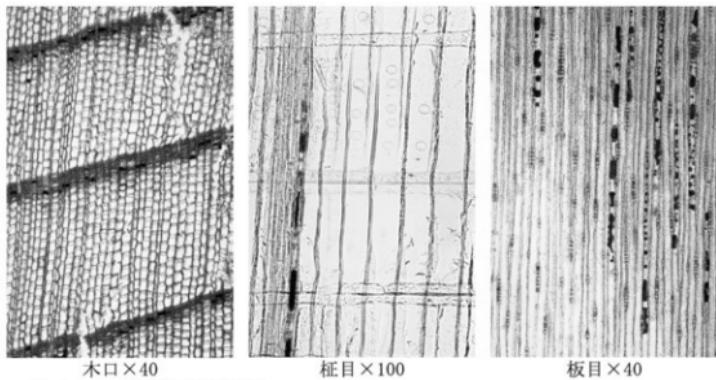
No-3 スギ科スギ属スギ



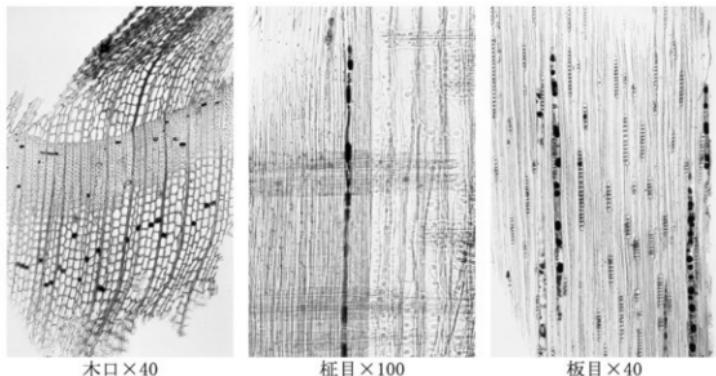
柾目×100



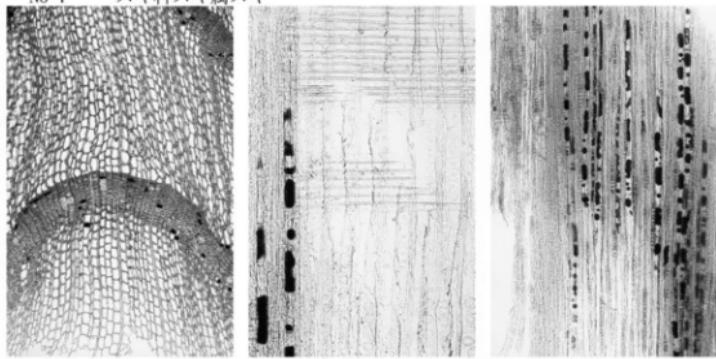
板目×40



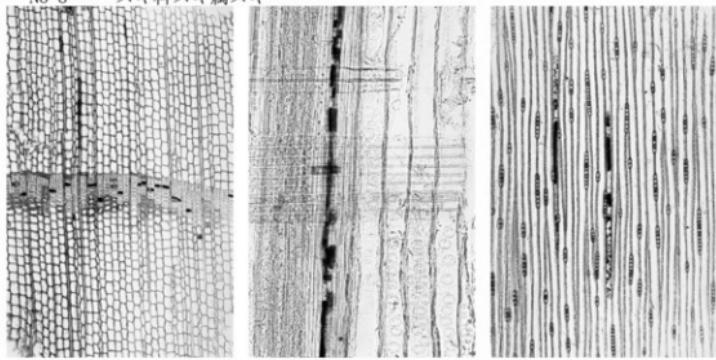
図版7 2次開室 さく 小粒品の厚膜微鏡写真(2)



No-7 スギ科スギ属スギ

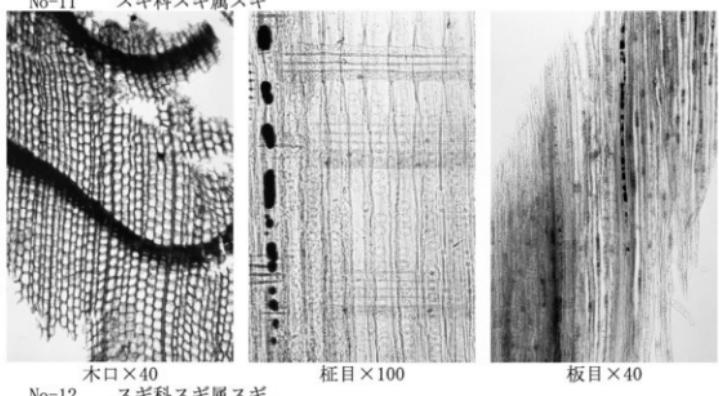
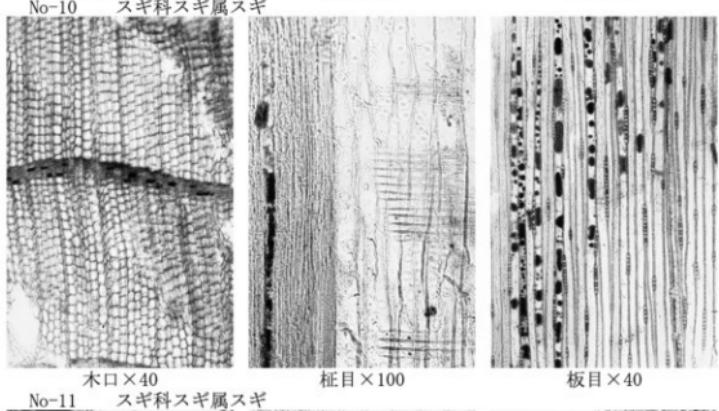
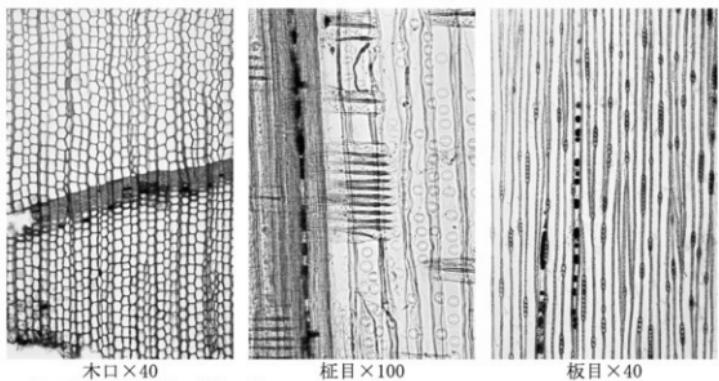


No-8 スギ科スギ属スギ

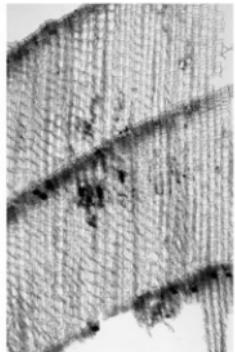


No-9 スギ科スギ属スギ

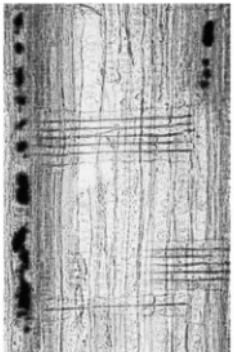
図版8 2次開拓 さく 小切品の樹理點微鏡写真③



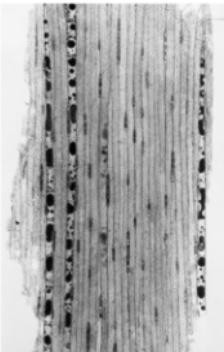
図版9 2次開室 さく 小切品の微細點微鏡写真④



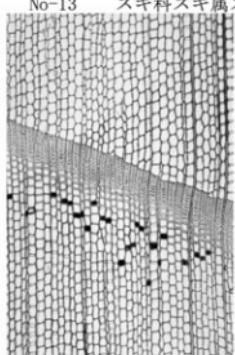
木口×40
No-13 スギ科スギ属スギ



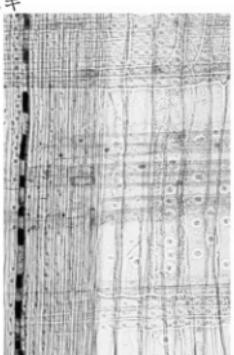
柾目×100



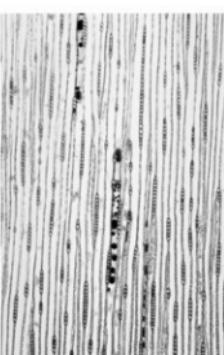
板目×40



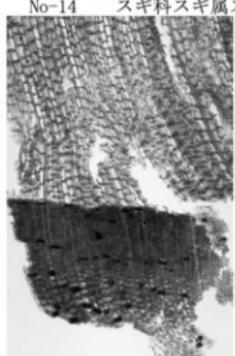
木口×40
No-14 スギ科スギ属スギ



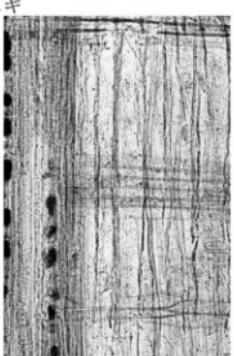
柾目×100



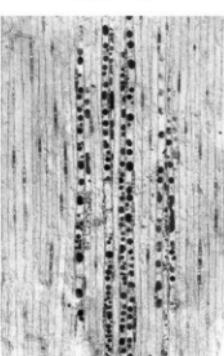
板目×40



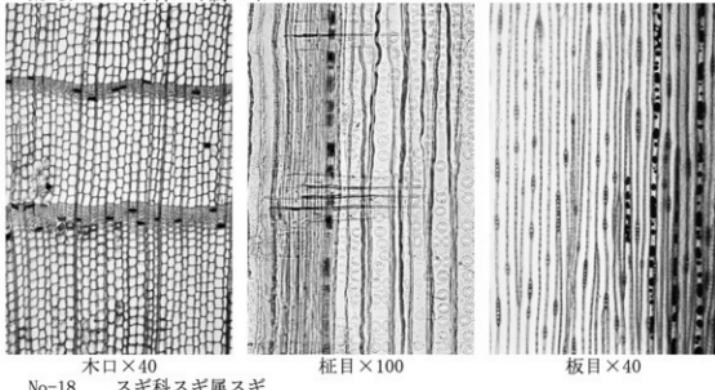
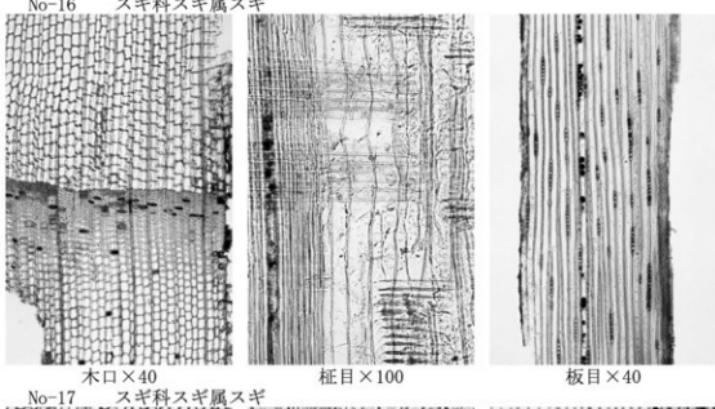
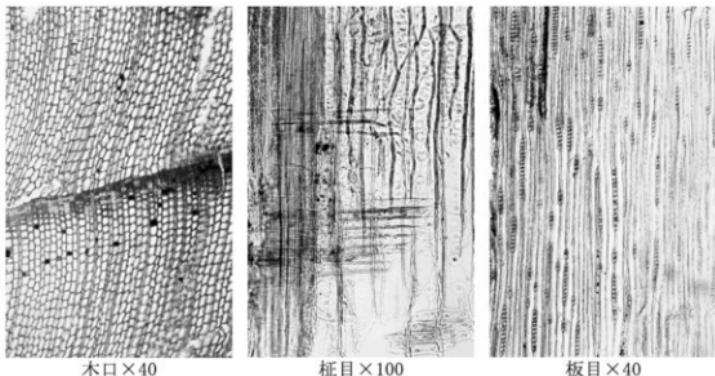
木口×40
No-15 スギ科スギ属スギ



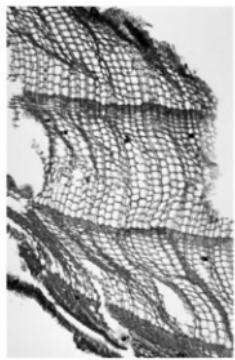
柾目×100



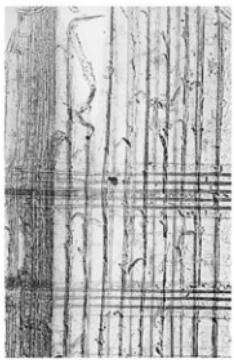
板目×40



図版11 2次閉管 さく 小粒品の厚薄點微鏡写真⑥



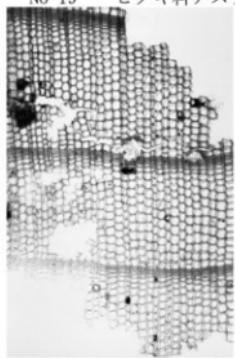
木口×40
No-19 ヒノキ科アスナロ属



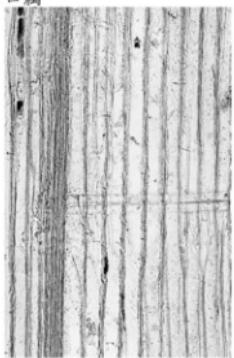
桿目×100



板目×40



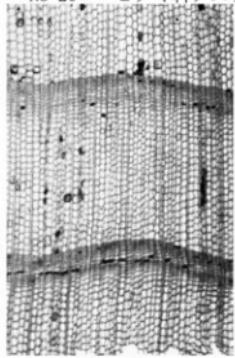
木口×40
No-20 ヒノキ科アスナロ属



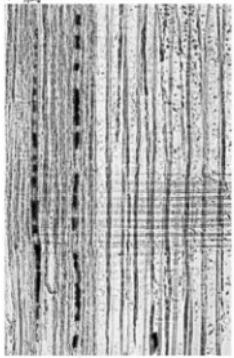
桿目×100



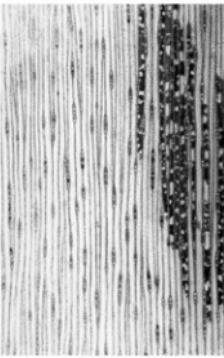
板目×40



木口×40
No-21 ヒノキ科アスナロ属

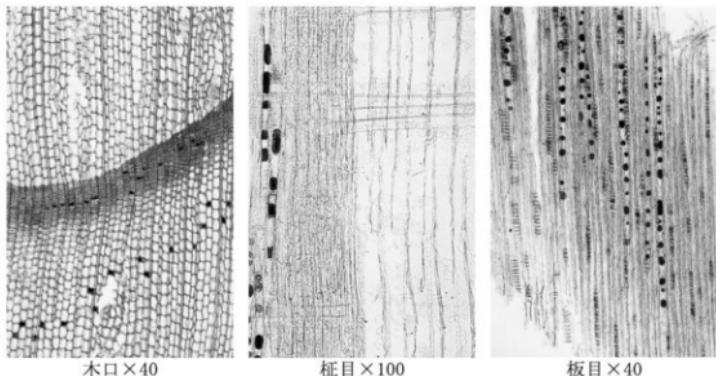


桿目×100

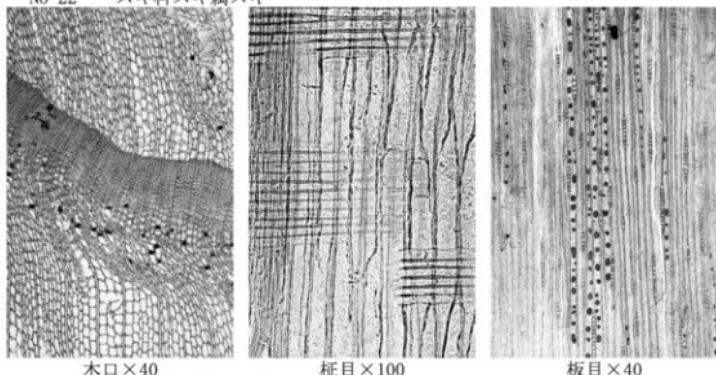


板目×40

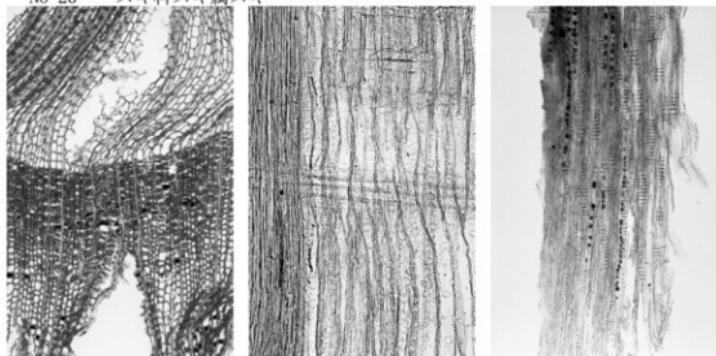
図版12 2次開室 さく 小粒品の厚膜微鏡写真⑦



No-22 スギ科スギ属スギ

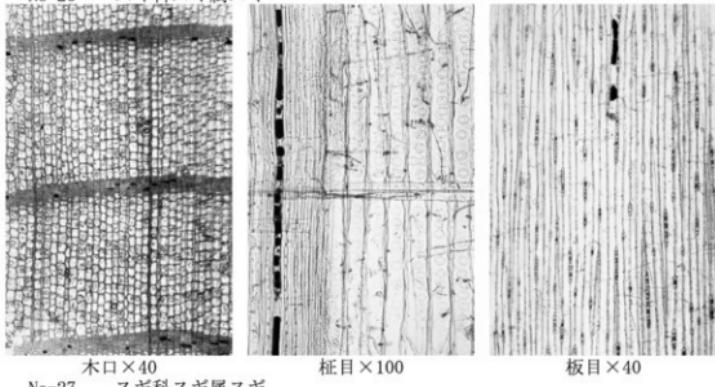
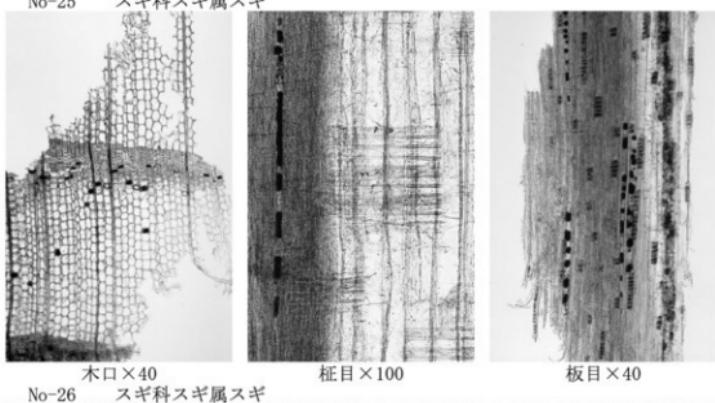
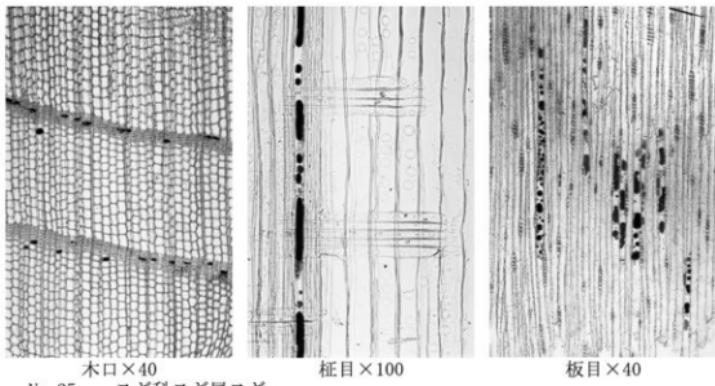


No-23 スギ科スギ属スギ

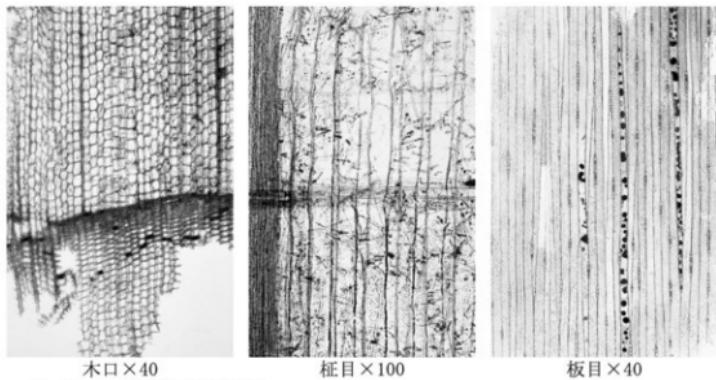


No-24 スギ科スギ属スギ

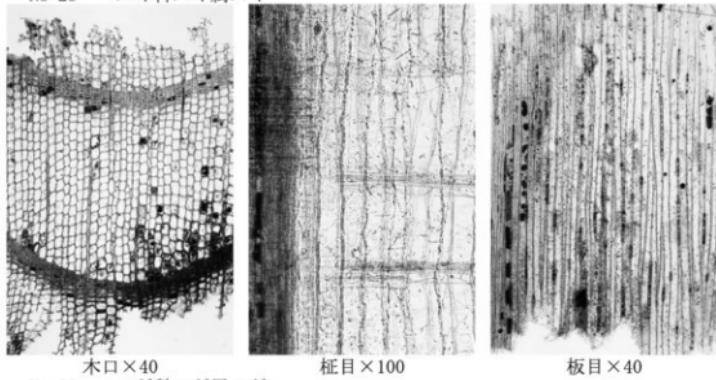
図版13 2次開室 さし 小枝品の厚壁部微細構造(8)



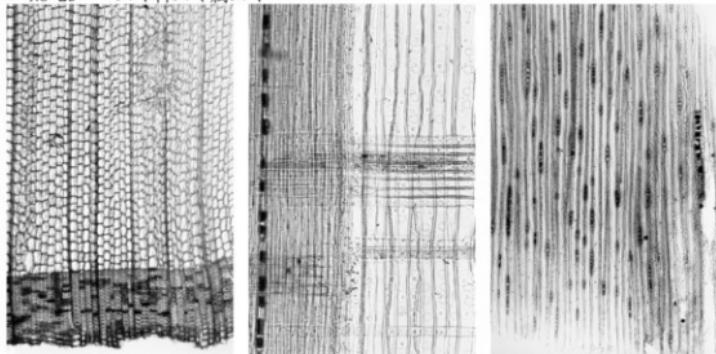
図版14 2次開室 さく 小形品の厚壁點微細孔目⑨



No-28 スギ科スギ属スギ

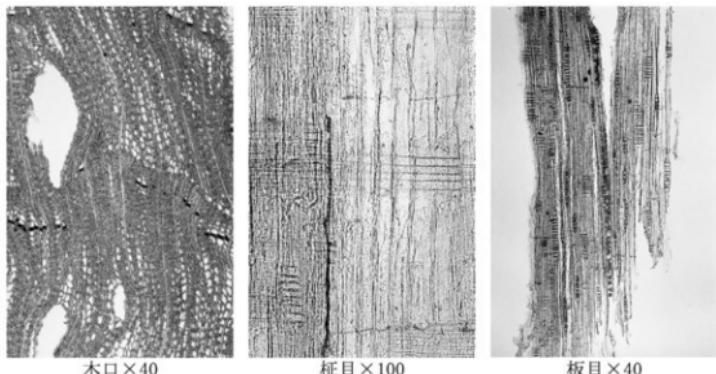


No-29 スギ科スギ属スギ

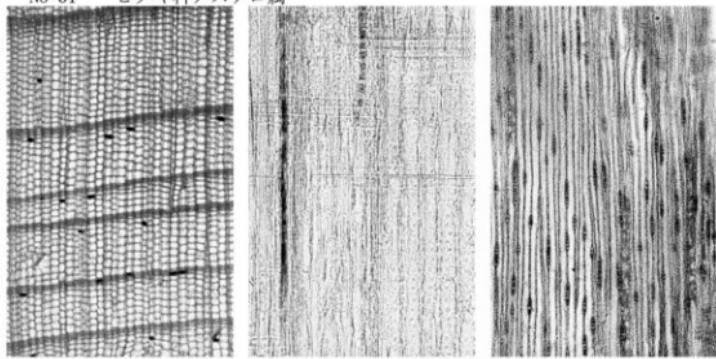


No-30 スギ科スギ属スギ

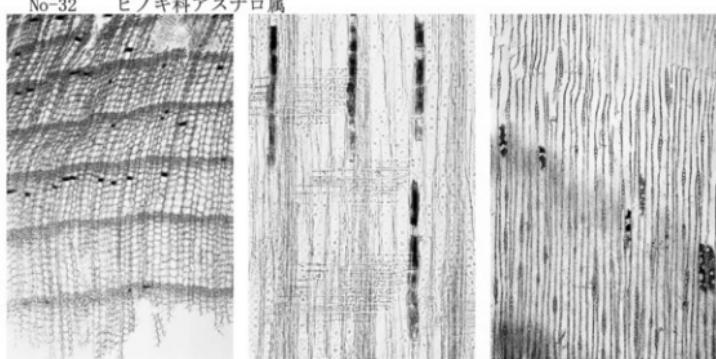
鉛筆15 2次開室 さく 小品の厚さは約1.5~1.8mm



No-31 ヒノキ科アスナロ属

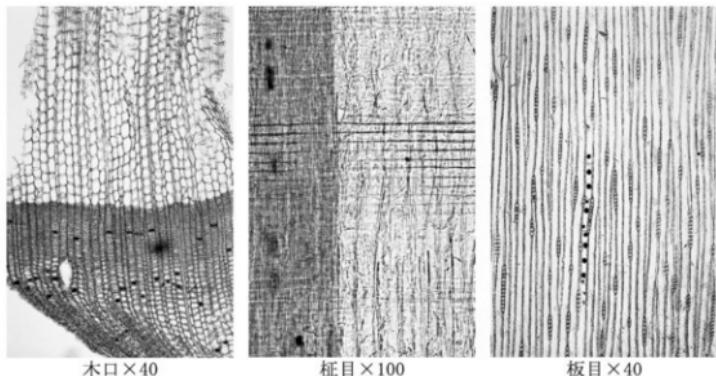


No-32 ヒノキ科アスナロ属

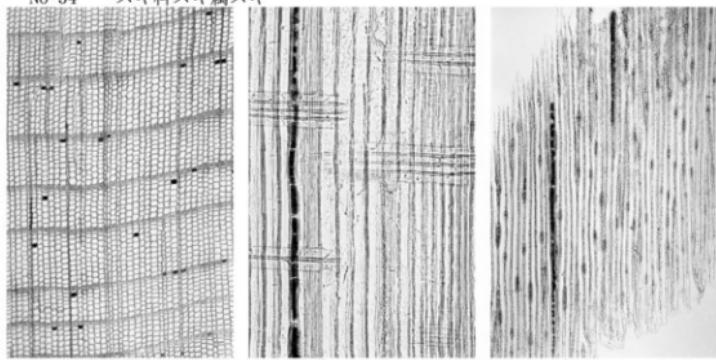


No-33 ヒノキ科アスナロ属

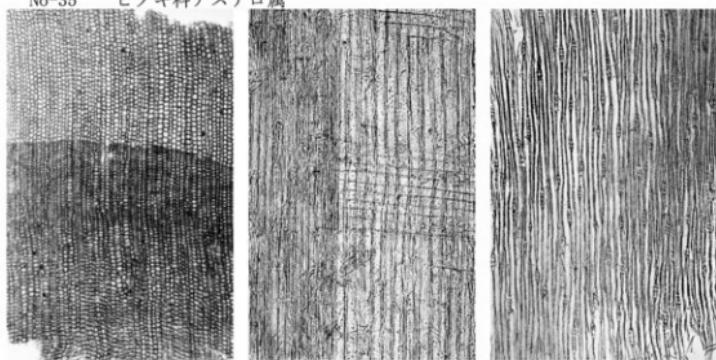
鉛版16 2次開拓 さざなみ品の多様點微細図 ⑪



No-34 スギ科スギ属スギ



No-35 ヒノキ科アスナロ属



No-36 コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ

図版17 2次開室 さく 小粒品の厚膜壁様子 9, 12

- 「第三回」『黙阿彌』(1988)
 長谷川康一・佐久間亮夫「生徒本部組織」『新説』(1982)
 佐久間亮夫「『さくじ』と『文學部』の解剖学的記載I~V」
 『新文学』第4号(1990)
 『新文学』第4号・付録「匿名文』と『新説』を編集I・II
 風見哲(1979)
 深澤和三「『魔術の解説』」『新説』(1997)
 余良きこと『アサヒ伊豆所』
 「余良きこと『アサヒ伊豆所』」昭和27年「文藝集成」近藤義民著(1985)
 余良きこと『アサヒ伊豆所』
 「余良きこと『アサヒ伊豆所』」昭和36年「文藝集成」近藤義民著(1985)
 『アサヒ伊豆所』
 『アサヒ伊豆所』
 Nikon
 MICROFLEX UFX-DX Type 115
 ◆3引交歎◆【3次供奉】
 『アサヒ』(1993)「アサヒ」における木更津特白日進夢を解釈成「一日目から入った」即、地野製糀も、地三毛芋も、地四郎第一号も、242p。

7 立花堂遺跡の自然科学分析

はじめに

「孔門退學は、詩文印序署に所存する季子時代から漢書時代の退場・退転が検討される退学である。唐季は、これまで3次唐季に亘り、各退場時の遷移の歴史学分析と退場場景分析の問題あるいは評議の論述を行っている。

ここでは、これらの成果を基に進歩の生物学分析についてまとめた。

a 試だとう所で器

第26番に、道の分野においてが集とした道場とその年代あるいは道場について示した。なお、部分分析では複数試験を分析しているが、道場の分野など「何」かが検出されなかった試験については省略してある。

ここでは、ヨリモト代とサ型の押戸などの淮積門の仕組み分析、ヨ安時代の溝淮積門の大型船頭淮積室、サ型の押戸淮積門の孔口淮積室、ヨ安時代の押戸構築部の木脚層室、ヨ安時代の「二事」などから得した結果の発見についてまとめた。

b まとめ

以上では、(1)地図および漂流復元、(2)活閑通退約、に分けてまとめてみた。

(1) 風切壁および風流傳元

ここでは、サトウ進植物の花粉分析、共生、遺伝学定、大型動物遺伝子定の成りを梗概述べる。

撫倉時代の♂♀ S E64・S E65、♀♀時代の♂♀ S E155の♂♀ 外骨頭櫛₂の検討において、♀♀時代および♂型では、進歩的辺縁部では片縁部にアカガシク底をリムにシイノキ底やヤマモモ底、モチノキ底などが主する黒変樹林が一部に成りし、また♂♀部には岸松林や柳林、コナラク底やクマシデクニアサダ底などの黒変林や變樹林も一部に主導していっていたことが推測されている。さらに、これら樹木に盛るようブドウ底やツタ底などのつる植物も主導していたと推測される。なお、♀♀時代の♀ S D152からは、エゴノキの木立地も主導していることから、これら樹木も第2波に主導していたことが推定されている。

狹倉時代の ♂ S E64等3尾の ♀ は、尾辺に棲息していた ♀ は、遺体の箇所からなるが、俗名数が少ないため尾辺墨乳を推定するには至らなかつた。なお、多くは厚生省や沖縄県の貯蔵標 ♀ からなる。

(2) 戯言および活劇連続物

ここでは、アおよびシ漁獲物の仔鱗片板、ス漁獲物から検出されたト型触角道管を室、ウ鱗片板の大きさ階級判定、エ鱗の数などをの成りを基に述べる。

漢倉時代の♂♂ S E64・S E65の「馬」の繪では、ソバやアブラナ科（アブラナ、ダイコンなど）の栽培の可能性が示されている。

ヨリ安時代の押野SE155の押野特許権登録の件
考證の検討では、イネ科が多く登録しており、その中にはイネと交雑される品種模様を示す特許が多く頒布されたことから、黒淵において特許が行われていたことが想定されている。ただし、収集した准種類は押野准種類ではないため、ヨリ安時代以前の准種類を示している可能性が高い。

平安時代の満 SD 152号からは、少數的多くのモモ核とウメ核が併記していることから、三種残渣として投擲されたものであることが推察された。

④ 安時代のすゝみ S E155 墓蓋部材の木札摩留定では、柱蓋材のスギあるいはヒノキ板の木札が利用

され、**半梁柱**と**半椽**に適応した木組の和戸が行われている。ただし、これららは構梁部材は、**半梁柱**の軒用材であることも考えられる。

一方、『じくぢ』SE155の構造図などは、8世紀以降で多く和戸されるヒノキ版の木組ではなく、スギ材を和戸している。

半椽などから門としている事は、平安時代および後醍醐天皇のいすれも集室と集庭されている。これらから平安時代へ後醍醐天皇での屋の和戸がうかがわれる。

おわりに

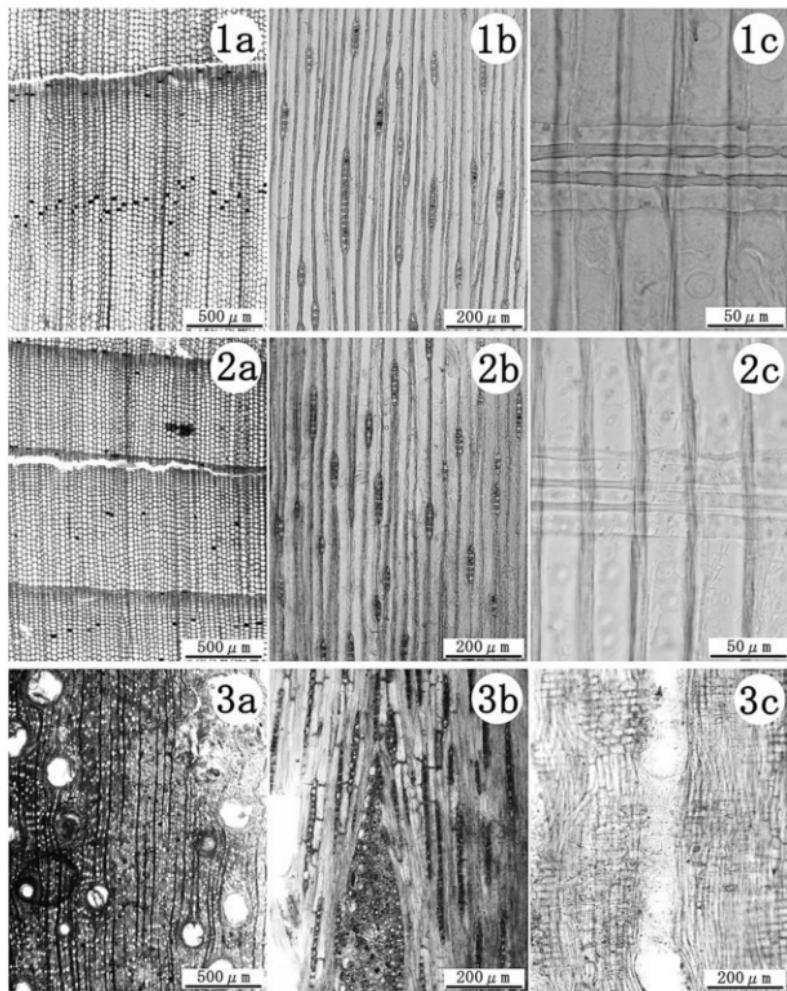
ここでは、平安時代および後醍醐天皇の遺構・遺物の花粉分析などを踏まえながら、集庭・集室および集庭廻りを行った。また、半椽に沿縫合部や木型施物遺物の集庭端頭から栽培および生活関連遺物の検討を行った。今後、集庭廻りの調査においても半椽の生息形態の検討を行うことにより、より精緻な集庭廻りおよび集庭流の得失が明らかになることを考える。

試料No.	報告番号	実測番号	遺構	種類	時期	樹種
1	371	3-001-01	SE155	曲物	平安後	スギ
2	370	3-002-01	SE155	曲物	平安後	スギ
3	369	3-003-01	SE155	曲物	平安後	スギ
4	379	3-007-01	SE155	隅柱	平安後	スギ
5	378	3-007-03	SE155	隅柱	平安後	スギ
6	380	3-007-02	SE155	隅柱	平安後	スギ
7	377	3-004-02	SE155	隅柱	平安後	スギ
8	359	3-007-04	SD152	底板	平安後	ヒノキ属
9	362	3-004-01	SD152	棒状	平安後	スギ
10	360	3-004-03	SD152	不明	平安後	アカガシ亜属
11	361	3-004-04	SD152	不明	平安後	ヒノキ属
12	373	3-005-03	SE155	縱板	平安後	ヒノキ属
13	374	3-006-02	SE155	縱板	平安後	ヒノキ属
14	376	3-005-02	SE155	縱板	平安後	ヒノキ属
15	375	3-005-01	SE155	縱板	平安後	ヒノキ属
16	372	3-006-01	SE155	縱板	平安後	ヒノキ属
17		実測なし	SE155	曲物	平安後	スギ

第25表 3次開室・ごとに小部品面積

試料No.	遺構	時代	対象堆積物	分析内容
1	SE57	奈良	埋土	花粉分析
			構築部材	木材樹種同定
2	SE63	鎌倉	埋土	花粉分析
			埋土	花粉分析
3	SE64	鎌倉	埋土	昆虫遺体同定
				花粉分析
4	SE65	鎌倉	埋土	花粉分析
5	SE68	鎌倉	埋土	花粉分析
6	SE155	平安後	井戸枠外側埋土	花粉分析
			構築部材	木材樹種同定
7	SD152	平安後	埋土	大型植物遺体同定
8	SD88	鎌倉		馬歯
9	SD106, v 4Pit13 掘方, SD98, 包含層	平安		馬歯

第26表 遺構とした追跡七分野内含



1a-1c. スギ (No.6) 2a-2c. ヒノキ属 (No.12) 3a-3c. アカガシ亜属 (No.10)

図版18 3次開きごとに分類品の導管壁微構造 (a: 疊状壁、b: 組織壁、c: 條紋壁)

VI 結 語

1 立花堂遺跡の遺構について

立花堂の調査では、①後堀代後御および余堀代後御、②安堀代後御、奥倉堀代の遺構を確認した。調査では南北に長く、その内を北御の溝が發掘調査を経るようになり、その発掘溝上に築跡が存在するような状況を呈している。

築跡については調査を二段階（3次調査を含む）と重複（2次調査を含む）で実施したが、いずれも②安堀代後御のものである。北溝では5段の堅土柱築跡を確認した。全て南北向である。軸立ちからおよそN10° E単斜（S B121・S B130・S B171）とほぼ直交する（S B129・S B172）の2列傾に分けられる。ほかにもピットが検出されており、調査を終えたこの周辺にひとつの築跡群が存在することが窺える。また、重複部ではS B41とS B42の2段を確認した。S B42については柱穴から北にしたむろが半片で、明確な北御の輪郭はできないが、余堀代後御に発達したと考えられるS E57の堅土を切り込んで柱穴が存在する。軸立ちはN5~6° Wである。S B41周辺には、ほかにも多くのピットが確認できることから複数段の築跡が想定できる。軸立ちはN5° Eである。これらの築跡に北東（N30° E）を増加するものは認められない。

北御については、余堀代後御のもの1本、②安堀代後御のもの1本、奥倉堀代のものを4本検出した。このうち10代の北御では木造の桟橋が柱孔に残り、奥倉堀代のものは空洞でありあろうことが確認できた。当御ぎが構造等となって現れた跡構造は複雑である。

今後の調査では溝の検出が非常に予測であった。特に余堀代後御から②安堀代後御、あるいは奥倉堀代までの遺構を含む溝群は、筆者追跡を終まつては流れ、埋まるというような状況であったと考えられる。異なる調査をかけて検討している筆者も、北御追跡での明確な北御跡はほとんど見られず、砂が多いか粘性が強いなど、筆者の状況のまま受けた筆跡したものである。また溝のうちには、溝中に沿うものやそれに接するものが多く、北御跡を増やすものはほとんど認められないことも注目すべき

点である。

2 周辺遺跡を含めた遺構の変遷

立花堂遺跡を含む、安瀬川と若狭川に挟まれた南北約1.9kmの範囲（猪内寺跡群および野原）では、①築跡遺跡②築跡をはじめ雪場堅土堤防や道路改築事業など数多の事業に伴って、ほぼ全域にわたって範囲確認調査が行われている。前記の範囲確認調査の結果、および前回は既報¹⁰⁾で報告されている¹¹⁾のでそれを参照されたい。北御に行われた範囲確認調査の跡跡名などは以下とのおりである。

- ②成元年度：①築跡遺跡②築跡（竹原道跡、式ノ浦道跡、三輪道跡）
- ③成9年度：栗原雪場堅土堤防（付属道跡重複部）
- ④成10年度：栗原雪場堅土堤防（付属道跡一部、付属道跡、築り道跡、三輪道跡）
- ⑤成11年度：栗原雪場堅土堤防（竹原道跡、式ノ浦道跡、笠生道跡、三輪道跡）
- ⑥成12年度：安瀬川猪内川改修（笠生道跡、三輪道跡）

- ⑦成14年度：栗原雪場堅土堤防（笠生道跡）

これらの範囲確認調査の結果を受けて、立花堂跡跡も②成8年度から以下のように行われ、今季報告する立花堂遺跡調査を含めて約37,000m²にも及ぶ範囲調査がなされている。前記を以下に示す。なお、報告書も調査路傍にそれぞれ印字されている。前記は註を参照されたい。

- ⑧成8年度：築り道跡（第1本）⁽¹²⁾ 6,620m
- ⑨成9年度：築り道跡（第2本）⁽¹³⁾ 3,140m
式ノ浦道跡（第1本）⁽¹⁴⁾ 5,100m
- ⑩成10年度：三輪道跡（第1本）⁽¹⁵⁾ 1,280m
付属道跡（第1本）⁽¹⁶⁾ 1,050m
- ⑪成11年度：築り道跡（第3本）⁽¹⁷⁾ 80m
築り道跡（第4本）⁽¹⁸⁾ 1,680m
付属道跡（第2本）⁽¹⁹⁾ 2,100m
- ⑫成12年度：笠生道跡（第1本）⁽²⁰⁾ 1,300m
笠生道跡（第2本）⁽²¹⁾ 400m
三輪道跡（第2本）⁽²²⁾ 1,300m
- ⑬成13年度：築り道跡（第5本）⁽²³⁾ 1,450m

	式ノゾ退跡 (第2次) ⁽¹⁾	400m
⑨成14年度：禁り退跡 (第6次) ⁽²⁾	2,858m	
禁り退跡 (第3次) ⁽³⁾	988m	
ミヅダ退跡 (第1次) ⁽⁴⁾	299m	
⑩成15年度：禁り退跡 (第7次) ⁽⁵⁾	1,403m	
禁り退跡 (第4次) ⁽⁶⁾	260m	
⑪成16年度：禁り退跡 (第8次) ⁽⁷⁾	1,583m	
⑫成17年度：ミヅダ退跡 (第2次) ⁽⁸⁾	2,035m	
⑬成18年度：ミヅダ退跡 (第3次) ⁽⁹⁾	1,726m	

以上の調査の結果から見えてくる、この流域の退跡の変遷を時代ごとにまとめておく。

(1) 季三当代

当期の退跡として明確なものは確認されていない。退跡はミヅダ退跡で少しあるが、これは「」している。

○印の退跡は、禁り退跡および式ノゾ退跡、笠作退跡で確認できる。

禁り退跡の第1次調査および第6次調査では合計14箇の野穴沿辺のほか、渓や谷なども多く検出されている。この禁り退跡に重複する式ノゾ退跡でも調査の一部に集められており、矢張り1箇をはじめ渓などが検出され、禁り退跡とともに、他の集落を形成していたものと想われる。また、このような辺境地のほかに、渓や谷などが多く検出されているが、これは「」である。しかし、それぞれの退跡は必ずしも確認されていないことを覚えておこう。

笠作退跡で確認されている退跡としては、△形渓谷底が△形渓谷底である。ほかにも△形渓谷底になるような渓谷も神奈川で確認されており、豈管でも3箇所を有する可能性がある。これらの△形渓谷底は、△形渓谷底に△形渓谷底されており、前述の禁り退跡の集落よりは辺境地である。

当期の退跡は禁り退跡で確認できるほかは、はつきりしない。退跡は禁り退跡をはじめ、△形渓谷底なども検出されている。

(2) 亂流当代

この当期の退跡は全般とおして非常に散在的である。まず辺境地の退跡としては、禁り退跡の1次調査で矢張り1箇をはじめ△形渓谷底などが確認されており、矢張り1箇であるが、伊勢が1点しかついていることは特徴である。また、1次調査時に重複する2次調査の牽縛で式ノゾ退跡がま

とまってE13した渓谷が検出されており、集落底の北端の渓谷として確認できよう。また、1次調査時に重複する第4・5次調査でも、伊勢が1箇とされた墨田柱塗跡1箇とそれをコの字状にすむ柱塗跡や柱塗跡などを検出している。

ミヅダ退跡の第2次調査では、季三当代末から後半に定められる△形渓谷底ともいわれる渓谷が見つかっている。前述の禁り退跡の集落とこのミヅダ退跡の△形渓谷底を同じ集落底と區域として捉えるには、三沢川を境んで右側に約520mと左側がありすぎる程に違う。しかし、それぞれの退跡は辺境地に行われた範囲確認調査でも、実際辺境の退跡や退跡がほとんど確認されていないことを覚えておこう。それらの間隔を拾つて確認がある。

後期になると、禁り退跡のうち約760mの付近に退跡調査が行われた第2次調査で、墨田柱塗跡3箇や△形渓谷底などが確認されている。その付近の退跡では、柱塗跡などは見つかっていないが、△形渓谷底は、禁り退跡と辺境地の第1・2次調査などで数ヶ所の渓谷が検出している。辺境地に引き続き退跡密度は非常に高い。

以上のことから、辺境地の退跡は禁り退跡調査およびミヅダ退跡の調査調査に、後期退跡は付近退跡調査を含みとした調査調査に存在することが窺える。

(3) 飛鳥・奈良当代

この当期の退跡も飛鳥のかつてある。まず飛鳥当期の退跡としては、禁り退跡第4次調査において、墨田柱塗跡が2箇検出されている。これらは、△形渓谷底が△形渓谷底を呈しており、柱間が1m程度の規模の小さいものである。ほかに柱塗跡が見よううな△形渓谷底などは見つかっていない。

また、禁り退跡のうち約240mに位置する笠作退跡の第1次調査では、飛鳥・奈良当期の墨田柱塗跡が2箇、そのほか△形渓谷底などが確認されており、奈良当期の範囲確認調査の結果も見せて、まだ複数の柱塗跡が存在する可能性も示されている。ここでの柱塗跡2箇は△形渓谷底を呈することから、△形渓谷底を呈する柱塗跡として表示されている。

つぎに、奈良当期に定められる退跡としては、禁り退跡第6次調査で墨田柱塗跡1箇が確認されている。このほかにも、△形渓谷底が△形渓谷底として表示が

数枚焼成されており、なかに主激鉄のものが含まれている可能性も考えられるが、日記している進歩で余糸時代に埋立するものは少ない。また「じ替り進歩の2次調査では余糸時代後期に焼成される鉄が2本焼成されている。

主激鉄では、2次調査まで後期の鉄が1本も見つかった。いざれの進歩でも主激鉄は確認されていないが、主激鉄では主激鉄の進歩が2次調査をリムに日記していることから、調査を眞近に主激鉄が存在する可能性は充分考えられる。

以上のことから現在の安瀬川に近い「透視跡」にこの当頃の聚落が存在する状況が窺える。

(4) 3次時代

3次時代前半の進歩は、前代の聚落が確認された當時進歩や禁り進歩では見られず、代わって式ノ津進歩で見えて確認されている。進歩としては、久ミブランと「じらき」を増加し、規制をもつてかぶ居ミ柱進歩が14棟、その聚落の牽引をすすむと考えられる溝などである。牽引をすすむ溝は又ミ御の津流に設置されることから、道跡進歩の可能性も考えられている。このような、進歩が発達と並んで守御の構造をもつた聚落が、鉄頭まで確実に発達する。

鉄頭の進歩は、付属退跡傍流沖合の第2次調査まで主激鉄が見られる。「じ替り進歩」で主激鉄が行なわれており、主激鉄の時に焼成した状況が窺われる。

後期の進歩としては、禁り進歩眞近や主激鉄進歩眞近で見えることができる。禁り進歩第1・2・4・5次調査では主柱主柱が30棟、鉄頭が5本ほど、そのほか手や溝などが確認されている。特に主激鉄は、第1次調査でも安瀬川沿いに見付している。

また「主柱進歩」では、主柱主柱7棟および鉄頭1本、ほか溝などを検出した。この「主柱進歩」の調査を眞近で行われた範囲で確認されている。主柱主柱や主柱主柱、主柱主柱などが見つかっており、調査を含めた「主柱進歩」に主激鉄の聚落が広がるものと想われる。

以上のことから、3次時代は鉄頭に聚落が存在すること、式ノ津進歩の前半聚落が特徴あるものであること、それぞれの聚落が鉄頭で存在しているこ

と、後期聚落が安瀬川沿いの主柱進歩に集まっていることなどがいえる。

(5) 漢倉・主柱時代

この当頃になても進歩が漢宮に見られる場所は黒く、煙突わらず灰色的ではあるが、漢倉時代の進歩を確認した焼成が、前代までと比較して増加する。禁り進歩眞近、主柱進歩眞近、主柱が進歩から付属退跡傍流沖合・フナハチ沖合に広がる範囲で進歩や進歩が確認できる。

まず「前進歩の1次調査」では主柱進歩は見られないが鉄頭が2本焼成されている。また、検出されるのは「茶椀油および茶碗」が付属に日記しており、河川を輸送経路とした焼成の一端を知っていた焼成として確認されている⁽²⁰⁾。2次調査では主激鉄の鉄頭が3本や2本、主柱5本などが見つかっている。この主柱進歩では、主柱鉄頭に焼成される進歩も進歩の火災をリムに確認されている。

また「主柱が進歩の2次調査」では、鉄頭を4本焼成したが主柱進歩は見つかっていない。おそらく聚落が調査を眞近に広がっているものと思われる。

禁り進歩では7・8次調査をリムに主激鉄の進歩や進歩が確認されている。主柱の焼成は少ないが、昌香や茶椀を含む付属の進歩が付属した溝をはじめ、主柱蓋や手、鉄頭なども見つかっている。14世紀前半から15世紀初頭までの主柱鉄頭を検出で後期の進歩や進歩も確認できるが、13世紀主柱が主激鉄であろうことが培養されている。また「主柱」の付属には「船底石」があり、ここで確認した進歩に関しては、かつて存在したとされる「船底石」との関わりも含めた考察がなされている。

以上、この沖縄の歴史をこれまでの調査結果から整理してきたが、3次時代を通して進歩は単純的で、いずれも付属付属で確認している。範囲は漢宮調査から主柱進歩まで「進歩・進歩とも然し」とされる焼成および主柱進歩とされる焼成を含めていくと、安瀬川沿いに主柱が進歩から付属付属フナハチ沖合および主柱・主柱に張り出し、禁り進歩・式ノ津進歩までの範囲に大きな範囲としてのひとつのまとまりを認識できる。主柱この範囲は、現段階でも一般的な様相が窺い、このほかにも主柱進歩や主柱進歩などが、昌

に存在する様子が見てとれる。

また古墳においては、笠形洪溶や四押造がいくつか検出されており、全時代を通して、墳墓構造とはいえ決して安定した形ではなかったことが窺い知れる。その結果、前述のように、墳頂部で許するような集落が、堅られた墳墓構造に転々と墳墓できるような状況を作ったのである。

3 建物の時期と方向

「佐賀追跡」および「唐追跡」で検出された墳丘柱脚の鉢込みなどに、神らかの規則性が存在するか見当を付けることを目的に、古代～現代に分類される墳墓構造の「算定」を作成した（第27表）。禁り追跡第1・2次事例結果については既述を参照したが、鉢込みなどの詳細な情報は掲載されていない。そのため、既報掲載の結果からおおよその鉢込みを示めた（ただし、第27表には掲載しなかった）。

この結果、禁り追跡1次事例で検出した墳丘柱脚内には古墳（A～D）においてそれぞれ3つのまとまり（鉢込みによる）がみられる。B事例では、平安時代のものが9戸検出されており、墳墓配置に規則性は見られないが、N15° E3戸、N21～22° E2戸、N12° W2戸、そのほか2戸のように鉢込みによって数組ずつのまとまりに分けられる。D事例では、平安～奥倉伊豫に分類される墳墓を15戸検出している。これらは、3箇所にまとまっており、各場所でそれぞれの鉢込みを踏襲した、数少ないまで禁りがなされているようである。その鉢込みはN18～19° E、N27～28° E、N31～32° Eである。後2事例では久慈うち（N30° E）とほぼ一致する。2次事例でもまとまりは無いものの、墳丘柱脚が2戸検出されており、N21° E、N31° Eと1次事例で確認した鉢込みのいずれかに帰属する。

このようなまとまりが、1つの追跡だけでなく尋ねる追跡で見られないであろうか。第27表にまとめた結果から、追跡もしくは追跡でまとまる類似な墳墓群は、式ノヲ追跡以外では確認できないことがわかる。この式ノヲ追跡の平安時代以前の例が、全て久慈うちを指すするというのは、この地域において絶対的な例であり、久慈の平安時代を含む上でも脚注深い。

しかし、式ノヲ追跡墳墓群は特異で終始し、その傍目視する「平安寄附」の墳墓群には、所々で久慈うちにて開いた墳地が確認される。久慈は、久慈に規定されない数組ずつの墳地のまとまりが確認できるに止まるのである。現在まで久慈対の名残を存続く残す古墳で、式ノヲ追跡墳地以外、その久慈に規定される墳墓群が少ないことは、久慈の名残を存続するうえでも脚注深い事である。

ところで、禁り追跡で検出年代に分類される2戸の墳丘柱脚が確認されているが、これらは鉢込みがほぼ久慈うちで帰属する。このことから、済州塔寺跡によって久慈の平安がこの時期まで遡る可能性が増加している。しかし、墳地の柱穴から得た追跡はいずれも記片であるとしており、済との重複関係から当期が成立されているが、その済も「吸集時代以前」というものである。よって、この済だけでは極端に久慈の平安が飛鳥朝にまで遡るとは言いたい。

4 井戸について

3次にわたる「佐賀追跡」の発掘調査で確認したものは、余呂馬代1基、リ安馬代1基、浜倉馬代4基である。このうちリ代の2基は土塁、リ型のものが系巣りの井戸であった。ここでは、各井戸の構造をまとめ、唐追跡で検出されているものとの比較検討を試みる。

S E57は横板を積み上げて組み立てたもので、宇野整氏氏の室領¹⁰による「横板式鍵庭井戸」に想定し、その中でも「ぬちに済次の井戸込みをつけて組むもの」に該当される。「横板鍵井下き口型」ともいう。墨のリキプランは方形である。横板鍵は6段確認したが、墨のリの2枚の横板のみ深井からの口であった。横板全体の長さや口の長さは、リ戸に行くほど規格化が見られる傾向にあるようで、4号リ口は全長約108cm、口幅は約80cmにまとまる。底の深井は約3.7mである。自立追跡から余呂馬代後半に施設したものとすえられる。

S E155はガラスとして横板と板柱、隅柱を組み合わせており、宇野室領による「横板鍵井戸横板組め」に想定する。墨のリキプランは角柱形である。墨柱4本のうち3本までは横板組みを転用したとす

遺跡名	遺構番号	時 期	主軸	軸方向	規模(間×間)	備 考	参考文献
立花堂遺跡	S B 4 1	平安後期	南北	N 5° E	2 × 5		
	S B 4 2	古代	南北	N 5~6° W	2 × 3		
	S B 1 2 1	平安後期	南北	N 9~10° E	2 × 3		
	S B 1 2 9	平安後期	南北	N 2° W	2 × 4		
	S B 1 3 0	平安後期	南北	N 11~12° E	2 × 4		
	S B 1 7 1	平安後期	南北	N 8~9° E	2 × 4		
	S B 1 7 2	平安後期	南北	N 0~1° W	2 × 3		
武ノ坪遺跡	S B 1	奈良後期	南北	N 28° E	3 × 2	条里方向・平安初かも	4
	S B 2	平安初	東西	N 27° E	3 × 2	条里方向	4
	S B 3	平安初	南北	N 33° E	3 × 2	条里方向	4
	S B 4	平安初	南北	N 28° E	4 × 2	条里方向	4
	S B 5	平安初	南北	N 28° E	3 × 2	条里方向	4
	S B 6	平安初	東西	N 28° E	3 × 2	条里方向	4
	S B 7	平安初	南北	N 28° E	4 × 2	条里方向	4
	S B 8	平安初	東西	N 29° E	3 × 2	条里方向	4
	S B 9	平安初	東西	N 28° E	3 × 2	条里方向	4
	S B 6 5	奈良後期	東西	N 27° E	2 × 2	条里方向・平安初かも	4
	S B 7 3	平安初	東西	N 28° E	2 × (1)	条里方向	4
	S B 7 4	平安初	東西	N 30° E	2 × (1)	条里方向	4
	S B 7 5	平安初	南北	N 28° E	4 × (1)	条里方向	4
	S B 7 6	平安初	南北	N 30° E	2 × 4	条里方向	4
神戸遺跡	S B 1 6	奈良～平安	東西	N 38° E	(1) × (2)		6
	S B 1 0	平安	南北	N 15° E	(1) × 5		6
	S B 4 3		東西	N 6° E	4 × 2		7
	S B 4 4		南北	N 23° E	3 × 2		7
	S B 4 5		南北	N 2° W	3 × 2		7
	S B 5 2		東西？	N 32° E	5 × (1)	条里方向	7
	S B 5 3	平安	南北？	N 27° E	2 × (1)	条里方向	7
	S B 5 4	平安	東西？	N 16° E	(4) × (1)		7
	S B 5 5	平安	東西？	N 17° E	3 × (1)		7
	S B 5 7	平安	南北	N 23° E	4 × 2		7
	S B 5 8	平安	東西	N 26° E	5 × 4	総柱・四面庇か	7
	S B 5 9	平安	東西	N 26° E	5 × 4	総柱・四面庇か	7
	S B 6 0	平安	南北	N 23° E	3 × 4	総柱？・東面庇か	7
惣作遺跡	S B 5 9	飛鳥・奈良	東西？	N 45° E	(2) × 5		10
	S B 6 0	飛鳥・奈良		N 1~2° W	2 × ?		10
替田遺跡	S B 6 1 0		南北	N 39° E	4 × 3		8
	S B 6 1 2	平安後期	南北	N 23° E	5 × 3	総柱	8
	S B 6 1 3	平安後期	南北	N 23° E	3 × 1		8
	S B 6 2 1	飛鳥？	東西	N 28.5~33° E	3 × 3	条里方向	8
	S B 6 2 2	飛鳥？	東西	N 28.5° E	3 × 2	条里方向	8
	S B 1 5 4	古代～中世	東西	N 29° E	4 × 2	条里方向	13
	S B 1 5 5	古代～中世	東西	N 20° E	5 × 3		13
	S B 1 5 6	古代～中世	東西	N 5° E	(4) × 2		13
	S B 1 5 7	古代～中世	東西	N 14° E	(3) × (2)		13
	S B 1 5 8	古代～中世	東西	N 17° E	(4) × (1)		13
	S B 1 5 9		東西	N 36° E	(3) × (1)		13
	S B 1 6 0		東西	N 38° E	(3) × (1)		13
	S B 1 6 1		東西	N 27° E	5 × ?	条里方向	13
	S B 1 6 2	鎌倉	東西	N 37° E	(1) × (4)		13
	S B 3 4 3	古代	東西	N 10° E	5 × 3		13
	S B 3 4 4	古代末	東西	N 8° E	4 × 2		13
	S B 3 4 5	奈良	東西	N 19° W	(2) × (2)	総柱	13
	S B 3 4 6	古代以降	南北	N 2° E	3 × 2		13
	S B 3 4 7	古代末	正方形	N 7° W	2 × 2	総柱	13
	S B 3 4 8	古代末	南北	N 32° E	3 × 2	条里方向	13
	S B 3 4 9	古代	南北	N 26° W	4 × 2		13
	S B 3 5 0	古代	南北	N 37° E	3 × 3		13
	S B 3 5 1	中世	南北	N 16° E	3 × 3	総柱	13
	S B 3 5 2	中世	南北	N 1° W	2 × 2		13
	S B 3 5 4 9	中世	東西	N 21° E	5 × (2)	南東隅土坑	13

※なお、替田遺跡第1・2次調査は概略に詳細が掲載されていないためここでは割愛した。

※参考文献に記述の番号は、結語の【註】番号と対応する。

えられるもので、^二にぎし込まれたほうがぎ込の内部のように埋められている。残りの1本は^三棒子をそのまま使用している。いずれにも横桟をぎし込む柄は無い。横桟は1男しか強度できなかった。また、隻^六手事として^七竹を後見しており4男残っていた。^八から1~3男^九まではそれほどぎ登にぎは無く、^十と^{十一}が接するように組まれていたが、4男^{十二}は3男^{十三}とのぎ登のぎが大きい。そのため4男^{十四}を揚げ^{十五}した後、3男^{十六}の^{十七}竹を^{十八}えるために4男^{十九}に^{二十}を^{二十一}いていた(第21キ添強)。底の標高は約2.5mである。^{二十二}した進時は^{二十三}舟に^{二十四}ないが、^{二十四}時代後期のものと^{二十五}える。

S E63～65、S E68は壁^上から^下茶碗などが同じしており、横倉御の系^りの^うである。壁^の茶^うプランは4^手である。通^{とお}の^う御^ご間^ま御^ご門^{もん}から S E63・S E65→S E68→S E64の順に堅苦^{かたがた}されたとぞえられる。底^{そこ}の^う壁^はは S E63が約4.0m、S E65が約3.85m、S E68が約4.1m、S E64が約3.7mである。

以上の検討の結果に、それを進歩で検討したが

の構造と所産鳴鶴は見事に全てはまっている。

奥辻連弾でも多款のず打を検出している(第28表)。『前連弾』では1次事件で11点、2次事件で6点、3次事件で2点確認されている。そのほとんどがナリ(宇野原領三郎)争りに記述されるもので、争り争りと複数打である。そのほか三郎傍矢のもの3点が争り争りおよびナビ、近世(IV期)のもの2点、が「誰建あるいは誰建?」と載荷されており、これも専述のすず氏が増補する傾向にはほぼ当てはまる。ナビに記しては板垣連のものは然く、板垣連とず打を対比させたもののほか、前橋とず打を対比させたものである。

禁り進陣では16本の旗手を槍門している。小旗は3種類で1本、5代6本、9世7本、飛甲2本である。いずれも木綿および赤墨りの旗手で、9本は確認されていない。

笠作道助では「代の才」を1番輝かせている。輝
輝と見られる本物が居て」しているが、「恵みき」の
祭典が行われた豪華が残り、二層目を「才」として再評
価されていることから、才を認めるときに才を学
事は恵みきられたものであろうことが推察されてい
る。

これら屏辯道場での論辯結果でも、ほぼす野氏の主張が出てはまることがいえる。

また八谷算氏の槍部⁽¹⁰⁾によれば、三重界界では、
ナ世から近世にかけて安田川・安瀬川流域の上郡部
と下郡部の根柢が強なり、下郡部では奥山郡から數
多の土建戸⁽¹¹⁾の進謫屏が存在するのに反し、三重郡
では系墨り・木建戸⁽¹²⁾が併んでると増殖してい
る。このこともナ世が進謫はじめ陳辯進謫の戸の
槍門派とも矛盾しない。

最後に、「芦伊連夢のS E57の性格について述べておく。」鶴見氏は、「JR東海において車掌には4本取りきずり、車掌には横板車座きずりが多いことを守らかにした。また「氏は「太虎獣・達磨」のナリきずりを強くと横板車座きずりのナリの手法には1.1~1.65mまでのほぼ6号室があること、「車掌の腰から離れた床板や車掌においては横板車座きずりのナリきずりが多いことを示し、横板車座きずりが宮下では駅所の格式を、東京ではそこに邑むとの車掌を反映している駅所が違うことを明らかにしてい

遺跡名	遺構名	時期	施設	底の標高(m)	備考	参考文献
立花堂遺跡	SE 5 7	奈良後期	横板井籠組	3.7	花粉なし	
	SE 1 5 5	平安後期	縦板組隅柱横桟どめ	2.5	曲物4段	
	SE 6 3	13世紀前半	素掘り	4.0	花粉なし	
	SE 6 5	13世紀前半	素掘り	3.85		
	SE 6 8	13世紀中頃	素掘り	4.1	花粉なし	
	SE 6 4	14世紀初頭	素掘り	3.7	昆虫化石	
里前遺跡	SE 5	12世紀末～13世紀初頭	素掘り	1.0～1.22	底付近石組1段	5
	SE 6	12世紀末～13世紀前葉	素掘り	1.0～1.22		5
	SE 1 7	12世紀末～13世紀初頭	素掘り	-0.6～-0.2		5
	SE 1 6	12世紀末～13世紀初頭	素掘り	1.0～1.22		5
	SE 3	13世紀初頭～13世紀前葉	素掘り	1.7～1.9		5
	SE 5 4	13世紀中頃	結桶・曲物積上げ	3.4	こぶし大の石	12
	SE 1 8 4	13世紀前葉	縦板組隅柱横桟どめ	1.25	曲物2段	16
	SE 1 8 2	13世紀後葉	縦板組横桟どめ	0.9	縦板1枚板・曲物2段	16
	SE 7 1	13世紀前半	縦板組隅柱横桟どめ?		曲物1段	12
	SE 1 0 4	平安末～鎌倉	素掘り?	2.4		12
	SE 1 2 6	平安末～鎌倉	縦板組隅柱横桟どめ?	3.2	曲物3段	12
	SE 1 1	15世紀後半	素掘り	-0.6～-0.2		5
	SE 2	15世紀末	素掘り	1.7～1.9		5
	SE 6 8	室町～戦国	縦板組隅柱横桟どめ?	2.9	曲物1段	12
	SE 1 9	16世紀後半	石組?	1.7～1.9		5
	SE 9	17世紀前半	石組	1.7～1.9	下方に板材	5
	SE 1 1 6	中世	素掘り?	5.4		12
	SE 8	前身遺構が13世紀後葉以前	石組+木組	1.26～1.5		5
	SE 2 5	13世紀中葉～13世紀後葉	底に敷石	1.26～1.5		5
替田遺跡	SE 1 0 5	古墳		5.9		13
	SE 2 5 8	古代	素掘り	5.84		13
	SE 3 2 4	古代	縦板組横桟どめ	5.76		13
	SE 3 2 7	古代	素掘り?	5.52		13
	SE 6 1 1	平安前期	縦板組隅柱横桟どめ?	4.16	礎數	8
	SE 6 2 7	平安後期	曲物2段	4.6		8
	SE 1 0 6	平安中～後期	縦板組横桟どめ?	4.5?	底板3枚	13
	SE 2 5 9	中世前半	素掘り	4.72		13
	SE 2 6 3	中世前半	素掘り	5.04		13
	SE 1 2 9	鎌倉	曲物	4.8		13
	SE 2 6 6	中世		5.0	曲物破片?	13
	SE 2 6 7	中世	曲物?	4.08		13
	SE 2 9 9	中世	木組?	5.4		13
	SE 5 3 8	中世		4.4	曲物底板	13
懸作遺跡	SE 9	奈良～平安初頭	木組?	5.2	下層井戸、上層土坑	10

なお、替田遺跡第1・2次調査は概報に詳細が報告されていないためここでは割愛した。

※参考文献に記述の番号は、結語の【註】番号と対応する。

写28: 二子背追跡および伊豆追跡の主・支

る。また、宇野氏はこれに付け加えて系りや系統の模様が織錦^{アラシ}のほとんどは- 近のものは1.2m以上であることを指摘している³⁰⁾。

古代の模様が織錦^{アラシ}は、現存では「芦屋道夢」のほかに伊賀内に所存する森坂進夢³¹⁾や伊豆守良³²⁾に所存する「桜」³³⁾「守良進夢」³⁴⁾でも確認されている。

桜³⁵⁾と守良進夢³⁶⁾では、手舟と舟底が描かれており、格別の舟³⁷⁾には、添板が付属する。堅³⁸⁾船³⁹⁾舟⁴⁰⁾および「守良進夢」などから、守衛的性格を帯びる模様を指摘されている。

森坂進夢³¹⁾では、木建の舟は約138cm、横板の舟に柄⁴¹⁾を添け、斜柄によって二つの舟板を連結する構造になっており、さ⁴²⁾芦屋道夢³²⁾と比較して非常に「堅⁴³⁾」な造りの舟⁴⁴⁾である。また舟板には縫み上げる舟を固定するような装置がなされている。この森坂進夢は、飛鳥時代の守衛的な模様を示す「堅⁴⁵⁾」舟⁴⁶⁾や余良時代の規制的に配布する「堅⁴⁷⁾」舟⁴⁸⁾、舟頭と舟尾に舟頭⁴⁹⁾舟尾⁵⁰⁾舟⁵¹⁾舟⁵²⁾舟⁵³⁾舟⁵⁴⁾舟⁵⁵⁾舟⁵⁶⁾舟⁵⁷⁾舟⁵⁸⁾舟⁵⁹⁾舟⁶⁰⁾舟⁶¹⁾舟⁶²⁾舟⁶³⁾舟⁶⁴⁾舟⁶⁵⁾舟⁶⁶⁾舟⁶⁷⁾舟⁶⁸⁾舟⁶⁹⁾舟⁷⁰⁾舟⁷¹⁾舟⁷²⁾舟⁷³⁾舟⁷⁴⁾舟⁷⁵⁾舟⁷⁶⁾舟⁷⁷⁾舟⁷⁸⁾舟⁷⁹⁾舟⁸⁰⁾舟⁸¹⁾舟⁸²⁾舟⁸³⁾舟⁸⁴⁾舟⁸⁵⁾舟⁸⁶⁾舟⁸⁷⁾舟⁸⁸⁾舟⁸⁹⁾舟⁹⁰⁾舟⁹¹⁾舟⁹²⁾舟⁹³⁾舟⁹⁴⁾舟⁹⁵⁾舟⁹⁶⁾舟⁹⁷⁾舟⁹⁸⁾舟⁹⁹⁾舟¹⁰⁰⁾舟¹⁰¹⁾舟¹⁰²⁾舟¹⁰³⁾舟¹⁰⁴⁾舟¹⁰⁵⁾舟¹⁰⁶⁾舟¹⁰⁷⁾舟¹⁰⁸⁾舟¹⁰⁹⁾舟¹¹⁰⁾舟¹¹¹⁾舟¹¹²⁾舟¹¹³⁾舟¹¹⁴⁾舟¹¹⁵⁾舟¹¹⁶⁾舟¹¹⁷⁾舟¹¹⁸⁾舟¹¹⁹⁾舟¹²⁰⁾舟¹²¹⁾舟¹²²⁾舟¹²³⁾舟¹²⁴⁾舟¹²⁵⁾舟¹²⁶⁾舟¹²⁷⁾舟¹²⁸⁾舟¹²⁹⁾舟¹³⁰⁾舟¹³¹⁾舟¹³²⁾舟¹³³⁾舟¹³⁴⁾舟¹³⁵⁾舟¹³⁶⁾舟¹³⁷⁾舟¹³⁸⁾舟¹³⁹⁾舟¹⁴⁰⁾舟¹⁴¹⁾舟¹⁴²⁾舟¹⁴³⁾舟¹⁴⁴⁾舟¹⁴⁵⁾舟¹⁴⁶⁾舟¹⁴⁷⁾舟¹⁴⁸⁾舟¹⁴⁹⁾舟¹⁵⁰⁾舟¹⁵¹⁾舟¹⁵²⁾舟¹⁵³⁾舟¹⁵⁴⁾舟¹⁵⁵⁾舟¹⁵⁶⁾舟¹⁵⁷⁾舟¹⁵⁸⁾舟¹⁵⁹⁾舟¹⁶⁰⁾舟¹⁶¹⁾舟¹⁶²⁾舟¹⁶³⁾舟¹⁶⁴⁾舟¹⁶⁵⁾舟¹⁶⁶⁾舟¹⁶⁷⁾舟¹⁶⁸⁾舟¹⁶⁹⁾舟¹⁷⁰⁾舟¹⁷¹⁾舟¹⁷²⁾舟¹⁷³⁾舟¹⁷⁴⁾舟¹⁷⁵⁾舟¹⁷⁶⁾舟¹⁷⁷⁾舟¹⁷⁸⁾舟¹⁷⁹⁾舟¹⁸⁰⁾舟¹⁸¹⁾舟¹⁸²⁾舟¹⁸³⁾舟¹⁸⁴⁾舟¹⁸⁵⁾舟¹⁸⁶⁾舟¹⁸⁷⁾舟¹⁸⁸⁾舟¹⁸⁹⁾舟¹⁹⁰⁾舟¹⁹¹⁾舟¹⁹²⁾舟¹⁹³⁾舟¹⁹⁴⁾舟¹⁹⁵⁾舟¹⁹⁶⁾舟¹⁹⁷⁾舟¹⁹⁸⁾舟¹⁹⁹⁾舟²⁰⁰⁾舟²⁰¹⁾舟²⁰²⁾舟²⁰³⁾舟²⁰⁴⁾舟²⁰⁵⁾舟²⁰⁶⁾舟²⁰⁷⁾舟²⁰⁸⁾舟²⁰⁹⁾舟²¹⁰⁾舟²¹¹⁾舟²¹²⁾舟²¹³⁾舟²¹⁴⁾舟²¹⁵⁾舟²¹⁶⁾舟²¹⁷⁾舟²¹⁸⁾舟²¹⁹⁾舟²²⁰⁾舟²²¹⁾舟²²²⁾舟²²³⁾舟²²⁴⁾舟²²⁵⁾舟²²⁶⁾舟²²⁷⁾舟²²⁸⁾舟²²⁹⁾舟²³⁰⁾舟²³¹⁾舟²³²⁾舟²³³⁾舟²³⁴⁾舟²³⁵⁾舟²³⁶⁾舟²³⁷⁾舟²³⁸⁾舟²³⁹⁾舟²⁴⁰⁾舟²⁴¹⁾舟²⁴²⁾舟²⁴³⁾舟²⁴⁴⁾舟²⁴⁵⁾舟²⁴⁶⁾舟²⁴⁷⁾舟²⁴⁸⁾舟²⁴⁹⁾舟²⁵⁰⁾舟²⁵¹⁾舟²⁵²⁾舟²⁵³⁾舟²⁵⁴⁾舟²⁵⁵⁾舟²⁵⁶⁾舟²⁵⁷⁾舟²⁵⁸⁾舟²⁵⁹⁾舟²⁶⁰⁾舟²⁶¹⁾舟²⁶²⁾舟²⁶³⁾舟²⁶⁴⁾舟²⁶⁵⁾舟²⁶⁶⁾舟²⁶⁷⁾舟²⁶⁸⁾舟²⁶⁹⁾舟²⁷⁰⁾舟²⁷¹⁾舟²⁷²⁾舟²⁷³⁾舟²⁷⁴⁾舟²⁷⁵⁾舟²⁷⁶⁾舟²⁷⁷⁾舟²⁷⁸⁾舟²⁷⁹⁾舟²⁸⁰⁾舟²⁸¹⁾舟²⁸²⁾舟²⁸³⁾舟²⁸⁴⁾舟²⁸⁵⁾舟²⁸⁶⁾舟²⁸⁷⁾舟²⁸⁸⁾舟²⁸⁹⁾舟²⁹⁰⁾舟²⁹¹⁾舟²⁹²⁾舟²⁹³⁾舟²⁹⁴⁾舟²⁹⁵⁾舟²⁹⁶⁾舟²⁹⁷⁾舟²⁹⁸⁾舟²⁹⁹⁾舟³⁰⁰⁾舟³⁰¹⁾舟³⁰²⁾舟³⁰³⁾舟³⁰⁴⁾舟³⁰⁵⁾舟³⁰⁶⁾舟³⁰⁷⁾舟³⁰⁸⁾舟³⁰⁹⁾舟³¹⁰⁾舟³¹¹⁾舟³¹²⁾舟³¹³⁾舟³¹⁴⁾舟³¹⁵⁾舟³¹⁶⁾舟³¹⁷⁾舟³¹⁸⁾舟³¹⁹⁾舟³²⁰⁾舟³²¹⁾舟³²²⁾舟³²³⁾舟³²⁴⁾舟³²⁵⁾舟³²⁶⁾舟³²⁷⁾舟³²⁸⁾舟³²⁹⁾舟³³⁰⁾舟³³¹⁾舟³³²⁾舟³³³⁾舟³³⁴⁾舟³³⁵⁾舟³³⁶⁾舟³³⁷⁾舟³³⁸⁾舟³³⁹⁾舟³⁴⁰⁾舟³⁴¹⁾舟³⁴²⁾舟³⁴³⁾舟³⁴⁴⁾舟³⁴⁵⁾舟³⁴⁶⁾舟³⁴⁷⁾舟³⁴⁸⁾舟³⁴⁹⁾舟³⁵⁰⁾舟³⁵¹⁾舟³⁵²⁾舟³⁵³⁾舟³⁵⁴⁾舟³⁵⁵⁾舟³⁵⁶⁾舟³⁵⁷⁾舟³⁵⁸⁾舟³⁵⁹⁾舟³⁶⁰⁾舟³⁶¹⁾舟³⁶²⁾舟³⁶³⁾舟³⁶⁴⁾舟³⁶⁵⁾舟³⁶⁶⁾舟³⁶⁷⁾舟³⁶⁸⁾舟³⁶⁹⁾舟³⁷⁰⁾舟³⁷¹⁾舟³⁷²⁾舟³⁷³⁾舟³⁷⁴⁾舟³⁷⁵⁾舟³⁷⁶⁾舟³⁷⁷⁾舟³⁷⁸⁾舟³⁷⁹⁾舟³⁸⁰⁾舟³⁸¹⁾舟³⁸²⁾舟³⁸³⁾舟³⁸⁴⁾舟³⁸⁵⁾舟³⁸⁶⁾舟³⁸⁷⁾舟³⁸⁸⁾舟³⁸⁹⁾舟³⁹⁰⁾舟³⁹¹⁾舟³⁹²⁾舟³⁹³⁾舟³⁹⁴⁾舟³⁹⁵⁾舟³⁹⁶⁾舟³⁹⁷⁾舟³⁹⁸⁾舟³⁹⁹⁾舟⁴⁰⁰⁾舟⁴⁰¹⁾舟⁴⁰²⁾舟⁴⁰³⁾舟⁴⁰⁴⁾舟⁴⁰⁵⁾舟⁴⁰⁶⁾舟⁴⁰⁷⁾舟⁴⁰⁸⁾舟⁴⁰⁹⁾舟⁴¹⁰⁾舟⁴¹¹⁾舟⁴¹²⁾舟⁴¹³⁾舟⁴¹⁴⁾舟⁴¹⁵⁾舟⁴¹⁶⁾舟⁴¹⁷⁾舟⁴¹⁸⁾舟⁴¹⁹⁾舟⁴²⁰⁾舟⁴²¹⁾舟⁴²²⁾舟⁴²³⁾舟⁴²⁴⁾舟⁴²⁵⁾舟⁴²⁶⁾舟⁴²⁷⁾舟⁴²⁸⁾舟⁴²⁹⁾舟⁴³⁰⁾舟⁴³¹⁾舟⁴³²⁾舟⁴³³⁾舟⁴³⁴⁾舟⁴³⁵⁾舟⁴³⁶⁾舟⁴³⁷⁾舟⁴³⁸⁾舟⁴³⁹⁾舟⁴⁴⁰⁾舟⁴⁴¹⁾舟⁴⁴²⁾舟⁴⁴³⁾舟⁴⁴⁴⁾舟⁴⁴⁵⁾舟⁴⁴⁶⁾舟⁴⁴⁷⁾舟⁴⁴⁸⁾舟⁴⁴⁹⁾舟⁴⁵⁰⁾舟⁴⁵¹⁾舟⁴⁵²⁾舟⁴⁵³⁾舟⁴⁵⁴⁾舟⁴⁵⁵⁾舟⁴⁵⁶⁾舟⁴⁵⁷⁾舟⁴⁵⁸⁾舟⁴⁵⁹⁾舟⁴⁶⁰⁾舟⁴⁶¹⁾舟⁴⁶²⁾舟⁴⁶³⁾舟⁴⁶⁴⁾舟⁴⁶⁵⁾舟⁴⁶⁶⁾舟⁴⁶⁷⁾舟⁴⁶⁸⁾舟⁴⁶⁹⁾舟⁴⁷⁰⁾舟⁴⁷¹⁾舟⁴⁷²⁾舟⁴⁷³⁾舟⁴⁷⁴⁾舟⁴⁷⁵⁾舟⁴⁷⁶⁾舟⁴⁷⁷⁾舟⁴⁷⁸⁾舟⁴⁷⁹⁾舟⁴⁸⁰⁾舟⁴⁸¹⁾舟⁴⁸²⁾舟⁴⁸³⁾舟⁴⁸⁴⁾舟⁴⁸⁵⁾舟⁴⁸⁶⁾舟⁴⁸⁷⁾舟⁴⁸⁸⁾舟⁴⁸⁹⁾舟⁴⁹⁰⁾舟⁴⁹¹⁾舟⁴⁹²⁾舟⁴⁹³⁾舟⁴⁹⁴⁾舟⁴⁹⁵⁾舟⁴⁹⁶⁾舟⁴⁹⁷⁾舟⁴⁹⁸⁾舟⁴⁹⁹⁾舟⁵⁰⁰⁾舟⁵⁰¹⁾舟⁵⁰²⁾舟⁵⁰³⁾舟⁵⁰⁴⁾舟⁵⁰⁵⁾舟⁵⁰⁶⁾舟⁵⁰⁷⁾舟⁵⁰⁸⁾舟⁵⁰⁹⁾舟⁵¹⁰⁾舟⁵¹¹⁾舟⁵¹²⁾舟⁵¹³⁾舟⁵¹⁴⁾舟⁵¹⁵⁾舟⁵¹⁶⁾舟⁵¹⁷⁾舟⁵¹⁸⁾舟⁵¹⁹⁾舟⁵²⁰⁾舟⁵²¹⁾舟⁵²²⁾舟⁵²³⁾舟⁵²⁴⁾舟⁵²⁵⁾舟⁵²⁶⁾舟⁵²⁷⁾舟⁵²⁸⁾舟⁵²⁹⁾舟⁵³⁰⁾舟⁵³¹⁾舟⁵³²⁾舟⁵³³⁾舟⁵³⁴⁾舟⁵³⁵⁾舟⁵³⁶⁾舟⁵³⁷⁾舟⁵³⁸⁾舟⁵³⁹⁾舟⁵⁴⁰⁾舟⁵⁴¹⁾舟⁵⁴²⁾舟⁵⁴³⁾舟⁵⁴⁴⁾舟⁵⁴⁵⁾舟⁵⁴⁶⁾舟⁵⁴⁷⁾舟⁵⁴⁸⁾舟⁵⁴⁹⁾舟⁵⁵⁰⁾舟⁵⁵¹⁾舟⁵⁵²⁾舟⁵⁵³⁾舟⁵⁵⁴⁾舟⁵⁵⁵⁾舟⁵⁵⁶⁾舟⁵⁵⁷⁾舟⁵⁵⁸⁾舟⁵⁵⁹⁾舟⁵⁶⁰⁾舟⁵⁶¹⁾舟⁵⁶²⁾舟⁵⁶³⁾舟⁵⁶⁴⁾舟⁵⁶⁵⁾舟⁵⁶⁶⁾舟⁵⁶⁷⁾舟⁵⁶⁸⁾舟⁵⁶⁹⁾舟⁵⁷⁰⁾舟⁵⁷¹⁾舟⁵⁷²⁾舟⁵⁷³⁾舟⁵⁷⁴⁾舟⁵⁷⁵⁾舟⁵⁷⁶⁾舟⁵⁷⁷⁾舟⁵⁷⁸⁾舟⁵⁷⁹⁾舟⁵⁸⁰⁾舟⁵⁸¹⁾舟⁵⁸²⁾舟⁵⁸³⁾舟⁵⁸⁴⁾舟⁵⁸⁵⁾舟⁵⁸⁶⁾舟⁵⁸⁷⁾舟⁵⁸⁸⁾舟⁵⁸⁹⁾舟⁵⁹⁰⁾舟⁵⁹¹⁾舟⁵⁹²⁾舟⁵⁹³⁾舟⁵⁹⁴⁾舟⁵⁹⁵⁾舟⁵⁹⁶⁾舟⁵⁹⁷⁾舟⁵⁹⁸⁾舟⁵⁹⁹⁾舟⁶⁰⁰⁾舟⁶⁰¹⁾舟⁶⁰²⁾舟⁶⁰³⁾舟⁶⁰⁴⁾舟⁶⁰⁵⁾舟⁶⁰⁶⁾舟⁶⁰⁷⁾舟⁶⁰⁸⁾舟⁶⁰⁹⁾舟⁶¹⁰⁾舟⁶¹¹⁾舟⁶¹²⁾舟⁶¹³⁾舟⁶¹⁴⁾舟⁶¹⁵⁾舟⁶¹⁶⁾舟⁶¹⁷⁾舟⁶¹⁸⁾舟⁶¹⁹⁾舟⁶²⁰⁾舟⁶²¹⁾舟⁶²²⁾舟⁶²³⁾舟⁶²⁴⁾舟⁶²⁵⁾舟⁶²⁶⁾舟⁶²⁷⁾舟⁶²⁸⁾舟⁶²⁹⁾舟⁶³⁰⁾舟⁶³¹⁾舟⁶³²⁾舟⁶³³⁾舟⁶³⁴⁾舟⁶³⁵⁾舟⁶³⁶⁾舟⁶³⁷⁾舟⁶³⁸⁾舟⁶³⁹⁾舟⁶⁴⁰⁾舟⁶⁴¹⁾舟⁶⁴²⁾舟⁶⁴³⁾舟⁶⁴⁴⁾舟⁶⁴⁵⁾舟⁶⁴⁶⁾舟⁶⁴⁷⁾舟⁶⁴⁸⁾舟⁶⁴⁹⁾舟⁶⁵⁰⁾舟⁶⁵¹⁾舟⁶⁵²⁾舟⁶⁵³⁾舟⁶⁵⁴⁾舟⁶⁵⁵⁾舟⁶⁵⁶⁾舟⁶⁵⁷⁾舟⁶⁵⁸⁾舟⁶⁵⁹⁾舟⁶⁶⁰⁾舟⁶⁶¹⁾舟⁶⁶²⁾舟⁶⁶³⁾舟⁶⁶⁴⁾舟⁶⁶⁵⁾舟⁶⁶⁶⁾舟⁶⁶⁷⁾舟⁶⁶⁸⁾舟⁶⁶⁹⁾舟⁶⁷⁰⁾舟⁶⁷¹⁾舟⁶⁷²⁾舟⁶⁷³⁾舟⁶⁷⁴⁾舟⁶⁷⁵⁾舟⁶⁷⁶⁾舟⁶⁷⁷⁾舟⁶⁷⁸⁾舟⁶⁷⁹⁾舟⁶⁸⁰⁾舟⁶⁸¹⁾舟⁶⁸²⁾舟⁶⁸³⁾舟⁶⁸⁴⁾舟⁶⁸⁵⁾舟⁶⁸⁶⁾舟⁶⁸⁷⁾舟⁶⁸⁸⁾舟⁶⁸⁹⁾舟⁶⁹⁰⁾舟⁶⁹¹⁾舟⁶⁹²⁾舟⁶⁹³⁾舟⁶⁹⁴⁾舟⁶⁹⁵⁾舟⁶⁹⁶⁾舟⁶⁹⁷⁾舟⁶⁹⁸⁾舟⁶⁹⁹⁾舟⁷⁰⁰⁾舟⁷⁰¹⁾舟⁷⁰²⁾舟⁷⁰³⁾舟⁷⁰⁴⁾舟⁷⁰⁵⁾舟⁷⁰⁶⁾舟⁷⁰⁷⁾舟⁷⁰⁸⁾舟⁷⁰⁹⁾舟⁷¹⁰⁾舟⁷¹¹⁾舟⁷¹²⁾舟⁷¹³⁾舟⁷¹⁴⁾舟⁷¹⁵⁾舟⁷¹⁶⁾舟⁷¹⁷⁾舟⁷¹⁸⁾舟⁷¹⁹⁾舟⁷²⁰⁾舟⁷²¹⁾舟⁷²²⁾舟⁷²³⁾舟⁷²⁴⁾舟⁷²⁵⁾舟⁷²⁶⁾舟⁷²⁷⁾舟⁷²⁸⁾舟⁷²⁹⁾舟⁷³⁰⁾舟⁷³¹⁾舟⁷³²⁾舟⁷³³⁾舟⁷³⁴⁾舟⁷³⁵⁾舟⁷³⁶⁾舟⁷³⁷⁾舟⁷³⁸⁾舟⁷³⁹⁾舟⁷⁴⁰⁾舟⁷⁴¹⁾舟⁷⁴²⁾舟⁷⁴³⁾舟⁷⁴⁴⁾舟⁷⁴⁵⁾舟⁷⁴⁶⁾舟⁷⁴⁷⁾舟⁷⁴⁸⁾舟⁷⁴⁹⁾舟⁷⁵⁰⁾舟⁷⁵¹⁾舟⁷⁵²⁾舟⁷⁵³⁾舟⁷⁵⁴⁾舟⁷⁵⁵⁾舟⁷⁵⁶⁾舟⁷⁵⁷⁾舟⁷⁵⁸⁾舟⁷⁵⁹⁾舟⁷⁶⁰⁾舟⁷⁶¹⁾舟⁷⁶²⁾舟⁷⁶³⁾舟⁷⁶⁴⁾舟⁷⁶⁵⁾舟⁷⁶⁶⁾舟⁷⁶⁷⁾舟⁷⁶⁸⁾舟⁷⁶⁹⁾舟⁷⁷⁰⁾舟⁷⁷¹⁾舟⁷⁷²⁾舟⁷⁷³⁾舟⁷⁷⁴⁾舟⁷⁷⁵⁾舟⁷⁷⁶⁾舟⁷⁷⁷⁾舟⁷⁷⁸⁾舟⁷⁷⁹⁾舟⁷⁸⁰⁾舟⁷⁸¹⁾舟⁷⁸²⁾舟⁷⁸³⁾舟⁷⁸⁴⁾舟⁷⁸⁵⁾舟⁷⁸⁶⁾舟⁷⁸⁷⁾舟⁷⁸⁸⁾舟⁷⁸⁹⁾舟⁷⁹⁰⁾舟⁷⁹¹⁾舟⁷⁹²⁾舟⁷⁹³⁾舟⁷⁹⁴⁾舟⁷⁹⁵⁾舟⁷⁹⁶⁾舟⁷⁹⁷⁾舟⁷⁹⁸⁾舟⁷⁹⁹⁾舟⁸⁰⁰⁾舟⁸⁰¹⁾舟⁸⁰²⁾舟⁸⁰³⁾舟⁸⁰⁴⁾舟⁸⁰⁵⁾舟⁸⁰⁶⁾舟⁸⁰⁷⁾舟⁸⁰⁸⁾舟⁸⁰⁹⁾舟⁸¹⁰⁾舟⁸¹¹⁾舟⁸¹²⁾舟⁸¹³⁾舟⁸¹⁴⁾舟⁸¹⁵⁾舟⁸¹⁶⁾舟⁸¹⁷⁾舟⁸¹⁸⁾舟⁸¹⁹⁾舟⁸²⁰⁾舟⁸²¹⁾舟⁸²²⁾舟⁸²³⁾舟⁸²⁴⁾舟⁸²⁵⁾舟⁸²⁶⁾舟⁸²⁷⁾舟⁸²⁸⁾舟⁸²⁹⁾舟⁸³⁰⁾舟⁸³¹⁾舟⁸³²⁾舟⁸³³⁾舟⁸³⁴⁾舟⁸³⁵⁾舟⁸³⁶⁾舟⁸³⁷⁾舟⁸³⁸⁾舟⁸³⁹⁾舟⁸⁴⁰⁾舟⁸⁴¹⁾舟⁸⁴²⁾舟⁸⁴³⁾舟⁸⁴⁴⁾舟⁸⁴⁵⁾舟⁸⁴⁶⁾舟⁸⁴⁷⁾舟⁸⁴⁸⁾舟⁸⁴⁹⁾舟⁸⁵⁰⁾舟⁸⁵¹⁾舟⁸⁵²⁾舟⁸⁵³⁾舟⁸⁵⁴⁾舟⁸⁵⁵⁾舟⁸⁵⁶⁾舟⁸⁵⁷⁾舟⁸⁵⁸⁾舟⁸⁵⁹⁾舟⁸⁶⁰⁾舟⁸⁶¹⁾舟⁸⁶²⁾舟⁸⁶³⁾舟⁸⁶⁴⁾舟⁸⁶⁵⁾舟⁸⁶⁶⁾舟⁸⁶⁷⁾舟⁸⁶⁸⁾舟⁸⁶⁹⁾舟⁸⁷⁰⁾舟⁸⁷¹⁾舟⁸⁷²⁾舟⁸⁷³⁾舟⁸⁷⁴⁾舟⁸⁷⁵⁾舟⁸⁷⁶⁾舟⁸⁷⁷⁾舟⁸⁷⁸⁾舟⁸⁷⁹⁾舟⁸⁸⁰⁾舟⁸⁸¹⁾舟⁸⁸²⁾舟⁸⁸³⁾舟⁸⁸⁴⁾舟⁸⁸⁵⁾舟⁸⁸⁶⁾舟⁸⁸⁷⁾舟⁸⁸⁸⁾舟⁸⁸⁹⁾舟⁸⁹⁰⁾舟⁸⁹¹⁾舟⁸⁹²⁾舟⁸⁹³⁾舟⁸⁹⁴⁾舟⁸⁹⁵⁾舟⁸⁹⁶⁾舟⁸⁹⁷⁾舟⁸⁹⁸⁾舟⁸⁹⁹⁾舟⁹⁰⁰⁾舟⁹⁰¹⁾舟⁹⁰²⁾舟⁹⁰³⁾舟⁹⁰⁴⁾舟⁹⁰⁵⁾舟⁹⁰⁶⁾舟⁹⁰⁷⁾舟⁹⁰⁸⁾舟⁹⁰⁹⁾舟⁹¹⁰⁾舟⁹¹¹⁾舟⁹¹²⁾舟⁹¹³⁾舟⁹¹⁴⁾舟⁹¹⁵⁾舟⁹¹⁶⁾舟⁹¹⁷⁾舟⁹¹⁸⁾舟⁹¹⁹⁾舟⁹²⁰⁾舟⁹²¹⁾舟⁹²²⁾舟⁹²³⁾舟⁹²⁴⁾舟⁹²⁵⁾舟⁹²⁶⁾舟⁹²⁷⁾舟⁹²⁸⁾舟⁹²⁹⁾舟⁹³⁰⁾舟⁹³¹⁾舟⁹³²⁾舟⁹³³⁾舟⁹³⁴⁾舟⁹³⁵⁾舟⁹³⁶⁾舟⁹³⁷⁾舟⁹³⁸⁾舟⁹³⁹⁾舟⁹⁴⁰⁾舟⁹⁴¹⁾舟⁹⁴²⁾舟⁹⁴³⁾舟⁹⁴⁴⁾舟⁹⁴⁵⁾舟⁹⁴⁶⁾舟⁹⁴⁷⁾舟⁹⁴⁸⁾舟⁹⁴⁹⁾舟⁹⁵⁰⁾舟⁹⁵¹⁾舟⁹⁵²⁾舟⁹⁵³⁾舟⁹⁵⁴⁾舟⁹⁵⁵⁾舟⁹⁵⁶⁾舟⁹⁵⁷⁾舟⁹⁵⁸⁾舟⁹⁵⁹⁾舟⁹⁶⁰⁾舟⁹⁶¹⁾舟⁹⁶²⁾舟⁹⁶³⁾舟⁹⁶⁴⁾舟⁹⁶⁵⁾舟⁹⁶⁶⁾舟⁹⁶⁷⁾舟⁹⁶⁸⁾舟⁹⁶⁹⁾舟⁹⁷⁰⁾舟⁹⁷¹⁾舟⁹⁷²⁾舟⁹⁷³⁾舟⁹⁷⁴⁾舟⁹⁷⁵⁾舟⁹⁷⁶⁾舟⁹⁷⁷⁾舟⁹⁷⁸⁾舟⁹⁷⁹⁾舟⁹⁸⁰⁾舟⁹⁸¹⁾舟⁹⁸²⁾舟⁹⁸³⁾舟⁹⁸⁴⁾舟⁹⁸⁵⁾舟⁹⁸⁶⁾舟⁹⁸⁷⁾舟⁹⁸⁸⁾舟⁹⁸⁹⁾舟⁹⁹⁰⁾舟⁹⁹¹⁾舟⁹⁹²⁾舟⁹⁹³⁾舟⁹⁹⁴⁾舟⁹⁹⁵⁾舟⁹⁹⁶⁾舟⁹⁹⁷⁾舟⁹⁹⁸⁾舟⁹⁹⁹⁾舟¹⁰⁰⁰⁾舟¹⁰⁰¹⁾舟¹⁰⁰²⁾舟¹⁰⁰³⁾舟¹⁰⁰⁴⁾舟¹⁰⁰⁵⁾舟¹⁰⁰⁶⁾舟¹⁰⁰⁷⁾舟¹⁰⁰⁸⁾舟¹⁰⁰⁹⁾舟¹⁰¹⁰⁾舟¹⁰¹¹⁾舟¹⁰¹²⁾舟¹⁰¹³⁾舟¹⁰¹⁴⁾舟¹⁰¹⁵⁾舟¹⁰¹⁶⁾舟¹⁰¹⁷⁾舟¹⁰¹⁸⁾舟¹⁰¹⁹⁾舟¹⁰²⁰⁾舟¹⁰²¹⁾舟¹⁰²²⁾舟¹⁰²³⁾舟¹⁰²⁴⁾舟¹⁰²⁵⁾舟¹⁰²⁶⁾舟¹⁰²⁷⁾舟¹⁰²⁸⁾舟¹⁰²⁹⁾舟¹⁰³⁰⁾舟¹⁰³¹⁾舟¹⁰³²⁾舟¹⁰³³⁾舟¹⁰³⁴⁾舟¹⁰³⁵⁾舟¹⁰³⁶⁾舟¹⁰³⁷⁾舟¹⁰³⁸⁾舟¹⁰³⁹⁾舟¹⁰⁴⁰⁾舟¹⁰⁴¹⁾舟¹⁰⁴²⁾舟¹⁰⁴³⁾舟¹⁰⁴⁴⁾舟¹⁰⁴⁵⁾舟¹⁰⁴⁶⁾舟¹⁰⁴⁷⁾舟¹⁰⁴⁸⁾舟¹⁰⁴⁹⁾舟¹⁰⁵⁰⁾舟¹⁰⁵¹⁾舟¹⁰⁵²⁾舟¹⁰⁵³⁾舟¹⁰⁵⁴⁾舟¹⁰⁵⁵⁾舟¹⁰⁵⁶⁾舟¹⁰⁵⁷⁾舟¹⁰⁵⁸⁾舟¹⁰⁵⁹⁾舟¹⁰⁶⁰⁾舟¹⁰⁶¹⁾舟¹⁰⁶²⁾舟¹⁰⁶³⁾舟¹⁰⁶⁴⁾舟¹⁰⁶⁵⁾舟¹⁰⁶⁶⁾舟¹⁰⁶⁷⁾舟¹⁰⁶⁸⁾舟¹⁰⁶⁹⁾舟¹⁰⁷⁰⁾舟¹⁰⁷¹⁾舟¹⁰⁷²⁾舟¹⁰⁷³⁾舟¹⁰⁷⁴⁾舟¹⁰⁷⁵⁾舟¹⁰⁷⁶⁾舟¹⁰⁷⁷⁾舟¹⁰⁷⁸⁾舟¹⁰⁷⁹⁾舟¹⁰⁸⁰⁾舟¹⁰⁸¹⁾舟¹⁰⁸²⁾舟¹⁰⁸³⁾舟¹⁰⁸⁴⁾舟¹⁰⁸⁵⁾舟¹⁰⁸⁶⁾舟¹⁰⁸⁷⁾舟¹⁰⁸⁸⁾舟¹⁰⁸⁹⁾舟¹⁰⁹⁰⁾舟¹⁰⁹¹⁾舟¹⁰⁹²⁾舟¹⁰⁹³⁾舟¹⁰⁹⁴⁾舟¹⁰⁹⁵⁾舟¹⁰⁹⁶⁾舟¹⁰⁹⁷⁾舟¹⁰⁹⁸⁾舟¹⁰⁹⁹⁾舟¹¹⁰⁰⁾舟¹¹⁰¹⁾舟¹¹⁰²⁾舟¹¹⁰³⁾舟¹¹⁰⁴⁾舟¹¹⁰⁵⁾舟¹¹⁰⁶⁾舟¹¹⁰⁷⁾舟¹¹⁰⁸⁾舟¹¹⁰⁹⁾舟¹¹¹⁰⁾舟¹¹¹¹⁾舟¹¹¹²⁾舟¹¹¹³⁾舟¹¹¹⁴⁾舟¹¹¹⁵⁾舟¹¹¹⁶⁾舟¹¹¹⁷⁾舟¹¹¹⁸⁾舟¹¹¹⁹⁾舟¹¹²⁰⁾舟¹¹²¹⁾舟¹¹²²⁾舟¹¹²³⁾舟¹¹²⁴⁾舟¹¹²⁵⁾舟¹¹²⁶⁾舟¹¹²⁷⁾舟¹¹²⁸⁾舟¹¹²⁹⁾舟¹¹³⁰⁾舟¹¹³¹⁾舟¹¹³²⁾舟¹¹³³⁾舟¹¹³⁴⁾舟¹¹³⁵⁾舟¹¹³⁶⁾舟¹¹³⁷⁾舟¹¹³⁸⁾舟¹¹³⁹⁾舟¹¹⁴⁰⁾舟¹¹⁴¹⁾舟¹¹⁴²⁾舟¹¹⁴³⁾舟¹¹⁴⁴⁾舟¹¹⁴⁵⁾舟¹¹⁴⁶⁾舟¹¹⁴⁷⁾舟¹¹⁴⁸⁾舟¹¹⁴⁹⁾舟¹¹⁵⁰⁾舟¹¹⁵¹⁾舟¹¹⁵²⁾舟¹¹⁵³⁾舟¹¹⁵⁴⁾舟¹¹⁵⁵⁾舟¹¹⁵⁶⁾舟¹¹⁵⁷⁾舟¹¹⁵⁸⁾舟¹¹⁵⁹⁾舟¹¹⁶⁰⁾舟¹¹⁶¹⁾舟¹¹⁶²⁾舟¹¹⁶³⁾舟¹¹⁶⁴⁾舟¹¹⁶⁵⁾舟¹¹⁶⁶⁾舟¹¹⁶⁷⁾舟¹¹⁶⁸⁾舟¹¹⁶⁹⁾舟¹¹⁷⁰⁾舟¹¹⁷¹⁾舟¹¹⁷²⁾舟¹¹⁷³⁾舟¹¹⁷⁴⁾舟¹¹⁷⁵⁾舟¹¹⁷⁶⁾舟¹¹⁷⁷⁾舟¹¹⁷⁸⁾舟¹¹⁷⁹⁾舟¹¹⁸⁰⁾舟¹¹⁸¹⁾舟¹¹⁸²⁾舟¹¹⁸³⁾舟¹¹⁸⁴⁾舟¹¹⁸⁵⁾舟¹¹⁸⁶⁾舟¹¹⁸⁷⁾舟¹¹⁸⁸⁾舟¹¹⁸⁹⁾舟¹¹⁹⁰⁾舟¹¹⁹¹⁾舟¹¹⁹²⁾舟¹¹⁹³⁾舟¹¹⁹⁴⁾舟¹¹⁹⁵⁾舟¹¹⁹⁶⁾舟¹¹⁹⁷⁾舟¹¹⁹⁸⁾舟¹¹⁹⁹⁾舟¹²⁰⁰⁾舟¹²⁰¹⁾舟¹²⁰²⁾舟¹²⁰³⁾舟¹²⁰⁴⁾舟¹²⁰⁵⁾舟¹²⁰⁶⁾舟¹²⁰⁷⁾舟¹²⁰⁸⁾舟¹²⁰⁹⁾舟¹²¹⁰⁾舟¹²

「神鏡」と名乗られた床羽身器の鏡が出土している³⁰。

いずれにしても、「刀鏡」という言葉は2文字の熟語として認識されていたものというよりは「刀」「鏡」という一字でも祥²となる一字を組み合わせて、よりる祥の意味を響くする意匠で書かれ、神らかの祭神に見合されたものと考えられる。

今も出土した昂首³器は、前述したように床羽身器と並び、²茶碗がほとんどである。これらは、ひとつの追模からまとめて出土したものではない。しかし自古⁴追模などを研究していくと、床羽身器については全て清および⁵追模から出土しておらず、1点ずつではなく2~4点ほどまとめて見つかっていることが注目される。前述のSD146・166のほかSD152からは3点出土⁶している。残念ながらいずれも裏面のため名乗られた文字は下字であるが、この清からは「昇も出土⁷しており、祭神と昂首³器との関連を知る上で非常に興味深い。

また床羽身器の昂首³がほとんど二字であるのにに対して、²茶碗の昂首³が「〇」や「+」の電号などが多いことにも注目される。これらは、²の昂首³器が出土した⁸追模や⁹追模でも甚多く確認されており¹⁰、この昂首³の昂首³器としては普遍的なものである。

以上、今までの調査で出土した昂首³器について概観してきたが、²が追模の昂首³床羽身器の出土¹¹は、周辺で出土された追模と比較して多いものである。精緻をして比較したものではないが、前述の¹²追模や¹³追模などでも¹⁴安後期~奥義時代の頭と¹⁵される集落があるにもかかわらず、²茶碗の昂首³器の多さと比較して、昂首³床羽身器の多さは驚いたるものである。このことから考えても、²が追模の¹⁶時代後期集落の船頭¹⁷が浮かび上がるのではないだろうか。

6 立花堂遺跡の評価

これまで、周辺追模を含め、²が追模の特徴などを考察してきた。ここで改めてまとめを行う。

まず、²茶碗¹⁸と¹⁹自らからの出土²⁰ではあるが、学習²¹期から後期頭の追模が数点出土²²している。²が後期になると、年代に応じて追模²³が導入、後期の追模を²⁴に含む清などが確認されるようになる。

余談²⁵ 塔跡は見つかっていないが、後期²⁶に魔除²⁷したと考えられる²⁸を1基検出した。これは前述したように、規模はとくに大きいものではないが、構造的に「宝瓶」や「有²⁹首の基數」との関連も考えられる。しかし、塔跡が見つかっていないことをはじめ、昂首³器は1点のみの出土³⁰、そのうえ未梢も確認されておらず、ほかの文系からこれを待えるものはない。周辺の調査を待って、再度検討を加えることがあるが、²が³¹も含めて埋没しておく。

追模³² ほかの昂首³と比較して追模³³が増加し、とくに後期に増加する追模を³⁴に検出できる。昂首³柱³⁵をはじめ、²と³⁶である。ここで昂首³できるのは、周辺追模と比較して昂首³の床羽身器が多いこと、祭神に製造する可能性のある「刀鏡」という昂首³が3点出ていること、²と³⁷に残る「³⁸」が出土³⁹していることが挙げられる。これらのことから、今も出土⁴⁰した²が⁴¹の昂首³に祭神と街中に製造する昂首³が存在した可能性が考えられよう。

また、数点の無首⁴²や⁴³と⁴⁴から⁴⁵までの追模が確認される清から⁴⁶の羽⁴⁷の裏面が出土⁴⁸しており、周辺で鋳造が行われていた⁴⁹可能性を示すものとして注目される。⁵⁰安後期の⁵¹は、界隈では多々⁵²和型⁵³に所存する⁵⁴を⁵⁵見られるが、非常に少ない。

なお、⁵⁶後⁵⁷(793)に安後期は⁵⁸の⁵⁹となっている⁶⁰。このような歴史的変遷も⁶¹追模の勢⁶²と神⁶³の関わりがあるのかもしれない。

おわりに

今も行った⁶⁴が追模の⁶⁵調査⁶⁶で、⁶⁷成8年度から連続的に行われてきた⁶⁸中⁶⁹地⁷⁰および⁷¹周辺の⁷²はひとまず終焉を迎える。⁷³が追模では、余り⁷⁴、⁷⁵安後期の昂首³床羽身器⁷⁶や⁷⁷の出土⁷⁸など、船頭⁷⁹ある追模・⁸⁰清を確認することができた。また⁸¹でも述べてきたように、⁸²追模を含む周辺の⁸³から数々の見事な成⁸⁴を得ることができた。しかし、決してこの⁸⁵の勢⁸⁶が全て明らかになったわけではなく、今後⁸⁷でいかなければならぬ調査⁸⁸も多く残っている。とくに⁸⁹代から⁹⁰期⁹¹にかけての⁹²の勢⁹³は非常に興味

深く、様々な検討を加える余地がある。今後の報道がその検討から毫遅れの歴史の解説へのひとつの支柱となり得ることを祈念したい。

【註】

- (1) 三重県議会・伊勢センター「伊勢進歩」(第2号)・
「伊勢進歩」(第3号)『児童虐待報道』(2001?)
三重県議会・伊勢センター「伊勢進歩」(第2号)『児
童虐待報道』(2006?)
- (2) 三重県議会・伊勢センター「伊勢進歩」(第23号)『夢連絡
三重県議会・伊勢児童虐待報道X』(1997?)
なお、今度以降の報道者が同行される。
三重県議会・伊勢センター「伊勢進歩」(第23号)『夢連絡
(10?)』『夢連絡に伴う「伊勢進歩」(第1・2号)
児童虐待報道』(2008?)
- (3) 三重県議会・伊勢センター「伊勢進歩」(第23号)『夢連絡
三重県議会・伊勢児童虐待報道X』(1998?)
かねては専門(2)に記した段落まで削除。
- (4) 三重県議会・伊勢センター「伊勢進歩」(第23号)『夢連絡
三重県議会・伊勢児童虐待報道X』(1998?)
三重県議会・伊勢センター「伊勢進歩」(第23号)『夢連絡
児童虐待に伴う「武ノ内進歩児童虐待報道」(2006?)
- (5) 三重県議会・伊勢センター「伊勢進歩」(第23号)『夢連絡
(10?)』『夢連絡に伴う「伊勢進歩児童虐待報道」(2002?)
- (6) 三重県議会・伊勢センター「伊勢進歩児童虐待報道
一丸化報道会』(1999?)
- (7) 三重県議会・伊勢センター「伊勢進歩」(第2号)・
「伊勢進歩」(第3号)『児童虐待報道』(2001?)
- (8) 三重県議会・伊勢センター「伊勢進歩」(第4号)『児
童虐待報道』(2004?)
- (9) 専門(7)で証に記す。
- (10) 三重県議会・伊勢センター『認定進歩児童虐待報道』
(2002?)
- (11) 三重県議会・伊勢センター『認定進歩』(第2号)『児
童虐待報道』(2002?)
- (12) 三重県議会・伊勢センター『伊勢進歩』(第2号)『児
童虐待報道』(2005?)
- (13) 三重県議会・伊勢センター『伊勢進歩』(第5号～第
8号)『児童虐待報道』(2007?)
- (14) 専門(13)で証に記す。
- (15) 専門(13)で証に記す。
- (16) 三重県議会・伊勢センター『伊勢進歩』(第3・4号)
『児童虐待報道』(2006?)
- (17) 今書
- (18) 専門(13)で証に記す。
- (19) 専門(16)で証に記す。
- (20) 専門(13)で証に記す。
- (21) 今書
- (22) 今書
- (23) ひざ写真「伊勢進歩における李三郎落の模様」(『伊
勢進歩』(第5号～第8号)『児童虐待報道』) 三重県議
会・伊勢センター 2007?
- (24) 伊勢坂崎「論議1 安藤洋と児童虐待報道」(『伊勢
進歩』(第5号)と「沖縄構造」 宮? 著者) 2007?
- (25) 今書『伊勢進歩』(『伊勢』第65号第5号 伊勢市
議会 1982?)
- (26) 今書 『「伊勢進歩」と「伊勢」—三重県内の市政か
ら見たその使い分け』(『伊勢見立』第8号 三重県
議会・伊勢センター 1999?)
- (27) 久保一義『「伊勢進歩」のアート』(『伊勢マガジン』151号
1967?)
- (28) 専門(25)で証に記す。
- (29) 三重県議会・伊勢センター「森田進歩」(『伊勢見立』
第12号 2002?)
- (30) 三重県議会・伊勢センター「田中 安芸郡安芸町 沢
川 お山進歩」(昭和55年度 三重県議会議員選挙運動
三重県議会・伊勢児童虐待報道) 1981?
- (31) 斎宮駿也・横田鶴『限りから寛めたで守たちー斎宮駿
也の忍者ご器』(1997?)
- (32) 不安要素で伊勢センターほか『各県西部三三進歩一
矢切久・跡見三重県議会・伊勢児童虐待報道書V(各県六
月2?)』(1990?)
- (33) 鹿野博一郎『郡議員による忍者ご器の性格』(『名古屋市
民・忍者ご器』忍者ご器の構造と性格をめぐつて—現行法規による伊勢所 全員で伊勢を
所 2003?)
- (34) 専門(30)で証に記す。
- (35) 川川幸『忍者ご器の伊勢』(『川心で館 2000?)
- (36) 東条弘志『名古屋市で宇宙船の伊勢』(東京ガルバ
2000?)
- (37) 川崎宏司『ヨリのあまご器について』(『伊勢進歩
(第5号～第8号)『児童虐待報道』) 三重県議会・伊
勢センター 2007?
- (38) 佐野みゆ『伊勢・伊勢の歴史的歩きつけ』(『伊勢
郡内伊勢13 郡内をつなぐ』 新・鈴村文化 2007?)

写 真 図 版



伊勢崎市
（ゆきから）



伊勢崎市
（ゆきから）



2次開削工 通水（向日・佐賀から）



2次開削工 通水（向日・佐賀から）



2次開墾地 通角（北西から）



2次開墾地 通角（南西から）



2次開削工 金剛 (じんごうから)



2次開削工 金剛 (じんごうから)



3次防除圃地 全景 (北東から)



3次防除圃地 全景 (南西から)



3次沈降防護工 全景 (左から)



3次沈降防護工 全景 (右から)



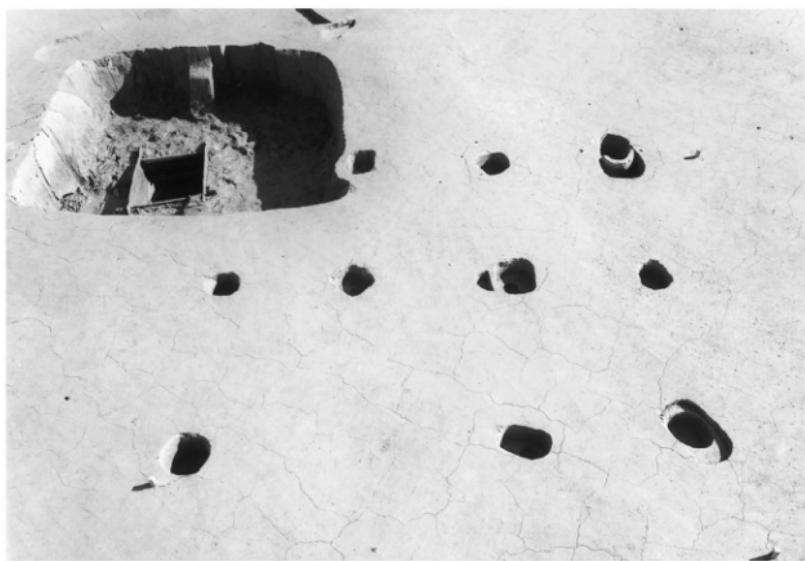
SE57 手すき便所 (糞から)



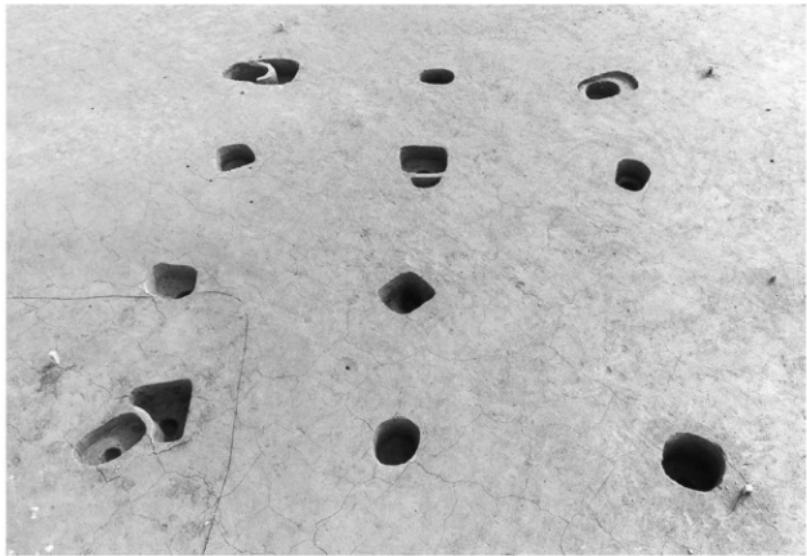
SE57 手すき便所 (糞から)



S E 57 手前側近景 (右から)



S E 57, SB 42 (右から)



S B 4 2 (上から)



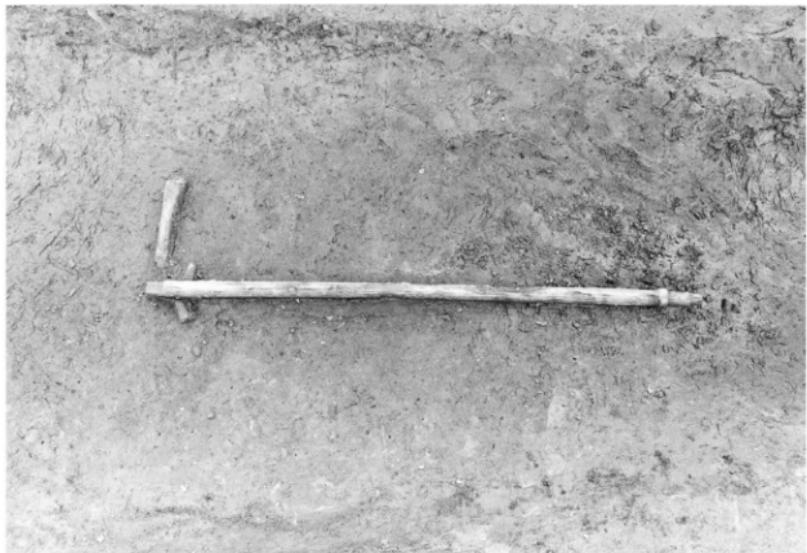
S B 4 1 (上から)



SB42中 s6 pit6 (手前から)



SB42中 s6 pit6 (手前から)



S D 1 5 2 ばく式流 (追跡番号 360・361・362) (ゆから)



S B 1 2 1 (ゆから)



S B 1 2 9 (仰から)



S B 1 3 0 (仰から)



SE 155 (北から)



SE 155 (西から)



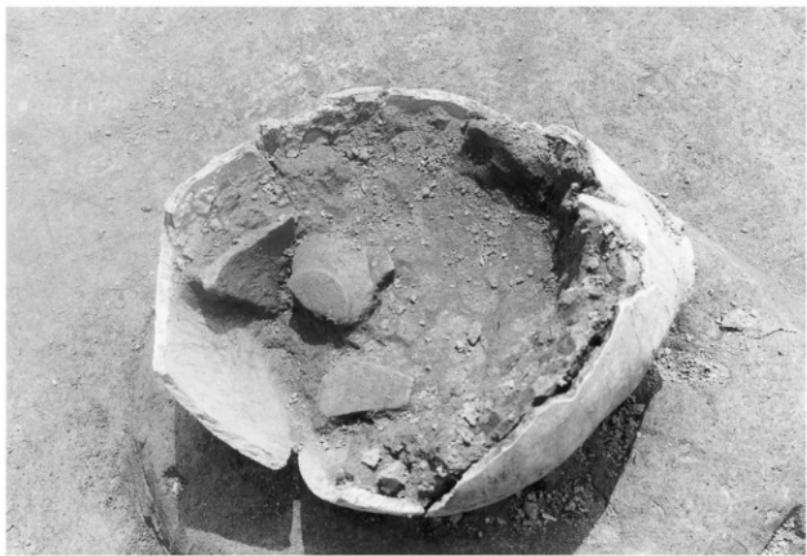
SE 155 木製筒 (向かひから)



SE 155 木製筒 (向かひから)



馬頭山遺跡 (遺跡番号 437) 之二 汽泡 (向から)



馬頭山遺跡 (遺跡番号 436・437) 之三 汽泡 (上から)



小千賀運動場(北口から)



小千賀運動場(南口から)



41



38

36

40

39



28

27

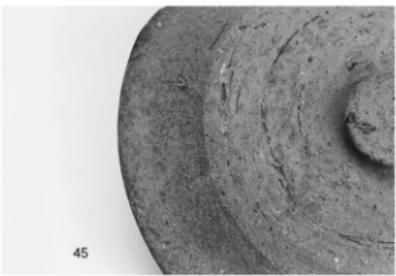
29



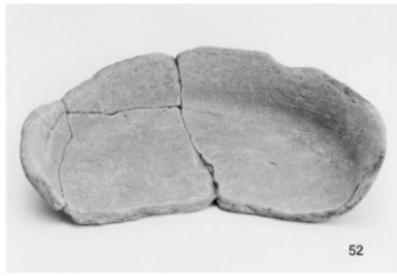
45



46



45



52



53

馬家窯文化 ①



55



56



61



65



78



79



82



83



84



85

卷之二 退身(2)



86



87



88



89



90



91



92



93



94



95



96



97

漆木退身③



卷之二 退身 ④



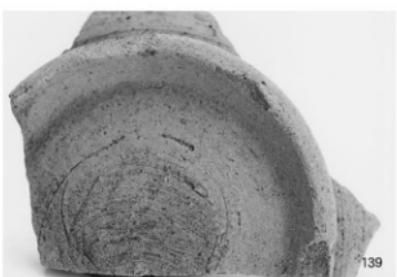
111



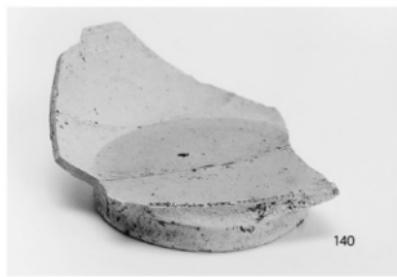
131



136



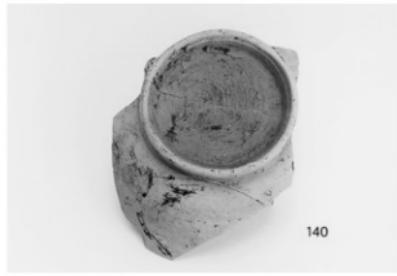
139



140



144



140



147

第二部分 (5)





七
七
七



183



184



189



184



192



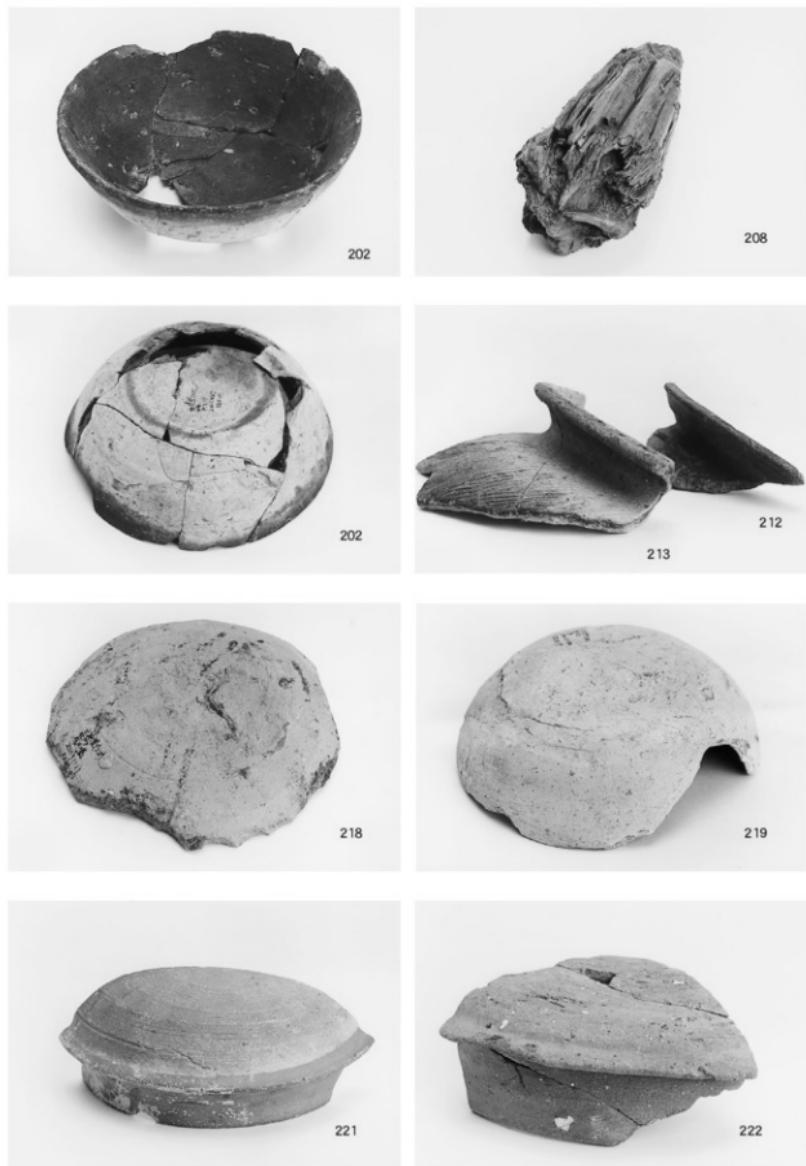
194



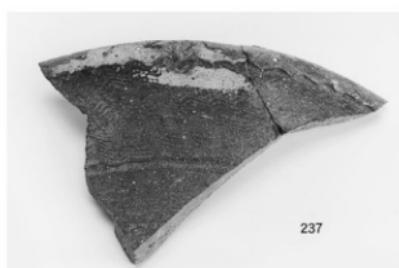
196



197



馬家窯文化 ⑨





264



259



282



298

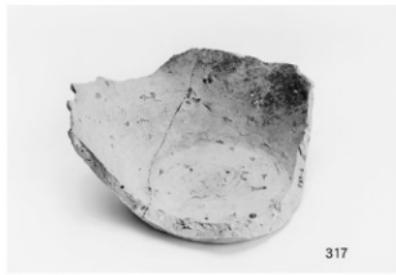
297



311



314



317



319

312

第二組 退步 (1)

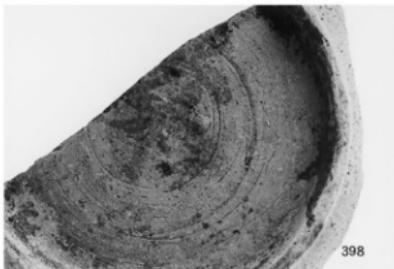




馬車輪軸 ⑬



395



398



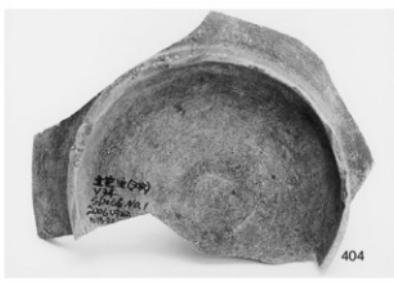
400



404



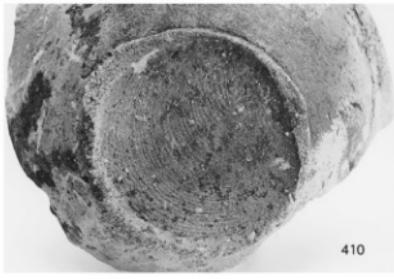
405



404



409



410



428



429



431



443



439



445



440



446



448



452



448



481



455



464



487



496

報 告 書 抄 錄

三重県埋蔵文化財調査報告 297

立花堂遺跡発掘調査報告

2008（平成20）年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 (有)山文印刷
